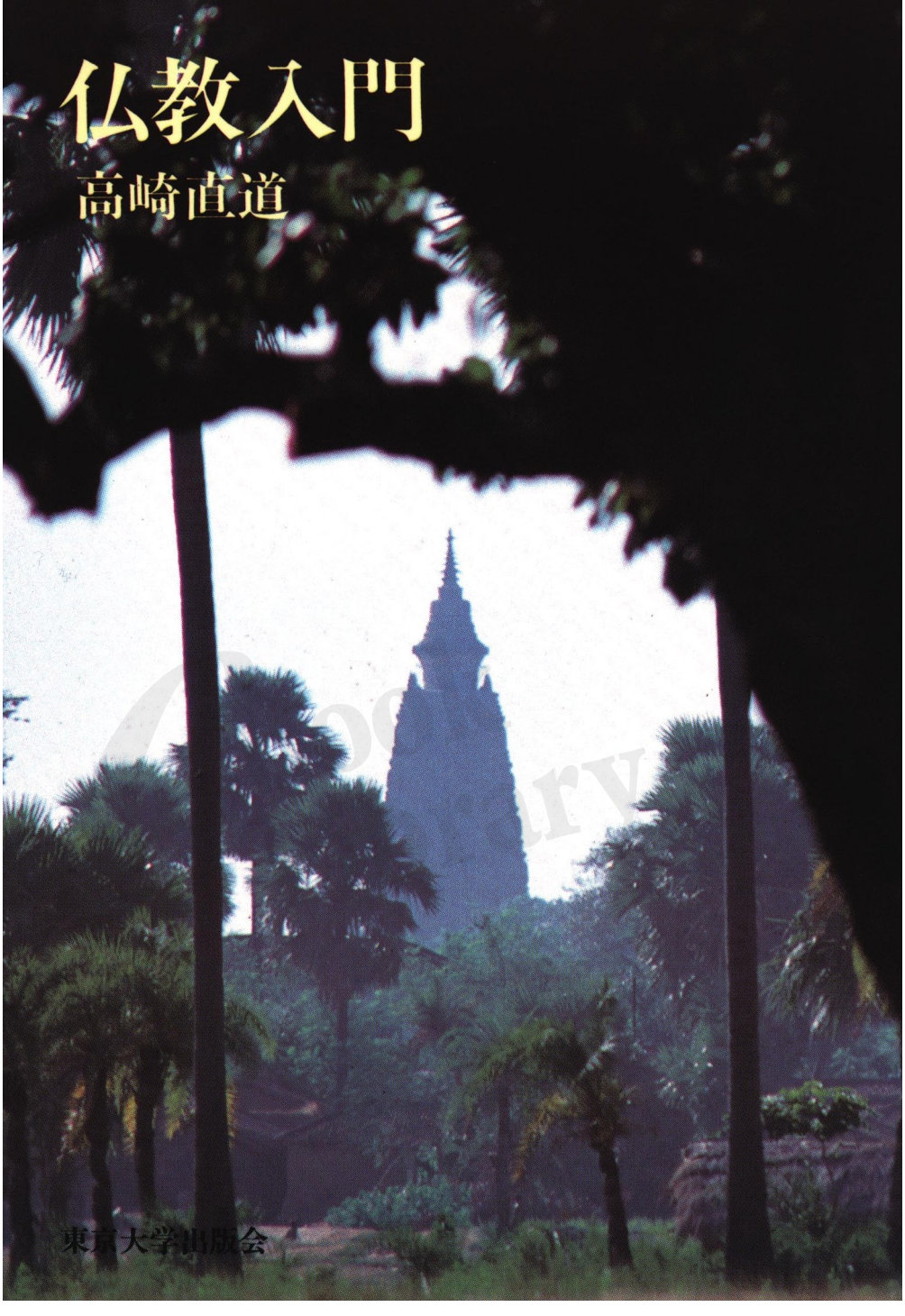
仏教入門

高崎直道



東京大学出版会

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content
from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

仏教入門

高崎直道

eBook Library

東京大学出版会

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content
from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

はじめに

わが国は、東アジアの縁辺に位置する島国として、古くから大陸の中国文化圏のなかにあって発展してきた。その大陸から輸入した数多くの文物の一つに仏教があった。これは、漢民族の固有の思想である儒教とならんで、わが国の精神史の形成、とくに文化人類学のいわゆる大伝統（すなわち国の文化を代表する制度とか支配理念など）の形成の中心となったほか、抽象的・論理的思考の育成において、もっとも大きな影響を及ぼした思想であり、宗教である。

渡来以来一五〇〇年ちかい歴史は、仏教をしてわれわれにとって水か空気のような存在たらしめたが、さて仏教とは何かという段になると、われわれは案外その中味を知っていない。ことに明治以来、西洋の近代文化を採り入れるのに汲々としていた間に、われわれは長い間われわれを培ってくれた仏教の有難さを忘れ、また時には、強くその教えを排除しようとすらした。現代の日本人にとって、仏教は古くさいもの、無用なものの代表のごとく見なされ、仏教にまつわるイメージは決して好ましいものではない。葬式の連想が仏教に縁起のわるいものという評価を与え、仏教に無関心であることが近代的であるかのごとく錯覚されている。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

たしかに、今日われわれが見聞する仏教、およびそれを取り巻くものには、改革を要し、廃棄して差し支えない要素がいくらでもある。しかし、生活の隅々や、ものの考え方の端端に、思いがけず、仏教によって育まれたものを見出すということは、日常しばしば経験するところである。仏教を除いて、どれだけの文化が日本に残るかと言えば、あるいはずいぶん心細いことになるのではあるまいか。とくにそれは、形而上学的思考の面において、強く言えることである。仏教を好むと好まざるとにかかわらず、仏教について知っておくことは、日本人みずからを知る重大な鍵の一つであろう。

仏教は、いわゆる宗教の一つである。それは、信仰や修行を通じて実践し、体得すべきものであって、単に知識として受け入れるだけで十分なものではない。しかし同時に、仏教は知的理解を排除するものではなく、知識がその信を深め、行を推進することが可能であるような教えである。以下に述べるところは、一種の仏教入門であり、仏教概説であるが、入門とは、知的理解の手ほどきという意味であって、信仰の手引きを意図するものではない。しかし、それが仏教と縁をむすぶよすがとなることもありうるであろう。

仏教について概説を試みる場合、その範囲が、時代的にも地域的にも、きわめて広大なうえ、それぞれの時代による変遷、地域による変容があるので、どこをとって仏教を眺めるかによって、概説の内容もずいぶん異なったものとなる。信仰の立場から言えば、それぞれの宗旨という特定の立

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

脚点が確定しているが、学問的には、できるかぎり広い視野に立ち、なるべく公平に眺めることが必要である。そのためには、仏教の歴史的研究にもとづいて、その出発点における基本的特徴を摑まえておいて、後代の地域・学派・宗派などによる変遷や変容の跡を明確にするというのが、今日一般的に採られる方法である。現実にわれわれの見聞きしている仏教の背後に目を転じ、その根元にさかのぼって知るということは、これからの日本における仏教のあり方を考えるうえで不可欠の操作と思われる。それはまた、仏教を他の宗教や思想と比較研究するための、素材を提供してくれる。本書もまた基本的にはその立場を採ることにしたい。

同時に本書が直接に意図する点、日本人の精神史解明の一翼を担うことから言えば、われわれを育んだ仏教が一般に「大乗仏教」といわれるものであり、出発点における仏教、すなわち原始仏教の教理だけでは理解しきれない面を多分にふくんでいる関係上、仏教の基本的特徴というなかに、大乗仏教の考え方までもふくめておかざるを得ない。そして、その教えがいかなる経路をへて、われわれ日本人の精神の糧となったかを考察する必要がある。

そこでわれわれは、仏教とはどういう教えであり、どのようにして成立したかを、大乗仏教の特色をも加えて考察し、次いで簡単に、その仏教が日本に伝来した経過をふり返って見ることにしよう。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

本書は、かつて駒沢大学の学生用教科書として編まれた『仏教一般』という小冊（現在廃刊）で筆者が担当した部分（第一部「仏教の大綱」）を骨子として、書き下したものである。執筆の意図も、まったくそのときと変わらないが、ただ対象が学生諸君から一般の読者に代わったという点で、はたして本書がその目的にふさわしいものとなっているかどうか、いささか疑念がないわけでもない。教科書は教師による補足や、ときには批判すらも予想しているけれども、一般教養書となると、読者を直接に相手とすることになるからである。

しかし、仏教というものは所詮はそれぞれがその能力に応じて摑む以外はない。本書は著者の現在の「我観仏教」の表明である。好くも悪しくも、わが理解のほどをさらけ出したものとして、読者諸賢が受けとって下されば幸いである。

なお、骨子とはいえ転用を許された駒沢大学仏教学研究室にはその御海容に感謝し、厚く御礼申し上げる。また、本書の出版について、慫慂からはじまって企画、レイアウト、校正にいたるまで、すべてお世話になった東京大学出版会の門倉弘氏、および索引の作成を引き請けて下さった東大大学院の竹井良憲君に心から御礼申し上げる。

（追記）　重版にあたり、誤植の訂正のほか、最小限の補正を施した。

著者

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo

目　次

はじめに

序章　仏教とは何か……一
仏法僧―仏教の三要素(三)　三宝への帰依(四)　法の絶対性(七)
大乗と小乗(九)　聖典〔三蔵〕(一三)

一章　ブッダの生涯……一九
ブッダ・シャーキャムニ(一九)　仏伝(二一)　誕生と出家(二四)　修行と成道(二七)　開教―初転法輪(三〇)　伝道と教団の発展(三四)　入滅(三八)　舎利塔建立と結集(四一)

二章　仏の本質……四四
ブッダの称号(四五)　仏と如来(四七)　ブッダの前生(五〇)　三世の諸仏(五三)　十方の諸仏(五五)　色身と法身(五八)　三身説(六一)

三章　法――仏教の真理観……六三
法ということ(六三)　教えの基本―縁起と四諦説(六九)　ブッダの立場―十四無記または十難無記(七七)　法印―仏教の旗じるし(八〇)

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

諸法と諸行―縁起したもの(八七)　法性―縁起の理(九一)　大乗仏教の真理観(九四)　第一義諦と世俗諦(九五)

四章　一切法――法の分類……九七

阿含の法体系―五蘊・十二処・十八界(九七)　有部の法体系―五位七十五法(一〇三)　有部の法理論―三世実有・法体恒有(一〇八)　大乗仏教の法観念―一切皆空(一一四)

五章　輪廻と業・煩悩……一二六

輪廻の世界―三界・六道(一二六)　業(一二八)　煩悩〔惑〕(一三六)　十二支縁起(一三三)

六章　悟りへの道……一四四

涅槃の境地と悟り(一四四)　大乗の涅槃観(一四八)　悟りへの道(一五〇)　八正道(一五一)　三学―戒と定と慧(一五三)　信と行(一六三)　利他行(一六六)　大乗の菩薩行―六波羅蜜(一六七)

七章　心――実践の主体……一七一

無我説と実践の主体(一七二)　こころ〔心・意・識〕(一七三)　唯心と唯識(一七七)　自性清浄心と如来蔵(一八六)　悟りと救い(一九三)

八章　修行者の理想像……一九六

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ひと〔人施設〕(一九六)　凡と聖(一九七)　菩薩の階位(二〇一)　一乗と三乗(二〇六)

九章　戒律と教団の組織 ……二一一
サンガの意義(二一一)　教団の組織(二一五)　教団の規則(二一九)

十章　仏教の歴史 ……二二六
1　インドとその周辺の仏教 ……二二七
教団の根本分裂(二二七)　マウリヤ王朝とスリランカへの伝道(二二九)　クシャーナ王朝と北伝仏教(二三〇)　部派仏教の特色(二三一)　大乗仏教の成立(二三二)　中観派と瑜伽行派(二三三)　密教の隆盛(二三五)　チベット仏教(二三七)　南方仏教(二三八)　インドの仏教復興(二四〇)

2　中国の仏教 ……二四〇
仏教の初伝(二四〇)　仏教の定着―南北朝時代(二四一)　中国仏教の確立―隋唐時代(二四三)　その後の状勢(二四八)

3　朝鮮の仏教 ……二四九

4　日本の仏教 ……二五一
仏教初伝と聖徳太子(二五一)　南都六宗(二五三)　天台宗と真言宗(二五四)　浄土思想の盛行(二五六)　禅宗の伝来(二五七)　日蓮宗と時宗(二五九)

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

室町時代以後の仏教(二六〇)
参考文献……二六三
用語索引

写真提供＝丸山勇　カバーおよび本文中の三宝(四)、王舎城(三)、初転法輪(七)、入滅涅槃(一四)、アジャンターの菩薩像(一九)、比丘の瞑想(三三)

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

序章　仏教とは何か

仏教とは、文字通りには「仏の教え」、すなわち「ほとけの説いた教え」である。これはちょうど、キリストの説いた教えをキリスト教とよび、マホメッドの説いた教え（すなわちイスラム教）をマホメッド教とよぶのと同じ命名法である。ここで「ほとけ」（仏・ブッダ）というのはブッダ・シャーキャムニ（釈迦牟尼仏）、つまり釈尊、いわゆる釈迦のことで、釈迦は仏教の「教主」である。仏教はシャーキャムニが自ら覚った真理を他に知らせるべく説いたもので、この「所説」の真理を「法」（ダンマ、ダルマ）とよぶ。したがって、仏教は別の言い方をすれば「仏法」すなわち、仏の説いた真理である。

ところで、シャーキャムニは何ゆえに自己の覚ったことを他に語ったのか。換言すれば、仏の教えは何の必要あって生まれたのか、ということを考えてみると、それは仏の教えを聴いた者が、その教えに随って実践に励んだ結果、シャーキャムニと同じような悟りを得ることを念願したからである。同じ悟りを得ればブッダとなる。つまり、仏教は、目的的に言えば「仏となるための教え」

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

である。実践を「道」とよぶので、仏教はこの見地から、「仏道」ともよばれる。

ブッダ（buddha）は中国では「浮図」などと音写され、それが日本に入って「ほと」と訛り、やがて「ほとけ」になった。「仏」も俗音で buddha の最後の音が落ちたところ（*but）を音写したもの。しかし、後には「仏陀」という雅語の音写も用いられた。

漢訳語としての「**仏教**」の原語には、たとえば buddha-śāsana（仏の教説）がある。今日インドで、ヒンドゥー教とかジャイナ教との対比で仏教をよぶときは Bauddha とか Bauddha-dharma（つまり仏法）と言う。Bauddha＜Buddha で、仏に関する、仏教徒、仏教の教説などを意味するサンスクリット（梵語）に由来する。なお、「仏教」は英語の Buddhism に相当する語として、今日一般に広く用いられている。漢訳語の「**仏法**」の原語は buddha-dharma であろうが、ダルマには後述するようにいろいろの意味があるので、「仏法」の意味もいちがいには決められない。わが国では古来、仏教とよぶより仏法とよぶことが多かった。仏法の権威は絶対的なものとして、王法すなわち世俗的国家権力よりも、高次のすぐれたものと仏教徒は考えていた。実際には、仏法（をいただく仏教徒）も王法のもとに屈服せざるをえなかったのではあるが。「**仏道**」はたとえば、仏教諸宗で用いられる「普回向文」のなかで「皆共成仏道」（皆ともに仏道を成ぜんことを）というふうに使われるが、その直接の原語は、出典の『法華経』によれば「最勝の菩提」の意で、仏の悟り、つまり「無上正等覚」を意味する。しかし、ほかの経典における用例では「菩薩道」「悟りへの道」を意味する場合もあり、特定できない。わが国では、神道との対比で用いられる。というより、わが国古来の宗教を「神道」とよんだのは、仏教の存在を知ってからのことである。中国的感覚では、鬼道、神道と並ぶものか。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo

仏法僧――仏教の三要素

右のことは、仏教というものを構成している三つの要素をおのずから説き明かしてくれる。第一は「仏（ほとけ）」である。仏がなければ仏教はない。歴史的に見て、ブッダ・シャーキャムニがこの世に生まれなかったら、今日いうところの仏教は発生しなかった。教理的に言えば、仏の出現、すなわちそのシャーキャムニが悟りをひらいたこと、成道（じょうどう）したこと、つまりブッダ（悟った者、覚者）となったことを認めるところに、仏教の出発点がある。

ところで、もしもシャーキャムニが、ブッダとなった後にその悟りの内容を他に対して説かなかったならば、それはシャーキャムニの胸のうちに閉じこめられたまま、シャーキャムニ個人の死をもって永久に、何の痕跡も遺さず消えてしまったであろう。そこには「仏教」の形成されるよすがもない。ここにシャーキャムニの説法のもつ歴史的重みがある。われわれは、その遺された教え、「法」を通してのみ、悟られた真理、「法」を知ることができる。すなわち、真理にして教えであるところの「法」こそは、仏教を成立させている第二の基本的要素である。

さて、「仏法」は教えの聴聞者を予想し、「仏道」はその実践者なくしては存在しない。この仏の教えを聴き、仏となるための道を実践修行（しゅぎょう）する人たちの集団をサンガ（僧伽（そうぎゃ））といい、「僧」と略称する。サンガは教主シャーキャムニの弟子たちの集団をさすのが原意であるが、広くは各地域、各時代の教団をさす。この集団なくしては、すなわち弟子からその弟子へと仏法が相続されることな

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

くしては、仏教が今日まで伝わることはなかったであろう。「僧」の存在こそは、仏教のいのちを永遠ならしめるうえで、欠くことのできない要素である。これを第三の要素と称するゆえんである。

この三つの要素、すなわち、(1)仏（ブッダ）と(2)法（ダルマ）と(3)僧（サンガ）とを、仏教の三つの大事な宝物という意味で「三宝」とよぶ。

右の三要素は、今日、宗教学において、ある一つの創唱宗教を成立させる不可欠の要件と見なしているところの、教祖（教主）と教義（聖典）と教団（教会）とよぶものに相当する。自然宗教もしくは民族宗教には教祖というものは知られていない。また、生まれによってその宗教が決まっているので、教団への加入（入信）という儀式もない。教義も簡単なもので組織化されていない。わが国で言えば、いわゆる神社神道、つまり村々町々の鎮守の祭に象徴されるような宗教は自然宗教で、天理教その他の教団組織のある宗教が創唱宗教である。また、世界の三大宗教といわれる仏教、キリスト教、イスラム教は、それぞれヒンドゥー教、ユダヤ教、そしてアラブ人の民族宗教を母胎として成立した創唱宗教であると同時に、民族の枠を超えて広まった意味で、世界宗教といわれる。創唱宗教は一般に世界宗教となりうる可能性——教えの普遍性——を具えていると考えられる。

三宝への帰依

この「三宝」は、仏教徒にとってもっとも基本的な信仰の対象である。ひとは仏教に入信するとき、まず、この三宝を心のよりどころ（帰依処）として信ずることを要求される（帰依処とは、危険

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

の場合の安全な隠れ場所といった意味)。この三宝に対する帰依の表明は、通常、次のような句を唱えることによって行なわれる。

南無帰依仏　南無帰依法　南無帰依僧

さらに、何ゆえにこの三宝が帰依するに値するかという理由を、次のように説明する。

仏は帰依処である。何となれば、両足中の最勝の方(両足尊)であるから。

法(ほっしょう)は帰依処である。何となれば、貪欲を離れた(清浄な)もののうち、最勝(離欲尊)であるから。

三宝に帰依する人びと(スワート博物館)
無仏像の表現で,ブッダの姿を象徴で示す.

僧は帰依処である。何となれば、共同体のうちの最勝のもの(和合尊)であるから。

ここで両足尊というのは、両足すなわち二本足で立つもの、つまり人類のなかで最勝第一のひとという意味であり、人間ブッダ、教主釈尊に対する敬意の表明である。他方、僧を和合尊とよぶのは、仏教の教団が人間の営む集団、共同体のうち、もっとも理想的な集団であるという自負で、平等・和合を旨とするので、その名がある。また法が離欲尊とよばれるのは、教主の教えが、欲望を離れた理想状態(これを涅槃(ねはん)と

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

よぶ）に導く真実の法であるということで、この教えを媒介として教主と弟子たちが、和合した共同社会を作りあげていくのが教団の当初の目標であった。このように仏教における帰依の対象が、その本質において何ら特別な超越的絶対者ではなく、人間の生みだす模範的なものという、人間中心的な考えにもとづいていたことは注目に値する。

スリランカその他の南方仏教圏では、日常つねにパーリ語の**三帰依文**を三唱する。パーリ語の原文は次のとおりである。

Buddhaṃ saraṇaṃ gacchāmi. Dhammaṃ saraṇaṃ gacchāmi. Saṅghaṃ saraṇaṃ gacchāmi.

（わたくしはブッダを帰依処といたします。わたくしは法を帰依処といたします。わたくしは僧を帰依処といたします。）

仏教への入信は受戒をともなう。義浄（ぎじょう）によって中国に伝えられた根本説一切有部（こんぽんせついっさいうぶ）の律蔵のなかに、受戒のときに唱える文として、最初に「南無帰依仏」などを三唱の後、

帰依仏両足中尊　帰依法離欲中尊　帰依僧和合中尊

と三唱し、次に、

帰依仏竟　帰依法竟　帰依僧竟

と三唱すると規定されている。「竟」は完了の意であるから、これは「仏に帰依し畢（おわ）りました」などと帰依の完了を告げることばである。

このほか、日本の仏教徒が今日ひろく用いるものに**三帰礼文**とよばれる次の句がある。

自帰依仏　当願衆生　体解大道　発無上意

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

（自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意をおこさん。）

自帰依法　当願衆生　深入経蔵　智慧如海

（自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海の如くならん。）

自帰依僧　当願衆生　統理大衆　一切無礙

（自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して一切無礙ならん。）

ここには三宝への帰依とともに、衆生済度の誓願をこめるという、大乗仏教の利他の立場が表明されている（ちなみに、この三帰礼文は『華厳経』の浄行品から採用された句である）。

三宝への帰依は一つにまとめれば「南無三宝」である。この句も、経典の写本のはじめなどによく見かける。日本語ではキリスト教の my God! 同様、舌打ちのことば（もっと略せば「南無三」――南無三、しまった！）に風化してしまったが、それらも今日ではあまり聞かなくなったようだ。

「南無」はサンスクリットで敬礼、敬意を表明することば namas で、インド人の通常の挨拶語 namas te（あなたに敬意を表わします）にも生きている。

法の絶対性

さて三宝はこのように、仏教の当初においては教主シャーキャムニとその教えと仏弟子とを指していたのであるが、教主の入滅にともない、その意義が変化する。「仏」はもはや現前の教主ではなく、弟子たちの記憶のなかでしだいに神秘化されていく。そして「ブッダとは何か」の究明が後継者たちの課題となり、そのなかから、今日われわれが親しく耳にする諸仏が形成され、信仰の究極

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

的対象として神にもひとしい絶対者の地位を得るにいたる。他方、シャーキャムニの教え（法）は弟子たちによってまとめられ、「経典」として後世に伝えられたが、真理探求の熱意は大乗仏教に見られるように、新しい経典の編纂と、発展した教理の解釈を生みだした。現在、仏教徒は、本尊として仏像を安置し、その前で経文を唱えるというかたちで、仏と法とに帰依を捧げている。他方、「僧」については、出家の修行者、専門の教導職の人びとを僧とよぶならわしであるが、帰依の対象としては、人間の理想像としての「菩薩」や「羅漢」あるいは各宗の「祖師」などをまつるかたちを採っている。

たとえば、「南無阿弥陀仏」は帰依仏、「南無妙法蓮華経」は帰依法、「南無観世音菩薩」や「南無大師遍照金剛」は帰依僧の表明の一種である。

三宝はこのように等しく帰依、礼拝の対象とされるのであるが、教理的にさらに一歩突っこんで考えると、仏と法と僧とは究極的には一つの価値に帰着するというのが、仏教の建て前である。その究極的価値とは「法」にほかならない。すなわち、法は仏の教えと見るかぎり仏に価値の根元があるが、仏とは「真理を悟った者」である以上、「悟られた真理」（所証の法）は絶対であり、これは仏が出現するしないにかかわらず、永遠不変である。そして、この「悟られた真理」こそは「教えられた真理」（所説の法）の根元（法界、真如）たるものである。一方、僧は「真理を悟ることを目的とする者」の集団であるから、三者は法を媒介として一体となる（これを仏教では「一体の三

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

宝」という）。原始仏教の人間中心主義は、非人格的な法の絶対性を前提として成立しえたし、大乗仏教も基本は同じである。ただ後者は、仏の真理を悟ったという事実を重視し、「真理と一体になった者」（如来）という意味で、仏＝法というかたちで絶対者を求め、ここに仏の「法身」という理念を生み出した。そして、仏を表面に押し出して、宗教性を増すことになった。仏教の特質をひとことでいえば、真理と一つになる、絶対との合一ということを目標とする点にあると言えよう（宗教としては、それがキリスト教などの一神教とは異なる、きわだった特色を示すことになるのである）。

絶対者との合一を目標とする思想はひろく神秘主義（mysticism）とよばれる。神秘主義はキリスト教やイスラム教の一部にもあるが、主流とはいえない。それに対しインドではヒンドゥー教も「梵我一如」の教えに見られるように絶対者との合一を説く。仏教はむしろ、このインド的伝統に根ざすと言うべきだろう。なお、わが国の宗教的伝統も神人合一というか、神人未分というべき思想が強い。宗教学の姉崎正治はこの伝統を「神人合一教」と名づけ、キリスト教などの「神人隔絶教」から区別した。

大乗と小乗

仏教とは何かと問うに対し、以上、仏・法・僧の三宝という基本的要素の側面から、その枠組を考えてみた。その具体的な内容は以下の諸章によって解答されることになるが、それに先だって、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

なお若干述べておかなければならないことがある。

第一は、仏教とひとくちに言っても、具体的には、日本の仏教があり、スリランカの仏教があるという次第で、現実に存続する教団ごとに、その内容は異なってくるであろうから、本書が一体いかなる立場に立って、解説するのかという点である。

われわれにとって身近な仏教、つまり日本仏教は大乗仏教である。他方、スリランカの仏教は今日、長老仏教（あるいは上座部仏教）とよんでいるが、歴史的にこれを見るとき、大乗仏教によって「小乗」とけなされた仏教の流れに属する。われわれとしては、著者にとっても読者にとっても、大乗仏教の立場から、仏教とは何ぞやに対する回答を書くことが理解も容易であり、心情的にも受け入れやすいであろう。しかし大乗仏教というのは、近代の仏教学が明かすところでいえば、ブッダの時代を去ること五〇〇年くらいから発生した一種の改革運動であり、その教えるところは決してブッダの説いたままではない。ブッダの教説（法）は「アーガマ」（阿含）の名で伝えられ、大乗仏教といえどもそれを無視しているわけではないが、大乗仏教は自らの教説の拠りどころとして「大乗経典」を所有し、そこにこそブッダの教説の真意があると主張し、それを「仏説」と称して尊重している。しかし、歴史的にはそれは決して仏説とはいえない。つまり、大乗は非仏説なのである。

このように、今日、学問的常識としては「大乗非仏説」は当然であるが、実は「阿含」といえど

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

も、仏説のままではない。これも近代の仏教学が暴露したことであるが、同じく阿含と称しながら、漢訳された仏典と、スリランカをはじめとして南方諸地域で用いられるパーリ語で書かれた仏典では、所説にかなりの相違がある。のみならず漢訳のなかにも、古来種々の部派に所属すると伝えられる経典が混在しており、それら相互に教説の内容が異なっている場合もある。

この現象は、仏教が、ブッダの入滅以後一〇〇年ほどしてから、しだいにいくつかの教団に分裂して多くの部派を形成し、それぞれの部派が「阿含」を伝承しているうちに、しだいに独自の解釈を加えるようになり、いつのまにかブッダの教えとはだいぶ隔たりを生じてきたという事情による。大乗仏教はむしろ、そのような従来の諸教団の学説がブッダの真意をそこねていると考え、ブッダの立場への復元をめざして、その運動を展開したものである。

大乗仏教が「小乗」とよんだのは、このような部派の教学であった。小乗ということばの意味については、いずれ本論中で再説するが、ひとくちで言えば、修行者が自分たちの悟りだけを目標として道に励み、在家の信者たちをかえりみないという非難をこめた呼び名である。大乗はそれに対し、出家在家を問わず、多くの者が悟りをめざして進む道である。それは指導者（菩薩とよばれる）から見れば、利他的な実践――自分が悟るより先に、他の人びとを悟らせる――となる。

部派の教学は、「アビダルマ」abhidharma〔阿毘達磨、阿毘曇〕とよばれる。その意味は、ダルマすなわちブッダの教えに対して（abhi-）これを研究するということ、つまり「法の研究」である（「対

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

法」とも訳される)。各部派が仏説である「阿含」を研究しているうちに、しだいに独自の解釈が加わってきたということである。

現在われわれが知りうるアビダルマの学説の代表は、一つは漢訳に伝わる説一切有部の教学であり、他はスリランカの長老仏教の伝えるパーリ語の仏典である。そのうち、大乗仏教が多く相手とし、論難を加え、同時にその影響をも蒙っているのは有部のアビダルマである。有部のアビダルマを知るための代表的な綱要書が、ヴァスバンドゥ〔世親〕の作った『倶舎論』で、日本では唐の玄奘の訳したものが広く読まれ、仏教綱要書ないし仏教入門書として用いられている(ヴァスバンドゥはだいたい五世紀の人で、兄をアサンガ〔無著〕といい、後に兄のすすめで大乗に転向して『唯識論』を作ったといわれている。このため『唯識論』と『倶舎論』は大乗と小乗の差異がありながら、教理上似た点もある。唯識の学説は大乗のアビダルマを自認している)。われわれとしては、おのずから日本の伝統も考慮して、『倶舎論』に示されているようなアビダルマを、仏教とは何かという問いに対する解答を書くにあたっての基準とするのが都合がよい。

もちろん、学問研究としては、ブッダ自らが何をどのように説いたのかを知りたい欲求にかられる。現有の部派的解釈の加味された諸仏典から、共通項目、共通する教理を拾いだし、編成していけば、ある程度はブッダの真説に近づけるであろう。現にそういう意図のもとに、ブッダ時代の仏教(ないし部派に分かれる以前の仏教)を「原始仏教」とか「初期仏教」とよび、さらにそのもっ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

とも古いところを「最初期の仏教」とか「根本仏教」とよんで、後の発達した小乗仏教（もしくは部派仏教）および大乗仏教から区別している。しかし、歴史的にさかのぼって原初形態を探るだけでは、仏教の内容全体にわたる解説とはなりえない。本書のような入門書としては、歴史的な厳密性は二の次として、仏教が仏教として体系を確立した時点に基本をおき、そのうえに後代の発展としての大乗仏教の教理にも言及するのが便利であろう。以下の叙述はこの方針に従って、全体をいわば共時的・体系的に分章し、その各々のなかで必要に応じて歴史的な発展を考察するという方法をとりたい。

聖典（三蔵）

仏教の聖典は、その成立の歴史からいうと、ブッダの入滅の後、仏弟子たちが集まって会議を開き、ブッダ在世中に説かれた教えと、教団に関して決められた諸規則を誦出したのにはじまる（これを結集と称している）。このときには仏の教えは「法」とよばれ、教団の規則は「律」といわれ、その二つが聖典の全体であった。

後に、仏の教え、すなわち「法」はしだいに理解しがたい点を生じ、また、ブッダの教えは対機説法を旨とする「八万四千の法門」といわれるごとく状況に応じてさまざまに説かれたので、その間に往々表現上の差異もあり、時には矛盾と見える教説もあった。そのため、それらをまとめて整

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

理分類し、また新しく解釈する必要が生じた。こうして生まれたのが「アビダルマ」で、西洋の神学、とくにスコラ哲学に匹敵するものといえる。このアビダルマの成立にともない、法は、教えの基本線という意味で「経」（スートラ）とよばれた。それに対してアビダルマは、注釈解説の書という意味で「論」（シャーストラ）ともよばれる。こうして、経・律・論のいわゆる「三蔵」tri-pitaka が成立する。蔵（ピタカ）とは「集めまとめておく容れ物（籠）」の意である。なお律に対する注釈もあらわれ、「アビ・ヴィナヤ」とよばれたが、これは「律蔵」のうちにふくめられていて、独立の蔵とはされていない。

羅什三蔵、玄奘三蔵などという場合の「三蔵」とは、三蔵すなわち仏典のすべてにわたって精通している学僧という意味で、中国で代々、経典の翻訳に従事した偉大な学僧に対して与えられた称号のごときものである。

先に述べたように、法あるいは経とよばれるものは、元来、仏の口から直接に説かれた聖典（仏語）で「金口の説法」などとも言われ、「阿含」āgama とよばれる。アーガマとは「伝え来たったもの」という意味で、聖なる伝承としての経典をさす。今日伝わっているものは、金口から洩れた言葉そのものではないが、とにかくそのように伝承され、信じられてきたものである。

この「阿含経」は、形式や内容に応じて、長、中、雑、増一などの部に分かれて伝えられている。この部類わけは、インドにおける仏教教団の諸部派ごとに若干の相違がある。また経典自体の伝え

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

るところではこれとは別に「九分教」「十二分教（十二部経）」による分類があったというが、現在は一部の経典にその分類に該当するものが見られるだけで、全体にわたってはその範疇は明白でない。

ところで、いわゆる「お経」のうちには、この阿含経以外のものもふくまれている。中国や日本の仏教徒が日常読誦している経典はほとんどが大乗経、大乗経典とよばれるものである。大乗経は『般若経』をはじめとして、『法華経』『阿弥陀経』『華厳経』『涅槃経』あるいは『維摩経』『勝鬘経』『楞伽経』など、さらには『大日経』や『金剛頂経』にいたるまで、その数はきわめて多く、その内容、長短などは種々雑多である。総じて大乗仏教の成立に呼応して、しだいにできたもので、歴史的には教主シャーキャムニの説法とは何のかかわりもない、後世の産物である。その意味では「大乗は非仏説」にちがいないが、ただ大乗経典の作者の自負においては、これこそ仏の教えの真意を伝えるものであるとして、阿含経よりも深遠で究極的な教えである。それを「仏説」と表明したのは、単なる権威づけというよりは、作者の信念の表白と見るべきであろう。事実、大乗経典はいくたの発展した教義をふくみ、それが仏教を思想的に深め、高めた点で、絶大な価値を有している。

大乗経典は、阿含経同様、「経」であることを主張するために、形式的には「如是我聞」にはじまっている。その説時、説処、聴衆などは時間的・空間的に無限に拡大され、空想をほしいままに

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

しているが、原則的には教主シャーキャムニの一代のうちの出来事とされるわけである。総じて「経」とは「如是我聞」にはじまり、聴くもの「皆、大いに歓喜して、信受奉行せり」で終わるものとされるので、逆にこの形式が守られておれば、すべて「経」と認められて経蔵にくり入れられる。かくて、インドでは後世にいたるまで新しい経典がつくられたし、インドのみでなく、中央アジア（西域）でも、また中国においても、いくつかの経典が創作された。中国では古来、そうした中国製の経典を判明したかぎり「偽経」と銘うってきたが、近代の学問研究の結果、その種の経典の数はさらにふえた。しかし大乗経典の生いたちから考えると、それらの「偽経」でも、内容的に仏教として一貫性があり、すぐれたものであれば、経として尊重していっこうに差し支えはない道理である。

「経」の範囲は中国ではさらに広くなり、経・律・論の三蔵の全体をも指す。その場合、経は「聖典」というに等しいが、その全体を指して「大蔵経」とも「一切経」ともいう。中国では仏教の伝来以来、三蔵に属する種々の聖典がしだいに訳出されてきたが、歴代の王朝がその管理に力を入れるようになり、翻訳された聖典を基準を設けて「入蔵」させ、また「経録」を作って、目録と入蔵の記録を残した。「大蔵経」はそのようにして入蔵された訳経類の集大成である。そのうち、経蔵は小乗経（阿含経）と大乗経、論蔵も小乗論と大乗論に分かれるが、律蔵には大乗の場合は戒のみで律はない。漢訳の律蔵中では『四分律』『五分律』『十誦律』『摩訶僧祇律』『根本説一切有部毘奈

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

邪』を五大部と称するが、これらは元来、別々の部派の律蔵である。このように律蔵は教団の規則であるから、部派ごとに独自のものがあったのである。

大蔵経中の論蔵には、中国人のつくった注釈類も一部ふくめられている。その考え方を推し及ぼせば、さらに現代にいたるまでの中国や日本製の注釈類や教義書までもふくめてよいことになる。とくに日本の場合、各宗の祖師たちの著作はそれぞれの宗派にとっての「聖典」であるので、一般には「お経」の名をそこまで拡大して用いている。この見地から『大正新修大蔵経』は、中国のほか日本の各宗聖典や、日本人の著わした経や論の注釈類の主なものや、経録とか高僧伝などをあまねく網羅、集大成している。

以上、われわれが古くから伝えてきた「大蔵経」すなわち漢訳の仏典および中国・日本などにおける著作を基準に叙述したが、現代われわれが手にしうる資料には、漢訳の大蔵経のほかに南方仏教の用いるパーリ語聖典（経・律・論の三蔵を完備、後代の論典は「蔵外」とする）や、チベット訳の聖典（大蔵経は全体を仏説部と論疏部に分ける。律も本典は前者、注釈は後者に入れられる。チベット人の著作は「蔵外」とする）があり、さらにサンスクリット語や、その他の諸語で書かれた個々の経・律・論の原典や断片などが現存し、発見され、出版されている。なお、チベット訳の大蔵経はさらに蒙古語や満州語にも訳されて現存している。

仏典は元来、暗誦されていたものであり、またシャーキャムニの論しに従って、インド各地の方

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

言によって説かれていた。それがしだいに教団ごとにそれぞれの所在する地方語によって書きとめられるようになった。パーリ語も元来はそのようなインド方言の一つを母胎としているものであり（パーリとは聖典語の意）、その筆写の時期は紀元一世紀ころとされる。インド本土ではその後、地方語からサンスクリット（標準語で雅語、文章語）に直すことが行なわれた（若干の訛りが残っているので、「仏教梵語」とよばれる）。グプタ期以後の著作はおおむねサンスクリットで著わされた。チベット語訳はサンスクリット語からの翻訳が大部分である。また漢訳仏典は、古いものは北インドの方言や、西域（中央アジア）の言語で書かれたものの翻訳であろう。五世紀以後はしだいにサンスクリットの原典からの翻訳となったものと考えられる。

以下、インドの地名、人名ないし一部の術語を片仮名で表記するが、出典や慣用によって、パーリ語とサンスクリット語が混用されている。不統一な点について、予め読者の了承を得ておきたい。

なお、片仮名表記では原音が完全には示せないが、ローマ字表記との対応でいくつか注意すべき点を挙げておく。

(1)母音のうち、e, o は常に長母音（エー、オー）、r はリの音に近い（r は子音 r が位置上母音の役割をしているもの。y→i, v→u の変化に相当する）。

(2)子音中、有気音（kh, gh, ch, jh など）は同系無気音と同じ表記。鼻音は ṃ（マ、ム）以外、語末ではン、母音がつづくときは ña（ニャ）などとなる。反口舌音（ṭ, ṭh など）は歯音（t, th など）と同じく、タ行で示す。

歯擦音 śa（シャ）、ṣa（シャ）、sa（サ）。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

一章　ブッダの生涯

ブッダ・シャーキャムニ

仏教の開祖はシャーキャムニである。

シャーキャムニとは、歴史上のブッダが、インド北部（現ネパール領）のヒマラヤ山麓に居を占めていたシャーキャ（サーキャ）〔釈迦〕族の出身であったのに由来する名である。ムニというのは「寂黙の聖者」などと訳されるように、世俗を離れて孤独な修行をつづける聖者に対する尊称で、したがって、シャーキャムニとは釈迦族出身の聖者ということである。

かれの個人名はシッダールタ（シッダッタ）〔悉達多〕であったとされるが、初期の文献では知られていない。修行者仲間ではゴータマ〔喬多摩、瞿曇〕とよばれていたが、この名はその家系に由来するとされている。一方、仏弟子たちは名をよぶことはありえず、バガヴァッド〔婆伽梵〕（世尊）という尊称を用いていた。シャーキャムニというのは、おそらく一般世人がたてまつった名であろう。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

もちろん、単にブッダとよぶこと（呼びかけ以外で）もしだいに広まっていったにちがいない。ブッダというのは、前にも述べたように「覚った者」で、理論的には万人がブッダになりうるが、歴史上の人物としてはシャーキャムニひとりに限られる。仏教の教団内部では、早くからブッダの称を事実上、教主ひとりに限ってしまったらしいからである。

ブッダ・シャーキャムニ〔釈迦牟尼仏〕の名が教団内でも用いられるようになったのは、後述するように「ブッダ」についての教理的解釈が加えられ、理論上、過去にもブッダとなった者があったとされて何人かの名前がつけられ、その墓（仏塔（ストゥーパ））まで建てられるようになってから、その諸仏と区別するためであったと推定される。同じくその名は、さらに後になって大乗仏教がおこり、阿弥陀仏とか阿閦（あしゅく）仏といった多くの仏たちが崇拝されるにいたってからは、この世界（娑婆（しゃば）世界）の救い主としてのブッダの名となった。

このように仏教内部の呼び名としては、教主はシャーキャムニとよぶのが一番正確で、紛れることがないのであるが、いまは歴史上の人物としてのブッダを、一般に慣用されているように、単にブッダとよぶことにしよう。ただ文脈上の必要に応じて、シャーキャムニの名も併用する。また、信仰の対象、教理上の用語としてのブッダは、混同を避けるためになるべく仏と漢字で書き、「ほとけ」とよむことにしたい。

なお、ブッダは覚ってからブッダとなったのだから、それ以前の呼び名としてはふさわしくないという

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

考えもある。事実、ブッダの伝記（仏伝）類では、覚る以前のブッダは「菩薩」という名でよばれている。しかし、本書では煩を避けて用いないことにする。また、ゴータマ・ブッダという表記もよく見かける。これはパーリ語聖典『長老偈』を初出とするが、北伝仏教ではあまり用いないので、ここでも採用しない。

仏　伝

教主シャーキャムニは、在世中でも教団の主として弟子や信者たちに尊崇されたが、その死後には急速に神格化され、超越的存在となっていった。そのために、その伝記はさまざまの潤色を生み、時代を逐うて神秘化、超自然化の度を深めている。

ブッダの伝記類は広く「仏伝」とよばれているが、初期のものは教団の歴史、つまり仏教成立の由来ないしは戒律制定の由来として律蔵のなかで語り伝えられた。したがってブッダの一生といっても、出家の動機、修行から成道をへて、説法を開始し、弟子ができて教団ができるまでの歴史がもっとも関心のあったところで、ブッダその人を語ることは目的ではなかった。教団にとって次に重要な事件となったのは、ブッダの入滅と、それにともなう教団の変化であった。この場合も、出来事の記録と、律蔵確定の由来を語ることに主眼があったと思われる。

しかし、すべて重要な出来事は教主ブッダをめぐっていたし、ブッダに対する崇拝が生ずるに応じてその事蹟として、事蹟の起こった場所とともに、ブッダの一生の節目が「大事」（重要な出来事）

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

として記憶されるようになる。こうして、

(1) ルンビニーにおけるブッダの誕生
(2) ブッダガヤーの菩提樹下における成道
(3) 鹿野苑（サールナート）における初転法輪（最初説法）
(4) クシナーラーにおけるブッダの入滅

という四つを最重要事件とし、その間に、カピラヴァットゥでの出家（踰城）とか、成道以前の苦行や降魔、成道直後の説法へのためらいと梵天の勧請といった諸事件が採り上げられ、さらには神秘化にともなって、さまざまの奇蹟が物語られるようになった。

そのあと、ブッダの成道を通常の人間には考えられぬ出来事として讃嘆するところから、それにいたる因行を前生にまで及ぼして考えるようになり、こうして多くの前生物語が加えられる。それが「ジャータカ」（本生話）であり、「アヴァダーナ」（比喩譚）である。

今日、われわれはこうして種々の仏伝類を伝えてきているが、そのなかから、歴史上の人物としてのブッダの伝記を取り出してくるのは骨の折れる仕事である。いまは仏伝の研究が直接の目的でもないので、以下に、ごく概略を右の四大事蹟を中心に描写し、若干の有名な伝説にふれるにとどめたい。

仏伝の資料は、今日ひろく仏伝文学とよばれているが、聖典の分類でいえば、ジャータカとアヴァダー

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ナの二種に分かれる。いずれも教祖の伝説の神秘化と礼讃の産物であるが、ジャータカはブッダの前生物語といってよく、ブッダがこの世において悟りをひらいたについては、単にこの世への誕生以後の徳行や努力、資質によるだけではなく、三阿僧祇劫にわたって前生をくりかえす間に、いわゆる六度万行を積み、智慧をみがき、善行を積んだおかげで（積功累徳して）、ブッダとなったものと考えたところに由来する。ジャータカ物語の数はパーリ聖典で現存するもの五四七種を数えるが、その間、相互に必ずしも関連があるわけでない。むしろ、古代インドに伝わっていた寓話や伝説を、ブッダの前生物語として改編したものである（寓話のなかにはイソップなどと共通するものもあり、わが国に古来伝わっている物語も多い。例えば、因幡の白兎など）。

「サーマ・ジャータカ」（サーンチー塔門）
森で盲目の老父母を養っていた少年サーマ（菩薩）は，あるとき鹿狩りの王（左端）の放った矢に射られ，倒れたが，孝行のかいあって蘇生する．

これに対しアヴァダーナとしての仏伝は、同じく前生を扱いながら、より仏教教理に即している。そこには、過去世において成仏したブッダ（＝過去仏）たちと、そのもとで修行した菩薩やその他の人びとの物語が挙げられて、それと現在のシャーキャムニやその周囲の仏弟子、その他の人びととの対応が語られるというかたちで、明瞭な因果応報を示している。この種の資料としては、現在、

(1) 『マハーヴァスツ』（大事）〔梵〕　大衆部系の説出世部の伝承

(2) 『仏本行集経』〔漢訳〕　法蔵部の伝承

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(3)『ラリタヴィスタラ』(＝『方広大荘厳経』)〔梵・蔵・漢〕有部の系統の伝承などが主たるものだが、さらに純文学作品として今日、仏伝文学の代表に挙げられるのが、(4)『ブッダ・チャリタ』(アシュヴァゴーシャ造。漢訳、馬鳴菩薩造『仏所行讃』)である。

これらの仏伝に共通した記事としては、ブッダは、ディーパンカラ〔燃灯仏。定光如来〕のもとで修行したバラモン〔婆羅門〕の青年で、そのときにその仏から成仏の授記を与えられたことが、それ以後の長い仏道修行のはじめとなっている。このような過去仏の物語は、しかし、かなり後の世に定着したものと考えられる。

これらの定型化した仏伝に先だって、より歴史的事実に近いと思われる資料が、前述のように『律蔵』のうちに見られ、またその一部は阿含経典のなかに独立した経典として遺されている。たとえば、成道の経過を語る『聖求経』の類いとか、最初説法を語る『初転法輪経』の類い、そしてブッダの入滅を語る『涅槃経』の類いなどである。

誕生と出家

伝説によれば、ブッダはシャーキャ族の王スッドーダナ(浄飯王)の王子として、都城カピラヴァットゥの郊外、ルンビニーの園で誕生した。母のマーヤー〔摩耶〕を幼時に失い、叔母にして継母たるマハーパジャーパティー・ゴータミーに育てられた。おそらく母の死が契機ともなったであろうが生来、内面的で瞑想を好み、若いころから人生の悩みをもちつづけたらしい。成長して一族か

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

らヤショーダラー姫を迎え、一子ラーフラ〔羅睺羅〕をもうけたが、是が非でも人生問題の解決をと望む意志の力が強く、ついに妻子を捨て、王子の身分を放棄して、城をぬけ出した。時に二十九歳であったという。

当時の風習として、道を求める人びとは出家し、諸処に師を訪ね、聖賢を求めて遊歴して修行したもので、人びとはかれらを「沙門」śramaṇa（道に励む人）とよんでいた。またかれらは、他家に食を乞いつつ生活したので、乞食者すなわち「比丘」bhikṣu, bhikṣu ともよばれていた。シャーキャムニも、そのような沙門・比丘のひとりとして、修行の生活に入ったのである。

誕生にまつわる伝説　仏伝類は、ブッダはこの世に生をうける直前には兜率天にあり、そこから降下してマーヤー夫人の胎中に入ったという。また、マーヤー夫人は夢に白象が胎内に入るのを見たといわれ、また出胎は脇腹からであったという。あるいは、生まれるやいなや、七歩あるいて「天上天下唯我独尊」と叫んだとか、アシタ仙が生まれた王子の人相を見て、この子は転輪聖王となるかブッダとなるかいずれかだと占ったとか、これらの話は絵画や彫刻類、いわゆる誕生仏などを通じてわれわれにも親しいところである。

釈尊の出家の動機について、伝説は**四門出遊**あるいは四門遊観をあげる。すなわち、太子時代の釈尊はカピラ城の東・南・西・北の門から出た折、順次に老人、病人、死人および出家の沙門に会い、世の無常を感じ、出家の生活に憧れたというものである。一説には最後に野で農夫のたがやす下で虫が殺され、また鳥が虫をついばむのを見て、生きることの苦を感じたともいう。これは仏教の基本にある無常観や苦観

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

（四苦八苦）による動機づけであろうが、無常を感じて出家したのは心理的に事実と思われる。

シャーキヤ族は、一般に西方のアーリヤ人正統派からすると、部族の旧制を守る人びと（ヴラーティヤ）とされており、今日ネパールで見られるような蒙古系の血の混った種族であったらしいが、正確なことはわからない。隣人のコーリヤ族とともに、広くはコーサラ国の文化圏内に属し、後には政治的にも独立を失った。王制といっても、貴族階級の間で交替で執政を立てて政治を行なう体制で、コーサラやマガダの王に見られるような絶対的な王権が確立していたわけではない。ブッダの時代には仏典によれば、インド中原の地はコーサラ、マガダの二大王国をはじめとして、一六大国が割拠していたという。この形勢はしだいに二大国による弱小国の侵略、吸収、そして最終的にはマガダによるインド統一（マウリヤ王朝、前四世紀末）と変わる。

沙門―六師外道（自由思想家たち）　ブッダの時代は右のように政治的には群雄割拠から全国統一に向かう傾向にあったが、文化的には一足さきに、ガンジス中流域に広域な文化圏が成立しつつあった。そこはアーリヤ人の根拠地たる西北インドから見るとなお辺境であったが、それだけに王族を中心に新興の意気に燃え、思想的にもインド史上もっとも活発な時期にあった。そこでは旧来のバラモン思想にとらわれない自由な雰囲気が生まれ、そのなかから多くの反正統派的な自由思想家たちが輩出した。ブッダもそのひとりだったが、仏教では仏教以外の異端思想家の代表として、ジャイナ教の開祖をはじめとする六人の名を挙げ、これを六師外道（ろくしげどう）とよんでいる。六師とは、

(1) プーラナ・カッサパの道徳否定論

(2) パクダ・カッチャーヤナの七要素説――地水火風と苦と楽と生命の七要素の集合によって人生を説く。創造者を認めない。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(3) マッカリ・ゴーサーラの宿命論――これも人生を十二の要素の集合と見、その形態は宿命的に決定しているので、道徳的行為などは無用という。この徒は後にアージーヴィカ（邪命外道）とよばれる一大宗教勢力となった。

(4) アジタ・ケーサカンバリンの唯物論――かれもまた要素集合論で、道徳や来世を否定し、現世の快楽至上主義を唱えた。

(5) サンジャヤの懐疑論――すべての真理に対し、絶対的認識や説明は不可能であるとし、形而上学について不可知論を主張した。この立場はのちに仏教などにも多くの影響を与えている。

(6) ニガンタ・ナータプッタのジャイナ教――ナータプッタはマハーヴィーラ〔大雄〕という名で、ブッダと同様、王族の出身といわれる。徹底した不殺生と無所有の戒を主張し、いっさいの外的汚れにもとづく業の流入を防ぐことによって身心の清浄を保ち、もって解脱にみちびくと主張した。これも仏教に多くの影響を与えている。現代まで、インド内の一宗教として、僧職者と信者をふくめた強力な団結を誇る共同体を存続させており、経済的にも有力である（教徒は商人が多い）。

修行と成道

ブッダは、はじめマガダの地に、バラモンで禅定を修し、高徳の名の高いアーラーラ・カーラーマやウッダカ・ラーマプッタを訪ねて教えを乞うたが、それにあきたらずその後、断食などの種々の苦行に励んで六年を経過した。その間、父王の家臣で、父王がひそかにかれのあとを追わせた五人の人びとも沙門となってかれと行動をともにし、ウルヴェーラーの村を根拠地として修行をつづ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

霊鷲山から，ラージャグリハ〔王舎城〕の眺め

けた。そこは多くの沙門苦行者たちが集まっていたところで、苦行林とよばれている。

あるとき、苦行の無益さを感じたブッダは断食を放棄して、村のそばを流れるネーランジャラー河〔尼連禅河〕で水浴びをした後、近くの村の娘のさしだす乳粥をもらって、体力を回復した。五人の仲間はそれを見て、「ゴータマは堕落した」と言って、かれを見捨てて去ってしまった。ブッダはそこで、ひとり身心を整えてガヤーの地の、とあるピッパラの大樹の下に吉祥草を敷いて坐り、しずかに禅定に入った。

やがて、ある朝まだき、ブッダの内心に突然大きなひらめきが起こり、在来の苦悩がすっかり消え、心は大きな喜びに充たされた。ブッダは、ここに、眼前に真理（ダンマ、法）があらわになったと感じ、自ら真理を覚ったことを自覚した。すなわち、ブッダ（目覚めた人）が誕生したのである。この事実、すなわち「悟り」（覚、悟）を「菩提」bodhiとよび、「成道」と称する。ブッダの悟りにちなんで、ピッパラ樹は菩提樹の名を得、またその地はブッダガヤーとよばれるにいたった。悟りを得るまでの心の葛藤は「降魔」の伝説によって示さ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

れている。

ブッダは何を悟ったか。これはブッダの内観の問題で、他人はうかがうべくもない。しかしその内容が教説のかたちで示されたとき、それは、苦悩とその原因に関する「縁起（えんぎ）」の理であったと説明されている。

アーラーラ・カーラーマと**ウッダカ・ラーマプッタ**の両名についての史実はまったく不明であるが、古い経典（『聖求経』）では、前者は「無所有処定」（何ものも所有しないことを体得する禅定）を教え、後者は「非想非々想処定」（何ものを想い浮かべるのでもなく、思い浮かべないのでもない境地を体得する禅定）を教えたとされる。後に確立した仏教の禅定の階梯（九次第定）では、この二つは、四無色定（肉体を離れた状態における四種の禅定）の第三、第四の階位とされ、かなり高度の禅定に属するが、さらにその上に「滅尽定（めつじんじょう）」をおいて、これを最高とする。これはおそらく、ブッダの達した境地をこの両仙人より上であることを示すための伝説的処置だったと思われる。ただ、両仙が釈尊の修行時代に教えを乞うた人物であったことはおそらく事実として認めてよいであろう。

苦行と禅定　苦行はひろく tapas とよばれている修行方法で、古くからバラモンの間で、超越的な力を得る手段として修せられていた。タパスとは「熱」の意味で、万物を生みだす根元的な力を古代インド人は熱に見出していたらしい。難行苦行によってそのような熱力を身につけるので、苦行をまたタパスとよぶ。その具体的方法としてはさまざまのやり方があったらしいが、総じて、粗衣粗食、山林や墓地などに住み、孤独に耐えて身心を鍛えるのである。断食はそのうちの極限状況の一つである。

苦行に対し、禅定の修行はより安楽な、しかし確実に悟りに達する方法として、釈尊によって採用され

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

た。そのことを経典は「欲楽と苦行の両極端を捨てた中道」とよんでいる。禅定はひろくはヨーガ(yoga)とよばれ、精神の安定、統一を意味する。バラモンの伝統でいうと、ウパニシャッドのなかで中期以後、にわかにしきりに説かれるようになる比較的新しい修行方法であるが、説によればインダス文明の遺物中にヨーガを修する姿をなす神像があるということで、その起原を非アーリヤ的なインド土着の伝統に求めている。釈尊の習った二仙はバラモンとしては新しいタイプの修行者であったのかもしれない。一方、反バラモンといわれる六師外道などの沙門たちも、大部分は苦行を修していて、実践方法によって両者を区別することはできない。周知のように現代のヒンドゥー教はその修行の基本をヨーガにおいている。

降魔　「魔」という漢字はもとmāraというサンスクリットの音写〔魔羅〕の略称で、マーラは死、死神を意味する。仏教の教理上で、魔は蘊魔、煩悩魔、死魔、天魔の四種を数えるが、蘊魔とはわれわれの肉体、煩悩魔とはわれわれの心のはたらきを指す。いずれも悟りの邪魔をするものを象徴しているのであるが、成道にともなう伝説では、悪魔ナムチが七年にわたって釈尊の隙をねらったが遂に目的を果たさなかったといい、あるいは他化自在天にすむ天魔波旬（バーピーヤス。より悪いやつ）が天女たちをひきつれて、菩提樹下の釈尊を誘惑したなどという。悪魔の誘惑は釈尊の入滅にまでつきまとう。これが死魔である。

開教——初転法輪

ブッダとなった釈尊は、しばらく内心の喜びを享受していた。そして、それを他人に伝えるものかどうか躊躇していたが、天の声によって伝道の意義と使命を自覚した。はじめに、心の喜びを分

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

かつべく二人の旧師を探したが、二人ともすでに物故していた。つぎに想い出したのは旧友五人である。かれらがバーラーナシー（ベナーレス）にいると伝え聞いて、その道を急いだ。伝説はこの伝道の決意の動機を、梵天（ヒンドゥー教の最高神ブラフマン）の勧めに帰している（梵天勧請）。

バーラーナシーに赴いた釈尊は、郊外ミガダーヤ（鹿野苑。現在のサールナート）で五人を見つけると、さっそくかれらに、自分は如来（真理に達した者）である、と言って話しかけた。はじめは信じなかった五人は、その威厳にうたれて思わず立ちどまり、釈尊の次の言葉を待った。釈尊は悟りの内容を「四諦」の説にまとめ、悟りに向かう実践として「八正道」を示し、それが苦楽の二辺を離れた「中道」であると宣言した（三章、「教えの基本」参照）。五人は心服して、すすんで弟子となった。この事蹟を「初転法輪」という。「法輪を転ずる」とは、教化の活動を国王が、戦車を前進させて国を征服・統治することに喩えたものである。

初転法輪が仏教にもつ意義はきわめて大きい。第一に、序章で述べたように、それによって仏・法・僧の「三宝」が成立したことである。第二に、「ブッダ」の性格を規定する点で、さらに重要である。悟りがブッダひとりの悟りに終わったならば、ブッダは世にとって無用である。ブッダにとって、その悟りによって世の人びとの悩みを救うことこそが、本来の目的でなければならない。悟りは「自利」であるが、説法を通じて「利他」となる。この両面を具えてはじめて、ブッダは世の尊敬を受けるに値する。この点から、ブッダは「自覚、覚他、覚行窮満」（自ら覚り、他をして覚ら

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

しめ、覚行窮満（あるいは円満）す）と定義される。そして、自覚すなわち自利は「智慧」のはたらきにもとづき、覚他すなわち利他行は「慈悲」の心に発する。かくて、智慧と慈悲とはブッダのもつ基本的徳性と見なされる。人間が二本足で大地に立つごとく、ブッダは智慧と慈悲を両足とする。

釈尊のその後の生涯は、もっぱらこの覚他、利他行の実践に捧げられた。

梵天勧請　成道後のブッダの行動についてはパーリ聖典中の『律蔵』大品の語るところが一番整っているが、それによると、最初の一週間は菩提樹下に坐し、次の一週間アジャパーラの樹下で坐し、その間に一バラモンを教化し、次の一週間ムチャリンダ樹の下に坐し、その間にムチャリンダ龍王を教化し、次いでラージャーヤタナ樹下に同じく七日間、結跏趺坐をつづけ、その間に二人の商人から供養をうけた（『律蔵』はここに「仏」と「法」の二帰依処が成立したと宣言する）。ついで、ブッダは、

自分の悟った真理は「深遠で、見にくく、難解であり、しずまり、絶妙であり、思考の領域を超え、微妙であり、賢者のみのよく知るところである。」ところが世人は執着心をもっていて、道理を見る力がない。だから、「わたくしが教えを説いても、他人がそれを理解してくれなければ、徒労に終わる。わたしはそのことを憂慮する。」

と内省して黙然としていた。そのとき世界の主、梵天がブッダの心中を察して、「それではこの世は滅んでしまう。正しく悟った人の心が、何もしたくないと思っているのでは」と思い、ブッダの前に姿を現わして、

願わくはこの甘露の門を開け。
無垢なるものの覚った法を聴け。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

とよびかけて、その説法を勧請した、とある。

梵天の勧請は史実とはいえないが、説法躊躇は心理的事実であったろう。説法を勧めるのは誰であってもよいが、その役目をヒンドゥーの最高神にさせているところに、仏教徒の意図が見られる。いわばインド世界における布教公認の願いである。さらに言えば、梵天より上に立ち、梵天に代わって世の崇拝をうける者としてのブッダの強調である。ブッダをこのような絶対的地位に押し上げるについては、次章で述べるような、法（ダルマ）を媒介とするブラフマン〔梵〕との対応がある。

無師独悟　ある経典によると、バーラーナシーへの途次、ブッダはアージーヴィカ教徒ウパカなるものに出会い、かれに対して自分の立場を次のような詩句で述べたという。

われは一切にうち勝った者、一切を知る者であり、一切のものごとに汚されていない。すべてを捨て、自ら知ったのであるから、誰をたのもうか。われに師はない。われに似た者はいない。神々をふくめた世界のうちに、われに比肩しうる者は存在しない。

妄執を持たず、解脱している。

われこそは世間において尊敬さるべき者である。われこそは無上の師である。

われは唯一の正覚者である。われは清涼となり、やすらいに帰している。

法輪を転ぜんため、われはカーシー（＝ベナーレス）に向かう。

盲闇の世に不死の鼓を打とう。

（パーリ聖典『中部』）

五人の比丘とは、コンダンニャ、アッサジ（アシヴァジット）、バッディヤ、マハーナーマおよびヴァッパであったとされる。コンダンニャは、ブッダの説法を聴いて最初に悟り、ブッダから「ああ悟ったぞ、コンダンニャは」と賞讃されたので、爾来、「悟ったコンダンニャ」Aññāta-Koṇḍañña〔阿若憍陳如〕と

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

人からよばれている。ほかの四人もやがて悟り、阿羅漢（聖者）となった。経典はそこで、（ブッダを加えて）「六人の阿羅漢が出現した」と称している。

なお、鹿野苑は仙人堕処（イシバタナ。聖仙のおちあうところ）とよばれるが、いわばアゴラ的な場所で、各種修行者が集まって討論し、意見を交換する場であったからとされる。

『初転法輪経』などで、ブッダが苦・集・滅・道の四諦と、道諦の内容として八正道を説いて、それを苦楽の二辺を離れた中道なりと宣言したというのは、仏教の体系化に応じて後で確立した説であるとしても、仏教が何を教えるか、その基本的枠組を示すものとしてきわめて重要な主張である。本書でも、この観点から、法（教説）の内容を四諦に応じて説くことにする（三章）。

伝道と教団の発展

ブッダの名声が知れわたるとともに、多くの人びとがその徳を慕って弟子となり、あるいは在家の信者として帰依を捧げ、供養の品を献じてブッダや弟子たちの生活の面倒をみた。はじめはブッダを試そうとして論議をしかけながら、結局は心服したという例も多い。あるいは、ふとした出会いでブッダが声をかけ、その教えに感じて弟子入りした者もある。また、はるばる南の国から、名声を慕って一六人の友を語らって訪ねてきたバラモンの例もある。

五比丘が弟子となってサンガの成立した後、最初の入団者はバーラーナシーの長者の子ヤサであった。ヤサの出家はブッダの名を高め、その友四人の出家を誘い、さらに五〇人の出家を見た。ま

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

た、ヤサの父母は熱心な信者（優婆塞と優婆夷）となった。ブッダはこの六〇人の比丘たちに伝道の使命を与え、ひとりひとりが別々に教化の道を歩むことをすすめた。

次に初期の入団として重要なのは、マガダのウルヴェーラーにおけるカッサパ三兄弟〔三迦葉〕とその徒一千人、およびラージャガハにおけるサーリプッタ〔舎利弗〕とマハーモッガラーナ〔大目犍連、目連〕に率いられた、懐疑論者サンジャヤの弟子たち二五〇人の集団改宗である。とくにサーリプッタの入信は仏教教団の地位確立にたいへん有力な支援となったらしい。指導者格のサーリプッタ、マハーモッガラーナ両名はまもなく仏教教団においても高弟として重きをなすにいたった。

さらにブッダは故郷カピラヴァットゥを訪ねた際、父王をはじめとしてシャーキャ族の人びとを教化し、子息のラーフラを出家させた。アーナンダやアヌルッダ、また後年反逆したけれどもデーヴァダッタ〔提婆達多〕など、みなシャーキャ族出身の比丘である。また継母のたっての願いを聞き入れて、ブッダははじめて女性の出家を認め、ここに「比丘尼」の教団（サンガ）が成立した。

ブッダは何びとでもその出自を問わず出家を許し、教団内部では世間的な身分や地位をいっさい認めず、すべてを平等に扱った。弟子のなかには、シャーキャ族などの王族（クシャトリヤ。刹帝利）や前記のカッサパ三兄弟、サーリプッタ、マハーモッガラーナないしマハーカッサパ〔大迦葉、摩訶迦葉〕などのバラモン出身者のほか、コーサラのサーヴァッティー〔舎衛城〕などの大都市の商人階級（ヴァイシャ。吠舎）も多かったが、低い身分の出で、しかも優秀な弟子もいた。ウパーリ〔優波離〕

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

はシャーキャ族の王宮おかかえの理髪師の息子であったし、また強盗アングリマーラ、無学なチューラパンタカ、ヴェーサーリ（ヴァイシャーリ）の遊女アンバパーリーなど特異な存在もある。在家の信者で、かつ有力な外護者としては、ラージャガハ（王舎城）の竹林精舎を寄進したマガダ国王ビンビサーラ、ブッダと同年の友人コーサラ国王パーセーナディ（波斯匿王）のほか、給孤独長者の名でよばれ、いわゆる祇園精舎の寄進者であるスダッタ（須達）や、鹿母講堂の寄進者ヴィサーカー・ミガーラマーターなどの名を逸することはできない。

ブッダの伝道した地方は、ガンジス河中流域の、だいたいマガダの首都ラージャガハとコーサラの首都サーヴァッティーを中心とする楕円形の地域で、北はカピラヴァットゥ、南はコーサンビーを都とするヴァンサ国に及んだ。教団の根拠地としては、そのほかマガダの北のヴェーサーリー（毘舎離）やカーシー（バーラーナシー）があるが、もっとも重要な拠点だったのはラージャガハの竹林精舎と、サーヴァッティーの祇園精舎であった。釈尊はこれらの地方を弟子たちを連れて遊行し、毎年夏の雨期の間は根拠地のいずれかに安住して（安居という）、弟子たちを修行につとめさせた。

三十五歳から八十歳にいたる四五年間について、ブッダの事蹟で特定の年時と結びつけられた事蹟はほとんど伝えられていない。しかし、経典や律蔵の描くところから見れば、以上のような生活のくりかえしであったと思われる。その間、教団の発展に応じて、教団の統率と運営のための規定として「律」がしだいに制定され、入団規則、生活の規律、違反に対する罰則、修行の方式などが

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

漸次細かく整備されるようになった。

サーリプッタは懐疑論者サンジャヤの高弟であったが、あるときラージャガハの町で乞食をしているアッサジ（五比丘のひとり）に出会い、その清潔な身なりと端麗な姿に感じて、その師の名と教えの内容を問う。アッサジはそれに対し、ブッダの弟子と名のり、

諸々の事物は原因より生ずる。如来はその原因を説きたまう。諸々の事物の消滅をもまた。偉大な沙門はこのように語られる。

とうたった。これを聞いて即座にサーリプッタは法眼を得、やがてモッガラーナとともにサンジャヤの弟子二五〇人をつれて、竹林精舎のブッダのもとに弟子入りした。サンジャヤはそのため「口から熱血を吐いた」という。右のうたは一般に「縁起法頌」とよばれ、また「法身偈」とよばれて、仏教の基本たる縁起の理を教える偈として尊ばれている。

『平家物語』の冒頭の句で有名な**祇園精舎**は、正式には「祇樹給孤独園」という。祇樹は、ジェータ（祇陀）太子というコーサラ国王の一王子所有の園林を、スダッタ長者すなわち給孤独（アナータピンディカ。身よりなき者に食事を施す人）が買いとって、ブッダの教団に寄進したものといわれており、その跡は今日サーヘート・マヘートの地に比定されている。精舎といっても、ブッダの当時は雨露をふせぐ程度の房舎以外、立派な建物はなかったらしい。記録によれば、サーヴァッティにおける雨期の安居は二十数回で、ラージャガハよりもはるかに多い。最重要の拠点というべきか。

デーヴァダッタの反逆　かれはブッダの従弟のひとりであるが、ブッダの晩年にブッダから離反し、別の教団をつくったため、仏典ではその非道ぶりが強調され（仏身から血を出させた――五逆罪の一つ）、なかんずく地獄に堕ちたと伝えている。しかし、事実はブッダより以上の厳格な戒律主義者であったため、ブッ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ダと意見があわず別れたということで、その教団はかなり後世まで存続したものと推測されている。

比丘千二百五十人　仏典のなかで用いられる定型句として、しばしば「世尊は……比丘千二百五十人の大サンガと倶なりき」ということばがある。この数は、三カッサパの徒一〇〇〇人とサーリプッタ、マハーモッガラーナの徒二五〇人を合わせた数で、この二つの集団入信が釈尊在世時の仏教教団の主力であったことを物語る。実数はもとより定かでないが、学者の算定するところでは、比丘八八六名、比丘尼一〇三名、優婆塞一二八名、優婆夷四三名の計一一六〇名が確実な数とされている。

入　滅

八十歳になったブッダは、雨期の安居のためヴェーサーリーを訪れた際、身の老いを自覚した。そのあと、寿命を知って故郷を最後の地にしようと考えたのであろう、カピラヴァットゥへの途をたどったが、たまたま一信者の供養した食物にあたって、その途中クシナーラー（クシナガラ）の地において、ついに侍者のアーナンダ〔阿難〕たちに見とられて亡くなった。一年前に亡くなったサーリプッタのあとをうけて教団の指導者の地位にあった長老マハーカッサパをはじめとし、大部分の弟子たちは、その臨終に間に合わなかった。

ブッダの死は「入滅」といわれる。これは parinibbāna〔般涅槃〕の訳であるが、パリニッバーナとは、死によって、すなわち肉体を捨てることによって、ブッダが完全な理想境、平和・寂静の世界（＝涅槃、滅）に入られたという意味である。ブッダとなったからには当然、精神的苦悩はなかっ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

たが、なお肉体を有する人間としての限界はあった。死によって人間としての制約を離れたとき、ブッダはまたいちだんと高次の存在となった。後年、仏弟子たちはブッダが通常の人間のごとく病いに倒れたとは考えるに忍びず、その偉大さを讃える念から、入滅は、ブッダが自らその教化のはたらきを終えた（化縁完了）ので「任意捨命」したと考えた。さらには、八十歳の生涯をもったブッダは不滅なるブッダの化身であるとまで考えるようになる（次章参照）。

ブッダ最後の旅　『大般涅槃経』（マハーパリニッバーナ・スッタンタ）にはブッダ最後の旅の記録として、ラージャガハを出てからヴェーサーリーを経てクシナーラーにいたるまでの足跡が忠実にたどられている。その最初の型は『律蔵』のなかで、仏教教団にとってもっともショッキングな出来事としての教主の死を記録する目的でまとめられたものと思われる。その結びはラージャガハにおける結集であった。この記録はやがて、その旅の途次でのブッダの教説の記録として、独立して阿含のなかに組み入れられて、今日見られる『長阿含』遊行経や、パーリ聖典『長部』第十五経などとなったらしい。

この経典のなかで語られるブッダの最後の教えとしては、(1)ヴェーサーリーの町を顧みて説かれた「七不衰」の話、(2)師拳の法はない（教師は教えにあたって出しおしみしない）、(3)アーナンダの仮眠中に悪魔がささやいた死への誘惑に対するブッダの承認、(4)ブッダの死後、弟子たちは「法をよりどころ（灯明あるいは洲・島）とし、自らをよりどころとせよ」（法灯明・自灯明）という教え、そして(5)最後の遺言として、「すべては無常である。決してなまけてはいけない」という教えなどがある。

供養者チュンダは鍛冶工であった。かれは在家の信者で、いわば檀越（檀主）である。そのあと、クシナーラーにおいてスバッダという者が教えを乞い、最後の出家得度者となった（同じくブッダの入滅を扱っ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

た『仏遺教経』ではそのことを「はじめに阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したまう」と言っている)。

ヴェーサーリーはガンジス北岸で、パータリ村(後のパータリプトラ、マウリヤ王朝の都。現在のパトナ市)の対岸に位置する。ここはヴァッジー族の共和国の都であった。仏教教団の組織運営はこの国の政治体制に範をとったといわれ(九章参照)、ブッダが生前もっとも愛された町という。この町を去るにあたってのブッダの言葉は、そのような懐古の情にあふれている。ブッダは町をふりかえってそれを語られたが、これを「象王回首」(象がゆっくりと体ごと、うしろを向いてふりむくさまに喩えたことば)とよんでいる。

任意捨命　ブッダの死の意義はそれをパリニッバーナ(完全な涅槃)と称するところにも見られるが、さらにそれを任意捨命と考えるところに解釈の進展がある。その主張によれば、ブッダの寿命は一劫で、なお残余があったのに、その「一劫の残りを捨てて捨命した」というのである。アーナンダは、悪魔がやってきてブッダとその取り決めをしたとき不注意にも眠っていたというので、後で非難されることになる。何ゆえ、自ら命を縮めたのか。その理由は書かれていない。後の大乗仏教はこの問題をさらに突っこんで考えて、永遠のブッダの、方便による現涅槃という解釈に達する。その間の経緯は次章の仏身観で述べるが、直接その問題を扱う経典として『法華経』の如来寿量品があり、また大乗の『大般涅槃経』があることを記しておく。大乗の涅槃経は、舞台をこのブッダの臨終にとりながら、まったく自由に大乗的解釈を挿入する。そこではブッダは饒舌で、チュンダ、迦葉菩薩(創作された人物)を相手に仏性とか如来の常住その他の問題を説法している。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

舎利塔建立と結集

教主釈尊、ブッダであり、教団の指導者であったシャーキャムニの入滅は世の人びとを悲しませた。シャーキャ族をはじめとして多くの地方の信者たちが、その遺骨をもらいうけて祀ることを申し出た。こうしてブッダの遺骨は八分され、瓶、灰とともに一〇個の塔（ストゥーパ〔卒塔婆〕、舎利塔）がつくられた。信者たちはブッダ亡きあと、塔を中心に集まってブッダを祀りつつ、その教えを守ることを誓った。

他方、葬儀、祭祀を信者にまかせた仏弟子たちは、ブッダの教えをよりどころとして、自ら道を励めという釈尊の遺訓に従い、その四五年にわたる教説と、教団についての遺法をまとめようと考えた。これは教主なきあとの教団の統一にぜひとも必要であった。そこでマハーカッサパが音頭とりとなり、ラージャガハ〔王舎城〕の地に五〇〇人の長老たちを召集し、アーナンダが教説を、ウパーリが教団の規則を誦出し、それを確認、確定し、統一した「法」（教説）と「律」（教団規則）とを編集した。これを「結集（けっじゅう）」と称している。

ここに仏教は、釈尊の遺訓を奉じ、実践する教団として、一つの固定したかたちを得たのである。

舎利八分　梵文の『涅槃経』によると、釈尊の舎利は、(1)クシナガラのマッラ族（直接、ブッダの葬儀を手伝った人びと）、(2)パーパーのマッラ族、(3)チャラカルパのブラ族、(4)ヴィシヌ島のバラモンたち、(5)ラーマ村のクラウディヤ族、(6)ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族、(7)カピヴァットゥのシャーキャ族

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

が祀り、また(8)マガダの大臣でバラモンのヴァルシャーカラが持ち帰って、アジャータシャトル〔阿闍世〕王が王舎城に舎利塔を建てた。さらに(9)ドームラ姓のバラモンが骨壺をドローナ村に祀り、(10)ピッパラーヤナという学生のバラモンが残った灰を祀った、という。

これらの遺骨は後にアショーカ〔阿育〕王によって再配分されて、全国に八万四千の塔が建てられたといわれている。

一八九八年、カピラヴァットゥの近郊で、イギリスの駐在官ペッペが古墳から一つの骨壺を発見、そこに、シャーキャ族がブッダ世尊の骨を祀った旨が刻まれてあったので、右の遺骨分配説は歴史的事実であったと認められる。さらにこの骨壺の出現によって、ブッダは太陽神話であるという一部の学者の説はまったく否定されて、その歴史的人物であることが確定された。

結集にあたる原語は saṃgīti で、衆誦とも訳される。サンギーティは暗誦してうたうことで、教えの句（たぶん韻文の形にまとめたもの）を誦出したのであろう。それまでに説かれ、暗誦の役に立てられていたものを、みなで唱えて確かめあったものと思われる。

マハーカッサパは、指導的位置にはあったが二代目の教主になったわけではない。教団はしたがって集団指導体制をとったものであろう。中国・日本の禅宗のいう、マハーカッサパが「拈華微笑」の縁で、ブッダの衣鉢をついだというのは、いうまでもなく後世の創作である。しかし「半座を分かつ」ということは、教主と同様に弟子を教える資格を認められたということで、これはサーリプッタなどに対しても与えられていた役目と思われる。

ブッダの年代と日付　釈尊の年代は一般には紀元前六―五世紀といわれるが、学者の間では、五―四世紀と見る説も有力である。前者は主に南伝の資料にもとづくもので、その基準はアショーカ王の即位が仏

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

滅後二百余年とみるものである。後者は北伝によるもので、有部の伝承がアショーカ王の即位を仏滅一一六年とするのによる。アショーカ王の即位年代は、その遺した碑文に刻まれたギリシア人諸王の名の比定から前二六八年ごろと算定されるので、それから二〇〇年遡らせるか一〇〇年ほど遡らせるかによって、釈尊の年代に一世紀の差ができる。このほか、現在南方仏教が用いている仏教紀年によれば、またさらに一世紀も遡ることになるし（一九五六年にブッダ・ジャヤンティの名で仏滅二千五百年を祝った）、同じ六―五世紀説などでも細かいところではいろいろの推定がある。両説のいずれが正しいとも、絶対的な意味では決められない。ただ、北伝も南伝も、それぞれの部派の歴史をアショーカ王に結びつけようとしたところに、伝承発生の真の理由があると思われる。その際、有部は、その派祖の年代を釈尊になるべく近いところにおいて古さを主張し、南方上座部は中央マガダとの結びつきを強調したものと思われる。

また、ブッダの誕生、成道、入涅槃の日付に関しては、日本では現在、四月八日の誕生（仏生会、灌仏会、花まつり）、十二月八日の成道（成道会）、二月十五日入滅（涅槃会）とそれぞれ別の日付にし、三大節として大事にしているが、南方仏教では三つともインド暦の第二月（ヴェーサーカ、ヴァイシャーカ）の満月の日（陽暦では五月ごろ）としている。もちろん正確な事実の伝承ではなく、満月の日を吉祥な日として尊ぶのによるものであろう。月のちがいや、八日という日付については、インド暦をむかし中国暦で換算したときに生じたものと推定されている。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

二章　仏の本質

ブッダ・シャーキャムニの入滅の項でふれたように、入滅を契機として弟子や在家信者たちの間で、ブッダとは自分たちにとって何であったのかとの問いが、その追慕、尊崇の念とまじって生じてきた。

神格化はまずブッダに対する呼び名の制限や神聖な名称の付加からはじまり、偉大さの根源を過去世における善根功徳の蓄積に帰し、さらに八十歳入滅をもって方便と考えて、永遠のブッダを想定するようになる。このようなブッダに対する見方の変遷を、ここでは仏の本質論と題して考察する。伝統的な用語でいうところの「仏身」の諸問題であり、学者はこれを「仏陀観」「仏身論」と称している。

仏身論はキリスト教神学における「キリスト論」Christology に対応するものである。

> 教祖がしだいに神格化される点で、キリスト教と仏教は興味ある対応を示すが、ただキリスト教の場合、イエス・キリストの出現の一回性（歴史性）を強調するに対し、仏教ではブッダの特殊性・歴史性がうす

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

められ、本質が普遍的な絶対者に還元されると同時に、ブッダ体験が万人に可能なものとして一般化されていくところは、きわだった相違点である。

ブッダの称号

生前のブッダは、自らが「覚者」であり、弟子たちにとっての教師であることは自認していたと思われる。さらに自らをタターガタ（すなわち如来）とよばせたと言われているが、真偽のほどは定かでない。しかし周囲の人びとはかれをタターガタと考え、大沙門（マハーサマナ）とよび、また面と向かってはバガヴァット（世尊）とよんでいたこと、さらに世人からシャーキャムニともよばれたであろうことは疑いない。そのほかバラモンなど弟子以外の人びとは、かれをゴータマあるいは「沙門ゴータマ」とよび、御身、君などとよびかけていた。そのほか古い時代の詩には、サッカ（シャーキャ族の人）、サーキャブッタ（シャーキャ族の息子）、大仙ジナ（勝者）、大雄などの名でもよばれている。それらには当時の宗教家たちに対して広く用いられていた称号や、よびかけのことばも多く、とくに神格化した名前というわけではない。アルハット（阿羅漢）にしても、人徳があり、修行を完成した者は当然、世の尊敬をうけ、供養をうける資格があるという世間の常識があって生じた呼び名であった。

このような状態に対し、『律蔵』の規定では、「御身」「君」「ゴータマよ」などとブッダに対して

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

よんではならないと規定され、「世尊よ」という呼び方が唯一の公認されたよびかけのことばとなる。他方、ブッダの語を教主だけに対して用いるとともに、ブッダの覚りを絶対的なものとするところから、サンブッダ（正覚者）の称号に、も一つ「正しく」という副詞をつけて、サンマー・サンブッダ（等正覚、正遍知）とよび、さらにその上に「無上」（アヌッタラ）という最上級の形容詞を付するにいたった（無上正等覚、阿耨多羅三藐三仏陀。その覚りは阿耨多羅三藐三菩提）。また、タターガタについても教理的な解釈がほどこされ、そのほか「一切智」（サルヴァジュニャ）〔薩婆若〕などブッダの特性を示す称号も加わってくる。このような種々の称号の主なものは後に「如来の十号」の名でまとめられるようになった。

如来の十号　(1)如来（真理の体現者）、(2)応供（阿羅漢）、(3)正遍知（正等覚者）、(4)明行足（知〔学問〕と行とを兼備する者）、(5)善逝（幸福を得た人。仏教徒をインドではしばしばサウガタ Saugata〈Sugata とよぶ）、(6)世間解（世間のことを知悉している者）、(7)無上士（最上の人間）、(8)調御丈夫（人間を調教する者）、(9)天人師（神々と人間との教師。人天の大導師）、(10)仏・世尊。

最後の仏・世尊を分けると合計一一となるが、如来の十号は如来の別名という意味でなら、応供以下、数えて一〇となる。要するに一〇は円数で、あまりこだわることはなかろう。

これらの名称は、たとえば『法華経』の序品に過去仏として「爾の時に仏有り。日月燈明如来応供正遍智明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊と号す」とあるように仏名のあとにつけて並べるが、多くの場合、最初の三名を挙げる（「如来応正遍知」「如来応正等覚」、音写して「多陀阿伽度・阿羅訶・三

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

藐三仏陀」など）。別称であるから、仏とよんでも如来といっても、指すものは変わらない（釈迦牟尼仏＝釈迦如来、阿弥陀仏＝阿弥陀如来）。

「仏」と「如来」については本文で解説を加えるので、十号のうちよく用いられる「応供」と「世尊」について説明を加えておこう。

「応供」は arhat の訳で、その語義は「～するに値する、ふさわしい」という意味である。したがって漢訳は時に「応」の一字でこれをあらわす。ひとの尊崇、供養をうけるに値する立派な人をいう。同じことばが後には声聞乗の修行者の到達する最高の位とされ（八章参照）、その場合、「阿羅漢」と音写されるのが慣例である（これを略して「羅漢」という。十六羅漢、五百羅漢など）。

「世尊」の原語バガヴァット bhagavat（婆伽婆、薄伽梵）は今日、一般に幸福（bhaga）を有する者（-vat）と解されており、ヒンドゥー教では神とくにヴィシュヌに対する尊称として用いられている。しかし、古くは領主、支配者に対する尊称だったらしく、世尊という訳はそれに近い。英訳して Lord という。

仏と如来

右の諸名称のうち、仏の本質を示す術語としてもっとも重要なのが「仏」と「如来」である。

すでに説明したようにブッダとは「覚者」であり、悟ったという過去分詞に由来する。その原語のもとの意味は「目覚めた」ということであり、また愚かの反対の「さとい」（賢い）という意味でも一般に用いられた語である。それが「真理を覚った者」の意味で用いられ、さらに教主をさす用

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

語となったのちも、なお一般的に悟りの体験をあらわす語として普遍性をもっているのは、仏教の宗教としての特色を示すものである。このような一般的体験と区別する意味もあって、仏の場合は無上正等覚というような修飾語が多く付けられたものであろう。

このようにブッダは語義上は明白で疑念をはさむ余地がないのに対し、それと同義語として用いられるタターガタ（tathāgata）となると、若干の説明を要する。タターガタは前述のように、ブッダ在世時すでに修行を完成した人に対して一般に用いられていた名の一つと思われるが、その意味は、「このように立派になった人」ということであろう。

しかし、教理の確立とともに、この語には重要な意味が付せられる。ここで「如（にょ）」とは「真如」tathatā のことで、「そのよう（tathā）であること（-tā）」という意味をもち、ありのままなること、したがって真実なることを示す。それは仏によって悟られた真理（諸行無常など、また縁起の理）をさす。さきに仏伝のなかで、仏とは「自覚覚他覚行窮満」といわれており、自覚は智慧のはたらきにより、覚他は慈悲の心に根ざす、ブッダはしたがって智慧と慈悲の二本足によって立つと述べた。この智慧、自覚という側面を、悟られた真理との関係でみるとき、ブッダは「如に来至した者」あるいは「如に逝ける者」（すなわち「如去（にょこ）」）と解せられる。そして、衆生救済のため、衆生と同じ世間に姿を現わして、覚他のはたらきをする点を「如より来たる」と解し、「如来」とよぶ。

このように「如去」と「如来」は悟りと衆生救済というブッダのはたらきの両面を、いわゆる往

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:29:08 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

相と還相という如に対する方向性で示そうとしたものであるが、それが同じ一つの tathāgata という語にふくまれている。この解釈を可能としたのは、一つにはサンスクリットの複合詞のもつ多義性であり、それをすすめた原動力は、ブッダすなわち真理（法）を悟った者を、真理（如＝法）と一体となった者、真理の体現者と考える仏教的・インド的な絶対者観であった。しかし、この点を論ずるには、大乗における仏身観（「法身」）の確立をまたねばならない。いまは、それにいたる経過をまず考察しておこう。

タターガタの語義　tathāgata はサンスクリットの複合詞として、(1) tathā＋gata (2) tathā＋āgata と両様に分解できる。(1)が「如去」で、チベット語訳はこの解釈を示す。(2)は「如来」で、漢訳が通常用いる語である。(1)の gata には知った、理解したという意味もある。この訳例で見るかぎり、チベット仏教は悟りを重んじ、中国仏教は仏の慈悲を表面に出しているように見える。

ところで、サンスクリットの āgata はさらにいくつかの意味をふくむ。まず、英語の come と同様、ā-gam（来る）という動詞は日本語とはちがい、ある地点への到達を示す。したがって視点の置き方によって、こちらとあちらのいずれにも用いられる（「如に来至した」「如より来至した」）。『大智度論』などの説明でも、如来の語義の両面をこの āgata のもつ二方向性で解釈している。さらに、如（tathatā）は迷悟にかかわりなく不変であるが、それが清浄になったとき（suddhim āgatā）如来とよぶという解釈もあり（『大乗荘厳経論』）、また、ā-gata を時間的に過去から現在にいたった、つまり次々と伝来してきたものと解釈している例もある（無始よりこのかた伝来したそのようなもの。仏性をさす――『宝性論』）。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ブッダの前生

仏伝が成道以前のブッダをさす呼称として「菩薩」を用いていること、それがさらに誕生以前の前生物語にも及んでいることは、すでにふれた。

菩薩は菩提薩埵（bodhisattva）の略称（もしくは訛音の音写）で、そのもとの意味は「悟りの確定している者」ということで、成道を前提としてブッダの前身の呼び名として用いられたものである。この名は後には一般的にブッダとなる以前の求道者、「悟り（bodhi）を求める衆生（sattva）」を意味する語となり、大乗仏教において、その修行者の理想像を示す名となる（八章参照）。

ブッダとなるための修行として、歴史上のブッダの場合は六年（もしくは七年）の苦行があっただけであるが、入滅以後、仏の神格化にともない、その修行は誕生以前の前生に及び、しかもその期間も三阿僧祇劫という途方もない長期間とされるようになった。そしてその間に「六度万行」を修めたとされる。六度とは布施ないし般若の六波羅蜜であるが（七章参照）、その具体的な実践の模様は各種のジャータカに示されている。その結果、ブッダは一八種の常人の及ばない仏徳（十八不共仏法）を具え、三二の偉大な人物の相（三十二大人相）を有するにいたったという。ブッダはまた、三明・六通などの神通力を具えるものとされた。また、これらの期間中、菩薩はつねに歴代の諸仏に仕えて供養したということで、過去の諸仏の存在とその名も伝えられるにいたった。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

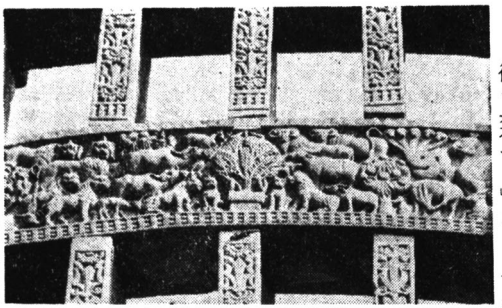
三阿僧祇劫　阿僧祇（asaṃkhya）とは無数という意味であるが、数の単位の最高で、10の一四〇乗をいう。劫（kalpa）もまた年数の単位で、その数え方は何種類かあるが、ここは宇宙が成立、存続、破壊して空無となる一循環を意味する大劫をさし、一大劫は数十万億年にあたるとされる。とにかくとてつもない数であるから、無限の過去世というに等しい。

仏の諸徳性　仏には無数の徳性（功徳、法）があって、「ガンジス河の砂の数よりも多い、あらゆる功徳を具有する」などと言われる。さきにみた仏の称号も、そのような徳性を示す語であるし、またそれらを煎じつめれば、智慧と慈悲の二本足に帰着する。しかし、仏典では定型句として、十八不共仏法など数種にまとめるようになった。

十八不共仏法は、阿含経に見られるところでは、十力・四無畏・三念住・大悲の一八項をさし、これがアビダルマにおいて確定した教理であった。

十力――仏に特有の一〇種の智力。(1)道理・非道理を弁別する力、(2)業とその果報との関係を知る力、(3)種々の禅定に通達する力、(4)衆生の機根を知る力、(5)衆生の欲求や理解の度合を知る力、(6)衆生の性格を知る力、(7)業に応じて生まれる世界を知る力、(8)過去世のことを記憶する力、(9)未来のことを予見する力、(10)煩悩が尽きて解脱したことを自覚する力、をいう。

四無畏――四無所畏とも訳し、仏が次の四点について怖れをもたないことをいう。(1)あらゆる現象苦の世界について知っていると明言すること。(2)苦の原因たる煩悩をすべて断じていると明言すること。(3)断ぜらるべき



ジャータカを刻んだサーンチーの塔門

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

煩悩について、他に説き教えること。(4)煩悩の断滅にみちびく道について説くこと。

三念住――仏は次の三つの場合において、つねに正知正念をもっている。(1)衆生が仏を信奉しても、仏はとくに喜ぶことなく、正念正知に住す。(2)衆生が仏を信奉しなくとも、仏は憂心をもたず、正念正知に住す。(3)衆生が仏を信奉しようと誹謗しようと、それにおかまいなく、仏は正念正知に住す。

大悲――仏の特性としての大悲とは、仏が常に衆生の苦難を救済しようという心をもっていること。大乗になると、十八不共仏法をこの十力などのほかに別出する。大乗の「十八不共仏法」とは、(1)～(3)身口意（身体・ことば・心）の三業について過失のないこと。(4)衆生に対する平等心。(5)禅定による心の安定。(6)すべてを包摂して捨てない心。――以上六つは戒学から生じ、無住涅槃の因となる。(7)～(11)衆生済度の意欲、精進努力、念力、禅定、智慧の五点について減退することのないこと、および(12)解脱からあともどりすることのないこと（あるいは信、欲、精進、慧、解脱、解脱知見の六より無滅ともいい、また、定を除いて解脱知見を入れる場合もある）。――以上の六項は定学より生ずる。(13)～(15)衆生済度のため、智慧の力で身口意の三業を現ずること。(16)～(18)過去・未来・現在の一切のことを知悉してとどこおりないこと。――以上の六項は慧学より生ずる（戒・定・慧の「三学」については六章参照）。

三十二大人相の数え方は一定していないが、主なものに「肉髻」、眉間の「白毫」、指間の水かき、足の裏の千輻輪、陰部が隠れている（馬陰蔵相）、身体全体がまろやかに隆起していること、四〇本の歯、四本の白牙、右に渦を巻いている毛髪などがある。これらは仏像彫刻の際、留意すべき点とされる。

さらに副次的な特徴として「八十種好」が説かれ、両者あわせて「相好」とよんでいる。

三明六通とは、(1)宿命通（過去世のことを知る力）、(2)天眼通（未来のことを予見する力）、(3)漏尽通

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

（現在の人生の苦を知り、その原因たる煩悩を断ずる力）、(4)天耳通（世界のあらゆる物音を聞く力）、(5)神境通（自由に世界を変現する力）、(6)他心通（他人の心を見とおす力）である。このうち、最初の三項を「三明」という（「明」は知識、超自然的知力の意で、「神通」とほぼ同義）。また、「十力」の(8)～(10)と同じ内容である。三明のほうが古くから説かれている。

三世の諸仏

過去仏の考えは仏教史上かなり古い。アショーカ王の碑文のうちにも、コーナーガマナムニ（拘那含牟尼）仏への供養が語られているが、この仏は古い阿含の資料で過去第五番目の仏とされている。シャーキャムニはその説によれば、第七番目にこの世に出現した仏である。

過去七仏　(1)ヴィパシュイン（ヴィパッシン。毘婆私仏）、(2)シキン（尸棄仏）、(3)ヴィシュヴァブー（毘舎浮仏）、(4)クルクッチャンダ（拘留孫仏）、(5)カナカムニ（コーナーガマナ。拘那含牟尼仏）、(6)カーシュヤパ（迦葉仏）、(7)シャーキャムニ（釈迦牟尼仏）。

このような過去仏の考えの成立には、ジャイナ教における開祖マハーヴィーラにいたる二十四祖の説が影響を与えたものと解されているが、仏教の教理上からいうならば、ブッダがその業績を、過去無限のかなたから存在するが、しかし世の中には知られていない森のなかの旧城の「発見者」に喩えられているところに見出される（次章参照）。つまり、絶対的なものは、旧い城にあたる「法」であるということである。そして、いまブッダがそれを発見したように、同じ真理の発見者（＝

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

仏）は過去においてもありえたし、また未来においても、別の発見者＝仏が生まれることも可能である（ただしこの比喩で、城の作者というものは問われていない）。こうして過去から未来にわたって、多くの仏が存在するということが理論的に認められた。

過去仏については、さらにさかのぼって、燃灯仏（ディーパンカラ。定光仏）を最初とする十五仏説、二十五仏説があらわれ、さらに、それぞれの名の仏が多数存在するとして無数にちかい仏を数えあげるにいたった。他方、シャーキャムニが、この世に誕生する直前には兜率天に生をうけたという伝説から、シャーキャムニの次に仏となるべき菩薩は同様に現在、兜率天にいるとされた。これを「一生補処の菩薩」と称する（一生補処とはあと一生だけ輪廻生存に縛られているが次生で解脱して仏となるという意。つまり仏の候補者）。マイトレーヤ（弥勒）菩薩がそれで、弥勒は五十六億七千万年の後にこの娑婆世界に生まれて、次のブッダとなるという。そこで、今のうちに弥勒に願って兜率天に生まれ、あるいは弥勒の下生するときこの世に生をうけようとした。すなわち未来仏の信仰である。

過去仏の名称は、過去七仏以外は各文献によって、また所伝の部派教団ごとに伝承が異なっている。したがって過去七仏が、原始教団が諸部派に分裂する以前に成立した思想であることは、まちがいない。さらに、ディーパンカラの名と、その役割（シャーキャムニの出現の予言、「授記」）もたいていの部派に共通しているので、これも仏伝との関係でかなり古く、最初のブッダとされたものと思われる。そのほか、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

過去荘厳劫、現在賢劫、未来星宿劫にそれぞれ千仏の名を挙げる場合もある（『仏名経』。釈迦は賢劫仏のひとり）。

アジャンター壁画の仏たち

十方の諸仏

過去から未来へかけて無数の諸仏の存在を想定するのと並んで、空間的に無限の世界の存在を予想し、それぞれに仏がいるという考えも現われた。

そのはじまりは大衆部（だいしゅぶ）の一派であったとされるが、とくにこの考えが顕著となり、教理的にも重要性をましたのは大乗仏教においてである。

この場合、前提となっている考え方の一つに、一つの世界には一時に一仏のみがある（一時に二仏は存在しない）という規定がある。一方、釈迦仏の説法の及ぶ範囲として、その世界を娑婆世界（サハーローカ）と名づける。娑婆世界は苦悩多い世界で穢土（えど）であるのに対し、その外に十方にわたって、無数の世界があり、そこは「浄土」であり、苦悩のない楽土であり、それぞれの浄土に別々の仏が存在する（仏国土）という考えが成立する。この世の

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

外に浄土や天国があるという考え方は古代エジプトその他、各地にあり、あるいは人類が自ら考えだした普遍的な見方とも思われ、特定の人種による発案を想定する必要もないかもしれないが、大乗仏教になってこのような考え方が顕著になるについては、古代ペルシャあたりの光明思想などの影響を考えることも可能ではある。

ともかく、こうして現在十方の世界に無数の仏国土があり、それぞれに一仏が在すという考えが、確立した。そういう浄土の代表格として、東に阿閦仏（アクショービヤ）の妙喜世界（アビラティ）、西に阿弥陀仏（アミターバ＝無量光、アミターユス＝無量寿）の極楽世界がある。

これらの諸仏は、たとえば法蔵菩薩が誓願を立てて修行し、その完成によって阿弥陀仏となったとされるように、発心（誓願）―修行―成道という釈迦仏と同じ悟りへの過程を考え、その結果として浄土を開拓したということになっている。大乗経典には過去世にも現在・未来世にも、こうして無限に多くの仏の存在を可能ならしめる枠があり、多くの菩薩（ないし種々の衆生、声聞の弟子衆も諸天龍神にいたるまで、仏の法を聴聞するかぎり）が、未来の成仏を予約されている（授記）。その際かならず、世界（仏国土）の名と仏名とが併記される。これら諸仏は大乗では「三世十方の諸仏」とまとめて唱えられている。

他方、娑婆世界は穢土であるので仏国土とはいわれず（『維摩経』のように、心が浄ければ、この土がただちに浄土であるとする思想も一方ではあるが）、したがって、釈迦は弥陀と同じような

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

修行の果として成道した仏とは別のジャンルと見られるようになる。すなわち、釈迦化身説である。それに対し、阿弥陀仏など浄土の仏は「報身」とよばれるが、これについては仏身論として次項で考える。

三千大千世界　ここでいう一世界は元来、転輪聖王の支配する区域を予想しているので、その範囲は須弥山を中心とする東西南北の四大洲、つまり地球世界にあたる地域を指すはずである。四大洲とは、東の勝身洲（ヴィデーハ）、南の贍部洲（閻浮提。ジャンブドゥヴィーパ）、西の牛貨洲（倶耶尼。ゴーダーニーヤ）、北の倶盧洲（クル）で、このうち南贍部洲こそが釈尊の出現した土地で通常の人間の世界であるとする。仏教の世界観では、この須弥山を中心とする世界の下に地獄などがあり、上に天界があると見るが、天界は禅定の力によって上昇できる範囲に属し、それを欲界、色界、無色界の三界にわけるので（四天下や下方の地獄にいたるまではすべて欲界）、三界の範囲が世界にふくめられる。三界はまた輪廻する者（解脱していないもの）の生存空間である（五章、一二一ページの図参照）。

さらに、空間的には須弥山を中心とする世界を一小世界として、その千個分を小千世界、その千個分を中千世界、そのまた千個分を三千大千世界という。つまり、小世界の十億倍（1000×1000×1000）の範囲をひとまとめとして考える場合がある。

娑婆世界　娑婆はsabhā の音写と思われるが（現代インド語でも集会を意味し、下院をロクサバー〔＝ローカ・サバー。世間人の集まり〕、上院をラージ・サバー〔支配者の集まり〕というごとし）、sahā とも書かれるので、そこに勘忍、忍耐の意をとり、しばしば「忍土」「堪忍土」と訳される。苦難多く、それに耐えなければならない世界という意味である。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

色身と法身

ブッダの入滅が仏の本質を考える契機となったとき、すでに仏はこの世の存在とはちがうということが意識されたが、その後最初に現われたのは、仏は法をその本質としているということであった。

「仏の身が法より成っている」ということは阿含のなかに見られる。そこでは法は梵（ブラフマン）と対比されていて、梵に代わる絶対的存在としての「法」、そして、梵の人格化としての梵天に代わる、法の人格化としての「仏」という類比が成り立つが、そこでは「法」が何を意味するかは必ずしも明白でない。他方、臨終の教えのなかに、

戒と慧と定と解脱とは無上である。

名声あるゴータマによってこの法は覚知せられた。
このように仏は知って、比丘らに法を説いた。
苦を滅した具眼の師は、般涅槃した、と。

という詩偈があり、そこに戒・定・慧・解脱の四法と、そしてそれらの知という五つが仏の資格として語られている。最後のものは後に「解脱知見」といわれるものであろう。この五つはアビダルマの教義で「五分の法身」といわれる。そして「法身」とは法の集まりで、戒などの五つの部分よ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

りなる法の集まりとは結局、教法の全体をさすと解せられている。その意味するところは、仏の死後、仏に代わるものは、仏の遺した教法であるという解釈（たとえば『遺教経』のいうところ）で、これが「法身」という語のもつ第二の意味である。

法身とはこのように、(1)仏は「法を身としている」という用い方に見られる仏の説明語、(2)その具体的内容として「五分よりなる教法の集まり」（＝すなわち八万四千の法門）との二義が、部派の教学であるアビダルマにおいて成立していたことが知られる。

このほか八十歳入滅の仏を論じて、その身が肉身（色身）であったか、法身であるか（したがって、その化身）の議論もあらわれた。有部などはあくまで色身説をとるのに対し、大衆部などは法身の化身説を唱えたといわれる。この後者の考え方がまた大乗仏教の仏身論にひきつがれてゆくのである。

たとえば、『金剛経』などに、

如来を色身をもって見たり聞いたりしてはいけない。如来は法よりなるものと見るべきである。

という詩偈があり、その他の『般若経』でも何度も、如来は「法よりなるもの」であると説かれているが、しかしまだ「法身」という独立した概念としては成立していないようである。

ナーガールジュナ〔龍樹〕になると、これに対し、『般若経』の注釈『大智度論』において、仏身に「法身」と「生身」をわけ、生身とは父母所生身の意で釈迦仏をさすとしている。法身と色身と

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

いう二身説はその後多くの大乗経典で見られるようになる。この二身説と、さきにあげた浄土の仏と穢土の仏の区別とを合わせるとき、三身説が成立するが、理論的にそれが確立するのはナーガールジュナよりもあと、たぶん瑜伽行派の理論のなかでである。

このうち「法身」というのは、さきに述べた「仏は法を身としている」という考え方から発展したものであるが、大乗において確立したところでは、法とはブッダによって悟られた法（所証の法）としての真理それ自体である。それは、後に仏によって説かれる教えとなる一切の法（所説の法、教法）の根元にあるものとして、法界（聖法出生の因）とよばれ、あるいは「法性」（法の本性、法の本質）とよばれるものである。同時にそれは世界のすべての現象としての一切法の根元にあるものとも考えられる。この法界は空間的に無限と考えられ、時間的にも不変、常住のものと見なされるが、仏はその本質においてそれと一体であるとして、仏そのものが時間・空間的に無限・不変な絶対的存在と見なされ、これが法身（如来の法身）といわれた。同時に、法身はまさにその普遍的存在性のゆえに、この世に存在する一切衆生もまた、その本質において法身とひとしいといわれる。これはとくに後述する如来蔵思想（七章参照）において発達した理論であるが、可能性としては『華厳経』の教理に十分読みとれるものである。『華厳経』の仏は、このような無限大な空間に浸透する存在として法身と考えられ、この法身はとくに毘盧遮那仏（ヴァイローチャナ）と名づけられている。毘盧遮那仏は人間の言葉で説法はしないが光明を発して、それが菩薩たちの頭に入

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

り、口から出ると、説法として経文のかたちをとる。この毘盧遮那仏は密教にいう大日如来であって、そこでは、説法をすると解せられる。これは如来の三密行の一つとしての口密（＝説法）としてである。

この場合、法身は一方では法界、法性と同じで、いわばそれは理そのものであるが、同時に、仏である以上、そこに智（さとり）の契機があると考えなければならぬ。その智のはたらきとして、万物をあまねく照らす光明が喩として用いられているわけで、それは同時に万物を育む太陽のはたらきにも比せられて、仏の慈悲をあらわしている（ヴァイローチャナとは、遍照の意）。すなわち、法身は理と智（智と悲をふくむ）とをかねそなえた仏を意味するというのが、大乗経典に一般的な「法身」の本質である。

三　身　説

この法身に対し、個別的な法の体得者＝如来（如にいたる者、如に逝けるもの）はさきに挙げたように自らの浄土をもつ諸仏で、修行の果報をうけた者という意味で「報身」といわれる（あるいは「応身」とも訳される）。その原語は「サムボーガ」で、受用身ともいわれるように、悟りの果報を享受するという意味である。そのかぎりでは自利で、自受用の立場であるが、浄土の存在はそこに衆生をうけ入れ、衆生たちをして同じ悟りを受用させるという利他の目的によるものであるから、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

その点から見ると法身と同性質の身（等流身）で、しかも利他のために他土に出現した仏たちということになる。つまり、受用身を「他者をして法の悟りを享受させるための身」（他受用身）と解するものである。この仏（浄土の仏）は、色身は備えているけれどもこの世にある凡夫たち（穢土の衆生）には見られず、ただ菩薩たちだけに見られるともいわれる。他方、釈迦仏は同じく利他の色身をとるが、そしてわれわれ凡夫も見ることができるが、これはわれわれのために、法身がとくに変化して姿を現わしたもの（化身、応身とも）である。それは「如より来た」という意味で「如来」である。

ここに、法・報・応（または法・応・化）の三身、あるいは自性身（＝法身）・受用身・変化身という仏の三身説が成立し、これが大乗仏教の仏身論の基本となった。

三身説は後には自受用身、他受用身を分けて四身説としたり、法身を自性身など三身の根元にあると見る四身説となったり、また智と理との峻別から、理としての清浄法界と、四智をもつ三身あるいは四身の仏という説に発展、そしてさらに清浄法界もまた根元的智であると見て、全体を五智とよび、一切を大日如来の世界と見る五智五仏の説などへ展開する。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

三章　法——仏教の真理観

法ということ

三宝の第二を占める「法」はダルマ（dharma. パーリ語では dhamma）の訳で、保つもの、支えるもの、の意である。

「ダルマ」という語はインドでは一般に、普遍的な真理あるいは宗教的規範（いわゆる宗教）、社会的規範（法律や慣習・制度）、行為の規範（倫理・道徳、義務）など広範囲にわたって使用されており、ひろく善、正義と見なされている。

すなわち、われわれが「ヒンドゥー教」とよぶものは単にダルマといわれ、時にヒンドゥ・ダルマ（インドの法）とよばれる。この場合のダルマは宗教と解してもよいが、ヒンドゥ・ダルマは同時に社会的規範でもある。それは『マヌ法典』その他の法典（dharma-śāstra）において規定される諸条で、その基本は「カースト（ヴァルナ）と人生の住期（アーシュラマ）に関する法」といわれる。カーストに関する法とは、所属するカーストにともなう規定で、それはまたカースト成員にとっての行為規範、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

すなわち義務（と権利）でもある。カーストにかかわるダルマとならんで、法典類には不殺生（アヒンサー）とか慈愍（ダヤー）とか布施（ダーナ）など、ヒンドゥー教徒として（インド的に言えば、人間として）守るべき普遍的道徳も教えられており、これらが両々あいまって、インド人（ヒンドゥー教徒）の人生観の基本となっている。

このような諸種の側面をもつダルマは、その根元を神々の啓示たる『ヴェーダ聖典』に仰ぐところの「永遠不変の法」（サナータナダルマ）で、守られるべき「正義」であり、またそれを守ることによって死後の果報、福祉をもたらす「善」である。

仏教の場合も、基本的にはヒンドゥー教におけるのと同じ意味あいで「ダルマ」の語を用いていると見てよい。仏教はヒンドゥー（教徒）からいわせると、Bauddha-dharma つまりブッダの法で、ブッダを通じて開示された真理であり、それはヒンドゥーのダルマの一つの現われであって、必ずしもヒンドゥー教と抵触するものではないと考えているらしい。しかし仏教の側からいわせると、ヒンドゥーの法がカーストその他の規制をふくみ、それを通じて実践されるインド的な法であるに対し、仏の法はカーストを超えた普遍的な法であり、人類普遍の真理である。換言すれば、ヒンドゥーの法、カーストの法が世俗的・世間内の法であるに対し、仏の法は出世間の法であると自負された（仏教が四姓平等を説く根拠はここにある。つまり、出世間の法としての平等性である。しかし、同時にそれが、仏教がインドの枠外に出て世界宗教となる契機をつくった）。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

さて、仏教において、「法」はブッダによって悟られた真理であると同時に、その内容がブッダの口を通じて説かれたものでもある、と前に述べた。そのような「法」の定義として経典の語るところをみると、次のように言われている。

法は、(1)世尊によって善く説かれ、(2)（聴く者が）自らよく見るべきもの、(3)時にかかわらず（非時）、(4)来たれ、見よというべきもの、(5)（理想〔涅槃〕に）導くもの、(6)智者の自ら覚るべきもの（自内証）である。――

さらに、仏によって善く説かれた法は、

初め善く、中善く、後善く、義（意味内容）と文（表現形式）とを具備し、完全円満で清浄の法であるといわれる。これらの定義は、「悟られた真理＝説かれた教え＝悟りに導くもの」という悟りと教えの円環構造をよく示して、そのかぎり仏教の基本構造を教えてくれるが、その真理＝教えの内容が何であるかはまだ示されていない。

この「法」の内容を示すものとしては、まず次の詩が挙げられよう。

何であれ諸々の事物（諸法）は原因より生ずる、
それら〔諸法〕の因を如来は語られた。
また、それら〔諸法〕の止滅をも、
このように大沙門は語られた。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

これは、後に法将といわれブッダの片腕ともたのまれた長老サーリプッタ〔舎利弗〕がかつて懐疑論者サンジャヤの高弟として沙門仲間でならしていたとき、道で出会った仏弟子のアッサジ〔馬勝〕から聞いて、その仏弟子となる機縁をつくったといわれる詩である。

この伝説が事実かどうか保証のかぎりではないけれども、仏伝や経典の編集者たちが、右の詩に仏教の基本的教理を見出していたこと、したがってまた、この詩に「法」の原意が求められることはまちがいない。

この詩に対する代表的な漢訳は、

諸法従縁起　如来説是因　彼法因縁尽　是大沙門説
（諸法は縁より起こる。如来は是の因を説きたまう。かの法は因縁にて尽く。是れ大沙門の説なり。）

この詩は、一般に「縁起法頌」とよばれる。それは、あらゆる現象は諸種の因縁によって生起したもので、その因縁がなくなればそれらの現象はなくなるという縁起説（ブッダが菩提樹下に悟ったとされる）をこの詩が説いているからであるが、さらにそれが「法身偈」とよばれることがあるのは、その縁起説が仏の説く法の根元であること、ブッダの入滅後も、ブッダに代わって尊重、崇拝されるべき法身（教法の集まり、教法の全体）の基本にある悟りの内容そのものを端的に示していると見られたからである。

実はこの詩には「法」ということばの、上に述べたのとはちがう新しい用法が見られる。それは

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

右の詩で「もの」と訳したもの、また縁起説の説明で「あらゆる現象」と言ったもので、ヒンドゥーの用法にはない仏教独特の意味である。

パーリ聖典に対する注釈（『法集論註』）によると、仏教の「法」には四つの意味がある。すなわち、(1)「教法」、(2)「因」、(3)「徳」、(4)「無我なるもの」である。

このうち、「教法」pariyatti とは「学んでそれに達すべきもの」を原意とするから、悟りと教えという仏教の基本構造を示す「法」にあたる。それは宗教としての仏教の全体をさすもので、聖なるものと言ってもよかろう。

次の「因」hetu とはさきの法身偈の説く道理で、縁起の法、因果の理といってよかろう。それは仏教の主張する真理、つまり、真なるものである。

第三の「徳」guṇa とは、価値あるもの、役に立つもの、善なるもので、道徳的規範たるものをいう。仏教としては人を菩提、涅槃に導くような正しい行為、実践修行すべき諸徳目をさすが、具体的には不殺生とか慈愍とか布施などヒンドゥーとも共通する徳目も多い（徳に反する法は「非法」とよばれるが、それは不善であり、過ちであり、悪い果報をもたらすものである）。

「徳」はこのように善で価値あるものを意味するのが原意であるが（「徳」＝「得」）、インドの原語でいうと一般に「性質」「属性」をさす。属性というのは実体にとって付属するものであるが、それを通じてその実体を顕わすような特色でもある。つまり、ある実体をそのものたらしめているよ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

うな性質、いわばそれを保たせているもの、支えているもの、つまりダルマである。ダルマの一般的用法としては、この「性質」「属性」というのはむしろ原意に近い。仏典のなかでも、この用法は数かぎりなく見られる（たとえば「生滅の法」といえば、「生じては滅するという性質」を意味する）。この場合には善悪美醜にかかわらない。

この「性質」という意味と関連して発達したのが、さきに「もの」とか「現象」と訳した「法」の意味である。

漢訳の仏典で伝統的に用いられる法の定義は「任持自相、軌生物解」（自相を任持して、軌として物の解を生ず。『倶舎論光記』等）で、後述する「一切法」といわれるときの「法」の意味である。そこで「自相を任持する」とは、固有の性質を保持するものの意で、実体というにはあたらないが、物質であれ、あるいは心理現象であれ、抽象的概念であれ、決まった性質をもっているものはみな「法」とよばれる。決まった性質をもっているとは、たとえば火といえば「煖の法」つまり熱いものと相場が決まっていて、冷たいことはありえない、といったふうなことである。それは「火」ということば（概念）の内容といってもよい。仏教では、意識の対象となる、一定の内容をともなう概念を「法」とよぶ。さらに仏教では、そういうあらゆる現象が、因縁によって生起するもの（縁起）で、たえず生滅変化するもの（無常）、不変な実体のないもの（無我）と教えるわけである。その意味で、さきにあげたパーリ注釈書のいう(4)「無我なるもの」がこの意味に相当すると考えるのである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

が、その原語 nissatta-nijjīvatā を直訳すると「実体なく生命なきこと」あるいは「衆生とか命ある者とよばれるもののないこと」で無我なることを意味するので、「性質」という意味にも、またそういう道理、真理という意味にもとれる。この点については後でまた説明するが、以上のような多義を一語にふくむものとして、仏教では「法」という言葉が用いられているのである。

以上の用法を現代流にまとめると、(1)教え（教法、宗教）、(2)真理（悟りの内容）、(3)性質、とくに善なる性質（功徳）、(4)存在（有形・無形の、心的・物的な諸現象、概念〔意識の対象となるもの一般〕）ということになろう。さらにこのような四種のすべてが教えの内容になっているのであるが、そのような教えを内容とする経典、聖典もまた「法」とよばれる。この用法はブッダ入滅後の結集に際して「法と律をえらんだ」というときの「法」の意味するところで、後の「経蔵」にあたるものである。これは第五の意味として加えてもよいが、(1)「教え」を、(a)能詮の経と、(b)所詮の教と二種に分けるのが伝統的な説明法である。

以下ではまず、中核となるべき「真理としての法」についての具体的内容の説明からはじめることとしよう。

教えの基本——縁起と四諦説

仏教の基本は、ブッダが法（真理）を悟ったということと、その悟られた法をブッダが弟子たち

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

に説かれたということ――すなわち、教えとしての法は、悟りというブッダの体験を言葉を通して語られたものである、ということを真実として信じ、了解するところにある。

この悟られた真理（所証の法）と説かれた教え（所説の法）の関係とその内容は、仏伝においては、ブッダが縁起の理を観じて法を悟り、初転法輪において四諦・八正道の教えを説いたというかたちで定式化されている。いま、仏伝に即して、このことを少しくわしく述べてみよう。

パーリ聖典の『律蔵』では、菩提樹下のブッダの行動をあらまし次のように説いている。

そのとき、世尊は、はじめて悟りをひらいて以来、七日の間、菩提樹の下で坐禅しておられた。七日たって後の夜のはじめ（初夜）、世尊は「縁起」を順逆の次第で思念された。すなわち、

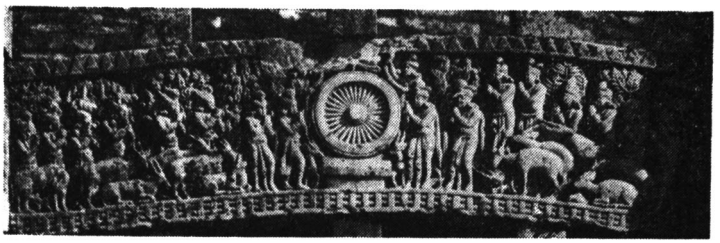
「無明によって行あり、行によって識あり、識によって名色あり、名色により六入（六処）あり、六入によって触あり、触によって受あり、受によって愛（渇愛）あり、愛によって取あり、取によって有あり、有によって生あり、生によって老死、愁い、悲しみ、苦しみ、憂い、悩みが生ずる。このようにしてこの苦の積聚がすべて集起する。

しかし完全に貪欲を離れた結果、無明が滅すれば、行が滅する。行が滅すれば識が滅する。（ないし）生が滅すれば老死、愁い、悲しみ、苦しみ、憂い、悩みも止滅する。このようにして、この苦の積聚のすべてが止滅する。」

そのとき、世尊は即興で次の詩をうたわれた。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会



初転法輪.「法」(ダルマ)は輪で示される(サーンチー,第1塔)

努力して瞑想しているバラモンに
諸法があらわれ出るとき、
かれの疑念はすべて消滅する。
かれは有因の法を知ったので。

次に世尊は真夜中にも同様に縁起を順逆の次第によって思念し、そのあと、次の即興の詩をうたわれた。

努力して瞑想しているバラモンに
諸法があらわれ出るとき、
かれの疑念はすべて消滅する。
かれは諸縁の滅を知ったので。

また次に世尊は、明け方ちかくなって、縁起を順逆の次第で思念して後、次の詩を即興でうたわれた。

努力して瞑想しているバラモンに
諸法があらわれ出るとき、
かれは魔軍を蹴ちらして立つこと
太陽が天空を照らすごとくである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

『律蔵』はこのあと、初転法輪に関して次のように述べている。

さて世尊は道を次いで、五比丘のいるバーラーナシーの仙人住処（イシパタナ）鹿野苑にやってこられた。……そこで世尊は、五比丘に告げられた。

「比丘たちよ、出家者のしてならないことが二つある。二つとは何か。一つは諸々の欲望において欲楽に耽ることである。……他は自ら苦しめることであり、いずれも聖ならず、ためにならない。如来はこの両極端に近づくことなく、中道を悟ったのである。……

比丘たちよ、中道とは何か。それは八支よりなる聖なる道である。すなわち、正見、正思惟、正語、正行、正命（正しい生活）、正精進、正念、正定である。これが如来の悟った中道であり、眼を生じ、智を生じ、寂静、神通、正覚、涅槃に向かうものである。

比丘たちよ、苦という聖なる真理（苦聖諦）は次のとおりである。生まれが苦であり、老も、……病いも……死も苦しみである。いやな人に会うのは苦であり、愛するものと別れるのも苦であり、欲しいものの得られないのも苦である。要約すれば、執着の素材としての五蘊は苦である。

苦の生起の因という聖なる真理（苦集聖諦）は次のごとくである。それは〔輪廻への〕再生をもたらすもの、喜びと貪りをともない、ここかしこに歓喜を求めるもの、すなわち欲への渇愛、生存への渇愛、および生存を離れることへの渇愛である。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

苦の止滅という聖なる真理（苦滅聖諦）は次のとおりである。それは、〔上述の〕渇愛が完全に除かれた止滅である。すなわち、捨、放棄、解脱（ゲダツ）、無執着（アナーラヤ）である。

苦の止滅にいたる道という聖なる真理（苦滅道聖諦）は次のとおりである。それは聖なる八支よりなる道である。……

「苦聖諦はこれである」と、未だかつて聞いたことのない法に関して、わたくしに眼が生じ、認識が生じ、智が生じ、慧が生じ、光明が生じた。「実にこの苦聖諦はあまねく知らるべきである」と……。「実にこの苦聖諦があまねく知られた」と、わたくしに……光明が生じた。

「苦集聖諦とはこれである」……「この苦の生起の因〔なる真理〕は断ぜられるべきである。……この苦集聖諦は断ぜられた」

「苦滅聖諦とはこれである」……「苦滅聖諦は現証されるべきである」……「苦滅聖諦は現証せられた」……

「苦滅道聖諦とはこれである」……「苦滅道聖諦は修せらるべきである」……「苦滅道聖諦はすでに修せられた」とて、未だかつて聞いたことのない法に関して、わたくしに眼が生じ、……光明が生じた。

比丘たちよ。まだこの四聖諦を以上のような三転、十二行相によって如実に知見しないうちは、わたくしは……無上正等覚を現に悟ったとはいわなかった。いまや、この四聖諦をこ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

のように三転十二行相をもって悟ってはじめて、わたくしは神々・マーラ・梵天をふくむ世間、沙門、婆羅門（バラモン）、神々や人間をふくむすべての衆生のうちで無上なる正しい覚りを現に悟ったと称したのである。そして、わたくしに次の知見が生じた。

わが心の解脱は不動である。これが最後の生存である。もはや再生はありえない。

と。」

この『律蔵』の記録がまとめられたのは、ブッダの悟った法は（十二支）縁起であり、初転法輪では苦楽の二辺を離れた中道としての八正道と、それをふくむ四聖諦の教えが説かれたということが教団の定説となって後のことであろう。それ以前に、悟られた法について、さまざまの説き方があったことは事実である。しかし、「縁起」の理と「四諦」の現観が同じ法にかかわるものと見なされたということは重要である。このかたちは基本的には漢訳仏典の伝える説でも同じである。

しかし、四諦の教説を見て気づかれることは、ブッダが、四諦を悟ってはじめて無上なる正覚を得たとひとに名のったと言っていることである。すなわち、苦・集・滅・道の四諦の説こそは悟られた真理にほかならない。そして、そこにこそ縁起の理が、より包括的に示されていることが知られる。十二支よりなる縁起の説は後に縁起説の代表となるが（五章参照）、『律蔵』では、それを証してブッダになったとは実は言っていない。ブッダとなってから、十二支縁起を思念したと言っている。それならば、それは四諦の説と同様、悟られた真理についての一つの表現にすぎない。ちが

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

うのは、四諦は教説として口から発せられたが、十二支よりなる縁起はブッダの内観にとどまったと書かれているだけである。

さらに大事なのは、しかし、この十二支縁起にはより古い型の説き方があって、それによると考察の出発点が、無明ではなくて老死などの苦であることである。すなわち、パーリ聖典の『相応部』や漢訳の『雑阿含』では次のように説かれている。（内容要約）

比丘たちよ、私がまだ菩薩であったとき、私はこう考えた。「実は世間は艱難に陥っている。生、老、衰、死をくりかえす。しかも、この苦から出離する方法を知らない。

ではどうして老死があるのか。生に縁って老死がある。

ではどうして生があるのか。有によって生がある。

……

ではどうして行があるのか。無明によって行がある。」

ここでは、苦からさかのぼって、その生起の因を追求していって無明にいたっている。これは四諦の説で、苦聖諦からはじまり、苦の生起の因すなわち苦集聖諦に及んでいるのと同じ型であり、そこにブッダの思考方法の原型が示されている。

事実、十二支の縁起が完成する以前には、老死の苦からはじまって渇愛に終わる五支の縁起、識と名色の相互関係で終わる十支あるいは九支の縁起説もあったし、さらにもっと簡単に、さきの苦

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

集聖諦の説明のように、苦の原因を渇愛に求めるだけのものもあり、そのほかさまざまに苦の原因が追求されているのである。四諦説の苦と集の二諦は、いわばそのような種々の縁起説を包括する図式と見ることもできよう。十二支縁起はその一類型にすぎない。

同様に、「無明滅すれば行滅す、ないし老死等の苦滅す」という観察も、四諦説の第三、苦滅聖諦を加えることによって、そこにふくまれる。しかも、四諦説はそのあとに十二支縁起の説には見られないもの、つまりどうしたら苦の滅を達成しうるかという方法論を道諦の名で教えている。それが苦楽の二辺を離れた「中道」であり、具体的には八正道である。この実践の方法を教えることによって、仏教は仏道、すなわち悟りに向かう道となった。苦を知り、苦の原因を知ってこれを断つこと、すなわち、苦の滅は道を修めることによって現証される。苦の滅の現証こそが目的であり(ブッダはすでにその目的を達した)、そのためには、それに向かう道——実践の手段——を修行しなければならない。このことを弟子たちに教え、勧めることが、ブッダの教説の目的である。

このように四諦の説には、仏教で教えることの全容がそのなかにふくまれている。同時にその全体が、縁起の理を示している。すなわちブッダの悟った法、真理とは、苦は縁生(えんしょう)ということにほかならない。四諦説のもつこの重さのゆえに、四諦は最初の説法(初転法輪)で説かれなければならなかったのである。

このように、四諦は法の枠組であり、その内容は縁起であると押さえることによって、仏教のい

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

う法の基本が確立したものと思われる。

四諦が教説の枠組となっている例として、『倶舎論』の組織を挙げることができる。同書は全体で九品（九章）より成るが、最後の「破我品」は特殊問題（といっても無我説という基本テーゼにかかわるが）を扱う付録的存在であるので、それを除くと次のような構造をもつ。（数字は品数）

雑染
- (3) 世間品（苦）— 苦諦
- (4) 業品（業）
- (5) 随眠品（惑）— 集諦

清浄
- (6) 賢聖品（行の果）— 滅諦
- (7) 智品（行と果〔仏〕）
- (8) 定品（行）— 道諦

法論
- (1) 界品
- (2) 根品
- 一切法＝諸行＝諸法

ちなみに、第一、第二品は法の総論ともいうべき章である。

ブッダの立場——十四無記または十難無記

ブッダのとった立場というか問題意識という点で、つねに言及されるのは、十四無記とか十四捨置記とよばれる、形而上学的議論に対する解答拒否である（「無記」avyākṛta とは、解説、解明〔記述〕しないという意味）。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

一四項目は、通常あげられるところでは次のとおりである。

(A) 世界は、①常住である、②常住でない、③常住かつ無常、④常住でも無常でもない。

(B) 世界は、⑤有辺である（空間的限界がある）、⑥無辺である、⑦有辺かつ無辺である、⑧有辺でも無辺でもない。

(C) 身体と霊魂（命我（ジーヴァ））は、⑨一つである、⑩別である。

(D) 如来（人格的完成者）は、死後、⑪存在する、⑫存在しない、⑬存在しかつ存在しない、⑭存在するのでも、存在しないのでもない。

十難無記というのはこのうち、(A)と(B)でそれぞれ第三、第四の選択肢にあたる③④⑦⑧の四項を除いたものである。また(A)と(B)とは、主題を「我と世間」とするものもある。

無記とされた課題は、世界の起源、死後の運命などいずれも日常経験の範囲を超える問題であるが、ブッダは、それが人生問題の解決になんら寄与するところがないという理由で、解答を拒否したというのである。これはマールンクャーブッタへの教えとして、阿含のなかで語られる「毒矢の喩え」でよく知られている。

マールンクャーブッタという弟子が、日頃ブッダが右のような問題に少しも答えてくれないので、答えていただかないと修行もできないと訴えると、ブッダは次の喩を説いてさとされた。（取意）

人が毒矢に射られたとしよう。さっそく医者がよばれてやってきたが、もしその医者に向か

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

って、その人が、「誰がこの矢を射たのか、それが解らない間は矢を抜くな」と言ったとしよう。また、「その人は大きいか小さいか、色が黒いか白いか、その使った弓は弩かどうか、弦は植物製か動物製か、矢羽は鷹か鷲か等々、わからない間は治療してはならない」と言ったとしたら、その人は、それらのことがわかる前に死んでしまうだろう。まず大事なことは、毒矢を抜いて応急処置をすることだ。

それと同じように、マールンクヤブッタよ、世界が有限か無限かなど、どのように考えたとしても、現実には人生には生老病死があり、憂悲苦悩悶がある。それをこの世においていかに克服するか、私はそれだけを教えるのだ。

私が解答しなかったのは、その答を出すことが梵行の目的ではないし、その答によって、厭離・離欲・滅尽・寂静・証智・正覚・涅槃に導くことはないからである。

ブッダの教えが目的とするところは、現実に人間が抱えている苦悩をいかにして克服するかということにあり、そのために苦悩の現実を把握し（苦諦の遍知）、その原因を見きわめて、これを断ち（苦集の断）、苦の滅した涅槃を実現すべく（苦滅の現証）、それに役立つ道を修める（苦滅道の修）のがその教えるところの全貌であり、それ以外のことは自らの解答する任務ではないとした。

このようなブッダのあり方は、さきの毒矢の喩にもあったように、応急処置を施す医者に喩えられる。医者が病状を見てその原因をたしかめ、それを除いて病人に健康を回復すべく、薬を施して

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

治療するごとく、ブッダは人間のいわば精神の医者である。それゆえ、ブッダはしばしば大医王とよばれ、また薬師如来のように、それを象徴する仏の存在も説かれているのである。

四種の答え方　ブッダは弟子たちの質問に対して何も解答しなかったのではない。ブッダの解答（記）の仕方は一般に四種にまとめられている（四答）。

(1) 一向記（いっこうき）――「生あるものはみな死ぬのか」と問われれば、「必ず死ぬ」と答えるように、断定的な回答をする場合。

(2) 分別記――「死者はみな輪廻するか」と問われると、「煩悩有るものは輪廻し、煩悩なき者は再生しない」と答えるように、条件に応じた解答をする場合。

(3) 反問記――「人間は勝れているか」と聞かれて、「何とくらべてか」と尋ねなおしたうえで、「天とくらべて」といわれれば「劣る」と答え、「畜生とくらべて」といわれれば「勝る」と答えるように、質問に応じて解答するもの。

(4) 捨置記――十四難のような種類の問いに対して、いずれとも解答しない場合。

法印――仏教の旗じるし

ブッダの立場、すなわち仏教の目的とするところが右のようであるとすると、仏教の教える真理（法）の性格もまた自ずから知られるであろう。

仏教の教える真理を具体的に示すものとして、三法印とか四法印とよばれるものがある。「法印」

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

とは法すなわち教えの旗じるし、あるいはスローガンということである（インドの論典では「法の要約」dharma-uddāna と名づけられている）。これは命題のかたちをとって、仏教で教えるものの見方を示したものである。四つの命題は次のとおりである。

(一)「諸行無常」（諸行は無常である）
(二)「諸法無我」（諸法は無我である）
(三)「一切皆苦」（一切は皆な苦である）
(四)「涅槃寂静」（涅槃は寂静である）

これらの命題が、単に哲学的な判断を示すものではないことは銘記する必要があるが、しかし四つを並べてみると、その間にかなり純粋に哲学的判断に近いものから、体験的・主観的判断と見えるものまでをふくんでいる。一応、右の順序に従って考えてみよう。

(一) 諸行無常

この命題は右の四つのなかで、われわれには一番親しいようである。それはたとえば、『平家物語』の冒頭の句、

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす

にあるように、人間の栄枯盛衰、この世のすべての現象の変化してやまない姿に、無常ということ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

が実感として知れるからである。その場合、おそらく「諸行」が何を意味するかはあまり詮索しないであろう。古来多くの人びとが、身近な人びとの死の体験から、世の無常を感じて仏門に入ったということはさこそと頷ける。いやシャーキャムニその人も、あるいは母の死が、その出家の動機ではなかったかと思われる。少なくとも四門出遊の伝説にはそうした受けとめ方が見られる。

しかし、無常は実感だと言っても、実際にはそう受けとっていない場合が多い。第一にわが身の死。人は死ぬものとわかっていてもわが身も死ぬものとはだいたい思っていない。だから、いざ死が近づくと人は恐怖にさらされる。そこに死が苦となる。無常であるものが無常と知られないところに、苦があるということが、仏教が説こうとする人生の真実である。

(二) 諸法無我

仏教のスローガンは「無我」ということにあるというのは、しばしば耳にするところであろう。これはたとえば、インドの正統派の哲学思想が、ウパニシャッド以来、「我（アートマン）」という輪廻・解脱の主体の実在を前提とする学説、すなわち有我説であるのとの対比で、仏教の特色を示すものとされる。「我」というのは元来、わたくし、おれ、とわれわれが常識的に考えている存在をいう。世の中にこれほど自明なことはない。もちろん、哲学的にはその本質が何かとなると、やかましい問題が多く、デカルトを持ちだすまでもなく、西洋においても古来の重要課題となっている。ことに近代ヨーロッパはそのような自我の存在を前提として人間社会のあり方を構築してきた。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

このように実感から言っても、哲学的思考の大方のあり方から言っても、自我の否定ということはきわめて難解である。それにもかかわらず、われわれは一方では「無我」ということを日常語にまで採り入れている。その場合の「無我」はたとえば無我の境地とか、無我夢中とかというように、自己忘却あるいは滅私奉公的な人生態度で、近代的自我確立とおよそ反対のあり方と受けとられている。この捉え方は、仏教を近代的自我観と抵触すると見なしがちである点で正確でないが、無我を単なる哲学的見解ではなく、実践的問題として捉えているかぎりにおいて正しい。

仏教の無我説の範型というべきものは、五蘊無我とよばれるものである。すなわち、たとえば『律蔵』のなかで五比丘への教説のつづきで、

比丘たちよ、この「色」（形あるもの、すなわち肉体）は我（自己）ではない。もし色が自己であるなら、この色が病いにかかることはないであろう。また、色について、わたくしの色はかくあれ（たとえば健康であれ）、かくなることなかれ（老いないように、死なないように）といえるであろう。しかし、色は我ではないから、病いにかかるし、あれこれと（自由に）することはできない。

この「受」（苦楽の感覚）が自己であろうか。……この「想」（像を思いうかべる作用、表象化）が自己であろうか、……この「行」（意志のはたらき）が自己であろうか、……この「識」（認識・判断のはたらき）が自己であろうか。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

こうして、肉体および四種の代表的な精神のはたらきを挙げたうえで、そのどれもが我とよべるものでなく、それ以外に我とよべるものはどこにもないので、したがって自己と思っているものは「我」ではないと結論される。

この場合、「我」には「自由になるもの」「(病いなどにかかって)変化しないもの」という見方が前提となっている。この点をとらえて、漢訳仏典は「我とは常一主宰の義」と定義している。五蘊をあげるほかには、眼・耳・鼻・舌・身・意の「六入」(六種の感官)を挙げる場合も多いが、これも要するに自己と考えているものを構成している諸要素である。そしてこれらの五蘊とか六入の一つ一つを、「法」とよんでいる。つまり諸法無我とは、もともと、われわれが自己と考えているものを構成している諸要素はすべて、我ではない、したがってどこにも我はない、ということであった。

この場合も、我とよべるものがないのに、我があると思うところに、苦しみがあるというのが仏教の説かんとすることである。我があると思うのは「我執」である。この我執にこそ、ブッダは諸悪の根元を見出したのである。そして我執が「わがもの」という所有欲を生むと見る。それの達成されないうらみが求不得苦である。同時に、我に常住永遠の存在という規定がふくまれているように、無我であることは、無常であることに帰着する。無常とは生滅のあることであるから、われわれに生老病死のあることが無我の証拠となる。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

しかし、仏教はまったく個人の役割を否定したかといえば、そうではない。それは入滅に際してブッダが教えられたという、「法灯明・自灯明」ということばに代表的に集約されている。同じく、遺言とされる言葉に

諸行は無常である。決して怠ってはならない。

とあったように、無常と観じて、自らつとめ励むところに涅槃がおとずれる。実践の主体性が一方で強調されていることは忘れてはならない。

(三)一切皆苦

苦というのは言ってみれば感覚である。感覚としての苦（苦受）は楽と対立する。そして感覚である以上、楽苦は相対的であり、また人生は苦あれば楽あり、楽は苦の種、苦は楽の種といわれる。無常というように、すべてがとは断言できない。それを一切が苦であると見るには抵抗があろう。ことに人間社会は楽をめざしての進歩で、現代の日本人はほとんど苦の種はないように見える。しかし仏教では、無常であり無我であるものは、みな苦をもたらすと見る。そもそも仏教の出発点が苦であった。四諦の体系も、縁起説の連鎖も、みな苦を所与の現実と見るところからはじまっている。

しかし、何ゆえ苦であるのか。ブッダの追求は苦の原因を見つけだすまでやまない。その究極に見出されたのが、一つは渇愛とよばれる欲望あるいは執着（そのもろもろの執着の根元が我執）、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

そしてさらにさかのぼると「無明（むみょう）」にいたりつくとされた。無明とは無知、真実に対する無知である。すなわち、すべてが無常であり、無我であるということを知らないことが苦の原因の大もとである。

このように諸法無我とか、諸行無常が、すべての現象についての本性（諸法の法性）であり、したがって変更を許さないのに対し、苦は所与の現実としては真実であるが、そのままであってよいものではない。それは滅せられるべきものとされる。そこに「一切皆苦」が前二つの命題と異なる点がある。そしてこれが、人生における苦楽とは次元のちがうところでの、苦ならざる状態、すなわち「楽」を理想と見ることになる。これが「涅槃寂静」の意味するところである。

㈣ 涅槃寂静

ひとつ、有名なうたを採りあげよう。

いろはにほへど　ちりぬるを
わがよたれぞつねならむ
うゐのおくやま　けふこえて
あさきゆめみじ　ゑひもせず

いわずと知れた「いろは歌」であるが、この元歌は、仏典中の次の詩である。

諸行無常　諸行は無常である

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

是生滅法　それは生滅性のものである
生滅滅已　それらは生じては滅する
寂滅為楽　その（生滅の）止滅こそが楽である

ここで諸行無常を知るとは書かれていないが、生滅の止滅、停止とは、生滅が文字どおりなくなることではなく、生滅性のものと知ることによって生滅を超越することであると教えられる（この点についてはまた別に〔六章〕述べることにしよう）。いずれにせよ、そこに苦滅すなわち涅槃が実現する。それが、寂静とか寂滅といわれ、楽とよばれている。その獲得こそが仏教の目的である。

以上、四法印はその全体が、四諦の説と同じ仏教の全体をその視野のなかに入れていることが知られる。しかし、そこには「縁起」ということは語られていないように見える。それらの命題と縁起はどうかかわるのか。最後にこの点について考えてみたい。

諸行と諸法——縁起したもの

これまで、諸行、諸法という命題の主語たるものについて、ほとんど説明しないできた。右の四法印のうち最初の三つの命題の主語たる諸行と諸法と一切とは、同じものを指しているというのが教学上の解釈である。その一切とは何かという問題については、後に独立した一章を設けてまとめて考察することとして（次章）、ここでは「行」とか「法」といわれることばの意味するところを述

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

べておこう。

「行（ぎょう）」は仏教の用語中、一番わかりにくいことばといってよい。その原語は saṃskāra（ペーリ語は saṅkhāra）で、「いっしょに」「完全な」等の意味をもつ saṃ- という接頭語と、「作る」「為す」という意味の kṛ という動詞語根との合成語の派生形の一つである。その意味は一応、「いっしょに集めて造るはたらき」としておこう。さきに五蘊の一つに「行」があり、意志作用と説明しておいたが、そして原語はいまの場合と同じであるが、これは心が他に対して積極的にはたらきかけ、結果をつくりだそうとする点を指していると解せられる。その意味で、それも形成力である。それを広くいえば、ものを生みだす力とかはたらきであり、さらに、そのようなはたらきを持つもの、すなわち結果を生みだすもの、因となるものを指すことになる。

因となるものというと、インド正統派の考えでいえば、たとえばブラフマン〔梵〕などの創造主を考える。そして、創造主は常住不変である。しかし仏教はそのような存在を否定する（無我ということをその場合、何であれ常住不変な実体はないという、哲学的解釈を容れることになるが）。さりとて、あらゆる現象が、何の因もなく成立したとは見ない。それに代わるものとして仏教の主張するのが、「縁起（縁生（えんしょう））」ということであった。このことは、ブッダが、ある外教の徒の質問、

苦は自在天によって作られたか、苦は自作であるか、苦は他によって作られるものか、苦は無因にして生じたものであるか。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

という質問に対して、

苦は縁生である。

と答えたと記録されているところに示されている。

この縁生ということ、その場合の苦を生みだす因たるものが、ここにいう「行」であり、またそのはたらきが「行」なのである。それは具体的にいうと何か。四諦の説でいえば、苦集＝苦を集めるもの（サムダヤ。集め、起こすもの）で、「集」は「行」と同義語である。十二支縁起の説でいうと、「無明に縁りて行あり」という二項でいえば、無明が「縁たるもの」で、それが「行」である（第二支たる行の「行」＝因、縁）。

ところで、次の「行」がまた、ここでいう行と同じことばである。そしてその行とは、身口意の三業、あるいは福・非福・不動の三行といわれる。身口意の三業は一応、業＝行＝はたらき（作る力）と一般的に解することができる。福行・非福行の場合は、福（天界に生まれることなど）に導くはたらき、非福（すなわち不幸、地獄などに堕ちるという結果）を招く行為ということで、行為自体をあらわすと同時に、果を生む力という意味が加わっている。実はこれが、いわゆる「業」（カルマ）にほかならない。「行」にはこのようにカルマという意味もあるのであるが、いまの場合は、その「行」が一方では、無明によって造られた結果であるとされ、他方では、次の「識」を生みだすはたらきとされていることが重要である。つまり、作るはたらき、因たるものは、同時に他者に

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

対して果たるものでもあるということ。絶対に一方的に因たるもの、一方的に結果たるものを認めないという理論となる（無明は、その因たるものを想定していないので、あたかも絶対的因であるごとくであるが、これは知の否定にすぎない。したがって、転換可能な状態として、ブラフマンのような絶対因ではない。苦もまた、つねに果として述べられるが、実質的には可滅のものである。縁起の系列はこうして始終とも可変のものである）。

こうして、因たるものは果たるものであり、その関係は無限に存在するというのが、仏教が暗黙に了解しているところである。この場合、因たるものがサンスカーラ（行）とよばれるのに対し、果たるものは、同じ動詞の過去分詞形をとって「サンスクリタ」とよばれる（さきの例でいうと、「無明」と「行」との間では無明がサンスカーラで、行はサンスクリタ。「行」と「識」の間では、行がサンスカーラで、識がサンスクリタ）。漢訳はこれを「有為」と訳す。いろは歌のいうところの「うゐのおくやま」である。また、作られたものという意味で「有為法」ともよぶ。したがって「有為」とは、行によって作られたもの、縁によって作られたもの、因によって作られたもの、因縁所生の法、縁起したもの、ということになる。これが、「諸法無我」といわれているときの「諸法」の指すものである。したがって、諸行＝諸法＝有為法の一切で、それらは無常であり、無我であり、苦（をもたらすもの）であるということになる。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

法性——縁起の理

以上のことで、「行」（サンスカーラ）と「有為」（サンスクリタ）の関係は、縁起と同じであることが知られたが、漢訳の縁起にあたるサンスクリットにも、それに対応する二つのかたちがある。すなわち pratityasamutpāda と pratityasamutpanna で、前者は「縁りて生ずること」あるいは「生起せしめること」、後者は「縁りて生じた（過去分詞）もの」である。ふたたび無明と行との間でいうと、無明が「縁りて生ぜしめるもの」、行が「縁りて生じたもの」となる。この場合、縁りて生じたもの（縁起したもの、縁生したもの）はまた、別の縁によって滅するもの——生起したものは必ず滅する——ということが理解の前提となっている。したがって、無常なもの、無我なるもの、苦をもたらすものは、この生滅あるものであり、「縁によって生じたもの」である。これに対し、「縁によって生起させること」を意味する前者には、因となるものというサンスカーラと同様の意味とならんで、縁起の法則自体をさす場合がある。前に掲げた『律蔵』の十二縁起の説明のところにはなかったが、対応する漢訳やサンスクリットの文献（『四衆経』）には、十二支よりなる縁起の各項の説明に先だって、

これあるとき、かれあり
これ生ずるより、かれ生ず
これなきとき、かれなし

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

これ滅するより、かれ滅す

という定型句があって、この縁起の法則を示すものとされている。さらに縁起を説明する阿含のうちには、「縁起という法則」pratītyasamutpāda (sg.＝因縁法) を「縁起した諸法」pratītyasamutpannā dharmāḥ (pl.) と対比して並べ、前者について、

比丘たちよ、これが諸法についてのきまりである。如来たちが出現しても、出現しなくても、この基本 (dhātu 界) は決まっている。それは法として確立しており、法として決定している。

それはすなわち、「これに縁ること」である。

と説かれている。「これに縁ること」とは具体的には、無明を縁として行のあること、ないし生を縁として老死、苦悩等のあることである。ここにわれわれは縁起説の基本を見出すのであるが、それがこのように行、有為ということばと本質的にむすびついていること、逆にいうと、諸行無常・諸法無我というのは、縁起の理を示すものにほかならないことが知られるであろう。

右の縁起の法則の説明のなかで、縁起が「諸法に関するきまり」であると見えていたが、そこで「きまり」と訳した dharmatā は、単独では「法性」と訳される。「法性」とは「法の本性」というのと同じで、縁起した諸法に通じる普遍的性質、すなわち縁起することを指していた。いわば真理としての法 (理法) を「法性」ということになる。それはまた「法爾の道理」などといわれることもある (それとの対比でいうと、「法」は共通の「法性」を有しているものということになる。こ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

のことばはしたがって、おそらく、「法」に一定の性質をもったものという意味が生じたあとで作られた語であろう)。

このように、「法性」は縁起の理法を内容とするものであるが、仏教の教理としては「無常であること」(無常性)、「無我であること」(無我性 nairātmya〈nirātman＝anātman〉も同じく「法性」である。そして、まったく同じ縁起の理、無我なることを、大乗仏教では新たに「空性」(くうしょう) śūnyatā と名づけた。「空性」とは、「一切皆空」(一切の法は空である)という命題を内容としていて、その意味は「自性(じしょう)が無いこと」とされる。自性 (svabhāva) には、自己存在でつねに同一の性質を保ち、他者を必要としないものという意味があり、具体的には外教の言う「我」(アートマン)がそれに相当するので、無我＝無自性で縁起していることを表わすとするのである。同時に「自性が無い」という判断は、「法にはそれぞれに固有の性質(自性)がある」という学説(有部の学説)に対する反立という大乗仏教の立場をも示しているが、これについては次章で詳説する。

右のような内容をもつ「法性」はまた、「法界(ほっかい)」「真如(しんにょ)」「実際」「真実」などともよばれる。

「法界」dharmadhātu とは、諸法の根元とか諸法の本質と説明される。諸法の根元というのは、縁起の理が仏によって悟られた真理であり、それが仏の教え(教法)の根元となっているという意味で、これをまた「聖法出生の因」(界＝因)などともいう。諸法の本質というのは、法性の場合とまったく同一で、「界」は「本性」「自性」と同義である(「界」の意味についても、次章参照)。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

「真如」tathatā は「如来」のところで説明したが、「そのようであること」の意で、ものの真実のあり方、つまり縁起をあらわす。真実のあり方とは、虚妄でないこと、転倒していないこと、諦性（satyatā）などとも言い換えられる。

「実際」bhūtakoṭi は「存在の極限」という意味。究極的な状態、絶対性と解してよいであろう。

「真実」tattva は「それであること」の意で、真如とほとんど同義と言ってよいが、「真実を見る」というように用いられる。真実を見た者といえば仏をさす。また、「真実の特質」tattvasya lakṣaṇam という表現があり、「法性」の同義語とされるが、漢訳仏典はこれを「諸法の実相」と訳している。

大乗仏教の真理観

大乗仏教は、右のような諸語によってその究極的価値と考えるものを表現する。すなわち、大乗仏教は「一切皆空」をものの見方の基本としている点で、いかなるものも実在としては立てないのであるが、そのような真理それ自体を、絶対的価値としていわば一種、宗教的実在と見なすのである。これはいわゆる小乗仏教に見られない大乗の独自性である。さらにこの宗教的実在観は、この真理を悟った仏を、真理と一体となった者として「法身」とよび、それとこの「法界」とを同一視する点で、仏に絶対性、究極的実在性を付与することになる。加えて、「法界」には（次章で見るよう

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo

に）「法という要素」という意味で、意識の対象となるかぎりの全存在をさす（すなわち、法界＝一切法）用法があるので、仏の側からすれば、仏が全宇宙にほかならないというかたちでの絶対性を意味し（たとえば『華厳経』の毘盧遮那仏の説明に見られる）、他方、法の側からすれば、全存在は真理の顕現として実有性を認められることになる（華厳宗の法界観に代表される）。ただし、後者はあくまで仏の目をとおして見た全存在、宇宙、世界、衆生ということであり、決してわれわれが把握しているとおりに現実を肯定しているのではない。

第一義諦と世俗諦

大乗仏教の真理観の第二の特色として、真理表現に二段階を考えることが挙げられる。これは、「法は自ら覚るべきもの」と言われた点にさかのぼって考察しなければならない。悟りの体験は他人には伝ええない。それは言語表現を超えている（言詮不及。言語道断）。教えとしての法は、その自内証の体験を言葉によって表現したものであるが、語るべからざるものを語っている点ですでに方便であり、仮のものである（「仮」prajñapti とは、言語による表現、知らせる手段という意味。「施設」とも訳す）。いわば、言葉に表わされた法（教説）は二義的なものにすぎない。ここで、悟りそのものを「最高の真理」paramārtha という意味で「第一義諦」（真諦、勝義諦）とよび、教法を「言説諦」と称した。言説は世間的コミュニケーションのためにあるから、「世俗諦」つまり世間的真理

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ともよばれたが、「世俗」saṃvṛti という言葉は後に、「真実を蔽うもの」という意味に解釈され、世間的真理は真実ならざるものと見なされた。さらにまた、同じ教説のなかに、真実の教えと方便的教えを分け、前者を第一義諦、後者を世俗諦とよぶ解釈も生じた。第一義諦ということばは、また真如、法界などの同義語とも見なされる。

（追記）四法印は一般には「諸行無常」「一切皆苦（一切行苦）」「諸法無我」「涅槃寂静」の順で並べられる。また、「一切皆苦」を除いて三法印を挙げる場合もある。なお南方仏教では「涅槃寂静」を省いて、三項を「三相」（三つの特色）の名で挙げる。本書では論述の都合上、右本文のように、諸行無常、諸法無我、一切皆苦、涅槃寂静の順をとった。

また、諸法無我の「諸法」は後の解釈（アビダルマ）では無為法（次章参照）を含むという。しかし、その場合、無為法（たとえば涅槃）は、「我（アートマン）ではない」ということならば理解されるが、「我がない」という意味で、諸行と同列に並べて考えることは無理であろう。しかし、伝統的な解釈ではその点はあまりはっきりしない。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo

四章　一切法——法の分類

阿含の法体系——五蘊・十二処・十八界

前章で諸行無常、諸法無我、一切皆苦といわれるときの諸行、諸法、一切とは、有為法であり、縁起するものであると説明した。そこでいう「法」とは、はじめに「法」の定義を論じたところで(4)存在あるいは現象とよんだものであり、『倶舎論』の定義によれば「自相を任持するもの」すなわち、一定の性質をもつ存在（もしくは現象）である。しかし、すべての現象といっても仏教では教説に型があるので、どんなものを「法」と数えるかということはそれに制約される。その種々の教説に説かれるものを分類・整理するのがアビダルマすなわち「法の研究」の仕事で、それによると、一切法は「五蘊」とか「十二処」「十八界」にまとめられている。

『般若心経』を見ると、その冒頭に「五蘊皆空と照見する」ということが出てくる。この「五蘊皆空」は『般若心経』の基本テーゼといってもよいが、それを説明して

色不異空、空不異色、色即是空、空即是色

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

といい、つづけて

受想行識、亦復如是

という。ここで出てくる「色・受・想・行・識」の五種の法を「五蘊」というのである。『般若心経』はそのあとさらにつづけて、「空のなかにおいては、

無レ色、無二受想行識一。無二眼耳鼻舌身意一、無二色声香味触法一、無二眼界一乃至無二意識界一、無二無明一亦無二無明尽一、乃至無二老死一、亦無二老死尽一、無二苦集滅道一、無レ智、亦無レ得……」

と無い無いづくしの連続であるが、そこで「無し」と言って否定されている諸項、これがすべて一切法にあたるものである。

『般若心経』がそれを「皆空」といい、無しというのは、大乗仏教に属する『般若心経』の立場からする解釈である。いまはその点はおあずけにしておいて、その無しといわれた諸法を分類整理してみると、次のようになる。

(A) 五　蘊　色・受・想・行・識

(B) 十二処　眼・耳・鼻・舌・身・意……六内処（六入）
　　色・声・香・味・触・法……六外処

(C) 十八界　眼界ないし意界……六根
　　色界ないし法界……六境

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

眼識界・耳識界・鼻識界・
舌識界・身識界・意識界　……六識

(D) 十二縁起　無明ないし老死
　　無明の尽ないし老死の尽

(E) 四　諦　苦・集・滅・道

(F) 智と得

このうち、(D)と(E)は教理の基本として別様の意味をもっているから除き（四諦は既述のとおり、十二縁起は次章後述）、また(F)は般若の智と、悟りあるいは涅槃という得果をさし、実践修行にかかわるものなのでそれも除くと、(A)(B)(C)の三種を一般に一切法に関する三科とよんでいる。この三種の分類はいずれも「一切法」をさすとされるから、五蘊＝十二処＝十八界ということになる。その関係は次のとおりである。

なお、そこに示されている諸法の名は仏教術語としては重要であるが、いささか煩瑣であるので辞典ふうに注記において解説しておこう。

（五蘊）	（十二処）	（十八界）
色	眼耳鼻舌身	眼耳鼻舌身
	色声香味触	色声香味触

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

受
想　法処　法界
行
識　意処　意界
　　　　　眼識界ないし意識界

五蘊（五陰）はもともと、われわれの個人存在を構成する五つの要素の集まり（蘊＝集積）である。すなわち、「色」rūpa とは肉体で、眼・耳・鼻などの器官（根）を具えた身体をさす。次の「受」以下の四つはそれに対し、心のはたらきで、「受」vedanā とは感覚もしくは感受作用（苦・楽と、そのいずれでもないものの三種）、「想」saṃjñā, saññā とは表象作用（心に像を取ること、想像、あるいは観念をもつこと、観念を抱くこと）、「行」saṃskāra とは意志あるいは衝動的欲求（心を構えること）、「識」vijñāna, viññāna とは認識作用あるいは判断（分別）をいう。

この五蘊はこのように肉体と精神（身心）の全体を表わすということなので、それに従えば、心のもつこれら四つ以外の作用は、「行」のなかに包括することになる。つまり、「行」を心作用一般と考えるわけである。他方、「識」は単なる認識作用というより、心の当体、心そのもの、つまり受・想・行となった心作用の属する主体と考えるようになる。

さらに五蘊がわれわれの個人存在の要素というだけでなく、いっさいの現象をふくむと見なされるようになると、「色」は外界もふくめて物質一般をさし、また心とは関係のない、いろいろの作用や力（たとえば「命根」など）ないし抽象的概念（「名」概念、「句」命題、「文」音節・文字など）はすべて「行」

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

の名で一括されるようになった。それと区別するために、個人存在の要素となる五蘊は「五取蘊」とよばれる。それらの要素を（素材として）取って個人存在（我）を想定し、その想定した「我」に執着し、ひいては輪廻の生存をひきおこしているということで、「我」の観念の素材（upādāna 取）としての五蘊という意味である。

五蘊の配列は固定しているが、この順序というのはおそらく、まず肉体があって、それを依りどころ（āśraya）として精神がはたらいているということ、その精神現象を、目の前にあるものを知覚し、知覚（感受）したものに対して心の中に像をつくって抱き、その像に応じてこれに積極的にはたらきかけ、最後に手にしてよく吟味し認識・確認するという心理上のプロセスを表わしているものと思われる。なお、積極的なはたらきかけは方向としては三つあって、感覚の三種に対応する。つまり、楽なもの（愉しいもの、美しいもの、総じて好ましいもの。例えば美人）を見てそれを心に想いうかべ、あれこれの楽しいことを想像すると、何が何でも手に入れたくなって近づいてゆくが、逆に、不快に感じ苦痛を与えそうだと、それから逃れようとするというふうに。あるいは蛇を見てこわいと思い、逃げようとするが、よく近づいてみたら縄であったと識るというような場合もあろう。

なお、「受」と「行」とは受動的と能動的の相違があり、「想」と「識」との間には、まとめて（sam-）知るのと、分けて（vi-）知るという対立する性格がある。

十二処（十二入）の「処」āyatana は知覚の入口、すなわち知覚がそこを通じて生ずる場所という意味である。たとえば、見るという働きは眼を通じて行なわれる。同様に、聞くのは耳で、嗅ぐのは鼻で、賞味するのは舌であり、触れるのは身（の各部にある皮膚）を通じてである（これらの眼などの諸器官を五根という）。それと同様に、識るのは意という感官を通じてであるということで、以上を合わせて「六入」

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(六処または「六根」)とよんでいる。この六入に対応する外界の対象(六境)が、色(いろとかたち)、声(音・声)、香、味、触(可触、触れることのできるもの)および「法」と名づけられ、その六つもまた知覚成立の条件であるということで、合わせて「十二処」というのである。

この場合「法」(つまり「法処」「法入」)とは、意の対象となる有形・無形、物質・非物質のあらゆる存在ないし抽象的概念をさす道理であるが、分類項目としては、色ないし触として分類されるもの、および眼などの六入(六根)以外のものをさす。

この命名法は、五蘊＝一切法とみたとき「行蘊」に他の四蘊に分類・配当できないすべてを一括してふくませるのと同じやり方で、いわばすべてが「法」であるが、そのうち特定の機能や特色のあるものには特定の名称を与え、その他は一般的な「法」の名で一括するということである。「行」の場合も同様で、五蘊のすべてが広義の「行」である。つまり、諸行＝諸法。ただし、意の対象としての「法」のなかには、無常で変化するもの(＝有為法)でないもの(無為法)、つまり変化しないもの——虚空(空間)など——もふくまれる(次項参照)。

五蘊と十二処との対応をみると、色ないし触という外界の存在(五境)と、眼ないし身という肉体に属する器官(五根)はすべて色蘊に入り、意は識蘊と同じであるが、法処は受・想・行の三蘊をふくむことになる。

十八界　右の十二処の対応(内と外、根と境)にさらに眼識ないし意識という六識を加えたもの。「界」dhātu とはここでは構成要素、もしくは領域、種類の意である(漢訳の「界」は一定の区画内の領域、あるいはその境界の意であるが、サンスクリットは「置く場所・土台」を原意とする)。同時に、その一定の領域内に置かれたものはたがいに共通する性質があるわけで、その共通する性質はそれらのものを一類

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

たらしめている要素であり、根元である。ちょうど、物質の「元素」にあたる。また、鉱山とか鉱石を意味することがあるが、それはそこから金属なり宝石の出るもとのもの（生処 akara）という意味である。

十八界の分類原理は、根・境・識の三事和合という考え方に由来する。これは認識論であるが、われわれの認識には必ず認識の対象（境）と、認識成立の機能をもつ器官（根）と、認識作用の三者が必要であるということで、眼を通じて色を見ることにより、色を識別する作用を眼識と名づけ、以下同様にして耳識ないし意識と名づけたものである。

ところで、五根・五境・五識の場合は三事が明瞭に区別できるとして、意根と意識は実は同じものにならないか。意根と六識を合わせて七心界とよび、そのすべてが実は「心」としては一つのもので五蘊中の「識蘊」に対応するのである。ただ機能の面で便宜上区別しているにすぎない（これを理論的に説明するために、『倶舎論』などでは、心のはたらきは刹那ごとに生滅するから、ある刹那には眼識がはたらき、ある刹那には耳識がはたらくというふうに、すばやく交替するものとした。したがって、テレビを見る場合など、画面を見るのと音を聞くのとが同時ではなくて、刹那ごとに交替していることになる。それをフィルムを見るのと同様、連続する映像と音声を知覚していることになる）。なお、この説では意界（意識界でなく）は一刹那前の、過去した〔過去に落謝した〕識をいうとされる。

有部の法体系——五位七十五法

以上、三科といわれる分類法は阿含以来の伝統、すなわち「仏説」であるのに対し、アビダルマの教学において確立したのが「五位」の分類である。伝統的に中国や日本でもちいるものは『倶舎

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

論』によるもので、元来は有部（説一切有部）の学説である。

五位は五法ともよばれるが次のとおりである。

(1)「色法」rūpa——物質的存在＝五根（眼など）、五境（色〔かたち、いろ〕・声など）および「無表色」（表面に現われない存在）はすべて五蘊中の色蘊にまとめられる。

(2)「心法」citta（心王）——心の本体ということで、機能に応じて心（citta）、意（manas）、識（vijñāna）とよばれる（心＝意＝識）。五蘊中の識蘊、十二処では意処（意入）、十八界では七心界に相当する。

(3)「心所法」caitta, caitasika（心所有法、心相応行）——心に属するものの意。すなわち精神作用。五蘊でいうと受蘊・想蘊および行蘊のうち心と関係ある（相応）もの（心相応行）。十二処、十八界では法処・法界にふくめられる。

(4)「心不相応行法」cittaviprayuktasaṃskārāḥ——心と無関係な諸作用、力、概念的存在など。(3)「心相応行」以外の行蘊、法処、法界所属のもの。

(5)「無為法」asaṃskṛta-dharma——(1)～(4)が有為法であるに対し、生滅を越えた不変常住のもの。「虚空」とか「涅槃」（滅諦など）。概念としては法処・法界にふくまれる。

この五位のそれぞれにいくつかの「法」が所属させられており、『倶舎論』によるとその数は「色法」が一一（上記の五根・五境と無表色）、「心法」は一（心＝意＝識）、「心所法」が四六、「心不相応

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

行法」が一四、「無為法」が三、合わせて七五となり、これを五位七十五法とよんでいる。

ものと心と作用　この分類の特色はいろいろあるが、まず、五蘊との関連で「行蘊」の意味を明らかにしたことがあげられる。すなわち五位と五蘊を比較すると、五位は、全体を「色」すなわち物質一般（もの）と、「心」と、「行」すなわち作用ないし力という三種に分けたことである。その場合、「行」は実体に対する属性ないしは作用という意味をもつことになる。そのうち「心」との関係の有無で、(3)と(4)が分かれるが、(3)の心所法はわれわれの迷悟の問題と直接関係があるため重視されて別出されたのに対し、(4)は理論的要請で設定されただけという相違があるが、理論としては阿含では果たせなかった整合性と組織性を加えることになった。この問題は『倶舎論』の依って立つ有部の法理論と関連するので、後でまとめて解説しよう。

第二は、「行」と区別されることで、「色」や「心」に対する実体的把握が強くなったことである。五蘊のなかの識蘊は最初にとりあげられたときには受などとともに心の機能であったが、古代インドの一般的な考え方やウパニシャッドなどの哲学説の影響もあって、識というものを心の機能の中心とするだけでなく、個体存在をまとめ、生存をつづけていく際の中核となるものとする見方が強くなってきたらしい。四大（地水火風）よりなる身体は死後分解するが、何かの機能が次生までつながらないと、輪廻ということは解釈つかない。ヒンドゥー教はそれをアートマン〔我〕という実在に帰するから説明は簡単であるが、無我を主張する仏教では説明がたいへん難しい。この問題は後の大乗仏教にまでひきつがれるが、阿含経の段階でもすでにいろいろな解釈があったらしく、そこから、識（＝心、意）を諸種の心作用の帰一する基体とみて独立させることになったものと思われる。しかし、決して、アートマンのように常住不変の実体でないことは、色法も心法も、ともに「有為法」であることのなかに示されている。この「心」の問題

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

についても、後で章を改めて解説することにしよう（七章）。

第三は「法」の体系に、右の「有為法」とならべて「無為法」を加えたことである。無為法というのは有為法の反対概念として作られたことばであるが、有か無かという相対的概念ではなくて、有無を超えたもの、有無とは次元の違う世界に属するものである。有無の世界といったのは生じては滅する世界、変化する無常の世界であるから、無為とは変化のない世界、常住なものを言う。この世の現象としてはそのようなものはないというのが「諸行無常」の理であったから、これは生死無常の世界を超越したところ、すなわち涅槃をいう。あるいは悟りの世界といってもよいが、それを「因縁によって作られたのではない」という意味で「無為」とよぶ。

無為はこのように悟り、涅槃という体験的に達成される理想境をさすのであるが、それをもまた「法」の名において並べるのは何に由来するのか。おそらくそれは、真理としての法、つまり常住不変の道理に通じるからである。そうすると、有為法とは現象としてのあれこれの法、無為法とは理としての法として区別することもできる。現象としてのあれこれの法は「縁起した諸法」であるに対し、理としての法とは、「縁起すること」（縁起）それ自体をさすのである。仏教の考え方では、縁起することが、縁起したもののほかにあるわけはないが、概念的にはたしかにこの両者を区別することができる。そして、縁起することは縁起した諸現象にとって共通する性質ともいえるので、これを「諸法の法性（ほっしょう）」という。縁起すること、すなわち生じては滅すること、絶えず変化することが、諸法についてのきまり、定めであるという意味である。無為というのは、この「法性」きまり、定めをさすのである（三章参照）。

しかし、有部の「法」に対する考え方は、この無為をもまた法のあり方の一つとして「無為法」と立てたわけである。そしてこの存在論的見方から、「虚空」ākāśa もまた無為法の一つと考えた。虚空とは空

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

間のことで、そこにおいてあらゆる物質が生じては滅するが、空間は変化することはない。生滅変化の生じる場、土台（界）である。このような論理的思考の結果として空間が無為法に加えられたが、同じく論理的な要請から次に説明するような第三の無為法が生まれた。

さきに「涅槃」と言ったのは「滅」ともいわれるが（苦の滅、煩悩の滅）、それは修行の結果として智慧の力で起こるので、これを「択滅」すなわち〔智の力で〕択びとった滅とよぶ。有部の理論では、三世にわたって存在する個々の法は智の力（択の力）で現在化する力を失う。それによって無為となる（果を生まなくなる。したがって、生滅しなくなる）、それが涅槃だと考えたわけである（したがってブッダのような完全な涅槃というのは、すべての法を一つずつ潰した果ということになる）。それはまったく現象として何もない、空無ということである。この考え方に対しては、後で述べるように大乗はまっこうから反対する。

この「択滅」に対して、この世には生起する自然的条件が欠けているために永遠に現象化できないものもあるはずと考えて、それを「非択滅」とよんだ。択力によらない滅、ということである。それがどんなものか名づけようはないが、理論上はとにかく考えられるし、考えられる以上、それも一つの法として加えておかなければ気がすまないのであろう。有部の理論、『倶舎論』の学説は総じて、修行、実践、体験の世界を出発点としながら、どうしても理論的整合性のほうを優先させる傾向があった。煩瑣な学問体系と化したゆえんである。

有漏と無漏　しかし、無為法の法体系への導入は、四諦の全体を同じく法の体系に組みこませるのに成功した。有為と無為の区別とならんで、それより古くから仏教で用いられる法の分類としては、有漏と無漏がある。「漏」は煩悩のことで、「有漏」とは煩悩をともなう心の状態をいう。それに対し「無漏」は煩

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

悩の垢れをともなわない心の状態で、悟りに向けて努力するはたらきや、悟りに役立つ心がまえはすべて無漏である。悟りや涅槃もいうまでもなく無漏である。四諦をこの有漏と無漏でわけると、苦と集（苦の因）は有漏、滅と道の二諦は無漏に属する。つまり「雑染」の二諦が有漏、「清浄」の二諦が無漏。一切法も同じようにして有漏と無漏にわけられる（色すなわち物質は有漏・無漏の範疇には入らないように見えるが、仏教の理論では、肉体は煩悩のおこるもとになるので有漏である。しかし、ブッダの身体は無漏身だといわれることもある。智慧などでも、世間的な知恵は有漏智、悟りに向かう般若の智ならば無漏智と区別される）。

これに対し、有為と無為の区別で言うと、無漏の二諦のうち滅諦だけが無為で、道諦は有為である。たとい悟りに役立つ善行、善心でも、生滅の法則はまぬがれないからである。有漏の二諦が有為であることは言うまでもない。これを図示すれば、次のようになる。

有部の法理論——三世実有・法体恒有

有部の学説は一つの理論によってこの法の体系を完成したのであるが、それは、右のような種々の区分で整理される諸法は、法として過去・現在・未来の三世にわたって存在する（三世実有、法

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:34:18 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

体恒有）ということであった。これは喩えていうと、無限につづく糸の束のようなもので、もし束の全体を輪切りにすれば、金時飴のようにいつでも同じ模様が現われるはずである。しかし、この束はわれわれとのかかわりにおいて見るときには、そのすべてがつねに関係をもつわけではない。三世の「世」というのは「世路」ともいって、道のことである。無限につづく糸の束に対して、われわれはそれに向かいあって立ち、前進していく。長い束のうち、われわれの眼前にあるのが「現在」の法で、その背後（つまりわれわれの前方）には「未来」の法が無限にひかえている。一方、現在の次の一瞬には、その法は過ぎ去って「過去」の法となる。過去の法となるとは、なくなることではなくて、われわれの（眼の）うしろのほうに位置して、見えなくなるだけである（もし、われわれの立っているところを固定して考えると、一群の法の束がたえず前方から迫ってきては後方に流れていく、無限の流れと見なされる）。

ところで、ある一刹那において、一列に横に並ぶ無限数の法の束のなかで、特定の法だけがわれわれとかかわりをもつ。それは種々さまざまの条件次第なのだが、かかわりをもった法だけが「現在」に生起し、次の瞬間には消滅して、「過去」の法となったといわれる。したがって、法の束がいっせいに現在化し、過去となるというのはまちがいで、正確には瞬間瞬間にいずれかの法が現在化し、いったん現在化した法はすぐに過去化する。それ以外の法はすべて未来の法だと考えるべきかもしれない。どちらにしても、過去とか現在とか未来というのは、われわれとのかかわりにおけ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

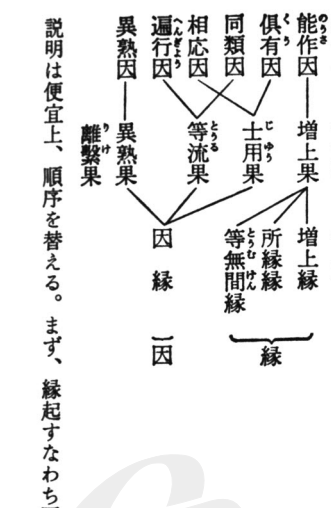
複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

る法のあり方にすぎないのであって、法自体としてはいつでも存在するというわけである。

この理論でいうと、無常というのは、法の現われ方（現在化）が刹那だけで持続性がないことの意味で、現在化の機会をもたないかぎり、無常とはいえないことになる（これが前に述べた「非択滅」の法の存在を認め、無為と見なす理由）。

同じく縁起ということも、ある法が条件によって他の法と関係をもち、その結果として現在化する、その法と法との関係のあり方をさすことになり、それをその種類によって六因・四縁・五果に分類することになった。

六因・四縁・五果　三者の相互関係を図示すれば、次のとおりである。



説明は便宜上、順序を替える。まず、縁起すなわち因果関係はひろく言って、異時の関係と同時の関係

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo

に分かれる。

異時の関係とは常識的にいうときの因果関係で、原因が先にあって、結果があとに出る。これにあたるものは、右のうち、

同類因
遍行因 ＼ 等流果
異熟因 ―― 異熟果

の三つがある。このうち、同類因および遍行因と、等流果との関係は、因果同質のものをさし、異熟因と異熟果とは因と果とが性質を異にするという。等流とは因となるものから流れ出たという意味。同類は果と同類の因ということである。たとえば、「信」などの善い心のはたらきが次の瞬間に同様に善い心のはたらきである「勤」（悟りに向けて意欲的に勤めようとする）を起こす場合、両者は善という意味で同類である。

この同類因→等流果の関係のうちで、とくにある種の煩悩はたいへん強烈な力があって、迷いの状態にあるかぎりのどんな心作用に対してもはたらきかけ、影響を与えるので、これを遍行因（あまねく行きわたる因）と称する（遍行因はしたがって、同類因のうちの特殊なものをさす）。

これに対し、異熟すなわち異質の関係というのは、善いことをすると楽な結果が出るが、楽な結果というのは善でも悪でもなく無記（中立）であるという理論に従って名づけられているもので、業とその果報との関係、輪廻生存におけるこの世と次の世（ないしそれ以後）とのいわば長いタームにおける因果関係をいう。だから、因と果は次の瞬間とは限らない。いま悪いことをした結果は、次生で地獄に堕ちるというかたちで現在化するといった道理である。その意味でこれは業理論といってよいし、道徳的因果律とよ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ぶこともある。

次に同時の因果というのは、二項の相互関係である。「倶有」というのは同時生起ということで、二項は相互に他に対して倶有因である。一方を因とみると他方は果ということになるが、それを「士用果」という。士用とは「男子のはたらき」の意で、他をひきつける強い力を言うから、因の力をさすことになる。したがって「士用果」は士用の結果、つまり他にひきつれられて起こったものということである。

この同時の関係のうち、特殊なものとして「相応因」↓「士用果」がある。もろもろの心作用（心所）と心との関係で、心が生起しているときは必ず何らかの心作用をともなっている、また、ある心作用がはたらいているということは心があるということである。「相応」は「心相応行」というときと同じ意味で、随伴するという意味。

以上の五種の因と三種の果との間の関係は因に果をひきおこす力が強く、そこに特定の関係が見られるので、このような強力な因を「因縁」という（因縁とは因としての縁の意味。縁はこの場合、一般に因とよばれるのと同義）。

これに対し、「能作因」↓「増上果」の関係は消極的な因果関係というか、あるものがある結果の生起するのを妨げないとき、それが能作因とよばれ、結果を増上果という。増上とは、支配力をもつということであるが、何かの意味で関係があるといった程度のことをいう。この世に存在するものは、それの存在を他から妨げられていないという意味で、他のすべて存在するもの（現在するもの）の増上果であり、また他に対して能作因である。また、前刹那の法と現刹那の法との間でも、同様に能作因と増上果の関係にある（ただし、相互的とはいえない）。

この能作因↓増上果の関係のうちで、特殊なものとして、所縁縁と増上果、等無間縁と増上果の場合が

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

あるという。

「所縁」ālambana とは認識のよりどころということで、認識は対象があるとき生ずる（心がはたらいているとき、必ずその対象が存在する）という理論による。この場合、対象のほうを因と考えるので、同時存在ではあるが俱有因と士用果の関係とは見ない。したがって能作因のなかに入れるが、所縁は識の成立を妨げないといった消極的な意味ではないので、「有力の能作因」とよぶこともある。

同じく、等無間縁も有力の能作因で、これは前刹那（直前＝等無間）の心（過去に落謝した意）を現刹那の心に対して、そうよぶのである。われわれの心は刹那ごとに滅しては生ずるが、その前後の関係で善悪などは不定なので、やはり同類因→等流果の関係とは見なしえないというわけで、ここに分類する。この有力の能作因二種以外のすべての能作因を、単に「増上縁」とよぶ（それには、ある法自体以外のすべての法がなりうる。その法の現在化を妨げないものという消極的な意味しかもたない）。

以上の六因あるいは四縁と四果との関係は、すべて有為法にかかわるものとされる。この有為法との関係を断ったところに成り立つ結果として、涅槃（択滅）があるので、涅槃を「離繫果」という。離繫は煩悩の繫縛を離れるという意味であるが、ここでは有為法とのつながり（関係）を離れるというふうに解せられる。したがってそれは果とはよばれるが、有為法のなかにその因はない（無為法は因果の関係をもたないので、果といっても便宜上の名称ということになろうか。なお、四諦の説明では道諦が因で、滅諦は果というが、その因とは手段ということで、ここでいう六因のいずれにも入らず、滅とは、因に果を作る力の消滅したことをさすという、いわば消極的な意味しか認めていないことになる）。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

大乗仏教の法観念——一切皆空

因果関係の分類という意味では、有部において確立したこの六因・四縁・五果の説はそのまま大乗にもうけつがれる。一切法の分類についても同様である。しかし、大乗仏教はこの有部の法理論に対して疑念をもち、それが仏説からほど遠くなっていることに気づいて、その修正を試みた。それがはじめに述べた『般若心経』にみられる「五蘊皆空」の教えなのである。大乗の主張は有部の「法有」に対して「法空」の理論で、それによって、縁起ということを仏説に即して正しく解釈できたと自負した。

有部の説は「無我」ということを、我が五蘊の諸法の因縁による集まりで、名のみの仮のものと見る点では仏説にかなうが、構成要素としての諸法が実有とみることは、法が外教のいう「我」と同様に、固有の性質をもった自己存在（自性 sva-bhāva）となり、諸法無我の理に反する。そこで、大乗は法もまた自性が無い（自性に欠ける＝自性空）と主張し、それが法が縁起するということの正しい意味だといったのである。『般若経』の「五蘊皆空」はその意味であり、ナーガールジュナとその後継者たち（中観派）がこれを敷衍して、その空性説をうちたてた。そのあと、しかし、諸法は空ではあってもなお現実には有りと見られているのはなぜか、という新たな問題が提起され、それの解明として、瑜伽行派の唯識説が成立した。瑜伽行派は、有部と同じ法の体系を利用しながら、法の存在性を剝奪し、ただその機能性を主体とのかかわりにおいて認めた（法は仮有）。主体との

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

かかわりとは、われわれにとって法がどんな意味をもつかということで、それは認識の基本構造（唯識）というかたちで解答されたのである。それは、仏説として五蘊や十二処・十八界の分類が立てられた本来の意義でもあった。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

五章　輪廻と業・煩悩

さきに四諦を説明して、苦とその因を示すところの苦諦と集諦とは、迷いとか汚れ（雑染）とか生死輪廻と規定されるわれわれ凡夫の現実の在り方についての因果関係を示すものであると述べた。いまは、その因果関係の構造について、もう少し仏教教理の示すところを説明しておきたい。これは仏教の人生観ないし世界観と名づけてもよいであろう。仏教で、われわれの所与の現実をどう見ているかという問題だからである。そしてこの見方に応じて、それに対していかに対処し、克服してゆくかという修行論が打ち出されることになるからである。

輪廻の世界――三界・六道

仏教の世界観・人生観の基本にある考え方として、「輪廻」saṃsāra ということを見逃すわけにはいかない。輪廻は生死とも生死輪廻とも、あるいは生死流転ともいわれるように、生まれては死ぬ、また生まれては死ぬということのくりかえしで、しかもそれが無限に続くという。その間に人

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

はつねに人身を受けるとはかぎらず、あるときは畜生に姿を変え、あるときは地獄に生まれる。もちろん、天に生まれるというよい果報に恵まれる者もあるが、それとても永劫ではなく、天上界といえども輪廻の一環にすぎない。

この輪廻の観念は仏教の発明ではない。仏教成立当時のインド社会にすでに周知の世界観・人生観であった。インド人は古くから、不死（アムリタ）すなわち死後の永生を願う気持が強く、それを光明の世界としての天、すなわち神々の世界に求めていた。しかしバラモンはその呪力によって神々をも支配し、その結果、呪力ブラフマンが究極的な地位を占め、神々の絶対性は失われるようになる。こうしてブッダの時代、インド人の思考のなかで、天上の神々の世界はすでに絶対的な幸福、永遠の幸とは見なされていなかった。そして天上の楽にも限界があると見たが、その理由は業（ごう）の果報の尽きることに求められた。現世と来世、ひろく言って一つの生と次の生との間に因果関係を認め、その決定の因子として生前の行為を予想するわけである。この次生を決定する行為ないしそのもつ力や機能を「業」とよぶが、この観念もまた、仏教成立の当時にはひろく信ぜられていたものと考えられる。

天上界に生まれることに代わって絶対的幸福と考えられたのは、この輪廻、生死のくりかえし、その苦しさから逃れることで、これを「解脱（ヴィムッティ）」とよんだ。生死輪廻からの解放は不死の獲得にほかならないが、バラモンたちの間では具体的にそれは輪廻の主体である個我（アートマン）が、宇宙の根元たるブ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ラフマン〔梵〕に帰一すること（梵我一如）と考えられた。この「解脱」のあり方をめぐって、ブッダの当時さまざまの見解がとりざたされ、論議の的となっていた。ブッダもまたその解決の道を探し求めて出家修行し、その結果として法を悟ったわけである。

輪廻はこのように、業、人生の苦、それからの解脱という種々の観念とセットになっているものであるが、すでに述べたように、ブッダの立場はそのような世界観・人生観を前提としつつも、輪廻の構造がどうなっているか（死後どうなるか）を論ずることよりも、現実の苦の因って来たるところを考えて、それを取り除くことに力点をおいていた。したがって、輪廻の構造を組織化することが仏教本来の目的ではなかったが、それにもかかわらず、教理体系の整備にともなって、その一環として輪廻の構造も体系化された。現在われわれはその細部に縛られる理由は毛頭ないが、仏教の世界観が生死輪廻を前提としていることだけは忘れてはならない。

現在、ヒンディー語では、この世、世間という意味で**輪廻**の原語 saṃsāra を用いている。いわば世界の時空的ひろがりのなかに生死のくりかえしが含められているのである。

なお、日本では輪廻ということは文字どおりには信じられていないように見受けられる。インド的な仏教の考え方では、死後一定のとき（四十九日、その間は「中有」。「中陰」ともいう）を経れば、必ずどこかに生まれ代わるので、霊魂が草葉の陰からわれわれを見守っていたり、年に一度、わが家に帰ってくることはない。輪廻はまったく信じられていないわけではないが、平安初期の『日本霊異記』など、仏教伝来の初期のものほど輪廻転生の話が多く、しだいに日本の土着思想によって風化してきたものと思われる。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(一) 六　道

仏教の説く輪廻の構造は三界・六道にまとめられよう。そのうち「六道」は具象性があってより通俗的に親しまれている。いまそれを表示すると次のとおりである。

天　上（deva 神々の世界）
人　間（manusya 人類）
阿修羅（asura 神々の敵たる魔神）
畜　生（tiryagyoni 横たわるもの、傍生、動物類）
餓鬼（preta 霊鬼、もとは死者の霊）
地　獄（naraka 奈落）

この六道（六趣）のうち、阿修羅を除く五趣を挙げるのが古い型である。畜生以下の三を三悪道とよび、そこに生まれると仏の教えを聴く機会、能力がないとされる。これに対し、善道は天上・人間の両界をさすのが通例である。

阿修羅の評価は仏典では二種類ある。一方では天龍八部衆（天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅迦）に数えられ、一種霊力を具えた存在で、仏の教えも聴聞し、理解する。しかし、他方ではつねに諸天を敵として戦いをつづける存在で、「非天」といわれる。修羅道が闘諍の世界とされるのはそのためである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

阿修羅は元来、インド・アーリヤ語の世界では、天すなわちデーヴァと並ぶ神的存在で、イランの古代宗教たるゾロアスター教ではアフラ・マツダの名で善神とされる。そこではデーヴァが悪神である。アスラの地位の低下はイランと分かれた後のインド・アーリヤ人の伝統であろう。そこにはアーリヤ人によって征服された種族の姿の投影（まつろはぬものどものイメージ）も二重うつしになっているかもしれない。

餓鬼は元来は死者の意で、死者の霊、祖先の霊をいう。死者は自ら食事をする能力がないので、子孫の供養がないと餓えてしまう。それは祟りをなすので、子孫による祭祀が要請される（この観念は施餓鬼会の行事に現在も残っている。これは何ほどか日本人の霊魂観に近いところがある）。

地獄は地底にあるとされる場所で、天界が天空にあるとされるのに対比される。そこに堕ちたのが地獄の衆生である。地獄についての描写は仏典では微細を極めるにいたるが、これは勧善懲悪の教訓を徹底させる手段として用いられた。地獄が極楽世界との対比で説かれることは、苦の最たるものとしてであろう。

天界が人間以上の世界とされるのは、インドの古い伝統であって説明の要はないが、このなかにヴェーダの諸神が三十三天（**切利天**）の名で組み込まれている。その大将が帝釈天である（天帝釈 Śakro devānām indraḥ〔釈提桓因〕。神々の支配者たるシャクラ。「釈」Sakka, Śakra はその個人名。一般には単にインドラ〔因陀羅〕とよぶ）。帝釈天は四天王を従えて、ブッダを守護し、また仏法を保護して後世に伝えることを任務としている。ブッダに法を説くことを勧請した梵天は、この帝釈天よりいちだん高い地位にあるが、これは古いヴェーダの神であるインドラよりも、新しく最高神として登場したブラフマン神の勢力が大きかったことの反映であろう。そのほか、大自在天 Maheśvara〔摩醯首羅〕はヒンドゥー教の主神シヴァである。また、地獄の主とされるヤマ Yama〔閻魔〕が夜摩天の名で加えられ、兜率天（Tuṣita）などと並んで、切利天と梵天の間に位置せしめられている。このようにヴェーダおよびヒンドゥー

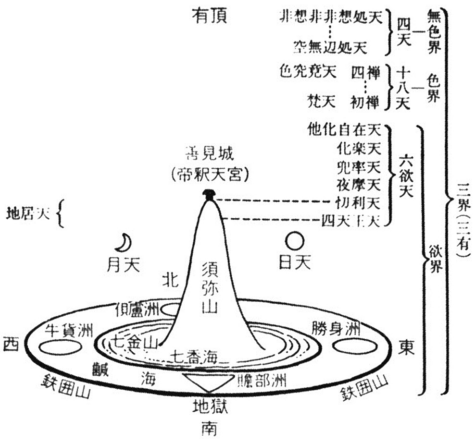
May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

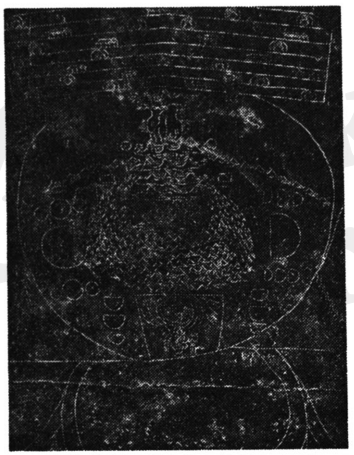
複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

教のパンテオンが、時代に応じて加えられ、天の名でよばれている。空間的には天空高く存在する世界で、そこに眷属の衆生たちが生活しているものと考えられている。

(二) 三　界

こうして、六道はおのずから垂直に配置されることになり、下は無限の底に地獄があり、上は無限に高く天界がある。そこで、人間以上の高いところは、修行の結果としてその行の力に応じて赴





須弥山図（東大寺大仏蓮弁毛彫）
左右に日月を置き，須弥山をめぐって海，その外側に山岳を表わす．粗い毛彫で，四大洲のうちでは南贍部洲が，波文の下方に三尊像を収めて方形に描かれている．

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

くべき世界とされ、ここに「三界」の観念が生み出されるにいたった。

三界はヴェーダでは天空地の三界というように、神々をやはり垂直に配置したのにはじまるが、仏教ではそれをうけつぎつつも、そこに禅定の力で達しうる高みの観念を加えた。禅定の段階については修行論で述べなければならないが（八章）、それによってわれわれが欲望（苦の原因となる）を除くことを目的とするので、禅定の効果のあらわれない「欲界」kāma-dhātu すなわち欲をともなった日常的意識の世界、禅定によって欲は除かれたが肉体をなお存している「色界」rūpa-dhātu、その上に、肉体の束縛を離れた自由な精神のみの「無色界」ārūpya-dhātu という三段階を考え、これに神々の世界を配当したのである。

神々の世界も一般的には欲界に属するのであって、それらを六欲天と称する。下から、(1)四王天、(2)忉利天、(3)夜摩天、(4)兜率天、(5)化楽天、(6)他化自在天。地上の最高点としての須弥山（これはヒマラヤ山を象徴したもの）をとりまいて日月などがめぐるとして、そこに四王天を置き、三十三天の主・帝釈天は須弥山頂に宮殿をもつとする。なお、ブッダの成道をさまたげたり、死期を早めさせたりした魔王波旬は、他化自在天の眷属とされている。兜率天はブッダがそこから降下してマヤ夫人の胎に入ったとされる世界で、目下は弥勒菩薩が待機中という。

この六欲天の上に、色界の初禅天として梵天の世界が考えられている。そして色界の最高天を色究竟天（アカニシュタ）とよび、その間に合計一八種の天界を置く（名称省略）。無色界天は禅定の段階に応じて四つに分かれるので、合計二十八天とよばれる。しかし、神々の世界としては色界天をもって終わるとい

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ってよかろう。

このように三界はいわば精神の高みであるが、禅定に入ることによって逢せられるとはいえ、禅定から出て平常の意識にもどればまた欲界にもどるはずのものである。しかし、これと死後の世界とが混同され、場合によっては色界の神々の世界に入ることは、むしろ解脱をさまたげるとも考えられた。つまり仏教的価値観からいうと、三界は所詮、輪廻の世界にあると見るのである。

(三) 有——輪廻する生存

この輪廻の世界における生存を「有」bhava とよぶので、三界は三有とも称せられる。また、無色天の最高処たる非想非々想処天は、それが輪廻生存としては最高位にあるゆえに「有頂(天)」ともよばれる（ときには色究竟天を有頂天とよぶこともある。これは肉体を具えたものの世界としては最高であるから）。

仏教の教理としては、輪廻は「有」という名でよばれるほうが多い。この名称は十二縁起を十二有支（輪廻生存を示す一二項目）というところにも現われているし、煩悩論や業論にも顔を出す大事な概念である（存在をあらわす「有」と紛らわしいが、それは bhava の訳）。しかし、他方では須弥山説とむすびついて、空間的な世界としても描かれている。仏教の教理としては「有」すなわち輪廻生存とは、迷いの世界として、悟りの世界「涅槃」と対立するあり方と見るだけで十分であろう。大乗の進んだ教理が強調するように、「迷故三界城、悟故十方空」であり、三界は心の描き出した迷

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

妄の姿にほかならないのであるから（三界唯心、但是一心作。――『華厳経』）。そのことをまた、大乗経典は「生死即涅槃」とも表現している。

業

この三界の「有」を有らしめるはたらきとして「業」が考えられている。業はさらに煩悩（惑）がひきおこすものとして、ここに仏教の「惑・業・苦」の体系ができあがる。この煩悩（惑）と称するものは、四諦の説でいえば「苦集」としての渇愛ないし無明であるから、業の観念は、四諦における苦と苦集との間をむすびつけるはたらきと言ってもよい。

業の観念は前述のように仏教以前から普及していたものであるが、仏教においても新しい解釈を加えて重要な教義概念となった。

ブッダは時に「業論者」とよばれることもある。それは来世の果報を導く力として、ブッダが、生まれ（出自）よりも現世における行為――善業の集積に力点をおいたことによるが、総じて業論者とは、行為を媒介とする道徳的因果律の信奉者と言ってよいであろう。

「業」と訳される karman（カルマン）は、作る、為すという意味の語根 kṛ- に -man というはたらきを示す語尾を加えてできた語で、作るはたらきや力をあらわす。その点、「行」と訳されるサンスカーラと類似の概念であり、事実、仏典で両者は混用される。ただ、「行」が「諸行」といって

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

広く縁起した諸法をさすのに対し、業にその用法はなく、多くの場合、輪廻とのむすびつきで、輪廻をひきおこす力をさすようになった。もちろん、一方では行為一般をもさすわけで、いかなる行為も必ず、そこに影響力を残して何らかの果を生むということが前提となっている。

さて、ひろく行為、業という名で、仏典では身口意（しんくい）の三種の業を挙げる。口業とは語業ともいうが要するに言語表現、ことばであり、意業とは心のはたらき、精神作用一般である。それを行為というのは漢語としては正確でないかも知れないが、身業がその狭義の行為、つまり身体、手足などを用いての動作を意味する。この行為論はまた、善業・悪業の分類に関連し、戒律の問題とつながる。たとえば、殺生とか盗みは不善の身業、妄語は不善の語業という類いである（その対極に、十善の天子などという場合の十善業道がある）。三業のうちでは、意業に重きをおくので、仏教は一種の動機論（結果ではなくて）ということになろうか。学説によっては、意業を「表にあらわれない業」（無表業、潜在的な業）とし、それにもとづいて身語二種の表面化された業（表業）があると考える。しかし、別の学説では意業のうちに表・無表の二業を考えるものもある。いずれにしても、心で思うことが根元的な影響力をもつ大事なことで、したがって心の改造こそ、悟りにとって大事なことと考える。仏教は体育理論でも生理学や物理学でもないので、身体による行動についてはごく大まかな区別しかしない。というより、善か、悪（不善）か、あるいはそのいずれでもない（無記）かということしか問わないのである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

この善悪はいうまでもなく、死後の運命にかかわるので、それによって業をわけると、福業・非福業・不動業の三種となる。福業は欲界の好ましい（「可愛」の）果報に導くもの、非福業は好ましからざる（「非愛」の）果報に導くもの、不動業は色・無色の両界に導くものである。

ところで、果報としての福とか非福は、善悪とは別である。業自体には善悪などがあるが、果報はその点では必ず無記とされる。その点で、果報（vipāka）を異熟と訳す（四章の「六因五果」参照）。

業の因果関係を生む力は、このような三界の輪廻をひきおこすだけでなく、道を修めて苦の滅にいたる場合にも考えられる。しかし、その場合は通常いうところの業とは性質がことなるので、三界の有をひきおこす業は「有漏業」つまり煩悩をともなう（あるいは煩悩にもとづく）業とよび、道を修めて生ずる業を「無漏業」とよぶ。さらに、諸仏の衆生済度のはたらきも、仏業とよばれるが、ただしこれは果を生むものではない。しかし菩薩の場合は無漏業と見なされる。

業の問題は輪廻とのむすびつきで、その業の担い手、輪廻する主体は何かという問題をふくんでいる。これは個我という肉体が滅んでも死滅しない実体を仏教が否定することとからんで、仏教におけるアポリヤの一つとなった。その解決策として、大乗唯識説におけるアーラヤ識の観念が生まれるが、これについては後で説くこととしよう（七章）。

煩悩（惑）

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

煩悩という言葉はこれをボンノウと読むことと合わせて、日本人の常識に入りこんでいる。たとえば大晦日の除夜の鐘を一〇八撞くのは一〇八の煩悩を退治するためだとか、数珠の珠が一〇八あるのも同様に、それを一つ一つ数え上げていくためだとか、よくいわれる。ところで百八煩悩とは何を数えるかとなると、これはなかなかややこしく簡単に説明できないし、理論上の要請にすぎないもので、覚えたところであまり意味はあるまい。ただ煩悩が人間の心にしみついたもので、なかなかしぶとく、容易には無くせないものだということは大かたの経験しているところであろう。仏教はとにかく、この煩悩なるものに諸悪――それは畢竟、輪廻すること、生死をくりかえす苦しみに帰着するのだが――の根元を求めているのである。

煩悩の原語 kleśa, kilesa（クレーシャ）とは「汚す」kliś- ものの意で、染とか汚、染汚（ぜんま）、さらに「惑」などとも訳される。前に述べた法の理論でいうと、種々の煩悩は心のはたらき（心所有法、心所法、心と相応してはたらく法）の一種であり、心に付着してそれを汚すものと考えられている。心を仏教がいかように捉えているかについては、後でまとめて述べる機会があろうが、さしあたって次のことを言っておきたい。

阿含経典のなかでは次のように説かれている。

心が汚れていると衆生は汚れ、
心が浄められると衆生も浄められる

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

これは迷うも悟るも衆生の心次第ということであるが、この対句は、四諦のうちの苦集の二諦と滅道の二諦の性格をそれぞれ示している。つまり、苦を集めるものたる煩悩によって心が汚れると、そこに衆生たちの苦が生じる。しかし、心が煩悩の汚れから離れて清められれば、そこに煩悩の滅尽、したがって生死の苦から解脱した涅槃の境が達成される。そこでは心を汚すものは、煩悩と業とその結果としての苦というその全過程の総体を示すものとして「雑染」saṃkleśa とよばれて、道の修習によって苦の滅にいたる過程が「清浄」vyavadāna（清め）といわれるのに対比されている。

このように、心を汚すものは煩悩だけに限らないけれども、そのすべての過程の大もとにあるところの心のはたらきが、とくに「汚れ」すなわち煩悩の名でよばれる。それは業との関係で言えば、身体や言葉によって示される行為の背後にあって、それをあらしめるようなはたらきとしての心のはたらきと言ったらよいであろう。いわゆる心に思っていることが、つい身体に現われ、口に出るというものである。仏教はいつでも、行為の根元にある心を大事と見る点で、一種の動機論に立つ。

このような行為の背景にある潜在的はたらきは、それ自体「業」とよばれることもあるし、また「行」（何かをあらしめる力）ともよばれる。煩悩はそうした意味での心業（意業）であり、心行である。

しかし、一方で、いま現に怒っている人があるとしよう。その怒りはこわい顔や、こぶしを握って手をふるわせているといった身業や、相手に罵声を浴びせるとか、叱るといった語業として示さ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

れるほかに、現に怒っているという心の状態でもある。そうすると、心の動きそれ自体は目に見えなくても、決して今の怒りの原因というだけでなく、今の怒りそのものである。そこで同じ心のはたらきにも、現在のものと、その原因となる過去のものとを区別することもできる。この考えに立つと、煩悩のうちに現にはたらいているものと、潜在的なものの二種を数えることになる。前者を「纏」paryutthāna, paryavasthāna の煩悩とよぶ。現に生起している、という意味である。これに対し、後者は「随眠」anuśaya とよばれる。眠っていて活躍はしていないが、なくなったわけではなく、条件次第ですぐ活躍するという意味である。この理論は、煩悩を滅することがいかにたいへんかという実感から生まれたものである。そして実践論的な意味で、瞬間的な「纏」の煩悩よりも、潜在的に持続する「随眠」のほうに力点がおかれ、それにこそ煩悩の本質があるとする見解も生まれた。『倶舎論』の「随眠品」という表題はその見解に立つもので、そこでは煩悩すなわち随眠で、その意味は（苦を）増幅するもの（anuśerate）と解されている。そこでは、「纏」は一種副次的な煩悩の名とされる。

さて、煩悩といわれるものにはどんなものがあるか。よく挙げられるもっとも基本的なものには、「三毒の煩悩」とか「三不善根」とよばれるところの、貪・瞋・癡がある。

貪（rāga）は貪欲とも訳されるように、むさぼり、執着することである。欲望一般と言ってもよい。この「貪」と方向的に反対の極にあるのが、「瞋」（dveṣa 瞋恚）で、これは嫌悪すること、憎悪

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

すること、拒絶反応を示すことであり、「礙げるもの」pratigha（礙）ともいう。前に、苦の種類のなかに、愛別離苦と怨憎会苦という相反する方向のものがあったのとちょうど対応する。われわれは何か好ましいもの、たとえば美しい異性を見ると、気をひかれて、いっしょにいたいとか話したいとか思う。その最後は自分のものにしたいという所有欲にいきつくが、それが「貪」である。望みが達せられれば心は楽しむが、もしその人と別れなければならぬとなれば、これは苦である（愛別離苦）。たとえ一時の楽であっても、会者定離で最後は愛別離苦を味わうとすれば、楽は苦の種、所詮は貪心それ自体が苦をもたらす。その人に対する愛着の心を捨てる以外に、苦の尽きることはない。これは仏教がもっともしばしば説くところである。

この反対は、好ましくないものに対する気持で、いやなものを見れば、つい顔をそむけたくなり、それから逃れようとする。いやだと思う奴ほど、よく出会ったり、まつわりつかれたりするというのが怨憎会苦であるが、これもそのような怨憎の念、嫌悪感が消えれば苦でなくなる道理で、その点で、瞋恚や嫌悪は煩悩の基本の一つに数えられる。

以上の二つがいわば心情的なもので、代表的な二方向を表わしているに対し、「癡」はいわば知的な煩悩で、文字どおり真実にくらいこと（moha）、無知（avidyā 無明）をいう。つまり、諸行無常という真実の理にくらいので、愛する者はいつまでも自分のそばにいると考え、貪欲、愛着を生ずるが、その道理を悟れば、心は貪欲を離れて平静となる。つまり「捨」（upekṣā 無関心）であり、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

苦の滅である。したがって、真理に対する無知こそは心情的な二煩悩のさらに根元にあるものといえる。これは、次の十二支縁起において無明を最初におくのと同じ道理である。

このような知的な面での欠陥としては、その無知の結果としておこる種々の見解があって、これも「見」dṛṣṭi の名で煩悩の一種と数えられる。見はその内容上、(1)我が実在すると考える「有身見」、(2)ものを常断、苦楽、同異といった両極端において考える「辺見」(辺執見)、(3)善悪の果報などを否定し、あるいは三宝の値うちを認めないなどの「邪見」、(4)自己の見解のみを正しいとする「見取(見)」、(5)外教の立てる禁戒とか慣行(シーラ)を守ろうとする「戒禁取見」とが挙げられる。ただし、これら五見はいわば知的理解の問題なので、その正しくないことに気づけばわりに容易に改められる(見道所断)とされ、貪・瞋・癡が長い修行によってのみ断ぜられる(修道所断)のと対比される。

「見」よりもしぶとい煩悩としては、三毒に並ぶものとして「疑」と「慢」を挙げる。このうち「疑」vicikitsā は疑惑、猶予で、業や果報、三宝などに対する疑いをさすとされ、一般的な疑念ではない。これも純知的な煩悩である。「慢」māna は心情的なもので、己れを高く見て、他を軽蔑する心、いわゆる自慢である。「我慢」もその一つだが、これは我ありとの慢(asmi-māna)で我見というのと同じこと(いまの日本語でいう「我慢」とは一種逆の心作用である)。そのほか「卑下慢」とか「増上慢」などもあるが、それらの意味は今日使用する意味とだいたい同じといってよい(教

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

理上、三慢、七慢、九慢などに分けるが、説明は省略する)。この「慢」と似たものに「憍(きょう)」すなわち、驕(おご)りがある。

百八煩悩　以上述べた煩悩類をまとめると、

(1)貪、(2)瞋、(3)慢、(4)癡(無明)、(5)見、(6)疑

の六種となるが、これを「六随眠」とか「六根本煩悩」とよぶ。「見」を五種にひらくと、合わせて一〇種と数えられる。この六種ないし一〇種の煩悩を、四諦を現観する見道によって断ぜられるもの、つまり純知的な煩悩と、修道によって断ぜられる、よりしぶとい情意的なものに分け(修惑は貪、瞋、癡、慢のみ)、さらに禅定の階梯に応じて、欲、色、無色の三界に配当すると、合計して九八種に細分される。それに一〇種の表面的煩悩すなわち十纏を加えると、百八煩悩という数ができあがる。それを断ったときは、まさに煩悩の滅尽で、悟り、涅槃の境位である。

阿含に説かれる諸煩悩　以上は『倶舎論』などのアビダルマにおいて確立した学説であるが、阿含経典にはそれほどまとまった煩悩論があるわけではない。その散説される主なものを並べると、

三結(身見、疑、戒禁取)

七結(欲貪、瞋恚、見、疑、慢、有貪、無明。——さきの六随眠のうち、貪を欲貪・有貪と二つに分けたもの。欲貪は欲界の貪、有貪は色・無色二界の貪をさす)

五上分結と五下分結——阿那含果において断ぜられる欲貪、瞋恚、身見、疑、戒禁取を「五下分結」、阿羅漢果において断ぜられる色貪、無色貪、掉挙(じょうこ)、慢、無明を「五上分結」とよぶ。

四軛(しやく)＝四漏＝四暴流(ぼうる)＝四繋(け)(欲、有、見、無明。欲と有は、欲貪、有貪にあたる)

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

五蓋（欲貪、瞋恚、惛眠、掉悔、疑。――惛眠は惛沈と睡眠、掉悔は掉挙と悔すなわち悪作。惛沈は心がしずむこと、掉挙はその反対でうきうきすること。睡眠はねむ気で、精神活動の不活発、悪作はしまったという後悔の念で、それぞれ惛沈と掉挙の結果とみて結びつけたもの）

右の「結」saṃyojana（心をしばるもの、心のむすぼれ）、「軛」yoga（心をつなぐもの）、「漏」āsrava（心から洩れでるもの）、「暴流」ogha（滝のように人を流転においやるもの）、「繋」grantha（結縛、しばりつけるもの、むすぼれ）、「蓋」nivaraṇa（心をおおうもの）は、いずれも煩悩の同義語とされる。これらの同義語を通じて、仏教で煩悩をどう見ていたかが知れるであろう。最後の「蓋」は、妨げるもの（āvaraṇa）とも類似の語であるが、これはまた、善でも不善でもない心すなわち「無記心」を、さらに煩悩の有無によって「有覆無記」「無覆無記」と分けるときの「覆」nivṛta とも関連する。

十二支縁起

以上は惑→業→苦（輪廻）の次第で因から果へと観察されるのが通例であるが、この三段階の因果関係を人間存在の現実にあてはめ、より細かく図式化したものとして十二支縁起説（漢訳では「十二因縁」）、すなわち無明にはじまって老死にいたる一二項よりなる縁起説がある。十二支の各項は、輪廻生存を構成する支分（あるいは節目）という意味で「有支」bhavāṅga ともよばれている。その名称については、さきに縁起説についてふれたところで、経文のかたちで挙げておいたが（七〇―七五ページ）、各項の意味や、それぞれの前後二項の関係については、あえて説明を後まわしにし

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ておいた。十二支縁起の完成には、惑・業・苦の説が密接に関連していると思われるからである。

十二支縁起は歴史的には、四諦における苦↑苦の因（苦集）と同様、現状を果とみて、その原因をさかのぼって考えるという思考方式にのっとってできあがったものである。それゆえ、苦（老死、愁、悲、苦、憂、悩）↑生↑有↑取↑愛という五支縁起を基本として、しだいに増広され、識と名色の相互依存関係を最後（究極の原因）におく九支あるいは十支縁起をへて、最終的に、その前に行↑無明をおく十二支にかたまったものと考えられる。このそれぞれのつなぎ目は、縁起説にとって大事な節目と思われるが、以下の考察でもその点を考慮して、十二支をいくつかの群に分けて説明を試みたい。

阿含経のなかでもすでにそうであるが、十二支縁起というと、十二支の各項が何をさし何を意味するかという点ばかり説明があって、それと次に来る項目とが、どんな種類の因果関係にあるかということが問われていない。しかし、縁起説であるからには、前後二項の関係にこそ意味があるはずである。しかも同じく縁起とは言っても、十二支は決して一本の同じ論理でつながるものではないのである。いまは特にその点に留意して区分してみた。

A　(1)無明 → (2)行 → (3)識

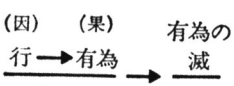
この三支は惑→業→苦の三段階を示す典型的な場合と考えられるが、その場合、第三の識支は現在の生存活動を代表している。識は心と言ってもよく、認識主観の意味であるが、阿含経でもそれ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

は生まれると同時に機能するものとして人間存在のもっとも中核をなす機能と考えられていた。さらには単に出生して以後だけでなく、受胎の瞬間から機能するという考えも生じて、これを「結生（けっしょう）の識」とよぶようになった。この識からさかのぼって考察するとき、識の性格を決定したものとして、過去の身口意の三業を挙げ（第二の行支、行＝業）、さらにその業をひきおこす因として、根元的な無知を想定したものである。

ところで、無明も一つの煩悩であり、また一種の行（サンスカーラ）であるとすれば、それは何にもとづいて生じたものかが当然問題にされなければならないはずである。しかし、仏典はそれについて何ら語るところがない。しかも輪廻は無始であるといわれる。すなわち、何ゆえ、われわれが真実を知らず、無明の闇につつまれているかという理由は人知を超えているのみでなく、ブッダにとっても回答されていない（無記）。ただ、はじめもわからぬ昔から、かくのごとく無明の闇につつまれているというところから、仏教の考察ははじまる。それで必要かつ十分なのは、その無明をなくせば、すなわち無明が明（知）に転換すれば、そこに苦の滅が実現し、その目標が達成されるからである（さらに言葉をかえれば、悟れば十二支のいっさいの因果関係は消滅してしまうから、無明は、この行→有為法という縁起――それは畢竟、輪廻をあらしめる――を成立させる根拠であるとも言える。その意味では単なる行の因にはとどまらない）。仏教は決して世界成立の原因を探ったり、創造の過程を説くことを



May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

目的とするものではないからである。

B (3)識 → (4)名色 → (5)六入 → (6)触

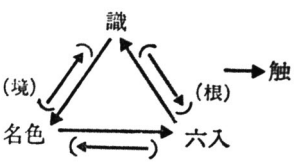
この四項の関係は、Aの場合と異なって単にわれわれの認識作用の成立条件を挙げたものであり、相互の関係は同時の依存関係である。

ここで、「名色（みょうしき）」nāmarūpa というのは元来、名称（nāman）と形態（rūpa）で、概念とそれに対応する存在をさすが、仏典では精神と物質、心と身体の意味に解し、五蘊でいえば、色蘊が色で物質、身体をさし、受・想・行・識の四蘊が諸精神現象をさすので、「名」にあたると考えている。それが「識」の対象であるのは、識のはたらき、すなわち認識・判断の結果として、これは水である、これは木であるなどとそのものと名称の対応関係が確定するからである。こうして、総じて「名色」は識の対象としての六境（色・声・香・味・触・法）をさす。

ところで、インドでの考え方として広くものを認識する場合、認識は、そのよりどころ（所縁）となる対象があってはじめて成立すると見る（「所縁」ālambana とはいわば認識のよりどころである）。その点では、「名色」に縁（よ）りて「識」あり、といわなければならない。そのため、十支、九支の縁起説が、識と名色との間で相互に縁となることを規定し、それを蘆の束が相互によりかかることによって直立しているのに喩えている（蘆束の喩）。十支説（九支説）は、こうして因果関係が識と名色の間で循環することになるので、それ以上にさかのぼる必要を認めないと考えたようである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会



ところで、別の阿含経では、「根と境と識との三事が和合して触あり」と言ったうえで、「触によりて受あり、受によりて愛あり」と説くものがある。これをあてはめると、名色が境、識は識であるから、根にあたるものとして「六入」（眼・耳・鼻・舌・身・意）を挙げる必要が生じる。さきに述べた九支と十支の相違は、この「六入」を加えるかどうかによるもので、おそらく九支縁起が先にあって、あとから根境識の三事和合という説に合わせて、六入の項が挿入されたものであろう。したがって「名色によりて六入あり」とはいうものの、識もふくめた三者は理論上は、同時の相依関係でなければならない。さらに加えて、次の「触」というのも、三事和合を条件として心が対象と接触し、そのいずれか一つが欠けても接触は成立しないというのが原意であるから、触もまた理論上は同時である。ただし、根境識の三事と相依というわけにはいかない。そこで、以上の四項の関係を図示すれば右のごとくなる。

しかし、伝統的な解釈では、識を結生識すなわち托胎の瞬間の生存状態と考えたうえで、胎児の成長過程で三週間後に肉体と精神機能が整っても、まだ諸根の整わないときを「名色」の位、諸根の整ったときが「六入」の位、そして出胎して外界と接触したときを「触」の位と考えている（これを近代の学者は胎生学的解釈とよんでいる）。

このように、Bの四項はそれだけでは認識構造を示すものとして善いとも悪いともいえず（ブッ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ダとても、諸弟子に法を説いているときは、同様の三事和合の触をはたらかしているはずであるから)、逆にいえば、有漏の場合も無漏の場合もある道理であるが、十二支の場合は、その前に無明にもとづくとされているので、結局、次の過程の「迷い」をひきおこすことになる。

ただし仏教の真理観でいうと、ものを主客に分けてみること自体が、「分別」といって悟りをさまたげるもの、正しい見方を損なうものと考える向きもあるので、識↑↓名色の相依関係自体に、苦(輪廻)の根元的因を見出したのだともいえる。この点については後世、大乗仏教で発達した唯識説がもっとも真剣にとりくんで、理論的な解明を与えている(七章参照)。

C (6)触 → (7)受 → (8)愛

ここで「受」は感受作用で、仏典は楽と苦と不苦不楽の三種にわけるのが通例である。対象と接触すると、その三種のいずれかの感覚が生ずるというのである。これは煩悩のところで考察した、好ましいものと好ましからざるものの関係と対応する。そして好ましいものと接触すれば楽受(よろこびや幸福感、快感)が生じ、その対象に対して愛着がおこるというのが、この三項が基本的に意味するところである。煩悩の例でいえば、好ましくないものと接触すれば苦受(いやな思い、不快感)が生じ、その対象を憎んだり嫌ったりすることになるが、そのような瞋恚(しんい)は、この場合、いわばマイナスの愛着、欲望として、(8)の渇愛のなかにふくめられていると考えてよいであろう。

なお、伝統的な解釈では三歳ごろに感覚が整い、思春期になると愛着が生じ、増大すると見る。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

D　(8)愛 → (9)取 → (10)有

愛（渇愛）に苦の原因を求めるのは一番古い型の縁起説で、しかも欲望にいっさいの悪の根元を見出すことは後の仏教とても一貫してかわらない。つまり、ここにも惑業苦の三項を認めることができよう。「有」というのは輪廻生存にほかならないからである。もしそう考えることができると、「取」は「業」にあたることになる。すなわち「取」も煩悩にはちがいないが、「愛」にもとづいて現にはたらいている執着をさすと見ることができるからである。その場合、「取」は欲取・見取・戒禁取・我語取という四取をさすと見るのが伝統的で、そのうち見取と戒禁取は、煩悩の「見」のところで説明したのと同様、仏教からみた悪見であり、我語取は我ということばに執われることであるから、これも我見、有身見と同じく仏教からみて最大の悪見である。これに対し、「欲取」はいわば上に述べた、現にはたらいている執着一般にあたる。つまり見が知的煩悩とすれば、欲取は心情的煩悩である。同時にそれは実際の身口意の三業を通じて現われる道理である。

このような「愛」と「取」によって結果するものが「有」、つまり輪廻の生存であるとすると、「有」はどうしても未来生をさす道理となる。この解釈が実はやがて、十二支の全体を過去から現在をへて、未来にわたる過程とみる考えを生み出したもののようである。

ところで、取→有という関係にはもう一つ大事なことがある。それは「有」（輪廻）の対立概念である「涅槃」について、経典は「取るものなくして涅槃す」という言い方をすることがあることで

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

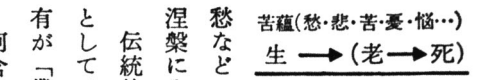
複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ある。この場合、「取」と訳された原語 upādāna には、取るという行為をあらわす場合（これが十二支の第九支「取」の直接の意味）と、取られるもの、素材、質料因をあらわす場合がある。たとえば「我」という観念にとって、その観念を成立させる素材は、われわれの存在を構成している五蘊であるので、五蘊は個人存在の要素としては「五取蘊」ともよばれる。その五蘊が死によってばらばらとなったとき、ブッダも完全な涅槃にはいられたとして、ブッダの死を「大般涅槃」とよぶわけだが、それを「素材（たる五蘊）なくして、涅槃に入る」というわけである（これは無余依涅槃と同義とされる）。ともかくこうして、取→有と無取→涅槃が、苦と苦滅に対応する基本型として取り出せる。その場合、取に対して薪の喩えが用いられているのは、薪を広く燃料、すなわち火の素材という意味で upādāna とよぶのと呼応する。いくら火種があっても、燃料がなければ燃えず、燃料がつきれば火が消えるように、渇愛の炎も、その愛着の対象となる材料が次々と現われることがなければ燃えることがない、つまり、火の消えた状態に比すべき涅槃に到着できる。この場合、愛着の材料とは五取蘊であるとされる。それが五蘊をさすかぎりでは、識の対象としての名色と同じものである。その意味で、愛→取→有は、識→名色……苦と対比されるし、愛と取との間は、識と名色の場合と同様、相依の関係にあるということになろう（それは愛＝取〔取るはたらき〕と取＝所取と考えればもっと明瞭になる）。

E (10)有 → (11)生 → (12)老死（愁悲苦憂悩）

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会



「有」は輪廻生存であるが、輪廻生存とは生→老死のくりかえしである。したがって、「有」は生老死（生死）の成立する土台と言ってもよい（上図参照）。さらに、生老死は避けがたき現象であるが、そのような無常なあり方においてわれわれは、愁・悲・苦・憂・悩といったさまざまの苦悩を生じているとすれば、これはさらに、老死によりて愁などありと言ってもよいはずである。何となれば、生老死はあっても無明がなくなれば、愁などの一大苦蘊は消滅する道理であるから。ただし伝統的理念では、生老死は輪廻にほかならず、涅槃に入ることは生老死のない世界に入ることとされている。輪廻と苦とは同義語なのであるから。

伝統的解釈はさらにここで不思議な解釈を下す。それは、この全体を未来の生存と見るのはよいとして、「有」を未来生を生む業有だと解釈することである。その場合は、愛と取は現在の「惑」、有が「業」で、生老死が未来の苦というかたちで、惑業苦が成立すると見るのである。

阿含の経典で十二縁起が語られるとき、決してそれが三世にわたる因果の連鎖を示すとは言われていないのであるが、惑・業・苦の三段階で輪廻の一巡を見る考え方が確定したアビダルマの仏教では、(1)(2)を過去の因、(3)—(10)を現在の果で未来に対する因、(11)(12)が未来の果として、三世にわたる二重の因果関係と考え、現在の諸項に対しても、胎生学的な発達段階を想定したのである。こうした一種実体的な考え方は、とくに有部の学説に特色的であったが、やがて大乗仏教において根底からその考え方をくつがえされるにいたる。ただし、ナーガールジュナ（龍樹）を代表とする空観

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

の徹底した否定的見解のあとにあらわれた唯識説では、基本的見方はナーガールジュナ同様の空観に立ちながらも、十二支縁起説にふたたびその処を得させたのみでなく、それを根拠に、アーラヤ識という根元的な識を想定し、そこに輪廻の生ずるいっさいの原因を構造的に背負わせた。この点についてはあとで述べることにしよう（七章）。

十二支縁起説は元来、輪廻の状況を説明するのが目的ではなかった。まして、三世両重の因果説が仏説の正しい解釈ということはない。なにより大事なことは、所与の現実たる人生の苦悩というものに対し、その根元をつきとめること、その根元を断つことによって、苦悩を滅することであった。つまりこれは四諦の教説の枠のなかでこそ、観ぜられるべきものである。このことは、さきに三章において、経典のことばとして十二支縁起を掲げておいたところにも明瞭に現われていた。すなわち縁起説を、無明からしだいに諸法が縁起して、生・老死の苦の成立におよぶ観察とならんで、無明を滅すれば行滅す、無明なければ行なし、というように、順次に消去していって最後に生・老死の苦の消滅にいたる観察が要求されていることである。この両方向は、それぞれ縁起の順観と逆観、あるいは流転の縁起と還滅の縁起とよばれている。われわれがこの両方向にわたって十二支縁起を観察するとき、われわれのあり方に関する因果の道理が明らかにされる。そして、苦悩の原因はこの因果の道理に対する無知に由来すると悟ったとき、そこにはもはや苦悩はない。したがって、輪廻もない、何となれば、そこでは無明（無知）は滅しているのであるから。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

輪廻はしばしば無始無終であるといわれる。無知がつづくかぎりは確かにそうである。しかし、ひとたび無知が知に、無明が明に転換すれば輪廻はとまり、涅槃が実現する。その意味で、輪廻は有終であり、また終わらせなければならない。その意味もあって、阿含や古い漢訳経典では「輪廻のはじめは知られない」とだけ言うのである。しかし、輪廻を終わらせるのは要請であり、目的である。どうしたら無知を知に転換させ、輪廻を還滅の方向に向けさせることができるのか。そのためには長い道の実践が要求される。これが道諦の内容である。これについては次章で論じよう。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

六章　悟りへの道

涅槃の境地と悟り

四諦の第三、「滅諦」とは苦の滅、苦を集めるものの滅ということで、それは「涅槃（ねはん）」nirvāṇa というのと同じであると前に説明した。その「涅槃」はまた「涅槃寂静」といわれ、「寂滅をもって楽と為す」といわれているように、静けさにともなう安楽の境地をさしている。それが仏教において究極的にめざすもの、理想境であるというのが、四諦の第三、苦滅諦の意味するところである。ブッダはまさにこの境地に到達した人にほかならない。

ところで、仏（ほとけ）という呼び名は直接にはこの境地を示す語ではない。理想境に達したという意味であれば、「如来」（如去）、「善逝」などの呼び名にふくめられていると言えるが、それにしても直接に涅槃の語とはかかわりをもたない。わずかに「ジナ」が苦悩に打ち克ったものという意味で苦滅、涅槃に近い内容を示している。それ以外の呼び名は、「仏」と同様に悟った者というような知的完成状態を示すか、あるいは世間の救い主とか教師といった指導者、救済者を示すかである。つまり、

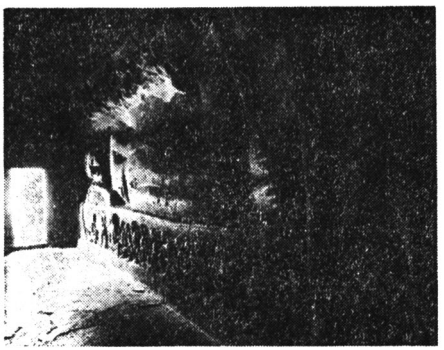
May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

智慧や慈悲の側面が強調されていて、涅槃の境地は背景に退いているように見受けられる。

このことは、仏教がまさに仏教とよばれるように、ブッダが真理を悟ったということをその原点としていることに由来している。この悟りの体験、すなわち「菩提（ぼだい）」bodhi は仏の仏たるゆえん、仏の本質（buddhatva 仏体）にほかならず、したがってその獲得こそが、仏道修行の最高目標である道理である。

ではこの菩提と、苦滅として示される涅槃とは、仏教においてどうかかわりあうのか。



入滅涅槃（アジャンター，第 26 窟）

仏伝に即していうと、「菩提」は成道であり、「涅槃」は入滅である。そのかぎりでは、生前にはブッダに「涅槃」はまだ訪れていなかったように見える。この点については、涅槃（ニルヴァーナ）ということばが、生命の火が消えるという意味で死を意味していたという事情があったものと思われる。しかしその一方で、理想境を示す語に「不死」amṛta があり、これと涅槃とが同義語として用いられている。そして、ブッダは成道に際して、苦悩を克服して心は汚れから解脱し、もはや輪廻の生存を二度と受けないと自覚したことを宣言している。あるいは自ら生老病死ある身でありながら、そのわざわいを知って、不老不病不死にし

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

て無上の安穏である涅槃を得たともいっている。これは現法涅槃、すなわちこの世における（生存中の）涅槃とよばれている。

この場合、ブッダにとって、最初から求めていたことは悟りではなくて不死の境地であり、涅槃であった。当時の苦行者、修行者たちは、輪廻からの解脱を求め、その方法を模索していた。ブッダはそれを、無常であり無我である人生の真実をありのままに見、知り、正しく悟って、人生に対して執着しないという心の状態をつくりあげることを通じて達成したのであった。このブッダの見出した方法にこそ、ブッダの特色があったので、他の宗教家から区別してとくにブッダの名でよばれるようになったものと思われる。そしてこのかぎりでは、菩提、悟りは、涅槃にとってはその手段であったと見なければなるまい。しかし、仏教の特色が悟りに見出されるにつれて、菩提、悟りが最終目的と考えられるようになったのであろう。とくに悟りの強調は大乗仏教における悟りの普遍化に負うているようである。

なお、悟ること、知ることの重視ということは、仏教の独占するところではない。すでにウパニシャッドでは、従来の、神々を祀ることによって神の恩恵をうけて不死の世界に赴くという見方にかえて、宇宙的な絶対者たるブラフマンと、われわれの個我（アートマン）とが本来一つである――梵我一如――と知ることによって、個我はブラフマンに帰一する（梵界に入る）、それが解脱であり、不死の世界の獲得であると教えている。その場合も、知ることは手段であるとはいいながら、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

それがただちに不死となることを意味するから、ほとんど目的というに近い。悟りを目的視するに応じて、仏教もしだいにこのウパニシャッド的な思考に近づき、それを自らのものにしていったように思われる（知り方において、有我と無我という反対の方向にあるが）。

ともあれ仏教の体系においては、「菩提」が「涅槃」とならんで、達成すべき同一の理想、目的を示す語となった。しかし一方では、悟りは智、あるいは慧、もしくは般若波羅蜜の名で、手段的な地位、つまり四諦でいえば道諦に属する性格をも保持している。別の言い方をすれば、知るということが、道諦と滅諦の因果関係をつなげているのである。これはまさに、無知が苦の因であることと対応する仏教教理の図式である。

菩提と涅槃の相違点を示す術語としては、ブッダの入滅を大般涅槃（偉大なる完全な涅槃）とよび、さらにそれを解釈して「無余依涅槃」すなわち肉体という依りどころ（所依）を残さない涅槃といって、それ以前（成道以後のブッダのあり方）を「有余依涅槃」と称したことがあげられる。また他方では、涅槃は仏弟子たちにも得られるとして、これを解脱の一味、等味というに対し、菩提は仏のみに限り、これを無上正等覚とよぶ場合もある。あるいは煩悩の滅尽、断除を涅槃、智の獲得を菩提とし、断と智の両面で仏徳を表わすこともある。

菩提・涅槃の異名　「菩提」は、覚、悟、道などとも訳されるが、そのほか証（通達）、現証（実現という意味）、現観、現等覚、正覚、無上正等覚（阿耨多羅三藐三菩提）などとよばれる。

「涅槃」は滅と同義語といったが、滅の意を示す語には nirodha（抑止）、nivṛtti（活動停止、止息。還

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

滅と訳す)、nirvṛti(煩悩の覆いのとれること)などがある。さらにその内容の説明として、漏尽、離欲、離繋(煩悩の束縛を離れる)、寂静、清涼、吉祥、安穏、不死、無畏、さらには常住、堅固、安楽などともいう。そのほか不死の処、寂静処、彼岸、無為、無漏界、離有(輪廻生存を離れる)、択滅(智による滅)なども挙げなければならない。そのほか、難見、無見、希有などという到達の難しさを示す語など、仏典中に探せばきりなく見出される。

次に「解脱」は mokṣa, mukti, vimokṣa, vimukti などと表現されている。

大乗の涅槃観

ブッダの死に最高の理想境(無余依涅槃)を見出した仏弟子たちには、肉体の死をもって涅槃に不可欠の条件とする考えが生じ、これを「灰身滅智」(身を灰にして、智〔=認識作用〕を滅する)と表現した。これに対し、大乗仏教は、涅槃の世界、彼岸を別の天地に求めず、この生死輪廻の世界そのままが、心の転換によって涅槃となると考えた(生死即涅槃、煩悩即菩提)。そこには、この世の衆生を救う仏の慈悲の強調が見られる。後で述べるが(八章)、大乗の理想像としての菩薩はこの仏の慈悲行の代行者として、衆生の有るかぎり、彼岸にわたることなく、この世に留って衆生の救済につとめるが、そのあり方をさして、大乗の仏典は「無住処涅槃」apratiṣṭhitanirvāṇa とよんでいる。その意味は、智慧によりて生死に住せず、慈悲によりて涅槃に住せずということである。

また、仏の本質の章(二章)などで考察した「真理と一体となる」という考え方は、悟りと、悟

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

られた真理（法）と、悟った者（仏）との一体同一視を生み、そこに究極的絶対価値を見出すことになった。こうして菩提・涅槃は、無為、真如、法界、第一義諦、縁起、空性など、および仏、如来、法身と同義語と見なされた。理論上それはいわゆる存在、実有ではないけれども、価値的には実在として、有的に積極的に表現されるようになる（たとえば大乗涅槃経の「如来常住無有変易」とか「常楽我浄の四波羅蜜」など）。さらには、悟りにいたる手段としての智慧が、悟りに不可欠の徳として仏や菩提と同一視され、また未悟の衆生における悟りの可能性に対してすら、そこに果たる悟りを予想（先取り）してこれを如来蔵、仏性とよび、これを真如や法身と同質視する学説もあらわれた（七章参照）。その場合、悟と未悟は、無垢真如と有垢真如、離垢清浄と本性清浄のように区別される。同じ意味で、如来蔵が「在纏位の法身」と規定される。こうした一元的な思考は総じて大乗仏教の特色といってもよいが、とくに華厳や禅を通じて、われわれにはなじみ深いものとなっている。しかし、それによって、悟るも悟らないも同じだということになり、悟りへの道を撥無することになると、これは仏教の正道を逸脱することとなる。インドの仏教はことにこの修行実践の順序次第を重視する点で、中国・日本の仏教と趣きを異にする。この点についてもまた次章でふれるところがあろう。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

悟りへの道

四諦の第四、道諦は具体的には八正道をその内容とし、その特色は苦楽の二辺を離れた中道だと言われていた（三章）。

ここでいう「道」mārga はとくに説明するまでもなく、目的にいたる路程であり、またそこを履み行くこと（prati-pad）である。四諦の説明においては、道は修すべきものとあったが、履み行くのはわれわれの場合、努力なしにはできない。修を意味するサンスクリットの bhāvanā は、「あらしめる」という意味である。それはひとをあるべき姿に向けて訓練することであり、それには何度もくりかえし行なって（串習）、身につけ、習慣づけてしまう必要がある。

道の出発点はどこにあるか。ブッダの場合、それは自らの決意によって出家したところからはじまった。仏弟子の場合も出家して修行をはじめること、また自らの決意によって出家することにも変わりはないが、その前にブッダに出会い、さらにその教えを聞くことがその手引きとなる（見仏聞法）。そして、ブッダの人格を信頼し、そのことばを真実と信ずるところに、出家修行の決意が生まれるといってよいであろう。後の確立した教団の規則では、入門の条件として、三宝への帰依と、規定された戒の条項の遵守を誓うことが決意の表明とされた。戒とは正しい生活態度を身につけることで、これがその後につづく実践修行の前提とされる。大乗仏教になると修行の目的を明確にして、発菩提心、略して発心ということをすべての前提にすえる。さらにその発心の動機を問う

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

て、衆生済度の誓願をいう。これらはすべてブッダの過去世における本願と長い修行を範とし、そのまねをするところに由来している。

道の修行は長い。ブッダと同じ悟りの果を目標とするならば、三阿僧祇劫にわたる修行が要求される。その長期にわたる不断の努力精進が仏道修行を特色づけている。その間に修行者はくりかえしくりかえし法を聴き、自ら反芻して法を観じ、体得すべく実践しなければならない。

仏教の実践修行の方法としては、禅定（ぜんじょう）が基本とされる。禅定はインドで広くヨーガ（yoga）といわれるのに相当するが、これもまたブッダ自らが成道に際してとった修行方法に由来している。苦楽の二辺を離れた中道といわれたのは、この禅定のことである。それは世間的欲楽に身を任せるのでもなく、身体を苦しめて心を鍛えるのでもなく、ひたすらに心を安定し、集中して、真理の観得に努めるのである。こうして最終的に真理を悟ったとき、そこに完全な心の平安があらわれ、苦の滅が現証される。

以上は、仏道修行の全道程をごくかいつまんで述べたものである。仏典には実にさまざまの実践徳目や修行階梯、その得果（とっか）の次第が微に入り細をうがって説かれている。しかしそのいずれもが、おおむねこの次第をもって述べられている。そのすべてにわたって述べる余裕はないので、以下、八正道をはじめとして重要なものについてだけ解説しておきたい。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

八正道

八正道（はっしょうどう）は「八聖道」とも書く。八項よりなる、聖人の履むべき道の意である。ここで聖人（ariya, ārya）とは、ブッダおよび仏弟子たち教団の修行者たちをさす敬称と見てよいであろう（次章参照）。その八項の名は前に経典の引用中に挙げてあったが、その内容を経の注釈類に従って列挙すると、次のとおりである。

(1) 正しい見方（正見（しょうけん））――四諦を観ずること。

(2) 正しい心のもち方（正思）――出離をねがい、瞋（いか）りや嫌悪をもたず、貪着をもたない。

(3) 正しい言葉（正語）――うそ（虚誑（こおう））、中傷（離間（りけん））、毀謗（きぼう）（傷害（そがい））、いやしいことば（雑穢（ぞうえ））を語らないこと。

(4) 正しい行為（正業（しょうごう））――殺生、盗み、婬欲の三種の行為をしないこと。

(5) 正しい生活（正命（しょうみょう））――種々の邪（よこしま）な生活法より離れること。〔教団の規律に従う生活〕

(6) 正しい努力（正精進）――生じた悪を断ち、未生の悪を生じないように勤め、未来の善を生ぜしめ、生じた善を増大させるように勤めること。〔四正勤〕

(7) 正しい憶念（正念）――この身は不浄であり、感覚（受）は苦であり、心は無常であり、諸法は無我であると観ずること（身受心法の四念処）、それによって、身は浄らかで、人生は楽しく、心は常にかわらず、我はあると思う四種のまちがった見方（四顚倒（してんどう））をなくす。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(8) 正しい禅定（正定）――四段階の瞑想。〔四禅〕（後述）

この配列は、まず(1)四諦の教えを理解して、(2)～(4)こころとことばと行ない（身口意の三業）を正しく保って、(5)規則正しい生活を送り、(6)悪を防ぎ、善を生ずべく努力をつづけながら、(7)われわれの真実のすがたを直視、憶念し、(8)心の安定にむけて努めるということである。このうち(2)～(5)は総じて正しい生活態度といってもよく、それは「戒」というかたちでさらに具体的に修行者に求められている。それに対し、(6)～(8)は総じて仏教の具体的実践方法（四正勤、四念処、四禅）であるが、さらに一言でまとめれば、「定」の一項に帰するといってよいであろう。種々の観法は禅定中に体得されるからである。同時に観法は正しい見方に従うものであるから、そこには一貫して智慧のはたらきが要求されている。禅定と智慧がならび行なわれ、釣合いのとれているのが仏教の理想とするところである（止観双運、定慧均等）。

なお後に確立した修行の階位でいうと、四諦の現観は聖者となる第一段階とされ、これが見道とよばれる。そして以後の諸段階が修道と名づけられるので、八正道をこれにあてはめると、正思ないし正定が修道で、その内容は戒と定と慧にまとめられる（この三項が三学とよばれる）。その意味で八聖道とは、凡夫ならざる、修行を積んだ聖者の道ということになる。見道と修道については八章参照。

三学――戒と定と慧

右のように八正道は戒を保つことと、禅定を実践して、智慧を得ることに要約されるが、これが

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

戒・定・慧の三学にほかならない。ここで「学」sikṣā は、その字義どおり学ぶことを意味するが、今日いうところの学問とはちがって修行というにひとしい。三学はしばしば修行道の全体の枠組としても用いられる（たとえば南方仏教の概説として、漢訳の『倶舎論』にあたる位置を占める『清浄道論』*Visuddhimagga* はその修行論を戒・定・慧の三学に分けて組織している）。そこで、ここでも修行論を三学に分けてもう少しくわしく考察しておこう。

(一)「戒」sīla

戒の原語は前にもふれたように、慣習となった行為、あるいは行為上の習慣を意味する。したがって価値的にはプラスもマイナスもあるわけで、悪い習慣は悪戒とよばれる。ここはもちろん悟りに向けての善い習慣で、行為上の諸規範をいう。しかもそれは他から強制されるのでなく、自発的に守って身につけなければならない。ひとは出家にあたって、あるいは三宝に帰依して信者となるにあたって、戒を守ること、すなわち悪いことをすまい、善いことをしようと決意する。その意味では、戒は誓いである。つまり心の問題である。しかし、誓いは実際には行為によって、すなわち身口意の三業を通じて示される。

仏教でもっとも基本的と考えられる戒としては不殺生、不偸盗（ちゅうとう）、不婬、不妄語、不飲酒の五戒があげられる。出家の修行者の場合、これらは「五学処」とよばれている。このうち不妄語は語業（口業）で、その他は身業であるが、その背後には意業がはたらいていると見なければならない。た

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

とえば不飲酒は、飲酒自体というよりも、それによって酔い、自制を失うことを慮っての禁止であるとされる。また不婬は、梵行（ブラフマチャリヤ）で独身を守ることであるが、それは結婚することが人間の欲望を増加し、心を涅槃とは反対の方向にむけるからである。この戒は在家の場合は不邪淫として、夫婦以外の交りの禁止という道徳的な問題にかわる（もちろん、無限の欲望の制御という意味はあるにしても）。不婬は道徳を越えている。一方、最初の二項は普遍的な人倫の道徳といってよいであろう。ただし、不殺生の場合、人間同士はもちろん、あらゆる動物に対しても危害を加えることを禁ずるが、これには輪廻の思想の影響もあろう。

以上の基本的五戒はその原型をジャイナ教に負うているといわれる。不殺生はさらにバラモンの思想にも影響を与え、ために在来の犠牲祭が香華供養に代わり、それが今日にいたるまでのヒンドゥー教の、ひいてはインド思想全体の特色となっているほどである。なお、ジャイナ教は第五番目に不飲酒ではなくて、無所有をあげている。ジャイナ教の修行者はそのため、財産はおろか衣服までも所有を禁じ、したがって裸体が理想とされる。仏教は衣服に関しては三衣の着用を命じ、必要最低限の生活資具の所有を認めている。その基本は少欲・知足にある。

戒を保つ目的は身心を清浄にして、それによって修行を容易ならしめるところにある。そのため修行者に対しては、比丘の二百五十戒、比丘尼の三百四十八戒といわれるように細部にわたる諸規定がある。しかし在家信者にとっては、三宝への帰依と五戒の遵守で十分で、ただそれについて確

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

固不抜の信念を要求される（これを「四不壊浄」とよぶ）。宗教的実践としては、戒の遵守のほか布施（仏の供養や僧団への財施、施食など）が説かれ、それによって死後、生天の果を生むとされた。

大乗仏教はその出発点が在家の運動にある。そのため、後説する六波羅蜜に見られるように、布施と持戒をはじめに置き、戒については十善業道を基本とする。十善業道とは、(1)不殺生、(2)不偸盗、(3)不邪婬、(4)不妄語、(5)不両舌、(6)不悪口、(7)不綺語、(8)不貪欲、(9)不瞋恚、(10)不邪見をいう。このうち(1)～(3)が身業で、(4)～(7)が語業、(8)～(10)は意業である。だいたいは八正道中の正業、正語、正思の内容に相当するといってよかろう。十善は人民に範たるべき帝王の徳とされる（十善の天子）が、実質的な内容は禁止さるべき不善業の否定（たとえば(8)～(10)は、貪・瞋・痴の三毒煩悩の否定）で、戒というにひとしい。大乗はこれを十戒とよんだが、たんに自己の止悪・行善にとどまらず、そこに利他の行を積極的に行なうことをふくめるべきだと考えている（『華厳経』十地品、戒波羅蜜）。これは後に、(1)摂律儀戒（止悪としての戒）、(2)摂善法戒（行善としての戒）、(3)摂衆生戒（衆生を利益する行の実践）の三聚浄戒の名でまとめられるようになった（『瑜伽論』菩薩地）。いわば戒のうちに行を摂するのである。

日本の大乗戒は、『梵網経』の三帰・三聚浄戒、十重禁戒・四十八軽戒を基本とする。十重禁戒はだいたい右の十戒と同じである。三帰とは三宝への帰依のこと。

(二)「定」samādhi

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

心を統一し、安定させることで、音写して「三昧」あるいは「三摩地」と言い、また「等持」とも訳す。同類のことばに「等至」samāpatti〔三摩鉢底〕、「等引」samāhita〔三摩呬他〕があり、その状態を説明して「心一境性」citta-ekāgratā（心を一点に置くこと）という。また、心のはたらきが静止するという意味で「止」śamatha〔舎摩他〕とよぶ。またその具体的方法としては「禅」とよばれる瞑想が主であるため、しばしば両者を合わせて「禅定」とよびならわしている。

「禅」は dhyāna の音写語で（パーリ語の jhāna に近い音の語尾が落ちた発音にもとづく）、訳して「静慮」という。心を静かにして慮るというのだが、思いをこらす内容は仏教の教えるさまざまの教理で、これを「観」vipaśyanā〔毘鉢舎那〕とよぶ。「観」は後述するように「慧」のはたらきだが、これは必ず「禅」において、あるいは「定」（止）にともなって体得されるので、「止観」〔舎摩他・毘鉢舎那〕と併挙される。また禅を定慧均等の修ということもある。

「禅」や「定」はともにヨーガの八支のなかに数えられている。ヨーガも、心を一つに結ぶ意味であり、仏教でも時にその名を用いている（たとえば大乗仏教の唯識説を説く学派はヨーガーチャーラとよばれるが、それはヨーガの修行をなす人〔瑜伽師〕の意である。瑜伽師はまた禅師ともいわれる。教団内の理論派あるいは法師に対して、禅定の実践者たちをいう）。要するに、禅も定もヨーガもそのさす範囲はほぼ同じと見てよい。ただ仏教では「定」を代表とし、禅、等至、等引、心一境性、止、等持を並べ、また「現法楽住」の語を加えて、定の七名とよんでいる。現法楽住と

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

は心が安定した結果としての安楽の境地をさす。

禅定は順をおってしだいに高度のものに進み、より高い心の安定度を得ていかなければならない。その階梯は「九次第定」にまとめられ、その得果が三界に配置された。その第一は四禅で、八正道のなかの正定の内容とされているが、ブッダが成道に際して修めた定といわれている。その上に「四無色定」があり、さらにその上に「滅尽定」が置かれる。滅尽定に入れば、心のはたらきは完全に停止する。しかし、禅定ということであれば、たとえ最高の滅尽定でも、悟り、涅槃とは異なる。禅定は日常生活において心をコントロールすることである。仏典では心の状態を定心と散心にわける。散心は通常の状態をいう。禅定に熟達すると、容易に散心から定心にかわり、また散心にもどる。ブッダはつねに禅定に入っては、その階梯を容易に上下する。そして出定したあとで弟子たちに説法する。修行者もまた同じような訓練をうけるのである。

さて、定中にあっての工夫は前述のように「観」とよばれるが、その内容はさまざまである。たとえば南方仏教では観法の対象を「業処」とよび、四十種を挙げる。『倶舎論』では、不浄観、慈悲観（＝四無量心）、因縁観（十二縁起観）、界差別観（肉体を構成する四大の差異を知る）、数息観（出入息観）を挙げて、「五停心観」とよんでいる。大乗仏教になるとさらに多くの独自の観法を生み、それぞれに三昧の名をつけている（たとえば首楞厳三昧）。念仏というのも、元来は観法の一つ（十随念の一つ、四十業処の一つ）で、とくにその方法として、大乗の仏典では阿弥陀仏の姿を眼前に

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

想いうかべる三昧（これを「般舟三昧」という。仏を現前に立たせる三昧という意味）が説かれている。禅と念仏というと、まったく対立する宗旨のように思われているが、もとを正せば、念仏もまた禅定の一環である。

九次第定　四禅、四無色定、滅尽定を九次第定という。四禅の内容は、経典によれば次のとおり。

(1) 初禅――諸欲を離れ、諸の不善法を離れるが、まだ「尋」（粗なる探求心）と「伺」（細なる探究心）が残っている。そして、欲や不善を離れたことから生じた喜と楽のある状態。

(2) 第二禅――尋と伺も停止し、内心が浄らかになり、心が統一する。尋と伺がなくなって、心が安定したことから生じる喜と楽とが残っている状態。

(3) 第三禅――喜を捨てさり、捨（平等心、特定のものに関心をもたないこと）によって住し、念（記憶）と正知とがあって、身に楽を受ける状態、これを「捨あり、念ありて楽住す」という。

(4) 第四禅――すでに楽と苦を断じつくし、喜と憂を滅しているので、不苦不楽であり、したがって捨によって念が清浄となった段階。この段階において、心の安定と智のはたらきが均等となって、悟りが得られるという。

四無色定とは、(1)空無辺処（虚空の無辺なることを観察する）、(2)識無辺処（心のはたらきが虚空に等しく無辺であると観察する）、(3)無所有処（何ものも対象を見ない）、(4)非想非々想処（そのように見る想念があるのでもなく、ないのでもないと観ずる）。

四禅は欲望などは離れているが、身体の安楽が残っているので、これを色界定という。その上の四無色定は心が肉体の束縛を離れて自在にはたらくので、無色すなわち肉体のない世界という。滅尽定になれば、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

その心のはたらきも完全になくなるというのである。ただし、大乗になると、その場合でも潜在意識ははたらいていると見る。潜在意識がはたらくかぎり、涅槃には入らない。一方、欲望を離れてなくても、精神の集中はありうるとして、それを「欲界定」とよんでいる。三界は輪廻の項で述べたように、そもそもこれら禅定の段階に応じて分けられた区別である。

(三)「慧」prajñā

「般若」で（般若はパーリ語 paññā に近い音を写したもの）、いわゆる智慧である。語義としては「智」jñāna と同じといってよいが、仏教の教義上は、時に区別して用いられることもある。日常的な意味で知とか知性をさすときにもこれらの語は用いられるし、ときには知覚というに等しい場合もある（＝「覚」buddhi）。しかし、ここでいう「慧」は悟りに導く知恵、あるいは苦の滅＝涅槃に導く手段としての知というべきものである。その出発点としてはまず仏の教えの聴聞があり、その法を受け入れて、自ら心の中に思いうかべて反芻して正しく知り、その教えに従って実践修行して、その知を深め、最後に悟りに達する。このように慧は、入門のはじめから悟りにいたるまでそれぞれの段階に応じてはたらくもの、そのすべてが慧学の内容となる。悟りにいたるまでの慧はその段階に応じて、聞慧、思慧、修慧の三種に分けられる。定の内容として示される観法は、いわばこの修慧にあたる。四諦の現観も十二縁起観も、さらには大乗仏教の空観も唯識観も、一方においては法であり教理であるから、まず聴いて覚えることからはじめるが、同時に禅定の修行によってその体

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

得にいたる意味で、修慧である。

一般に知というとき、知るというはたらき（認識）と知られた内容（知識）の両方を意味するが、仏教でも同じことがいえる。知るというはたらきは、感覚的に知る（知覚）ほか分析的認識（判断、分別）、あるいは直観的な知などさまざまある。「慧」が法を簡別するはたらき（択法）といわれるときは理論的・分析的な認識というに近く、これはいわば有分別の智である。四諦とか縁起とか、無常、無我といわれるような真理が、その場合の知られた内容としての知（所知）である。しかし、同じ真理が修行実践を通じて体得されると、「これは四諦である」「これは十二縁起である」という分別がなくなる。それは知ることと知られることとが区別されない状態とも言えるが、これを無分別智という。それは悟りの智にほかならない。それは日常の認識の次元を超えた世界であり、「真如」そのものである。

同時に仏といえども、衆生を相手とし、弟子を前にして法を説いているときには、通常どおりの分別の世界にいる。つまり、知るはたらき（主観、能知）と知られる対象（客観、所知）は分かれている。しかし、そこには通常の人間つまり凡夫のもっているような疑惑、迷い、あいまいさ、不正確さもなく、まして、その対象に対する執着はない。そこで、仏の智は、無分別智にもとづいて、悟りの後に得られる智という意味で「後得智」、後得の有分別智とよばれる。それは仏が衆生救済のために活動するに不可欠の智とされるので、後得の世間智とも言う。これはとくに大乗仏教が強

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

調するところである。

仏の得た有分別の智としては、古くから神通力があげられる。神通は天眼通、宿命通など一般に説かれる超自然的知力をさすが、それはすべて利他のために役立てられることを前提としている。その一つに漏尽通がある。漏尽通は漏尽智ともいわれる。漏尽は煩悩の尽きることで、解脱というのに同じであるから、漏尽通は解脱の自覚である。これはまた「解脱知見」といわれるものにひとしい。そこで、仏は戒・定・慧の三学によって解脱し、解脱知見を具足するといわれる。この五段階はまた仏道修行の全過程にも相当し、仏教の説くところはこの五段階のいずれかに入るという意味で、五種に分類される法の集まり（五分法身）とよばれる。同時に仏は、この五分よりなる法を身体（その実質）とする者という意味で「法身」でもある。

三十七覚支　阿含経典にはこのほか種々の修行項目や、観法が説かれているが、それらはすべて「覚支」（あるいは「菩提分」「菩提分法」）とよばれ、後には次の三七項目にまとめられた。「覚支」とは悟りをあらしめる諸部分、悟りの因という意味である。

(1) 四念処――身体は不浄と観ずる「身念処」、感覚は苦であると観ずる「受念処」、心は無常であると観ずる「心念処」、および諸法は無我と観ずる「法念処」。これによってそれぞれを浄・楽・常・我と見て執着をおこすまちがった考え（顚倒想）をなくす。八正道のうちの正念。

(2) 四正勤（四正断）――生じた悪を断ち、未生の悪を防ぎ、未生の善を生ぜしめ、生じた善を増大せしめるように勤めること。八正道の正精進にあたる。

(3) 四神足（四如意足）――禅定を得ようと欲すること、すすんで努力すること、心を正しく保つこと、正しい智によって思惟すること。この四つは禅定を体得するに必要な四つの足である。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(4)五根と(5)五力――修行をすすめ、悟りを得るに不可欠な五つの機根と、その発揮する力。信・精進(勤)・念・定・慧をいう。この五項はそのなかに修行のすべての階梯をふくんでいる。信については次に説明するが、具体的には三宝に帰依し、業とその果を信ずることをいう。

(6)七覚支――智慧のはたらきの七段階。①慧によって法を記憶する「念」。②憶持した法を理解する「択法」。③理解した法を体得すべく「精進」する。④精進によって心に「喜」が生まれる。⑤喜悦が生まれると身心が軽快となる、「軽安」。⑥軽快となると心が統一する、「定」。⑦楽苦・喜憂をこえた平等心、「捨」。

(7)八正道――前述のとおり。

信と行

仏教における信は第一に三宝に対する帰依であるが、さらに詮じつめると、仏のことば(仏語)を信頼することだといわれる。それが結局は仏を信ずることになるわけであるが、初期の段階ではとくに重要な徳目として強調されているようには見えない。ただ五根・五力の冒頭におかれていて、いわば修行の出発点とされている。この場合、信は修行そのものというよりも、修行の前提となる受け入れ態勢と考えてよい。すなわち、それはまず心を開いて法に聴き入り(忍許)、それによって心が澄みとおること(心澄浄)、そして悟りに向けて意欲を起こすこと(欲)の三段階をふくむと解せられている。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

信をこのように修行の前提と考えれば、実質的には「行」とは別となる。それは在家の信者の場合、行は要求されず、ただ、三宝への帰依と五戒の遵守だけが要求される（四不壊浄）ところにも見られる。

換言すれば、出家修行者には信と行が要求され、信を前提として行に進み、解脱、悟り、涅槃を得ることが目的とされるが、在家の信者は信のみで行はなく、したがって解脱、涅槃は望むべくもない。代わりに布施をほどこし、戒を保てば、死後に生天の果報は得られると教えられている（施、戒、生天の教え）。

ここに、信と行とは道を異にすることとなる。

他方、修行者にはその能力、性向によって道を異にすると見る考え方があって、そのなかに「随信行者」と「随法行者」を数えることがある。法を聞いて、ただその教えの通りに信ずるのが前者で、法を正しく簡別するのが後者であるから、これは信仰型と理論型、信と知の対比と言ってよい。そのほかに定と慧の対比もあり、あわせて解脱への道には信解脱、心解脱（定によるもの）、慧解脱の三種があることになる。この場合、心解脱を得る者は実践型、狭い意味の行型といえる。しかし、もっともすぐれた型としては定と慧をともに具えた解脱が「倶分解脱」の名でよばれるので、信それ自体にはそれほど大きな比重を置いていないように見うけられる。

これは、仏教が出家修行者を主眼とし、とくにその行がもっぱら彼らのためだけと考えられてい

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

たことによる。それに対し、大乗はひろく信を強調する（たとえば、『華厳経』は「信は道の元、功徳の母」と説き、また『大智度論』には「仏法の大海は信を能入となす」という）。それは大乗仏教が元来、在家の信者たちの運動として興り、在家の信者たちの要求を満たすべく説かれたことによると思われる。大乗とは大きな乗物であるが、仏の悟り体験をひろく万人に解放し、すべての衆生に（在家出家を問わず）仏と同じ、阿耨多羅三藐三菩提を得たいとの心を起こし（発菩提心、発心）、それに向けて行を積むことを教える。つまり、仏の前身と同じく「菩薩」となることを要求するわけである。しかもそれが仏たちの意向であり、その意向は仏の誓願にもとづくもので、慈悲心の発露であるとするのである。そのような仏の慈悲心に対する絶対的信頼感というべきものが、大乗における信の原型であり、それはヒンドゥー教の神に対するバクティ（信愛）とも似た絶対的な帰依であり、無条件の帰依というに近い。原始仏教やアビダルマの仏教では、信は仏の語を信ずること、仏の教えに対する信頼がその基本にあったとされるのに対し、大乗仏教は、仏の人格に対する絶対的信仰を基本とする。このような信がとくに顕著に見られるのは『阿弥陀経』をはじめとする一連の浄土教で、阿弥陀仏がそのような帰依の対象の代表として今日まで多くの人びとの信仰を得ているが、初期の大乗経典には多かれ少なかれ、このような仏に対する信頼が示されている。同時に、このように仏を絶対的な高みにおきながらも、なおその助け（加持）を借りてでも仏にならい、仏と同じ道をたどってその位に達したいという望みをもつのが大乗であって、そこにおいて

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

すべての従来の行がその目的に向けられる（回向、廻向）だけでなく、仏と同じように、衆生を救済することにその成果がふりむけられるべきだとした。すなわち、利他行の実践である。その点で在来の出家修行者中心の阿含、アビダルマの教えは、修行者が自ら解脱して阿羅漢となることだけを志向しているとして、小乗と貶称された。

利他行

しかし小乗といっても、阿含、アビダルマの教えに、まったく利他行が説かれていないわけではない。その代表的な教えとしては「四無量心」と「四摂法」がある。

四無量心は前にも挙げたように、慈・悲・喜・捨で、「慈」とは他人に楽を与えること、「悲」とは他人の苦を除くこと、「喜」とは他人の楽をよろこぶこと、「捨」は喜憂・苦楽を超越した平らかな心である。これらは禅定によって養わるべき利他の心であり、それによって衆生に無量の福をもたらすと同時に、自らも梵天の世界に生まれかわるとされる（この意味で、四梵住ともよばれる）。

四摂法というのは、衆生を済度摂受する四種の徳行という意味で、

(1)「布施」――ひとに慈しみの心をもって接し、財物や教えをよく施す。

(2)「愛語」――ひとに接するに、つねに温顔とやさしい言葉をもってする。

(3)「利行」――つねに他人のために利益となることを行なう。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(4)「同事」――自他の区別をなくし、他人と一心同体となって協力する。

の四項をさす。しかし、このような利他行がとくに積極的に説かれるようになるのは、大乗仏教においてである。

大乗の菩薩行――六波羅蜜

利他行を旨とする大乗が基本に据えたのが「六波羅蜜」の行である。

「波羅蜜」pāramitā とは元来、最高完全なる状態という意味で、それぞれの徳目の完成ということである。六波羅蜜の代表格は「般若波羅蜜」であるが、これは智慧の完成ということで、仏の悟り、あるいは阿耨多羅三藐三菩提を得るときにはたらく智慧を、他の慧から区別してよんだものである（『般若経』くわしくは『般若波羅蜜経』*Prajñāpāramitā-sūtra* とよばれる大乗経典は、このような仏の悟りをあらしめる完全な智慧について説く経典という意味で、それによって、大乗仏教の教える教理――一切皆空の教え――を体得しうるとする）。布施をはじめとするその他の波羅蜜も同様で、般若波羅蜜の体得者である仏の身につけている布施の行などが、それぞれに完全なものであるということで、仏の諸徳性に「波羅蜜」の語がつけられたのである。そして、仏がその前生において菩薩たりしときに、衆生済度のために積んだ万行が、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、般若（智慧）の六種につくされるということで六波羅蜜の名が挙げられているのが、その起こりである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ところで、「波羅蜜」は右のように仏の悟りを得る前提となる諸行であるところから、さらに「それによって、悟り、すなわち理想の状態が得られるような、完全な行」という意味が加わった。それを「波羅蜜」という言葉のうえでも示されるとして生まれた語義解釈が「到彼岸」とか「度」という訳語を生んだ。すなわち「パーラミター」を、他者とか彼方を意味する para の語の派生語とみて、彼方（彼岸）に（pāram）行った（ita）ことと解するのである。いわゆる通俗語源解釈に近いが、教理的には味わいが深い。この諸徳の力で、この世から逃れ、輪廻の海を渡って、彼岸の理想境に到達するというわけである。しかも、その渡すはたらきは自分のためではなく（つまり自ら度るのではなく）、他の衆生たちを度すためであり、菩薩というものは、そのためにちょうど川の船頭のような役目をする者であるとすら考えられるにいたった。

さて、六波羅蜜は最初に布施を置くが、ここには、在家信者の徳目としての布施と持戒による生天という型が反映している。また、持戒により精進して禅定と般若を得るのは出家修行道の型にほかならない。したがってこの配列にも、三学の場合同様、初歩的なものから究極のものへという順序が考えられているものと見なしてよい。

布施は利他行そのものと見てよいが、在家の場合の財施に対応し、出家者としては法施が強調され、在家の信者のリーダーとしての菩薩にそれが要求される。そのほかに、菩薩は衆生に対して無畏を施すべきであるともされる（『観音経』で観世音菩薩は「施無畏者」とよばれている）。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:36:41 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

戒もまた、元来、在家に対して要求された三帰依と十戒を基本としているが、同時に三聚浄戒の名で、利他行の誓いともいうべき「摂衆生戒」がそこにふくまれているとされる。

第三の忍辱は忍耐心で、苦難に耐えることである。その代表例として、仏伝中で忍辱仙人の名でよばれている本生話の主人公がある。これは無道な王の命ずるままに、手足を切らせ生命を奪わせてもなお、それに耐えたおかげで、後の悟りの縁をつくったとされるのであるが、教理上の解釈では、忍とは法を真実として認め、うけ入れることを言うとされ、とくに「無生法忍」（法の無生であることの悟り）を菩薩の要求される忍波羅蜜と見ている。

精進とは、善をすすめ、悪を止める点において、努め、励むことで、実践的には他の五波羅蜜すべてにかかわる積極的態度である。

禅定もまた大乗的色彩が強いが、その基本となるのは、空・無相・無願の三解脱門である。これは諸法を空であり、無相であり、願い求めるべきものではないと観ずる三昧で、それが解脱への入口であるとされるのである。

以上の五つを前導として、般若波羅蜜が修習される。この前五波羅蜜と般若波羅蜜とは、それぞれ福資糧、智資糧の名で、菩提をうるための二種資糧とよばれる（資糧は文字どおり菩提を養うかてである）。般若波羅蜜は前にも言ったように大乗の悟りで、それによって、真理（真如）と一体になるのであるから、その内容として大乗の説くすべての教理がふくまれる道理である。それをひ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

とくちでいえば、『般若心経』のいうように「五蘊は〔自性として〕皆空であると照見する」ことに帰着する。

以上の六波羅蜜は、それが菩薩によって、衆生がそれを得るように努められたという意味では利他行であるが、それ自体は、悟りを目標としている点では自利の完成に導くものである。仏としては、しかし悟って後の利他行があるべき道理である。衆生の一人一人も、菩薩の手助けによって彼岸に到達したとすれば、ただちに利他行となって現われるはずである。その点を強調すべきであるという見地から、『華厳経』においては、右の六波羅蜜のあとに、般若波羅蜜のはたらきの内容をひらいて次の四項を加えて、合わせて十波羅蜜（じっぱらみつ）と説くようになった。

(7)「方便」――他人を救済する手段ということで、慈悲にもとづく。

(8)「願」――衆生を済度しようとする誓願。

(9)「力」――衆生を救う実行力、仏の十力。

(10)「智」――以上の諸力の根底にある、世間、衆生のすべてのことを知る智。

ここで、第六の般若波羅蜜が根本無分別智であるに対し、最後の智はその後得の世間智をさすとされている。菩薩はこの十波羅蜜を、その行の進むに応じて、十種の階梯（十地）において順次に完成していくというのが『華厳経』（十地品）の教えるところである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

七章　心——実践の主体

無我説と実践の主体

以上の実践論は、仏教の要諦であり眼目であるが、これを総括しているのが「七仏通誡の偈」である。すなわち、

諸々の悪を作らざれ　（諸悪莫作）
諸々の善をすすんで行なえ　（衆善奉行）
おのれの心を浄めよ——　（自浄其意）
これが諸仏の教誡である　（是諸仏教）

ここで、前にも述べたように、戒を守って悪行をつつしみ、善業を積み、すすんで定慧の修行によって心を浄めよと教えられている。心を浄めることは最終的に苦を滅するにいたるので、心を浄めること自体が仏道修行の目的であると言ってもよいであろう。

ところで、自ら心を浄めるとか、自己の心を浄めるといわれているが、その自己というのはいっ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

たい何であろうか。また、浄められるべき心とは何であろうか。

「自ら」ということが、常識的に考えて、実践修行の主体としての自己、修行者各自を意味していることは、説明の要もあるまい。それは、ブッダが「自ら、他に依らずして悟った」（自覚、無師独悟）と言い、「法は自ら証すべき（自内証）のもの」という場合の自己自身である。同じくそれはブッダが、入滅に際して遺言されたという「自らをよりどころ（灯明あるいは洲・島）とせよ。〔ブッダの説いた〕法をよりどころとせよ」という場合の、たよりにすべき自己である。それらの用例は、仏教が実践において修行者個人の主体性を重んずる点を示すものとして重要である。

ところが仏教は一方で無我説を主張する。無我とは、われわれが常識的に自己と考えているもの（我）は何ら実体のあるものではないということであった。「我」がないのに、あるかのごとくに思い、執着するところに、苦の原因があるとも言われていた。この無我説と右の主体性の強調とは、理論的には明らかに矛盾である。

ところで、我がないのにあるかのごとく思い、執着するといったが、では、その思い、執着するものは何なのか、誰なのか。ほかでもない自らである。悟りに向けて実践する主体と同じ自己である。無我説の立場からいうと、私が思うという思いも、私が悟ったという思いも、どちらもまちがいであろう。悟りのあかつきには、そのような思い方は捨てなければならないし、捨てられるであろう。しかし、そこに、捨てた自己が残り、悟った仏がいる。あるいは、悟りとは自己が法と一体

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

になること、法そのものになりきることだと言っても、そこに、法と一体となった自己（それを仏、如来という）が残る。この問題は、言葉を通じてどんなに追求していっても、結局は解決がつかないであろう。

この無我説のもつ理論的弱点は、業とか輪廻を説く場合にもあらわれた。「我」がないというのに、いったい何が業を背負って次の生をうけるのか（自業自得というとおり、業は直接自ら報いをうけるものと教えている）。これは、仏教がその教理体系を理論の平面で矛盾なく説こうとしたとき生じた最大の難問であった。

こころ（心・意・識）

それに答えて、漠然と考えられたのが、自己と見なされる実体を「心」と見ることであった。たとえば、前にも述べたように、経文に、

心が汚れていると、衆生は汚れている
心が浄められれば、衆生は浄められる

ということばがある。さきほどの「自浄其意」は、この理論に通じるものがある。そこでも、「衆生」とは何だということが問われるであろうが、迷うも悟るも心次第ということで、仏教は心のあり方を問題としてきた。自己といい、衆生といっているものが実在しないとしても、迷ったり、悟

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ったりしている心はある。心こそは実践の主体にほかならず、心を浄めるとは、心が浄まること、そして心が浄まることが、ただちに自分が浄まることである。つまり、自らその意を浄めるというときの「意」は目的格ではなく、「自」と同格の実践主体である。心すなわち衆生である。仏教が心を重んじることは、人間の行為を身口意の三業に分けるうち、身口二業の根元に意業を置くところにも見られる（デカルトの言葉をもじって言うと、「我思う、故に思い〔＝心〕あり」というところか）。

しかし、「心」といえども、実は無我説と矛盾する。前にも述べたように、無我を説明するのに、色・受・想・行・識の五蘊のどれもが我ではないといわれていた。その五蘊がかりに諸縁によって集まって、ここなる「われ」とよばれる個人存在を形成している。そのうち、色は肉体およびその諸器官（根）をさし、他の四つが、心とよばれるもの（はたらき）であるということであった。つまりわれわれが「心」とよぶものは、受・想・行・識とよばれる諸作用（心理作用、心理現象）に分解されている。そのいずれもが、無常であり、その思うとおりに何事をも自由になしえない（つまり自在なる我ではない）ということであった。すなわち、諸種の心作用を除いては、「心」なる実体はやはりどこにもない道理である。

ところで、常識的にはたしかに、われわれは心があるといい、また仏教でも通常はそう説いている（たとえば、木石は「無情」であるが動物は「有情」である）。そしてまた、同じく心作用の仲

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

間でありながら五蘊の最後の「識」に特別重要な機能をもたせ、他の三つは、それに従属させるような考えも現われてきた。つまり、識＝心と見なすのである。また、いままでもほとんど同義語のように扱ってきた「意」ということばも、元来は身体にそなわる眼や耳、鼻などと同じ感官の一つ（ただし、物質ではない）であった。しかし、その機能を除いて心とよばれるものはないので、意＝心と見なされている。こうして、しだいに心＝意＝識ということが教理的に確認された。そして、経典のなかで心とよばれ、意とよばれ、あるいは識という名で言及されているものが、実践の主体、すなわち諸種の煩悩をともなって業をおこし、その結果（＝果報）を背負いこむとともに、ひとたび法を聴いて、その教えに従い、しだいに煩悩を捨て、善い心のはたらきや智のはたらきを蓄積していったあかつきに、業や輪廻から解放されて涅槃を得るところの当体であると考えられるようになった。一切法の分類のなかで述べたところの、五位による分類で「心王」とよばれているのが、そのような見方の現われである。つまり五蘊のうちで、受や想や行（諸行）は、識とよばれる心王に従う家来のごとく、心の所有する法（心の属性、心所法）で、つねに心にともなってはたらくものと規定されたのである。このアビダルマの規定においては、定（三昧）も慧（智）も、そのような心所法の一つにすぎない。心が安定し、慧のはたらきが強くなった極限において、心に悟りが生じ、解脱したことを知る。

このようにいうと、心はずっと持続して存在しているように聞こえるが、いくら心が実践主体と

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

いっても、一方で無我を基本説とするアビダルマの教理では、決してそのような持続的存在を認めることはできない。他の有為の諸法と同様に、心もまた、諸縁によって形成されたものであり、刹那ごとに生じては滅する存在である。ただ、われわれは一定の業の集積の結果として、この世に生をうける（托胎の瞬間に「識」として形成される）。そして、刹那生滅をくりかえしながらも、一定の期間（業の力がつきるまで、あるいは生まれた後の新しい業の力が一定の条件を満たすときまで）、同一の個体としてこの世に生存をつづけて、やがて死を迎える。この生まれてから死ぬまでの間、常識のうえで個人存在と見なされるものを、アビダルマの教理では「心相続（しんそうぞく）」citta-santāna とよんでいる。つまり、「我」とよんでいるものは刹那滅（せつなめつ）の心の一定の条件下における相続（意識の流れ）にほかならないというのである。この一定の条件というなかには、寿命（＝命根）とか熱（煖、あたたかさ、体温）などが重視されている。それらが四大よりなる身体をまとめ保ち、心のはたらく基盤とされている。この考えは、たとえば現代の生理学の知識で、身体の細胞が時々刻々、新陳代謝をくりかえしながら、なおそこに同一の個体の存続を認めているのと比べれば、理解できるであろう。

心相続という考え方は、原則的には大乗仏教にもそのまま受けつがれたが、大乗仏教ではこれをさらに発展させて、より精緻な理論を展開させることになる。瑜伽行派の唯識説がこれである。

刹那滅と心相続　「刹那滅」というのは、一瞬といえども存続しないということである。アビダルマの

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

哲学では「無常」をこの理論で説明したが、同時にその刹那滅なる諸法が、必ず次の刹那に何らかの影響を残すとみて、それが「業」であるとした。すなわちそれは潜在的な力であって、滅した後に残る点で残滓力（習気）であり、次のはたらきをおこす点で形成力（行）である。心の場合、前刹那の心が、次刹那の心をひきおこす縁となる（これを「等無間縁」とよぶ。直前の縁の意）とされる。この連続の関係で、前刹那の心を「意」と名づけ（十八界の分類では「意界」がそれに相当する）、現刹那の心を「識」とよんだ（識は十八界中の六識で、そのいずれか一つとして心は機能しているという）。この識は次刹那の識に対しては、意としてその生ずる依りどころとなる。こうして心の連続性が成り立つというのである。

唯心と唯識

前に十二支縁起について述べたとき、その第三支たる識が一つの重要な役目を果たしていることにふれておいた。その識というのは、まさにここに言う「心」そのものなのであるが、完成したアビダルマの教学では、現世に生をうける場合の托胎の最初の瞬間に形成される何ものかが、それであると考えている。そしてそのような個人存在の核ともなるべき識は、過去世における無明と行（潜勢力）を背負いこんでいる存在で、それが結局はまた、次の生をひきおこす原因となるところの執着、欲望をそのなかにひそめているものと規定されることになる。

このように識に、十二支縁起のうちでの要となる役割があることを、最初に表明したのは『華厳経』である。すなわち、菩薩の修行に応じて獲得される階梯（次章参照）の一々の特色を説く「十

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

地品」のうち、般若波羅蜜のはたらき（それはただちに悟りに導く）を説く第六地（現前地）の解説において、十二支縁起はすべて一心にもとづいて生起するのであり、したがって三界はただ心のみである（三界唯心）と高らかに宣言している。

『般若経』の作者はアビダルマの教学を目の前において、その教学の分析的性格ができるかぎりの精緻な理論体系を構築しているにもかかわらず、いや、まさにその性格のゆえに、ブッダの精神ともいうべき、言葉に表現できない何かあるものを見失っていると直観した。そして、思いきってその理論体系の仮構性を打ちこわすべく、「すべてのものは空である」と表現した。そのいうところの「すべて」のなかには、当然のことながら「心（こころ）」もふくめられている。それゆえ、「心もまた縁起したもの」（したがって刹那ごとに生滅をくりかえすもの。それゆえ、無我である）というアビダルマとも共通の基盤に立ちつつ、その他の諸法との間にとくにその機能の特殊性というものを認めなかった。言葉をかえれば、『般若経』は第一義、究極の立場に立ってすべてをながめるので、その間に差別を見ない。もちろん『般若心経』にあるように、「色即是空」といってすべての特殊性を否定しながらも、「空即是色」とすぐにつづけて、空性に裏づけられた個別性の世界（色・受・想・行・識）を別の立場（世俗の立場、ことばの世界、仮（け））から承認はしている。しかし、その諸法のうちでの心と、その他の存在、つまり主観と客観の機能的相違点については、何ら言及することがなかった。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

この心ともの（対象）、主観と客観との間の機能的対立性ということに目をつけて、新しい理論構築をはじめたのが、瑜伽行派の人たちであり、その唯識説であった。それは『般若経』の立場の解明を旨としたナーガールジュナ〔龍樹〕とその後継者たち、すなわち中観派の人びとの主張する「空」の説を受けつぎながら、それを一歩すすめ、発展させた説であった。その学説が所依の経典として求めたのが『華厳経』十地品であり、三界唯心の教えであった。唯識説は『華厳経』の唯心説の直接の後継者なのである。

ところで『華厳経』では、識でも心でも、そして意でも、同じ一つの「こころ」をさすというアビダルマの学説がそのまま承認されている。これに対し、唯識説では、同じ「こころ」でも機能的にいくつかに分けられるとし、その機能の異なる側面ごとに「心」「意」「識」と名づけるとした。われわれが「こころ」とよんでいるものには、まず現にはたらいている瞬間のものと、過去したもの、および未来のものがある。その過去とか未来というのは厳密に言うと、現在化するときが、未来にあるものと、すでに終わったもの（過去のある一点において現在化したもの）ということにほかならない。アビダルマの理論が明かしたように、われわれの存在は、過去から未来につらなる——あるいは、未来のものが現在化して次の瞬間に過去していくという動きをつづけている——意識の流れ（心相続）にほかならない。この意識の流れには、しかしもう一つ、潜在的な、表面に現われない流れがあり、それもまた表面に現われる意識の流れに影響を与えている。そうでなければ、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

業のはたらきを説明できない。この業をつくるはたらきを「心」の機能に求め、またそれを、潜在的な形成力（種子＝行＝業）をたくわえる場所（貯蔵庫）に見たてて、アーラヤ（阿黎耶、阿頼耶）識と名づけた（ālaya は蔵とか宅と訳される）。

現在機能した心は、何らかの印象を残す。それが次の刹那の心にはたらきかけるが、同時にその一部はそのまま心に貯えられて、一定の時間をへて発現することもある。この印象というなかには、心自体のほかに、その心のはたらいた対象、つまり客観の印象もある。その主客いずれの印象も、アーラヤ識としての心に印象し、それが次後の心の性格を決定し、はたらきを決定する。この印象としての側面から見たとき、このはたらきを「熏習」といい、印象を「習気」とよぶ（習気とは、衣服に香をたきしめると、いつまでも余熏が残るのに印象の残存をたとえたもの）。同じものが、次の心を決定するので、その側面からみると「種子」という（種子はいうまでもなく、結果を生む点で、地中におちて、あとから芽が出てくる草木の種にたとえられたものである）。このような機能によって、われわれの意識の流れが、過去の業を背負っていることが説明できるとするのである。したがって、アーラヤ識というのは、それぞれが過去の業を背負っている個人個人の意識の流れを形成しているのであって、そのあり方はひとりひとりにおいて異なっている。

このアーラヤ識の流れ（相続、刹那滅の継起）に対し、われわれはそれがわれわれの自我だと思っている。すなわち、アーラヤ識を「我」と誤認している。この誤認するはたらきもまた、主観

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

としての意識にほかならない。しかし、機能的には明らかにアーラヤ識とは別である。そこで、このはたらきを「意」manas とよんだ。これが自我意識である。自我意識はある意味では個人存在の基本だともいえる。しかし仏教の理論からいうと、無我なる意識の流れにおいて、我を認めるのであるから、その機能はあるべき方向（当為）に向かうものではない。なぜか。自我意識は、自己の所有（＝我所、わがもの）の意識のもととなるし、それはあらゆるものを自己中心に考え、そこに執着をおこすからである。仏教はこれを、我執、我所執という。それがまた業をひきおこし、結果としての苦を生み、輪廻をひきおこす。自我意識のあるかぎり、苦の滅は望めない。そういう意味でこの「意」は、「汚れたマナス」（染汚の意）とよばれる。

　このように、われわれの「こころ」は潜在意識としてのアーラヤ識（＝心）と、それを我と誤認する、したがって我執をひきおこす機能としてのマナス（意）とを背後にもったうえで、対象認識（識）の機能を営んでいる。この対象認識は、アビダルマの説と同様、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識のいずれかによって行なわれる。この機能がいわゆる主観の機能であるが、主観は客観に応じて六種に分かれるだけで、過去した場合は、いずれも意の名でよばれる。つまり六識の別は現在だけにかかわるのである。さらに、それは善悪などの性格づけをされるが、それはその心といっしょにはたらく「心所」の機能による。そして、背景に「アーラヤ識」と「汚れたマナス」をもっている点で、善も悪も、一様に「輪廻生存」をつづける力となっている。結局、アーラヤ識→マナス→

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

六識という立体構造をもつ心が、輪廻生存をおこす根元とされるのである。これが、「我（アートマン）」がなくても、何がどうして輪廻するのかという課題に対する最終的解答となった。

識すなわち認識主観は対象を取るのがその本性である。つまり識とは、何かを知ることである。そこで識のはたらきを能取、対象を所取とよぶ。この所取のなかには、われわれの身体、およびわれわれ自身の行動、反省されたかぎりでの意識活動、すべての他の個体、環境世界、ないしは経典のことばや意味にいたるまで、要するにわれわれの意識内容となるものすべてがふくめられる。われわれはそれらの所取は客観として実在すると考えている。しかしよく考えてみると、それらはあくまで、われわれの認識の対象、識によって知られた対象（意識内容）としてあるのであって、存在それ自体ではない。総じてわれわれの認識にのぼらないものは、ないに等しい。認識にのぼるとは、関心の範囲内といってもよい。したがって、われわれは各自勝手に世界を構築して、そのなかで生きているのである。その意味で、われわれが対象としている世界は、われわれの心が仮構したものであり、真実そのものではない。この点をとらえて、唯識説は、「表象としてのみある」という。この表象（つまり意識内容）というのが、ここでいう「識」vijñapti の意味である（これに対し、認識するはたらきは「識」vijñāna という）。「唯識」とは、唯（ただ）識のみであるということだが、その識は実は「識によって知られたもの」つまり知識内容としての表象の意味である。

われわれはそのような表象の世界に対し、実在感をもち、執着をおこしているのであって、それ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

はすべて「こころ」のなせるわざとしか言いようがない。唯識説ではまず、この意味でわれわれの認識構造そのものを誤った見方と考え、これを「虚妄分別」abhūta-parikalpa と名づけている（虚妄分別は三界〔つまり輪廻生存〕に属する心・心所と説明される）。そして虚妄分別によって見られ、知られた所取・能取の対立の世界を、仮に構想された（parikalpita）世界という意味で、「遍計所執性」とよぶ（所執というのは、その仮に構想された世界にわれわれが執着し、そこに苦を生んでいるという意味でつけ加えられたことば）。これに対して、表象としての所取・能取を現わしだす虚妄分別そのものは、過去の無明、業の力で形成されたもの、縁起したものという意味で「依他起性」paratantra-svabhāva とよんでいる（他に依るというのは、はじめに述べた現在の識が過去無限の刹那の印象をうけて、その果として生起している点をいう。アーラヤ識という不変の実体があるのではない、という意味）。依他起なるアーラヤ識の上に、主客対立の世界、われ・わがものの観念の世界（我と法）が展開していて、それがわれわれの現実、迷妄の世界、輪廻の生存となっているというのである。

　このような迷妄の世界は当然なくさなければ、悟りは得られず、涅槃には達しない。しかし、悟るのもまた「こころ」のはたらきである。虚妄分別としてはたらき、主客の世界を現出しているアーラヤ識をおいて、ほかに悟りの当体となる心があるわけはない。アーラヤ識がアーラヤ識のままであるかぎりは、悟りはないが、それが別の状態になったとき、悟りが現われ、涅槃が実現する。それはアーラヤ識が虚妄分別としてはたらかず、主客の対立を表わさないときである。識は能所の

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

対立を表わすのがその仕事であるから、それは識が識でなくなるときといわなければならない。その状態は、主客が無二であるとも、識が真如と一つになるとも言われるが、識の機能としてみれば（つまり主体としての心のあり方でいうと）、無分別智がはたらくといい、識が智に転換する（転識得智）ともいう。さきに述べた「別の状態になること」で、これを「転依（てんね）」（所依の転換）とよんでいる。そしてこの状態は、経典に説かれる法を知り、それにもとづいて修行をつんだあとで達成されるので、これを「完成された状態」parinispanna という意味で「円成実性（えんじょうじっしょう）」とよんでいる。その状態においてはじめて、「真実を見る」。その場合の見るこころはアーラヤ識とはよべない。仏とおなじ、悟りの智となっているわけである。

右に挙げた三つのあり方――遍計所執性、依他起性、円成実性（これを「三性」とよぶ）――は、こころのはたらき方に応じて相互に転換するものであって、決してそれぞれが別の世界ではない。これがはじめに引いた阿含の「心汚れれば衆生汚れ、心浄まれば衆生浄まる」という経文に対する解釈であり、悟りを、ものの見方の転換――心の転換――においてとらえるこの学説の基本線を示しているのである。

ところで、悟りの世界では無分別智が真如と一つとなってはたらき、対象を見ないといったが、では仏は何も見ないのかというと、ちゃんと衆生のことを知り、衆生に思いをかけ、その救済のために限りないはたらきを示してくれる。その場合にはやはり、そこに能所の区別はあり、主客によ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

る認識という構造は具わっている。このような仏の心のはたらきを、唯識説では「無分別智の後で得られる清浄な世間智」略して「後得智」とよんでいる。この仏の心は能所に分かれてはたらきつつ、しかも能所を見ない。つまり、アーラヤ識のように因果の関係をつくらず、迷妄の世界を構築しない、という。因果の関係をつくらないとは、有為のもの、無常で生滅変化するものでないということで、つまり無為法である。後得智とは無為法としての仏（＝法身）のおのずからなるはたらきにほかならない。

以上、唯識説は迷いの世界と悟りの世界を心の転換というかたちでとらえ、これを理論的に説明したが、そのような心の転換――転依――がどのようにして達成可能であるか、そのために瑜伽行すなわち禅定の修行が要求される。その瑜伽行の基本となるのが「唯識観」である。唯識観は、右のような理論をいわば法を聴いて頭で認得するだけでなく、体得するための修行法である。そこでは、禅定に入っているとき想いうかべるさまざまの影像が、外界に実在するものでないこと（ちょうど夢のなかの影像が外界に実在しないように）の体験から、日常生活においてわれわれの見たり聞いたりしている対象もそのままに（見られるままに）実在しているのではない――それはすべて心の構築したものである――ということを悟らせ、すすんで、対象がなく対象を見ないとき、その対象をながめていた心もまたないと知って、心も対象もともにない境位（境識俱泯）の世界に入る。これを「唯識に入る」と称している。この唯識観の達成には、ただそれだけでなく仏教のあらゆる

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

かたちの実践修道の訓練が要求され、それに応じて順次に階位が上がっていって最後に仏位に達するとされるが（次章参照）、その基本はあくまで唯識観の完成にあるといってよい。そこに、この派が「瑜伽行派」yogācāra とよばれ、「唯識論者」vijñānavādin といわれるゆえんがある。

唯識説の理論はインド大乗仏教の生んだ最高の理論体系と言えるが、そのいわんとするところは畢竟、真実のすがた（真如）というものは変わらないのに、それに対する見方において迷悟が生ずる、だから、悟ればまた対象は真実のままに眺められるということである。つまり『般若心経』の、色を空と見ない迷妄の世界に対し、色は空なりとみる悟りの世界を説くが、同時に、「色即是空」を「空即是色」といいかえるのと同じ消息なのである。禅宗になると、この消息を端的に「柳緑花紅」と表現してしまうのである。

自性清浄心と如来蔵

唯識説でいう心、すなわちアーラヤ識が、迷っている凡夫の心のあり方を基本として立てられたのに対し、どんなに迷っていても、その心はもともと清らかなもので、仏の心と同じだという見方がある。たとえば、「菩提心」といい「発心」（発菩提心）というように、悟りを求め、悟りに向かう心は汚れたものとは言えない道理で、悟りに向かう努力を可能とするような心のはたらきに着目するのが、この考え方である。これを「自性清浄心」という。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

仏弟子のひとりに、若いパンタカとよばれる者がいた。大きいパンタカとよばれている兄は仏弟子のなかでも指折りの智者だというのに、弟のほうは教えの言葉の一つも覚えられないぐずであった。そのため仲間からもいじめられどおしであったらしい。ブッダがそれを哀れんで、あれこれの教えを覚えることはない、ハンカチを手にして、それがごみやほこりで汚れていても、洗えばきれいになることを観察しなさいと命じた。パンタカはその言われるとおりに、手にしたハンカチに心を集中して禅定につとめ、やがて悟りをひらいたという。

このハンカチの喩えにあるように、心はもともと真白で、輝いているが、たまたま煩悩の汚れがついて汚れているにすぎないというのが、「自性清浄心」の意味するところである。自性清浄とは、心が本来、生まれつき（自性として）清浄だということなので、一見、性善説に似ている。

唯識説において心というときには、狭い意味ではアーラヤ識だけをさすが、広くは、単にその心のはたらき方の相違である意（マナス）とか、眼識などの六識のみならず、さらにその心にともなって現われる種々の心作用（心所法）にいたるまでをすべてひっくるめて心とよんでいる。それに対し、この考え方によると、心と、心にともなう作用（あるいは属性というのも同じ）としての煩悩などとを切り離し、煩悩などは心の上に外からやってくる客、つまり一時的滞在者のようなものだという（客塵煩悩）。外からやってくるからといって、どこかに煩悩が実在しているわけではなく、それはもともと存在しないのだが、心がものの道理をわきまえず真実を知らないとき、つまり無知（無

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

明）であるときに現われ出て心に付着し、心を汚す。それが凡夫における状態である。場合によっては、それは月の光をさえぎる雲にも喩えられる。雲が行き過ぎれば月はまたもとどおり皓皓と輝く。悟りというものは、ちょうどこの雲間を過ぎてふたたび光をとりもどした月のようなものである。さらに言えば、雲がおおい、光をさえぎっているように見えても、実は、月の光は前も後も少しも変わらずに光り輝いているように、迷悟にかかわらず、衆生の心もつねに輝いている。心それ自体は汚れることはない。

この教えは、『阿含経』のなかでは次のように説かれている。

比丘たちよ、この心は光り輝いている。しかもなお、客塵の諸煩悩によって汚されている。仏の教えを聞いたことのない（無聞の）凡夫たちはそのことをありのままに知らない。それゆえ、かれらには心の修行がないというのである。

比丘たちよ、この心は光り輝いている。そのうえ、それは客のごとき諸煩悩から離れている。そのことを教えを聞いた聖なる弟子たちはありのままに知っている。だから、私はかれらは心の修練を積んでいるというのである。

ここでも同じ変わらぬ清浄な心が、修行によって、そのことを知るか否かによって、あり方の異なっていることが教えられており、したがって修行、訓練による心の変化が要求されているが、ただ唯識説のように心自体の転換ではなく、心の状態の変化（心そのものは不変）としてとらえられ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ている。

さらにこの考え方は、金が鉱山において他の鉱物とまじっているが、採掘され、精錬されるとその輝きをあらわす、さりとて金自体に変化があったわけではない、という比喩によっても示されている。これは煩悩を、心をおおいかくす蓋と見るもので（五蓋）、心は、金と同様「生まれながらの色をもつ」不変のものと見なされている（サンスクリットで「金」を意味する語はいろいろあるが、その一つに jātarūpa〔生色〕がある。これはその訳）。

阿含の教えでは、このように心をもともと明るく輝いているものと見ることが多かったようでもあるが、この考えはアビダルマの仏教ではあまり関心がもたれず、大乗仏教になって急に脚光を浴びるようになる。その場合にもいろいろの解釈が出てくるのだが、『般若経』では、「自性が清浄」とは自性がないこと、つまり空という意味と解釈した。そうなると、唯識説のところで述べたように、迷うも悟るも心が要という教えと近くなる。もちろん、その教えと自性清浄心の考えとが矛盾するものではなく、両方の統一は可能であるが、『般若経』の場合は、それ以上に心の問題を掘り下げることをしなかった。これは唯識説のところで述べたとおりである。

ところで、唯識説が迷うも悟るも心が要という教えに立脚してその学説を展開したのと対照的に、自性清浄心の教えを出発点として新しい学説を展開させる系統が現われた。歴史的にはむしろ唯識説よりも古いと思われるのだが、それは、この自性清浄心のつねに変わらない点、仏の心と同じ点

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

に悟りの原動力を見出して、これを成仏の因という意味で「仏性」と名づけ、また衆生のすべてにそれが具わっている（一切衆生、悉有仏性）と主張した学説である。いまはこれを一般に如来蔵思想とよんでいるが、「如来蔵」tathāgatagarbha とは、衆生がその胎 garbha に如来を宿しているということで、胎中の如来はいわば「如来の胎児」である。同時に、その「如来の胎児」はそのまま成長すれば如来となる道理で、そこに衆生と如来の同質性、一貫して変わらない本性が意味されている。他方、いくら同質でも胎児が胎児のままに留まったのでは、永遠に仏・如来とはならない道理で、そこに成長・発達という変化の契機、つまり修行の大事さもふくめられている。さらに、胎内にあるということは、蔵されていて見えない点（無知）と、金鉱中で金が他の鉱物などの滓に混じているように、煩悩の覆蓋に纏われているという凡夫の状態をも示している。もう一つ、如来の胎児というときには、如来が親で衆生はその子供たちであるとも、如来という胎の内に衆生がみな入ってしまっているという解釈もできる。これらのすべての意味が「如来蔵」ということばのなかにふくまれ、また如来蔵思想の内容を構成しているのである（「仏性」ということばでは、せいぜい仏と同じ性質とか、仏となる基盤、因という意味しか表わせないので、われわれは含意の多い「如来蔵」でこの思想を表現している）。

ここでは、自性清浄心はもはや単に心というだけでなく、仏や衆生を通じてのすべての基礎となっているような何かに昇華してしまっている。それは不変のものという点で、アーラヤ識が刹那生

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

滅の存在、縁起したもの、有為法であるのと異なり、無為法そのものであるとされる。無為法はまた真如とよばれ、法界（法の根元＝悟り、法の基盤＝法性）にほかならない。そして、仏、如来はその無為法＝法界そのものになりきった存在であるので法身とよばれているが、そこから逆にいうと、如来蔵は煩悩に纏わられた法身（在纏位の法身）ということになる。また、法界には法の領域という意味で全宇宙的な普遍性が付与されているが、それと一体となった仏の法身もまた、虚空のようにすべての存在にゆきわたっているとされる。具体的にはそれは一切智者としての如来の智慧のはたらきが衆生のすべてに及ぶことをさすが、それを理論化して、如来（の本性）が衆生のすべてに宿っていることの根拠とされる（しかしその理論に、ウパニシャッドやヴェーダーンタ哲学の教える「梵我一如」の説とまったく同じ構造の考え方があらわれているのは、注意すべきである）。一方、同質ながら衆生は汚れをもっており、仏は汚れがないという状態の変化に着目して、衆生、如来蔵を「有垢真如」、そして仏、菩提を「無垢真如」とよぶこともある。

アジャンターの壁画から，菩薩像

こうして自性清浄心が、全面的に無為法、真如、法界、法身という絶対的価値そのものと同一視されるよ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

うになると、煩悩の存在はますます影がうすくなって極小化される。そのあげくには、煩悩はもともと無いものだから、衆生は本来覚っている（本覚）という言い方まで出てくる。これは場合によっては修行による浄化という過程をも極小化させることにもなりかねない。また逆に、それにもかかわらず、現実にはどうしてこうも煩悩が多く、なかなか除くことができないかということを説明不可能にもさせる。実はアーラヤ識の説が生まれるについては、このような難問に対する解答という意味もあったようである。

こうして、自性清浄心＝如来蔵と、アーラヤ識とは、同じ一つの心の表と裏、楯の両面のように相反し、対立しつつも、決して切り離せないものであるので、ここにこの両者を同一視する考えが出てきてもおかしくない。そのような見方は『楞伽経』を通じて『大乗起信論』にいたって完結している。『起信論』ではその基本を如来蔵のほうにおいているが、如来蔵の側面を「心真如」、アーラヤ識の方面を「心生滅」とよんでいる。その場合でも、如来蔵の上にどうして本来ありもしない煩悩が現われるかというメカニズムは必ずしも巧みに説明されているようには見えない。一方、唯識説では、如来蔵の学説は真如・法界の説明といっしょに導入され、円成実性と同一視されている。しかし、その重点は、迷悟転換の基盤としての中性的な場といった意味がつよくなり、悟りの原動力という意味あいはうすれている。そして悟りを、迷いの根元であるアーラヤ識の転換、自己否定に求めた点で、宗教的実践のうえで如来蔵思想以上の深みを示すけれども、どうしてそのような転

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

換がおこるかについてのメカニズムについては必ずしも十分に成功しているとは見えない（術語でいうと、アーラヤ識に、それと本質上あい容れない無漏の種子（しゅうじ）が、法を聞いた余熏（よくん）として生じて〔聞熏習の種子〕付着し、しだいに本体を抑え、消滅させるにいたるという）。結局、両思想は相補的に仏教の求めるもの、悟りにいたる実践の主体のあるべき姿を明かすものと言うべきであろう。

悟りと救い

如来蔵思想については、もう一つ注意すべき点がある。それは衆生がすべて如来蔵であること、あるいは「一切衆生、悉有仏性」ということは、われわれ凡夫はおろか小乗の修行を完成した者たちにすら理解を絶したこと、わずかに大乗の菩薩たちによってようやくその一端が知られるにすぎず、すべてはただ仏・如来だけが知るところであるということが、いたるところで強調されていることである。如来蔵思想は経の説き方からいうと、比喩も多分にまじえて、唯識説などよりはるかに理解しやすい。しかし同時にわれわれが勝手に解釈すると、容易に誤解に導く危険がある。たとえば、仏性が有るというと、如来蔵とか仏性を何か実体的なものと考えるようなものである（同じ危険はアーラヤ識にもあり、経典はそれを「我」と誤解するものが多いから、小乗の修行者たちにも説かなかったと述べている）。

では、どうするのがよいか。それに対して、凡夫や二乗は「ただ如来の教えを信ぜよ」と説いて

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

いる。衆生が仏と同じだというのは、仏が言うことであって、それは仏の慈悲のなせるわざだというのである（『華厳経』に有名な「微塵含千の喩」があり、そこで如来は衆生のうちに如来の智慧がくまなく入りこんでいるのを見て、「奇なる哉、奇なる哉、徳相を具備して、我が身と異ならず」と言っている）。

この信ということは前にも述べたように、いわば仏教への入門で、それだけでは悟れるものではなく、むしろ信の力で修行が進んでいくというのが仏教の正道であるが、その背後にある如来の力、如来の慈悲を強調するとき、しだいに如来への絶対の信を説く教えとなる。この如来の絶対性とそれに対する帰依の必要性を声高く主張することもまた、如来蔵思想の大きな特色となっている。その点で如来蔵思想は、『阿弥陀経』などの浄土信仰ともつらなり、『法華経』の一乗思想（八章参照）をも受けつぐ、いわば大乗仏教の正系といえる。それはまた、中国に入ってもその仏教の基本となり、日本仏教においてはさらにその影響力をつよめている。

これに対し、インドの仏教ということになると、信に絶対性をおく仏教は必ずしもその主流であったとは見受けられない。それはブッダの説いた最初の仏教において、悟りあるいは苦の滅にいたる実践修行が第一に要求され、そこに出家修行者の目標がおかれたことによる。インド仏教の主流は絶えず出家修行者であり、かれらによる行の仏教であった。大乗はその出発点において修行者のためのものというより、在家者のための門であったから、行よりは信、悟りよりは仏の慈悲による

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

救いがその主眼であった。万人の救いは仏の慈悲（その具体的あらわれとしての本願）と、その代行者としての菩薩の利他行を除いてはありえない。その点で、大乗は信の仏教を基本としているのだが、やがてその指導者たるべき菩薩のあるべき姿として、実践修行の重要性が認識され、しだいにふたたび出家修行者、エリートの宗教としての性格を強めていった。その典型的な現われが、アビダルマの教理を復活、導入、再解釈した瑜伽行派の唯識説である。この学派はその名のとおり、瑜伽行の仏教である。中観派といえども、その独自の修行の体系というものはもたないけれども、その中道＝空観の体得のために厳しい修行を要求している。しかし、こうした大乗仏教の専門化はどうしても大乗仏教が本来めざしていた在家性、仏讃仰の信の宗教を別のかたちで補う必要性と、その要求を生んだものと思われる。そうして現われたのがいわゆる密教である。密教はすべての現象を如来の三密（身口意の三業）に帰する徹底した仏の立場からの宗教で、その根底には如来蔵思想につらなるものが見られる。もっともそれを救いの宗教とか信の宗教と一方的に決めるわけにはいかないのではあるが。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

八章　修行者の理想像

ひと（人施設）

南方仏教の聖典の一つに『人施設論』*Puggalapaññatti* という論典がある。これは、仏典のなかで「ひと」について言及しているところをまとめ、整理して、一人ないし一〇人の項に分類したものである。その「人施設」という意味は、仏教教理が「無我説」を標榜しているのに、常識的もの言いとしては人の存在を予想している。たとえば、仏に言及して、

一人この世に出現す。大智・大光の出現なり。

などという。あるいは修行者たる弟子たちもそれぞれに人格として（これは当然だが）扱われている。そこで、そういうふうにほんとうは無我で、五蘊仮和合の存在であるのに、かりに人と名づけ、便宜上、独立自存の存在であるかのごとく扱うという意味で、「施設」とよんでいる。施設の原語は paññatti, prajñapti で、「仮」とも訳される語である。そこで、仏典中で言及される「人」に関する用例の集成を「人施設」とよんでいるのである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

そのような「人」についての分類としてどのようなものがあるか。たとえば、男と女というのもそうであるし（修行者ならば比丘と比丘尼、信者ならば優婆塞と優婆夷など）、インド人と外国人などというのもそれであるが、仏典がいちばん重要視するのは、修行の進みぐあい（悟ったか否か、など）による分類である。その類で基本的に考えられるのが、凡夫か聖人かという種類分けである。

凡と聖

凡夫は日常の日本語化しているが、文字どおりには「並みの人間」の意味である。しかしそこに「煩悩具足の」という形容詞が加わるように、仏教的にはあまり評価されない。インドの原語でいうと、幼童、愚者の意味をもつ bāla、もしくは「異生」と訳され、さまざまの生まれのものという意味をもつ puthujana, prthagjana にあたる。たいていの場合、「凡夫異生」と併称される。

仏弟子たちも入門のはじめは凡夫であるが、やがて修行を積んで悟りをひらくと、「聖」ārya, arya とよばれるようになる。この「アーリヤ」という語はいうまでもなく、インド・アーリヤ人が誇りをもって自称した民族名であり、ドラヴィダ人その他の「種々の生まれの者」たちと対比して用いられた。同じ語が「種々の生まれをもつ」凡夫たちとの対比で、修行の積んだ仏弟子たちに対する呼び名となった。おそらくブッダの当時、アーリヤの語は民族名・人種名というよりは、文化的概念として、アーリヤ的文化伝統を身につけた者たちをさすのが実状だったであろう。正統派の

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

場合、バラモン階級こそはアーリヤ中のアーリヤとして、その地位を誇ったに相違ない。その同じ名称を、仏教では修行を積んだ弟子たちに用いたわけである。

(一) 四向四果

このアーリヤとよばれる仏弟子たちとは、煩悩を完全に尽し（漏尽）、ひとの供養をうけるに値する（応供）者として世の尊敬をうけたアルハット（阿羅漢）を最高位として、以下、四向四果とよばれる八種の階位に属する者をいう。このような階位はもちろん、ブッダよりはかなり後代になって確立したものにちがいないが、いまその名称を挙げてみると次のとおりである。

「預流」（須陀洹）は「流れに達した」の意で、はじめて仏の教えという川の流れにのった者、つまり修行者として、仏の教えを理解し、守ってさらに実践をつづけることの確定した人たちである。この人たちは、清浄な法眼を得るといわれる。

次は「一来」、その上が「不還」であるが、それぞれ悟りを得、涅槃に入る前に、もう一度この世に生まれかわる者と、二度とふたたびこの世に生まれることがない者という意味である。その上に前述の「阿羅漢」がくる。この四つを四果とよぶが、それぞれに「向」とよばれる前段階があると見て（たとえば預流向と預流果）、あわせて四向四果の八輩（四双八輩）という。かれらだけが「アーリヤ」なのである。このうち最初の「清浄法眼を得る」預流果は、真理を見る段階ということで「見道」といわれ、それは預流向にあたる十五心刹那と、預流果としての第十六刹那をさすという

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

から、ほとんど直観というにちかい短い時間において達成されるのである。これに対し、以後の諸階は「修道」の名でよばれ、長期にわたる実践のくりかえしによる鍛練を必要とする。そして修学をつづけたあと、最後に「阿羅漢位」に達したとき、修行者は、

わが生は尽きた。梵行は確立した。なすべきことはなし終えた。もはや輪廻の生をうけることはない。（我生已尽、梵行已立、所作已弁、不受後有。）

と自覚する。これが「阿羅漢」で、もはや学ぶべきものが何もない者という意味で「無学」とよばれる（学問のない人ではない）。これに対し、それ以前の七位は「有学の聖人」（まだ学ぶことのあるアーリヤたち）とよばれている。ブッダの在世中、四九九人の仏弟子が阿羅漢となった。侍者のアーナンダ（阿難）は多聞第一ではあったが、なお若くて煩悩多く阿羅漢位に達していなかったが、ブッダの入滅後まもなく悟り、ここに五〇〇人の阿羅漢が出現したといわれている。いわゆる五百羅漢の由来である（禅宗の寺などでは「十六羅漢」の像をまつるが、その名称や祀りの起原は中央アジアと考えられている）。

(二) 聖人位への転入

さて、見道を得るには十六心刹那の直観によると言ったが、これはそれ以前のながい修行――法を聴き、その教えを実践し、禅定によって体得することのくりかえし――の結果である。いわば、長い修行の効果が、あるとき突然ひらめきのように悟りをもたらすのである。その悟りというのが

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

「四諦の現観」だとされている。

この聖人位に達する以前の長い修行時代のあとの、突然の回心のような体験、これが「清浄な法眼を得た」という喜びであろう。そして、このときに修行者は凡夫から聖人に代わるのであるが、その転換点を「凡夫の種姓をのりこえて、聖人の種姓に入る」とも表現している。その原意は「預流」というのとほとんど同じであろう。あるいはまた、「正しい位に確定した」（正性離生）とも、「正定聚」の仲間入りをしたともいう。

この凡夫から聖人への転換は、後の確立した階位では、凡夫でも聖人でもないその境い目として「種姓人」の名でよばれ、預流向の直前の位と見なされた（種姓人とは、カーシュヤパなどバラモン階級のなかでの姓をさす gotra からの転用）。これを凡夫のほうから見ると、「世第一法」（世間で最高の位）ということになる。有部はこの名を用いる。

(三) 四善根

この「世第一法」を最高とする四つの階位があって「四善根」とよばれる。『倶舎論』を見ると、そのような聖人以前の修行にもまた多くの階位をもうけ、細かい規定を加えている。そこでは、出家して少欲知足に安んじ、三衣一鉢の生活を守ること（戒）からはじめて、不浄観などの禅定を実践しつつ（定）、四諦を観察すること（慧）が要請されている。凡夫位のうち一定の段階に達したものはまた「賢位」とよばれ、聖人とあわせて「賢聖（げんじょう）」という。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

こうした階位はたしかに修行の進みぐあいに応じて命名されたものにちがいないが、あまり細分し、くわしく述べてもむしろ形式的な分類にすぎぬようにも見える。ここでも、これ以上の詳説はさしひかえる。なお、修行者の性向に応じた人の分類として、「信と行」の項（六章）で述べたように随法行者と随信行者の別などがある。

菩薩の階位

以上はアビダルマの教学の確立のなかで組織化された階位であるが、もとを正せば、ブッダ以来出家の修行者たちについて考えられたものである。そして、その最高位は阿羅漢であり、仏弟子たちは阿羅漢にはなっても、仏にはならないと考えられた。

このような考え方に対し、大乗は、万人に仏と同じ阿耨多羅三藐三菩提を得ることを究極の目的とさせ、発心したかぎりでのすべての修行者に、悟る以前の仏と同じ「菩薩」という呼び名をもってした。

では菩薩たちは、どんな修行をして、いかなる階位に上がるのか。北インドに伝わった説出世部とよばれる部派の仏伝『マハーヴァストゥ』には、菩薩の経る階位として、灌頂位（かんじょうい）を最後とする十種の段階（十地）を挙げている。これはブッダとなる以前の菩薩、つまり釈迦菩薩の前身の修行経過を示すものである。灌頂というのは、即位灌頂といわれるように、王位に登るに際して頭から水

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

を注ぐ儀式をいうが、これが法の支配者（法王）としてブッダの成道をたとえて用いられたものである。

他方、大乗仏教自体では『般若経』の例をとると、「初発心」にはじまり、行に入り（名称不定。後の「治地」あるいは「新学」）、やがて「不退転」の位に入り、最後に法の王子、皇太子として、兜率天にあって次生での成道にそなえている「一生補処」（あと一度生まれかわるまで、輪廻の生存に繋縛されている者）にいたる四種の階位を設けている。他方、『華厳経』では、さきに述べた仏伝の十地説を承けつつ『般若経』の主張も加味してつくられた十地説（後の「十住」）が説かれた。そこでは、「初発心」「治地」をへて、第七地が「不退転地」（阿惟越致）とよばれており、そのあと、「童真」「法王子」をへて「灌頂地」になるとされている（童真は「少年となった」の意）。

「不退転」というのは、修行を積み、確実に身につけて、もはや後もどりしない地位にいたったという意味である。この十地説はそのあと、さらに別種の新しい十地説にその地位をゆずることになる。それが『十地経』（『華厳経』十地品）のいわゆる十地説である。

この新しい十地説は「歓喜地」にはじまり、「法雲地」に終わるもので、そのそれぞれにおいて、六波羅蜜の実践（第一～第六地）、つづく四種の波羅蜜を加えて一〇種の実践が要求されている。初地歓喜地では、菩薩の出発点として「菩提心を発す」が、あわせて菩薩は衆生済度の「誓願」を立てる。またそれによって「如来の家に生まれる」ともいわれる。その解釈としては一般にこれが

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

「聖人への入位」「正性決定」を意味するとされる。たとえば、第六位たる「現前地」では般若波羅蜜の修習が説かれるが、その般若波羅蜜によって観得せられるのが、「三界唯心」という真実の理であった。また第七遠行地は、菩薩がその結果として、仏弟子たちよりもはるかに遠い彼方まで達することをいうもので、第七地における修行の飛躍的発展をものがたっている。また第八不動地以上にすすむと、菩薩は仏に代わって衆生済度のために法を説き、衆生の手引きをする能力を身につけるとされている。八地以上の菩薩はしばしば大力の菩薩とよばれる。

この華厳の十地説は、前述の古い十地説（＝十住）のほか、十行・十廻向といった階位説とも合わせて、『華厳経』中で四十二位として並べられ、さらに『梵網経』では最初に十信をおいて五十二位を数えるにいたった。これに仏位を加えると五十三位になる（すなわち十信・十住・十行・十廻向・十地・等覚・妙覚・仏）。その場合、歓喜地以上の十地が聖人位で、それ以前は凡夫位とされる。

菩薩には以上のように多くの階位が設けられていて、初発心から阿耨多羅三藐三菩提を得て、仏となるまでの道ははるかに遠い。元来、アビダルマの教義において、釈迦菩薩が成道するまでに三阿僧祇劫にわたり生をくりかえすとされていた。大乗においても、この説は継承されている。

しかし、一方においては、『華厳経』に「初発心時、便成正覚」というように発心を重視して、それがただちに「如来の家」に生まれて、悟りをひらくことにつながるという点が強調されている。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

さらにまた他方では、菩薩はその衆生済度の誓願のあついゆえに、自ら仏となるより先に、すべての衆生を彼岸にわたそうと努める存在であるともいわれている。実は大乗の経典のもっとも強調していることは、この第三の点である。そして、この理想を示すために菩薩は渡し場の船頭にたとえられ、また理論上は「智慧によって、生死に住せず、慈悲によって、涅槃に住せず」といわれ、生死にも涅槃にもとどまらないゆえに、菩薩のあり方を「無住処涅槃」と称している。ここに、利他に生きる菩薩の理想がある。

ところで菩薩というと、われわれは、文殊、普賢、観音、勢至、弥勒ないしは地蔵といった大菩薩たちを想起する。いま、その一々について由緒来歴、性格などを記すいとまはないが、弥勒（マイトレーヤ）は一生補処の菩薩で、現在、兜率天に待機中で、五十六億七千万年の後にこの娑婆世界に下生するという。釈迦如来の入滅後、その法はなおしばらく存続するが、やがて無仏の世となるので、そのあとに来る弥勒の世に幸福を期待し、今から弥勒にお願いしてその下生の折にともにこの世に生まれることを祈るのが、弥勒信仰で、一種のメシア信仰といわれる。

文殊（マンジュシュリー。文殊師利）は智慧第一といわれ、『般若経』において重要な役を果たすので、「文殊の徒、般若を作る」（富永仲基）とまで考えられている。その住所は清涼山という（中国では五台山がその霊場）。文殊の智に対し、行の完成者として尊ばれるのが普賢（サマンタバドラ）である。この菩薩は他土の菩薩といわれ、仏の教説を聞くべくその成道を知っていち早く馳けつけ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

たと『華厳経』にある。おそらく『華厳経』の成立とともに作られた新しいイメージであろう。その行を「普賢行」とよび、大乗の修行の典型とされる。「入法界品」は、善財童子が文殊師利のすすめに従い、五三人の善知識を順次にたずねて、しだいに普賢行を積み、最後に普賢のもとにいたるという求道の遍歴の物語となっている。『華厳経』はこの普賢と文殊の両名によって、仏に代わって、衆生済度の説法がなされたという構想になっている。

盧舎那仏の蓮華座から，諸仏菩薩（東大寺）

一般的信仰において、もっとも著名なのは観音（アヴァローキテーシュヴラ。観自在）であろう。この菩薩の本籍は南方の補陀落山とされるが、ヒンドゥー教の神格との関連も考えられる。大乗経典中では、『法華経』の「観音普門品」に見られる三十三身による衆生済度のはたらきが有名である。また浄土教の関係経典中では、阿弥陀如来の脇侍として大勢至と並んであらわれるが、元来は阿弥陀如来とは独立の信仰の対象であった。

地蔵菩薩はその出現はもっとも遅く、初期の大乗経典類には現われない。地蔵菩薩は、地獄に向かう衆生がその難をまぬがれる最後のチャンスを与えるとされ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

るが、そこには地獄にまで赴いて、衆生のためにつくす菩薩の大悲心が示されている。この菩薩は出家の姿をしている点で、他の菩薩が宝冠をつけたりしているのと異なる。しかし研究の結果では、文殊師利も出家の菩薩であり、大乗の指導者の理想像がそこに示されていたという。

これらのほか、大乗の経典には、それぞれに教理や行の理想を人格化した種々の名の菩薩が現われて活躍していて、枚挙にいとまがない。しかし、菩薩はすべてが行の完成者なのではない。そもそも発菩提心したのが菩薩であるから、そのままでは凡夫の菩薩であり、しかもその数は無数である。実はすべての衆生が菩薩たりうるし、菩薩とならなければならない。そこに大乗仏教の理想があるといえよう。このことは『法華経』において高らかに強調され、やがてそれが如来蔵思想を生む母胎の一つとなった。いわゆる「一乗」の教えである。

一乗と三乗

『法華経』は、真実の教えは、すべてのものが最後に仏となるような道ただ一つであって、それ以外に第二、第三の道はないという（唯有一乗法、無二亦無三）。この第二、第三というのは、仏弟子のための道とされる「声聞乗」や、「独覚者」となる道「独覚乗」（または縁覚乗）をさすという。あるいは、長者の家が火事になったとき、それを知らずに夢中で遊んでいる子供たちを救うべく、長者は外に羊・鹿・牛の三車が待っているから早く出るようにと誘い、子供たちが外に出てみたら、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

そこに待っていたのは立派な大白牛車一つであったという比喩（火宅三車の喩。三界を火宅に喩える）に説かれるように、旧来の教えにあった声聞・縁覚・菩薩の三乗にかわる、一仏乗の教えこそが真実であるとも説かれている。

ここにいう三乗の「乗」は大乗の「乗」と同じく、衆生を理想にみちびく乗物ということで、元来は仏の教法を喩えたものである。大乗は、自分たちの教えはバスのように大勢を一度に彼岸に運べるということで、ひとりひとりが乗って悟りの世界にいく単車のような旧来の教え方を、小乗と貶した。この小乗とよばれるもののなかに、前に述べた声聞乗のほかに、独覚乗をたてた（これは教えによらない）。独覚が縁覚ともよばれるのは、教理上、その悟りも釈迦牟尼と同じく縁起の理を悟ることによると考えたためである。そもそも独覚＝縁覚とは、成道直後、ベナーレスで初転法輪する以前のブッダの姿（無師独悟したという）にほかならない。声聞は、自分たちが阿羅漢となることのみを求めて衆生の救済（在家の信者の救済）をかえりみないし、独覚もまた自分だけの道を歩むので、同じく自利のみを追求するといって、この二つのあり方を一括して小乗とよび、また二乗ともいう。

この二乗に対し、もう一つの道として、菩薩→成仏のコースがある。これは釈迦菩薩に実例があるほか、過去にも未来にも、同じ道をたどって成道した者はあるということが、旧来の僧院の仏教にも認められていた。そしてこの三者はそれぞれ目標も別々であるとともに、それに乗る者も別で

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

あると考えられていた。つまり、弟子の道を歩む者は阿羅漢になるだけで、仏には絶対になれない。独覚も同様、独覚となる以外にはない。このような考え方が「三乗」説といわれる。大乗仏教は菩薩→成仏の道を広げて、衆生たちもそこに入るとしたが、経典によっては旧来の小乗の徒は別だとして、いっしょにふくめないことが多い。つまり、三乗説は小乗にも大乗にもある。

その行き方に対して、仏の広大な慈悲のもとにおいては、声聞も縁覚も、そして菩薩はもちろん、みな等しく仏となることを目標とし、また仏となりうるのだということを、はじめて強調したのが『法華経』であった。仏の目から見れば、すべての衆生は「わが子」つまり「仏子」であるというのである。シャーリプトラ〔舎利弗〕やマハーカーシュヤパ〔大迦葉〕といった仏弟子たちは、そのことを聞いてはじめて、自分たちも仏となれると知って涙を流して喜んだとされている。こうして、「一乗」ということが「大乗」の理想であり、仏の願うところであるとされた。ただし、衆生の機根によってはそのことを直接に説くのがかえって害になることもあり、理解せられないこともあるので、仏は「方便」によって、二乗の道を説き、あるいは三乗の区別を説いたとも教えている。

一乗の主張の前提にはこのように仏の慈悲行が予想されているので、この教えは仏への信仰を基本とする仏教である。この一乗思想の発展として、前述のように、すべての衆生に成仏の可能性をみとめる如来蔵思想が形成された。これを衆生のもつ可能性、能力という点では、衆生は「仏の種姓」をもつ、あるいは仏の種姓（家柄、素姓）に属するといわれる。三乗説はこれに対し、それぞ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

れの道に属する衆生には元来、それぞれの異なった能力が先天的にあると見て、三乗の種姓を想定するのである。それはちょうど、インド社会においてバラモン以下、種姓（カースト）が先天的に異なるとされたのと似ている。その意味で、一乗の教え、衆生すべてが仏の種姓（仏性）をもつという如来蔵の教えは、「サンガに入れば、バラモン、クシャトリヤ等の区別なく、すべて仏の子であり、沙門釈子と名のるべきである」というブッダの教え（四姓平等）の旨によくかなうものと言わなければならない。

しかし、インド大乗仏教の歴史を見ると、三乗説もなかなか根強い。これは先天的な種姓というよりも、行のむずかしさを主張し、行の重要性を強調するところに由来するのである。現実の人間のあり方を直視するとき、いかに執着をなくし、苦を滅し、悟りをひらき、仏となるのが困難なことか、衆生がいかに仏とは遠く隔たった存在であるかが容易に想い起こされる。それに打ち克つ行こそが仏道であると見る人びとは、三乗説にこそ真実の教えを見出している。その代表が唯識説を説く瑜伽行派である。この派では、三乗にコースが確定する以前（つまり各乗の「種姓地」に入る以前）、まだその種姓は未決定であるとして、これを「不定種姓」とよび、一群の衆生は修行の結果、そのコースが決まると見ている。いわば後天的に種姓の決まる衆生である。その下にさらに、どっちにころんでも永久に涅槃も悟りも不可能な衆生があると考えて、これを「無性（アガートラ）」の衆生とよんでいる。それがどういう人びとかというと、第一に、享楽主義者、欲望追求者で、仏法をかえりみ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ない者たちである。これをイッチャンティカ〔一闡提〕とよんでいる。しかし、とくに問題としたのは、無自覚に欲求を追求している者よりも、ことさらに仏教を誹謗する者である。『法華経』も一乗を主張する一方で、『法華経』を誹謗する徒に対し、きわめつきの非難をし、破邪を叫んでいるが、その系統をひくものである。しかし同時に多くの経典は、そのような悪逆の徒でも、仏の慈悲でいつかは仏教に改心するときがあるとして、最終的にはその成仏も可能だと見る。それに対し、菩薩こそは、その大悲の願力によって永久に涅槃に入らないのだから、これが真のイッチャンティカであるという主張もあらわれた（大悲闡提）。さきにあげた地蔵菩薩は、菩薩のこのような理想像を具象化したものであろうと思われる。

なお、唯識説を説く日本の法相宗は、この三乗説と一分の衆生の不成仏を説く点で、真の大乗ではなくて「権大乗」であると見られ、『法華経』を基本とする一乗説の天台宗などからいちだん低く見られた。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

九章　戒律と教団の組織

サンガの意義

サンガ〔僧伽〕は仏教ではその教団を意味する正式の名称として用いられている用語であるが、その由来するところは仏教以前にさかのぼる。ブッダの当時、インドでは周知のように多くの宗教家たちが沙門の名でよばれ、諸方を遊説し、弟子を集めて教団を組織していた。これらの宗教家たちは、時に「サンガの所有者」saṃghin、「ガナの所有者」gaṇin とよばれているが、そのことは逆に、そのような宗教団体がサンガもしくはガナとよばれていたことを示している。

サンガもガナも、もとは単に集団という意味である。しかし具体的にその名でよばれた集団としては、右のような宗教団体のほかに、同業組合つまりギルドのような経済組織と、共和政体の国家とがあった。これらの集団に共通な性格としては、同一の目的をもって集まった人びとのつくる共同体で、その成員は相互に平等であり、同一の規律に服し、その加盟は自由意志によること、集団の意思決定は成員の合議制によることなどが挙げられよう。自由意志による加盟は実際問題として

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

は宗教団体の場合に限られるかもしれないが、この語の使用される背景に、所属が生まれによって決定するカースト（ジャーティ集団）との対比があったことと予想される。宗教に関していえば、バラモン〔婆羅門〕が四姓の最高位として生まれを誇っていたことに対し、そのようなカーストや家の規制から逃れ出て（出家）、自由になるところに沙門のサンガが成立したのである。また、共和政体の国がサンガとよばれるのは、世襲の王という生まれながらの支配者をいただくのでなく合議によって、つまり自分たちの意志によって支配者をえらぶ点をさしてよんだものと思われる。仏教の教団はその成立の由来からいって明らかに沙門の宗教団体の一つであるが、その教団の運営にあたっては、サンガ国の代表というべき、ヴァッジー族（ヴリッジ族）のヴェーサーリー（ヴァイシャーリー。毘耶離）の町の合議制に範をとったと言われている。

ヴェーサーリーは、ブッダ在世時にはマガダに対して独立を保った都市国家で、経済的繁栄を誇っていた。ブッダもしばしばこの地を訪れて安居しているし、仏教教団にとって後々までもその重要な根拠地の一つであった。そして、ブッダはこの国の人々を讃え、この国がいつまでも衰えないことを祈っている。『涅槃経』によると、ブッダは最後の安居をヴェーサーリーの郊外で送っているが、それに先立って、マガダ国のラージャガハ〔王舎城〕を出てガンジス河岸のパータリ村に赴くと、マガダ国はそこに城を築いてヴェーサーリー攻撃の拠点にしようとしていた。それを見ながらブッダは、七つの条件がかなえば、ヴェーサーリーの町は衰えることはないであろうと予言した。その七項とは、(1)ヴァッジー族の人びとはよく会議を開く。そして多数の人がそのために集まる。(2)一致和合して会合し、一致和合して決議し、一

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

致和合して事を処理する。(3)古来きめられたヴァッジー族の法を守る。(4)年長者を尊重し、敬愛して、かれらに仕える。(5)ヴァッジー族の子女に不当な結婚を強制しない。(6)内外の社廟を尊敬し、供養を捧げる。(7)聖者（アルハット）たちを保護し、尊重する。（取意）

右の七項につづけて、仏教の教団もまた、七つの法を守れば長く繁栄するであろうと予言する。

(1) 比丘（修行者）たちがしばしば会合をもつ。
(2) 比丘たちが一致和合して会議を開き、決議して、サンガのことを処理する。
(3) 比丘たちが新しい制度をつくったり、古い制度を捨てたりせず、定められた掟を遵守する。
(4) 比丘たちが、仲間の長老、先師、導師たちを尊敬し、敬愛して仕え、その言うことをよく聴く。
(5) 欲望がおこっても、それに負けないように努める。
(6) 比丘たちが人里を離れた場所に住むことを好む（大臣王侯に近づかない）。
(7) 比丘たちが修行に専心し、それを見て、すぐれた仲間が加わり、加わった者は心が安らかに教団にとどまるようになる。（取意）

このほかさらに五種類におよぶ「七不衰の法」を説かれたというが、それらは修行道の徳目と重なるので列挙を省略する。

仏教のサンガの特色はまた大海にたとえられて、次のように述べられる。

(1) 大海が岸から離れるに従ってしだいに深くなるように、サンガには入門してからしだいに学が深まる。
(2) 大海の水が岸を越えて出ないように、弟子たちは戒律を破らない。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

(3) 大海に死体を流しても必ず岸に打ち上げる。それと同様に、サンガは戒律を犯した者を必ず挙罪して見逃すことがない。

(4) 諸川は大海に入れば、海の一味となってそれぞれの名を失う。それと同様に、人はサンガに入団すれば、社会的な階級・地位・姓名を捨てて、ひとしく沙門釈子とのみ呼ばれる。

(5) 大海はすべて塩の味が同一であるが、それと同様に、サンガの成員はみな、同一の解脱味をもっている。

(6) 大海はどんなに多くの川が流入しても水量に増減がないように、サンガの修行僧たちが、いかに増加しても、また涅槃に入っても、増減はない。

(7) 大海は種々の財宝の宝庫であるが、それと同様、サンガには微妙高遠な教え（法）と、戒律がある。

(8) 大海には種々の大魚が住んでいるが、それと同様、サンガにも偉大な弟子たちが住している。

これらの比喩のうち、とくに(4)は、いわゆる四姓平等の主張として重要である。同時に、その理念は教団の内においてのみ実現しえたもので、インド社会の改革を意図するものではないことは言うまでもない。同じく右の宣言は、仏教のサンガがインド社会にあって一種、治外法権的な力――国王権力の不輸入――を認められていたことも意味する。これは、仏教のサンガが出世間のもの、すなわち通常の社会とは次元を異にする集団で、道徳的にもすぐれて範たるものと世間で認められ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

たからにほかならない。

教団の組織

仏教の教団という場合、もっとも広義には仏教徒、すなわち修行者も信者もふくめた全体をさすことがある。今日のわれわれの常識ではそれが一般であるが、同時に、教団の語で専門の僧職者だけを意味する場合もある（教団人とか宗門人の名でよぶ場合）。

仏典においても、古くからこの二つの意識は存在した。前者すなわち出家の修行者と在家の信者を合わせたもっとも包括的な名としては、「四衆」がある。四衆とは、(1)比丘と(2)比丘尼――以上は出家、男女の修行者。(3)優婆塞と(4)優婆夷――在家の信者の男女をさす。「比丘」とは乞食者ということで、信者の供養する食物を受けて生活するところから、その名が出た。「比丘尼」はその女性形である。また「優婆塞」は「近事男」とも訳されるように、ブッダや弟子たちに近づき奉仕する者の意で、教えを聞き、供養をする点でかくよばれる。「優婆夷」はその女性形。これはいわば供養する者と受ける者で、経済的に仏教教団を成立させている有機体として不可欠な要素である。しかし、この場合、四衆の「衆」は parisad (parisā) の訳であり、また、その全体に対する名称はない（仏教徒 Bauddha として、個々人をよぶことはあっても）。つまり、この全体をサンガとよぶことはない。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

これに対し、仏典がサンガの名を用いるのは出家者の集団のみに限られる。仏教でサンガの成立したのは、仏伝の章（一章）で述べたように初転法輪の際である。それに先立って、ブッダは二人の商人に会って法を説き、二人はブッダとその法に帰依して優婆塞となったといわれる。したがって、在家の信者の存在は教団の成立を意味するとは考えられていなかったのである。おそらく、それはサンガというのが生活共同体として現実に存在し、何らかのかたちで規制可能な範囲を予想したからで、「律蔵」というものはすべて、このような出家者の集団に対する規則集成にほかならないのである。

この律蔵の規定の拘束をうける出家者たちはまた、成人か否かなどの区別によって五種に分けられる。すなわち、成人の成員（二十歳以上）としての比丘と比丘尼、未成年成員として男は「沙弥（しゃみ）」、女は「沙弥尼」および「式叉摩那（しきしゃまな）」であるが、最後のものは比丘尼となる前二年間の女性修行者に対する名称で、これは妊娠の有無を調べるための措置といわれる。この五種は「五衆」の名でよばれ、また在家の信者とあわせて「七衆」の名でよばれることもある。なお、五衆の区別は、律の規定がそれぞれの実状に応じて異なっているからであり、実質的には沙弥などは独立のサンガをつくりえないので、比丘のサンガと比丘尼のサンガの二種が存在することになる。

この比丘と比丘尼のサンガは同じ律蔵の規定に従う点で同一の共同体に属するが、実際の日常生活という点ではつねに全員が一カ所に集まっていることはありえない。ところで、律の規定を運用

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

するためにはその場に集まった成員だけで会議し、議決しなければならないことが生ずる。そのため、特定の時処における特定数の比丘あるいは比丘尼の集団をさしてサンガとよぶことがある。これを「現前僧伽」とよぶ。いま現にそこに成立しているサンガの意である。これに対し、さきの五衆よりなる出家者の教団は「四方僧伽」とよばれた。インド全域の出家修行者全体のサンガという意味である（「四方」すなわち四方より成るの意をあらわす原語は cāturdeśika で、これを音写して「招提」という。唐招提寺の名の由来である）。

現前僧伽は、このようにサンガ運営の規則適用のための組織で、議決されるべき事項の重要度に応じて、四、五、一〇、二〇、二〇人以上の成員を必要とするものという五種に分かれる。たとえば入団許可のためには一〇人以上の成員の同意を必要とするので、九人以下の成員が集っても議決できない。そして、三人以下の人数しかいない場ではサンガとしての資格はなく、何の議決も行なえない。このような無資格な集団は、単にガナとよばれている。このような規則があるので、時に応じて、現前僧伽の編成を一定の地域に限る必要がある。これを「結界」とよぶ。初期の教団はことに特定の寺院などを持たなかったので、毎年の安居などでつねに結界を決め、その人数を数えておく必要があった。

サンガの運営、すなわち律に従う議決の方法は「羯磨」（かつま。作法の意）といわれるが、これも事項の軽重に従って、一度ないし三度賛否を問い、全員の賛成が要求される（白二羯磨ないし、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

白四羯磨。「白」は表白すること、意見を表明すること)。この在会者全員の一致という条件があるため、逆にサンガ成員の数をそのつど確認しておく必要があったのである。

教団の成員は、律の規定に服する点と議決権という点ではすべて平等であるが、修行の面では当然、差異がある。また教団内の役割に応じて、種々の名称が与えられる。年功、修行を積んだ指導的地位にある人びとは「上座」(長老)といわれ、大徳・尊者・具寿などと敬称をもってよばれる。また特定の資格としては、受戒後一〇年以上をへて弟子をとることを許されたものを「和尚」upādhyāya といい、また教団中にあって学業の指南役となるものを「阿闍梨」ācārya (軌範師)とよぶ。また、教団内で能力に応じて役割が分化するようになると「法師」「禅師」「律師」などの名称も生まれた。禅師は「瑜伽師」yogācāra と同じで、禅定修行にもっぱらなる人びとである。これに対し、法師は説法師で、民衆教化を主な仕事とする。

ところで、ブッダはサンガにあっていかなる地位を占めていたのか。入滅後に編集された律蔵類は、実際には無仏すなわちブッダのいない時代の規定であるから、ブッダの存在を予想せずに規則をつくっても差し支えない道理であるが、理念的には、サンガはブッダによってはじめられたものであるし、律はブッダによって規定されたものでなければならない。この現実の規定か理念かという点で、律蔵類は、ブッダをサンガから除外するもの(僧中無仏)と、ブッダをサンガの成員と考えるもの(僧中有仏)とに分かれる。前者はまた、仏法僧の三宝を明確に区別するという考えを根

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

拠としているものである。

このような次第で、ブッダ在世時の実状は不明な点が多いが、サンガの指導者としてブッダもまたその一員に加わり、同一の規定に服して生活していたものと思われる。これは宗教家として当然であった。たとえば施物などがあった場合、仏だからといって独占したり、特別に受けることなどは考えられない。しかし、律の制定権をもつのはブッダに限られるとされるので、その点では他のサンガの成員とは異なる。そして、入滅後もこのことは確認されたので（そのため理念上、律の変更は入滅以後、認められない）、しだいに仏をサンガから除く方向に傾いていった。ブッダの入滅後、ブッダはサンガのなかで仏塔などのかたちで祀られるようになるが、そこに施される供養物は仏物といって、サンガへの寄進たる僧物とはっきり区別されるようになる。

教団の規則

教団の規則の集成を「律蔵」とよぶ。「律」Vinaya（毘尼）とは、導くこと、教化することを原意とするから、教育要項くらいの意味である。律蔵は大別して、成員の守るべき戒の条項を列挙する部分と、教団の行事、運営に関する規則の部分よりなる。

前者は「戒本」Prātimokṣa（波羅提木叉）と称し、比丘に関しては二五〇戒、比丘尼については三四八戒よりなる（律蔵ごとに戒の数には若干の出入がある）。この戒は元来、修行道の説明（六章）

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

で述べたように、自ら遵守を誓うものであり、したがってたとい戒を破っても、それ自体では罪とはならない。しかし、教団の規定として取り上げられるかぎりは、それに違反した場合には何らかのかたちで処罰をうける。そこで律蔵のなかでは、戒の条項は罰則をともなっており、罰の軽重に応じて波羅夷、僧残、波逸提、提舎尼、突吉羅の五種（五篇門）に分かれ、あるいは内容も加味して八類（波羅夷、僧残、不定、捨堕、単堕、悔過、衆学、滅諍の八法）に分類されている。

このうち波羅夷（pārājikā）はもっとも重い罪で、教団からの追放を罰則とする。この適用をうけるのは、殺生、偸盗、婬（非梵行）と、悟っていないのに悟ったと言う大妄語の四項で、これは五戒中、不飲酒戒をのぞく四戒を犯した場合に相当する。波羅夷は断首にたとえられている。

次の僧残は、波羅夷がサンガから追放される罪であるに比し、この部類に属する者は罰をうけても、懺悔によってサンガ内に残れるところに由来する名である。しかし波羅夷罪同様、この場合もサンガによって罪が与えられるものとして、重罪の部類に属する。懺悔がすむまで別住、一週間の謹慎が課せられる。出罪は二〇人のサンガによって決定する。この適用をうけるのは、比丘の場合、自瀆とか女人に触れるなどの一三項である。

波逸提以下は軽罪で、懺悔によって贖われる。波逸提（pāyattika, pācittika）は「堕」とも訳されるが、意味は罪を懺悔することである。そのうち所持を禁じられた物品を所持していることから生ずる罪の場合は、まずその物品を捨てることからはじめなければならないので、これを「捨堕」と

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

よんでいる。それ以外の場合は「単堕」（ただ懺悔のみ）といわれる。内容は妄語や悪口の類である。懺悔は三人ないし一人の比丘の前で行なわれる。次の提舎尼または波羅提提舎尼（pratideśaniya）は食べてはならない食物を採った場合の罪で、これも懺悔だけでよい。悔過法というのが同じものをさす。そのほかの、何らかのかたちで教団の規定に反したものは突吉羅（dukkaṭa）罪に入る。突吉羅は「悪作」とも訳されるように、悪い行為を犯したということである。そのうち重いものは懺悔すなわち人の前での告白を必要とするが、それ以外は心に悔いるだけでよいとされる。衆学法と滅諍法は犯した場合、突吉羅罪になるとされるが、前者は食事などの行儀作法に関するもので修学を規定されている条項、後者はサンガ中でおきる諍いをしずめる方法をいう。しかし罰の適用は明白でない。最後に「不定」とあったのは、たとえば比丘が女性といっしょにいた場合、ただ同座していただけならば波逸提、手など握れば僧残、それ以上になれば波羅夷ということで、実状を調査しないと罪が確定しないものをいう。

　このほか、偸蘭遮（thullaccaya）罪を挙げる場合がある。これはいわば未遂罪で、波羅夷か僧残に値する行為の準備段階で、サンガにおいて懺悔を要求される。

　なお、戒本の各条項には「因縁」といって各法制定の由来が述べられている。これは律の条項が随犯規制といって、問題が起きるごとに逐次増加したことを物語っている。その場合、初犯すなわちその条項制定の原因となった行為は罰せられない。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

律蔵の後半、すなわちサンガ運営の規則に関する部分は「犍度」khandha とよばれる。犍度は章というほどの意味で、主題ごとに別章にまとめられていて、全部で二三章ほどある。そのうち主な規定は次のとおりである。

(1)「出家作法」――サンガへの入団は「受戒」（具足戒、受具、進具 upasampadā）を必要とする。入団にあたっては最初に三帰（三宝への帰依）と、戒の遵守が要求され、さらに四依による生活を守ることが要求される。その方式としては、はじめは三帰だけ、あるいはブッダが「善く来た比丘よ」とよびかけるだけで十分だったと思われるが、律の規定として確立した方法では白四羯磨により一〇人のサンガの成員全部の賛成を得た後、具足戒と四依法を守ることを誓わされる。具足戒は戒本の条項全部を守ることを誓うものである。

(2)「布薩」uposatha――毎月一定の日に、同一結界内に在住するサンガの成員が集まって、戒本を誦して日ごろの行為を反省する行事。

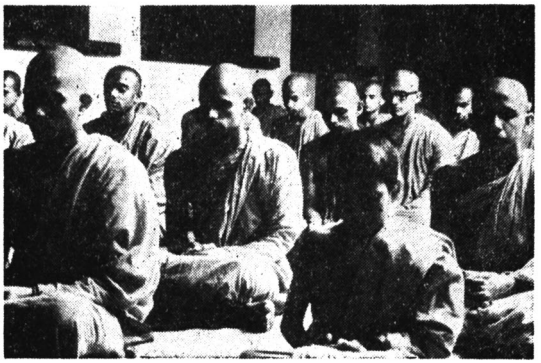
(3)「安居」――毎年雨期の三ヵ月間、一定の場所に定住して修行に励むこと。雨期中は交通不便で行乞に適しないからと、あやまって虫類などを踏みころすことを避けるためといわれる。安居の明ける日に「自恣」を行なって、安居中の行為の正否をサンガの成員に問い、次に衣料を調達して翌年の安居にそなえる（迦締那衣法）。

(4)「四依」――サンガの成員の日常の生活は四依法を基本とする。四依とは、①食は托鉢（乞食）

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

によって得た食物、②衣は糞掃衣（ふんぞうえ）、すなわち墓地などに捨ててあった布類をつぎはぎして作ったものを用いる。③住は樹下の坐臥所、④薬は陳棄薬（腐尿薬）の四つを、生活の依りどころとするという意味である。



瞑想する比丘（コロンボの僧院で）

初期の教団は文字どおり行雲流水、遊行する沙門たちの集まりで、一定の住所をもっていなかったと思われる。次の段階として、サーヴァッティ〔舎衛城〕の祇園精舎とか、ラージャガハの竹林精舎といわれているような園林が寄進され、もしくは利用をゆるされて教団の根拠地となった時代で、毎年の安居はいくつかのそういった特定の地で行なわれるようになった。その場合でも僧房などはなく、せいぜい臨時の小屋がけくらいであったろう。四依はその時代までのサンガの基本的あり方を示したものである。教団の発展とともに、しだいに定住がはじまり、精舎、僧院が建造され、仏滅後は仏塔も建てられたりして今日いう寺院の形体が整えられていくようになった。同時にそれは教団に土地その他の財産が生じたことを示している。律蔵の規定にはその時代の反映も見られる。しかし、サンガの成員にとって

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

は、私有物の所持はきわめて厳格に制限されていた。

所持を許される品は、三衣一鉢といって、上中下の三衣と托鉢用の鉢（応量器）を基本とし、そのほか、坐具、水こし袋、ないし裁縫用具、剃髪用の剃刀など、日常生活の最低必需品であった。また食事は正午までで、その間に朝の托鉢によって二度の食事をする。時には斎（布薩食、とき）といって信者に招かれることもあった。午後は水および薬以外はいっさい採ることを許されない。病人にかぎってバターなどの保持が許された。金銭の所持ははじめにはまったく禁止されていた。

これらの規定はしかし、細部にわたっては律蔵によって異なっているし、時代による変遷もあった。最初の教団分裂は金銭や塩などの所持をめぐる意見の対立によって惹起されたとされている。

部派教団と律蔵　仏教のサンガはブッダ入滅の後一〇〇年ほどたってからしだいに分裂し、各地に個別的な教団が成立した。それぞれの教団は独自の律蔵を保持したが、それを部派とよんでいる。部派の数は根本分裂による上座・大衆の二部と、それぞれの枝末分裂による一八部があったといわれている。現在、そのすべての部派の律蔵が残されているわけではないが、漢訳に数種類あるほか、パーリ語、サンスクリット、チベット訳などがあって、かなりの資料が得られる。その主要なもの（全体にわたる「広律」とよばれるもの）と所属部派を示すと、次のとおりである。

〔漢訳〕『十誦律』六一巻、薩婆多部（説一切有部）。カシュミールより将来。

『四分律』六〇巻、曇無徳部（法蔵部）。カシュミールより将来。中国においては四分律宗がこれにもとづいて成立し、以後、中国・日本の律の基本とされた。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

『摩訶僧祇律』四〇巻、摩訶僧祇部（大衆部）。法顕がパータリプトラより将来した。
『五分律』三〇巻、弥沙塞部（化地部）。同じく法顕が師子国すなわちスリランカよりもたらしたもの。
『根本説一切有部律』一八部一九四巻、根本説一切有部。義浄が中インドよりもたらしたもの。大乗教徒が所持していたといわれる。根本説一切有部はマトゥラーに根拠地があったとされる。
この最後のものはチベット訳が完備しており、また、かなりの部分のサンスクリット本が残存している。パーリ聖典の『律蔵』*Vinaya*、南方上座部。オルデンベルクの校訂によって、ロンドンのパーリ聖典協会から一八七九―八三年の間に出版された。和訳は『南伝大蔵経』所収。
このほか、戒本とか、羯磨本、あるいは各種犍度など、部分訳も多数あり、一部サンスクリット本も発見され、校訂出版されつつある。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

十章　仏教の歴史

仏教の歴史は教団の歴史である。序章で説明したように、僧すなわちサンガ、教団の持続なくしては、今日にいたる仏教の伝承も発展もない。人人（にんにん）の相承、師嗣（ししそう）相承の尚ばれるゆえんである。

ここでいうサンガとはもちろん、仏教徒の全体という理念的なものである。個々の教団についていえば、つまり現実の仏教史は、分裂の歴史、盛衰存亡のくりかえしであるが、その流れのなかから、新しい教理の展開もあり、また新しい地域、インド以外の広大な地域への伝播もあった。今日、仏教は東アジアや東南アジアの地域で、有力な教団組織と多くの信者を擁して活動中であるとともに、主に文書を通してではあるが、思想的にヨーロッパやアメリカの人びとにも関心をもたれ、影響を広めつつある。

この仏教教団の歴史的展開は、時間的・空間的に、次のように図示することができるであろう（二二八ページ）。この図で示すように、仏教史は、幹となるインド仏教史、すなわち発生地インドにおける教団の発展と、枝ともいうべき各地への伝播と、そこでの発展とに大別される。枝はまた小

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

枝を生みながら、それぞれに大もととなる幹や主な枝からの栄養をその時々にとり入れつつ発展した。しかし、大もとというべきインド仏教は、教団の内部事情と、インド社会の歴史的状況という外部事情のために、十三世紀の初頭に教団組織が崩壊した。

以下、いわゆる仏教滅亡にいたるまでのインド仏教の流れと、中国・朝鮮・日本における仏教流伝の歴史を略述しておこう。

1　インドとその周辺の仏教

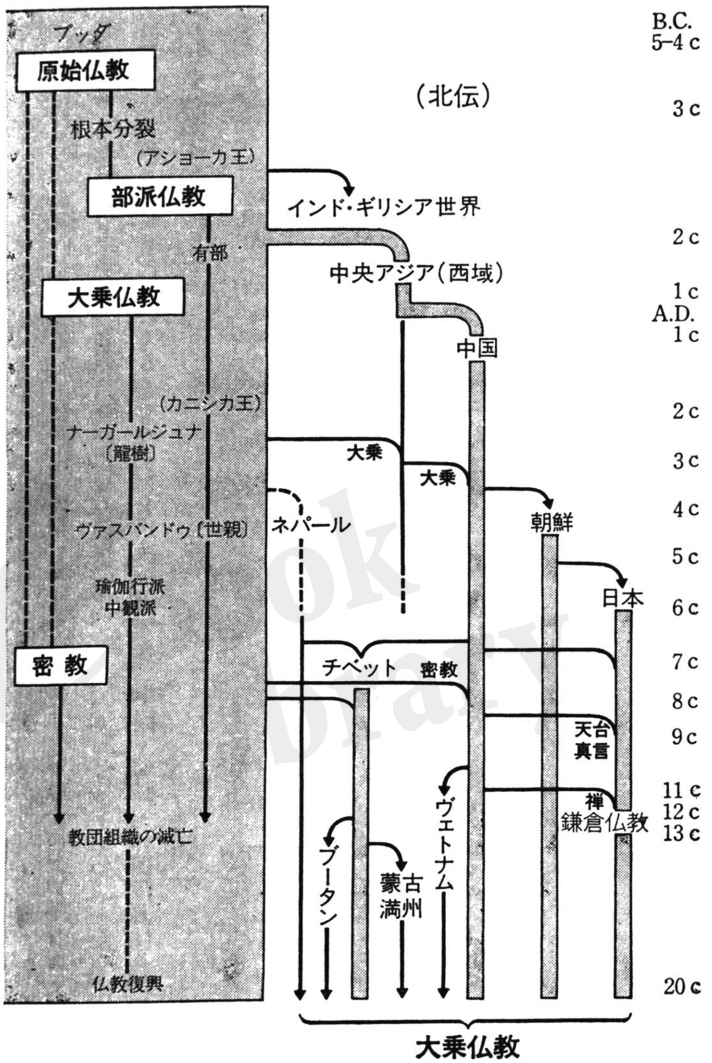
教団の根本分裂

ブッダの入滅（仏滅）以後およそ一〇〇年間は、教団はブッダの教え（法）を守りながら、同一の教団の規制（律）に従って統一した教団組織を保っていた。しかし、教団の拡張にともない、内部に意見の対立を生じ、律の解釈をめぐって上層部の保守派と、大衆修行者を中心とする進歩派に分裂した。前者を「上座部（じょうざぶ）」といい、後者を「大衆部（だいしゅぶ）」とよぶ。その契機となったのは、金銭を蓄えることなどの十事を「浄法」として認めるか否かであったとも、修行の完成者としての「阿羅漢」の性格に関する「五事」の解釈の相違にあったともいわれる。

分裂の歴史的事実がいつ行なわれ、具体的にどうであったかについてはなお不明な点もあるが、根本分裂はさらに地域や教義の差をめぐって教団の細分化をおこし、ここに部派仏教の時代に入る。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

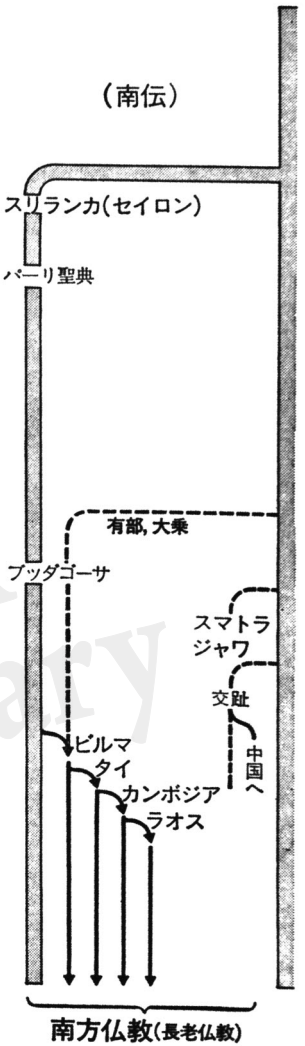
複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会



May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:37:53 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

部派数は合計二〇あったと称せられる（それ以前の時代を、ブッダ在世時をふくめて「原始仏教」あるいは「初期仏教」とよぶ）。



マウリヤ王朝とスリランカへの伝道

教団の分裂は理念的には忌わしいことであったかも知れないが、事実は仏教教団の発展のあらわれである。このような教団のインド各地への発展には、紀元前三世紀前後の、マウリヤ王朝によるインド統一国家の出現と、王朝の三代目アショーカ王（阿育王、前二六八即位）による保護が大いにあずかって力あった。そして前三世紀以後になると、仏教は単にインド内のみでなく、スリランカ（セイロン）やヘレニズムの文化圏に広まるにいたった。ことにスリランカは、伝説によればアショ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

ーカ王の王子マヒンダの伝道によって開教されたとされ、以後、今日にいたるまで仏教の一大中心として栄え、その歴史を誇っている。なお、スリランカ仏教は上座部系で、長老派（テーラ・ヴァーダ）と自称し、南方上座部ともいわれている。

クシャーナ王朝と北伝仏教

マウリヤ王朝の滅亡後、北インドではギリシア系その他の外国人の侵入があいつぎ、その支配下に入ったが、この状勢はかえって仏教が北方に伝播するきっかけとなった。ギリシア人の王のなかには、メナンドロス（ミリンダ、前一五〇ころ在位）のように、仏教に帰依した者もあった。つづくスキタイ人（サカ族）などの支配下で、仏教は中央アジア（西域）各地の諸民族の間にうけ入れられたが、このような発展を決定的にしたのは、紀元後一世紀に中央アジア出身の大月氏（だいげつし）の一支族が、インドから中央アジアにかけて建設したクシャーナ王朝の治下においてであった。仏教はその間に、中央アジアからさらに東にすすみ、中国へ伝えられた（中国の伝承では、紀元六七年という）。

クシャーナ王朝のカニシカ王（一二八年即位）はアショーカにおとらず熱心な仏教信者であった。北インドを領土とし、ガンダーラの地に都したが、とくに北インドに栄えていた部派の一つ、「有部」（説一切有部）を保護したので、有部はそれ以後もっとも有力な部派となり、ながく北インドを中心に勢力を張るようになった。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

部派仏教の特色

有部の教義は「すべての法は三世にわたって実有である」（三世実有法体恒有）と主張し、実有の法の相互関係によって「縁起」を説明した点にある（四章参照）。この主張は、釈尊の教え（法）を種々に分類整理し、組織体系化したところから生まれたものであるが、このような学問を「アビダルマ」（法の分析、法の解釈）とよんでいる。総じて各部派は根本聖典として「法」すなわち経と、「律」とを各自に伝持した。律は地域的・時代的要請でそれぞれに少しずつ特色、差異をもつようになり、経もまた伝承の間に変化をうけた。しかし、各部派がもっともその特色を発揮したのは、この「法の解釈」においてであった。そのような法の解釈を、各部派は「論」のかたちで製作し、伝承しつつ、さらに独特の教義を展開していったのである。その意味で、部派仏教は「アビダルマ仏教」ともよばれている。

有部は諸部派のなかでもっとも組織だった教義体系をつくりあげた（『大毘婆沙論』二〇〇巻）。『倶舎論』はこの有部の綱要書の代表として重要な論である。その他の部派はスリランカの上座部を除くと、法蔵部、経量部、正量部などの若干の部派が、漢訳仏典中にその派の論書を残しているが、他は有部の書などで言及されている以外、ほとんど知られていない。

部派仏教はこのように教義の確立という点で大きな功績を残したが、その主体となったのは出家

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

の修行者たちであり、かれらが国王などの保護のもとに安定した生活をおくり、学問や修行に専念できたところから生まれたものである。教義の煩雑化が仏教の生命を失わせ、信仰を涸れさせる傾向があったのも否定できないであろう。その点に対する信者の側からの反発と出家者内部での反省が、新しい宗教運動をおこすことになった。

大乗仏教の成立

この新しい運動は、釈尊の遺骨をまつる塔すなわちストゥーパを守って、それを中心に集まっていた在家の集団のなかから生まれたものと思われる。かれらはひたすらに仏徳を讃仰し、ブッダへの信仰を中心に生きてきたもので、そのなかからブッダの神格化も生まれたものと想像されるが、やがて、自らの手でその思想を表明する道具として、新しい経典を編纂した。そのなかでかれらは、その道を万人の救済をめざす広い乗り物という意味で「大乗」と名づけ、在来の部派仏教を限られた出家者だけの道という意味で「小乗」と貶称した。小乗の教えが「法」中心であるのに対し大乗の教えは「仏」中心であり、また小乗が「出家中心」の仏教であるのに対し、大乗は「在家中心」の仏教とよぶこともできる。在家の教えとして大乗仏教は、ブッダの前生における呼び名「菩薩（ぼさつ）」とその利他行にその教えの基本を見出し、「菩薩」をもって、仏に代わって世のためにつくす理想的人間像の名としたが、同時に法に関しても、ブッダの根本にかえり、その真意を明らかにするも

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

のであることを主張した。

この新しい教えは、紀元前一世紀以降、『般若経』『法華経』『華厳経』その他の大乗経典のなかでしだいに発展していったが、教理上の特色としては、「空」思想がその基本にあり、また仏の絶対視（法身）と、仏のはたらきとしての「般若」と「方便」（慈悲行）の強調とを挙げることができるであろう。信仰の仏教としての大乗の典型的なすがたは『阿弥陀経』などの浄土教に見られる。

中観派と瑜伽行派

大乗仏教は主に、紀元後二世紀に南インドに生まれたナーガールジュナ〔龍樹〕と、五世紀ころグプタ王朝の治下で活躍したヴァスバンドゥ〔世親〕の二人によって教理が確立され、組織化された。

ナーガールジュナは『般若経』の教えを基本に、「空」の教理を哲学的に究明して『中論』を著わし、また『大智度論』で般若経を注釈しつつ大乗の教義をまとめた。かれの仕事は基礎的かつ普遍的であったので、後世の仏教徒はすべて、かれの説に基本をもとめ、ために中国、日本では「八宗の祖師」の名でよばれている。弟子にアーリヤデーヴァ〔提婆〕があり『百論』などを著わした。

ヴァスバンドゥはもと経量部に属し、有部の概説書『倶舎論』を著わしたが、後に兄アサンガ〔無著〕のすすめで大乗に入り、そのあとをうけて、新しい教理体系を確立した。この体系は、ナーガールジュナ以後に成立したもので、マイトレーヤ〔弥勒〕を始祖とするといわれ、その実践方法

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

から瑜伽行派（ヨーガーチャーラ）とよばれていたが、教理の特色から「唯識説」ともいわれている。かれは、マイトレーヤの著やアサンガの『摂大乗論』などに注釈を書くとともに、自ら『唯識三十頌』などを著わした。漢訳の『成唯識論』は、その注釈の一つである。

ヴァスバンドゥの系統はその後、大乗仏教の主流として栄えたが、この瑜伽行派の唯識説は心の分析を主としながら、有部の影響をつよく受けてアビダルマ的傾向をもち、煩瑣な教学に変わっていった。他方、これと対抗して、六世紀にはナーガールジュナの思想を直接にうける中観派が台頭し、両者の間ではなばなしい論争が生まれるようになる。この論争の過程から、ディグナーガ〔陳那〕やダルマキールティ〔法称〕の努力で、仏教の論理学――因明――が大成するが、大乗仏教も結局、出家の専門家の間の学問仏教と化し、本来の在家仏教的色彩はしだいに失われていくにいたった。

大乗仏教の思想の流れとしては、このほか法華の一乗の教えを発展させた『勝鬘経』や『涅槃経』にみられる「如来蔵」や「仏性」の教えがあり、その組織化された論書として『宝性論』や『大乗起信論』がつくられたが、学派の系統としては主に瑜伽行派の人びとの手に属していた。七世紀に、玄奘や義浄がインドを訪れたころ、大乗仏教は中観・瑜伽行の二派があり、部派仏教では有部と経量部および正量部などが大きな勢力をもっていたと伝えられている。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

密教の隆盛

大乗仏教の二学派が学問仏教と化していくのと併行して、密教が台頭して、やがて多くの信者を獲得し、インド仏教の主流を占めるようになる。

密教とは秘密仏教の意味で、呪術的な儀礼を通して、神秘主義的な教義を説く教えである。すでに原始仏教のころから、インドの一般思想の影響もうけて呪術的な要素は仏教のなかに入りこみ、ことに在家の信者たちの間でそれを排除することは不可能であった。在家信者のなかから興った大乗仏教にはなおさらその傾向がつよく、一方で「空」のような哲学を生みながら、大乗の経典はたいてい「陀羅尼（だらに）」などの呪文を説き、その効果を教えている。仏の法身の教えも、その汎神論的傾向から神秘主義と容易にむすびつき、むしろ神秘主義的解釈のうちに仏教のもっとも究極的立場があると考えられるようになった。こうして、大乗仏教の新しい解釈というかたちで密教の教義が成立する。その時期は七世紀ころで、最初にあらわれた経典が『大日経』である。ややおくれて『金剛頂経』が現われて、大乗と異なる密教の特色が明瞭となった。

密教では諸仏や菩薩・明王の世界を描いたマンダラ〔曼荼羅〕を飾って、その前で印契（いんげい）をむすび、真言（マントラ）を唱えて、ヨーガ〔瑜伽〕を修する。真言は呪（しゅ）とも訳されるが、陀羅尼のことで、そのなかに仏の教えの真意がこめられていると解するゆえに、かく呼ばれる。そして真言に教えの主眼をおくので、密教は真言乗ともよばれる。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

密教独特のヨーガが発達するにつれ、それに応じて、その教理や作法が細かく規定され、種々の流派を生じた。金剛乗とかサハジャ乗、時輪乗などがそれで、なかには左道密教といわれる快楽主義の邪道まであらわれた。般若と方便（慈悲）の合致という理想境を、前者を女性、後者を男性に見たて、その結合に求めるものである。密教は、仏の立場からの行（秘密行、三密）で、克己による鍛練という面が少なく、現実肯定的であるから一般の人には入りやすく歓迎されたが、同時に堕落の危険も内包していたのである。後期の密教はその聖典を「タントラ」（緯、よこ糸。経に対する語）と称し、儀軌（カルパ）・作法を主な内容とする。タントラの語はヒンドゥー教の密教でも聖典の名として使用されるので、密教を広くは「タントラ教」（タントリズム）ともよぶ。金剛乗の左道密教なども、むしろヒンドゥーのタントリズムの影響をうけて成立したものであろう。

イスラーム教徒が北インド各地に侵略を開始した十一世紀ころは、インド仏教は密教の名においてほとんどヒンドゥー教と区別のないものとなっていた。十三世紀の初頭、イスラームの軍隊によってベンガル地方の大寺院が破壊され、仏教の根拠地が失われると、出家の修行者や学僧たちは経巻をたずさえて、難をネパールやチベットに逃れた。そして教団組織の崩壊とともに、仏教徒はいつしかヒンドゥーのうちに吸収され、ここにインド仏教の終焉を迎えるのである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

チベット仏教

チベットが民族的統一をえて建国したのは七世紀のことである。当時、中国は唐の時代で、初期のチベット仏教はネパールと唐の両方からの輸入によって成立した。しかし、地理的にも文化的にもインドとのつながりのほうが深いので、政治的関係がうすれるとともに中国仏教の影響は減り、九世紀以後もっぱらインドからの輸入がつづくことになった。その間にインド僧と中国僧の間で論争が行なわれ、後者が敗退したといういきさつもあった（八世紀後半）。

その時代からいってチベットに入った仏教は大乗仏教で、しかも密教をともなうものであった。ことに、イスラームの侵入にともなう多数のインド僧のチベット移住は密教の隆盛に拍車をかけたと思われる。こうして、密教を主としたチベット仏教の諸派（ニンマ〔古派〕とよばれる）が次々と現われた。そのなかで、十一世紀に入国したアティーシャは密教の出身ではあるが、純粋な大乗の学説をチベットに移入するのに努めた。それもチベット仏教の性格を変えるにはいたらなかったが、後年ツォンカパが出て、改革主義を唱えたとき、それがアティーシャの学説を継承するものであることを宣言している。

十三世紀に蒙古人が中国を征服して元王朝をつくった際、チベットもその治下に入ったが、サキャ派のパスパ（発合思巴、発思巴、八思巴）はかえって皇帝を帰依させ、その援助で蒙古に教線を張るとともに、チベットの政権をも仏教教団が獲得した。これがまた仏教堕落の因をつくり、そのあ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

とをうけて十四世紀にツォンカパの登場を迎える。

ツォンカパは自派をゲルクパと称し、戒律を厳重に守ることによって改革の実をあげた。これが現在チベット仏教の主流をなす宗派である。教団はその後ダライラマとよばれる法主によって相承されることになったが、その継承法は師嗣ではなく、転生という独特の方法による。第五代ダライが政権をも手に入れて、以後チベットは、いわば法王国となっていたが、現代は中華人民共和国の治下に入り、現ダライラマ十四世は現在、インド亡命中である。

近代ヨーロッパの学者はチベット系の仏教をラマ（師匠の意、日本の「上人」と同義）の教えという意味でラマ教（Lamaism）と名づけたが、現在はそれが仏教とは別であると誤解されているのを避けるため、この名称を用いない。

南方仏教

紀元前三世紀に仏教が伝わったスリランカ（セイロン）では、紀元後一世紀には経・律・論の三蔵をセイロン文字で書写したといわれている。これが今日まで南方仏教で聖典として使用されている「パーリ語聖典」である。

さらに五世紀にはブッダゴーサが出て、ほとんど全部の聖典に註釈をつくり、教義を大成した。以後スリランカの仏教は、その確立した教えを忠実に守ることを伝統として今日にいたっている。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

これはインド仏教にも、また中国、日本の仏教にも見られない特色である。さらに同じ態度は、スリランカから伝播した南方諸地域の仏教にも伝わっている。これが日本の仏教徒などから見ると、南方仏教を小乗とけなし、保守的とあざけることになるが、しかし、かれらは自分たちこそ仏の教えを忠実に伝えているとの自負があり、むしろその戒律主義には学ぶべきことが多い。

スリランカの上座部は十一世紀にはビルマに移植され、また十三世紀にはタイに入った。タイからさらにラオス、カンボジアやヴェトナム南部にも普及して、今日の南方仏教の体制ができあがった。その間スリランカにおいて上座部の伝統が一時とだえたとき、ビルマから僧を迎え入れたこともあり、相互に交流がある。

東南アジアにはこのほか、かつてはマライ半島からスマトラ、ジャワ、ボルネオなどにかけても多くの仏教徒が存在したが、その多くは八、九世紀ころ、東インドや南インドからのインド人の植民とともに普及したもので、ヒンドゥー教と混淆した密教的大乗仏教であり、インド本土と同様、イスラームの進攻とともに消滅してしまった。

出家者の教団の確立しているスリランカ上座部が今日まで栄え、密教や大乗仏教がこれらの地域から失われていったということは、仏教のあるべき姿というものについて、なにか一つの示唆を与えているようである。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

インドの仏教復興

十九世紀に入り、イギリスの植民地支配下にインド文化のルネサンスが叫ばれるや、スリランカのダルマパーラなどによるインド仏教復興運動がおこり、ブッダガヤーの仏塔の修復、仏教徒による管理が実現した。この運動は大菩提会とよばれている。さらにまた、不可触とされた下層民衆の間に反ヒンドゥーの旗印として四民平等の仏教をいただく運動がおこり、インド独立をへて、仏滅二千五百年を記念するブッダジャヤンティ（一九五六）の機会にアムベットカルを指導者として仏教への集団改宗を果たした。これによって、インドにおける仏教徒の数は現在三八〇万人に達した。

このほか、チベット人の流出、日本から日本山妙法寺の運動などがあって、インドの仏教はなかなか活発となった。

2　中国の仏教

仏教の初伝

中国の仏教は、伝説によれば、後漢の明帝の永平十年（六七）、大月氏国から迦葉摩騰（カーシャパマータンガ）と竺法蘭が洛陽に来て『四十二章経』を訳出したのにはじまるといわれている。事実上は、前二世紀来の前漢による西域経営の結果として、中国にやってくる西域人たちによって徐々にもたらされていたものであろう。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

仏教伝来の初期にあっては、漢民族は儒教を国是とし、またその文化伝統に誇りを抱いているため、なかなかこの異国の宗教をうけ容れようとしなかった。三国の動乱をへて西晋の時代になると、老荘の思想が貴族の間にひろまり、その気運に乗じて仏教も老荘の教えに合致するものとして、しだいに漢民族の社会に浸透するようになった。当時の仏教はこうして、老荘の思想を媒介として理解され、訳経にも老荘の概念が用いられていた（これは「格義仏教」とよばれている）。

仏教の定着——南北朝時代

仏教が中国に根を下ろし、飛躍的な発展を遂げるのは南北朝時代に入ってからである。それに先立って、西晋が塞外民族の勢力に逐われて江南の地に移り東晋を建てたことが、仏教の南地への進出の第一歩となり、あわせて漢人社会への定着を果たす結果となった。

この時期を画する代表的人物として、われわれは鳩摩羅什（クマーラジーヴァ。三四四—四一三）と、その訳経活動を挙げなければならない。かれは羅什三蔵の名で親まれ、今日までわれわれが尊重、使用している『法華経』をはじめとする多くの大乗経典や、ナーガールジュナの『中論』や『大智度論』など重要論典の訳者として知られている。かれの訳経によって、中国人ははじめて仏教教理の正統な理解に達したといわれる。羅什以前にも多くの仏典が漢訳されており、また、敦煌菩薩といわれた竺法護（ダルマラクシャ。三世紀）のようなすぐれた訳経三蔵もいたが、なおその訳経は中

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

国文としてなじまず、ために羅什訳によってとって代わられた。羅什以前の訳経を今日、「古訳」と称している。

羅什の主な学説は弟子の僧肇らの手で伝えられ、それ以前の老荘的無による解釈に代わって、ここにはじめて般若の空思想が正しく理解されるにいたった。この伝統のなかから後に三論宗が生まれ、また『法華経』を中心とする天台宗が生まれる。

仏教の中国への定着という点ではこのほか羅什に先立って、道安（三一二―八五）による訳経の整理と戒律の整備、廬山の慧遠（三三四―四一六）による禅定や念仏行の実践、その教団としての白蓮社の運動なども逸することはできない。

羅什以後も訳経はますます盛んとなる。なかでも東晋の仏駄跋陀羅（ブッダバドラ）による『華厳経』の訳出と、北涼の曇無讖（ダルマクシェーマ）による『涅槃経』の訳出は、その後の中国仏教の展開に大きな影響を与えた。ことに『涅槃経』は翻訳当初から、その「如来常住、無有変易」と「一切衆生悉有仏性」の教義が般若の空と一見相反するために大きな衝撃をひきおこした。しかし、中国人はどちらかというと否定的な表現よりはこのような積極的肯定の主張のほうが理解しやすかったらしく、この教義は急速にひろまって中国仏教の基本思想となった。

南朝が貴族によって仏教思想を個人的に吸収しようと努めたのに対し（この点は仏教保護者として有名な梁の武帝においてもかわらない）、北朝は国家仏教の色彩が強く、これが後の隋・唐の時

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

代にひきつがれて中国仏教の一大特色となる。ことに北魏はその長い支配期間（三八六―五三四）に、時には仏教排斥を命じた太武帝などいたが、おおむね仏教に厚く、そのもとで仏教も大いに発展した。雲岡や竜門の石窟もその所産である。しかし、僧侶の間に皇帝を如来に見たてる思想などもあらわれた。これは『沙門王者不敬論』を著わした慧遠などときわだった対比をなす。

北魏時代の訳経としては、六世紀初頭の菩提流支（ボーディルチ）などによる唯識説の紹介が重要である。この系統はヴァスバンドゥの『十地経論』を所依としてその教義を展開したので、地論宗とよばれている。

唯識説ではそのあと梁の末期に真諦（パラマールタ。四九九―五六九）によって訳された『摂大乗論』を所依とする摂論宗がある。この学説は南地ではうけ入れられず、まず北地にひろまった。地論宗は後にこの系統に吸収される。

真諦にはそのほか『大乗起信論』の訳出がある。如来蔵思想を説くこの論は地論宗の手で早くから北地にひろまり、やがて後の中国仏教全体に大きな影響を及ぼすことになる。

中国仏教の確立――隋唐時代

南北朝時代は仏教が中国社会に根を下ろした時代といったが、教義の点ではまったくインド仏教の輸入、消化の時代であった。それが咀嚼されて、真に中国独自の仏教に脱皮するのは、隋の時代

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

に入ってからである。

そもそも中国仏教でいう「宗」の概念は、今日われわれが日本仏教について予想するものとはまったく異なっている。それはまず第一に一定の解釈にもとづく教理の体系、つまり学派であって、たがいに他と排除しあう教団を意味しない。その場合、南北朝時代まではたいてい特定の経や論の解釈を通じてのグループであった。それが南北朝末期になると、おびただしい数にのぼる漢訳経典の間で、いずれを最高のものと考えるか種々の基準によって優劣を決め、それによって釈尊一代の説教を統一整理して理解しようとする傾向があらわれた。これを「教相判釈」、略して教判論という。そしてそのような選択の結果によって、新しい宗旨が成立した。それが二蔵、三転法輪を説く吉蔵の三論宗であり、智顗の五時八教説による天台宗などである。以下、このようにして隋から唐の時代にかけて成立した諸宗を略説しておこう。

(1) 三論宗――この宗は前に述べたように羅什の弟子たちの伝えた系統であるが、その教義の確立は隋の吉蔵（五四九―六二三）による（三論とはナーガールジュナの『中論』『十二門論』、アーリヤデーヴァの『百論』をいう）。吉蔵は『三論玄義』を著わしてその宗義を述べたほか、多数の経典に注釈を書いて、空、般若の教義を鼓吹した。

(2) 天台宗――この宗は慧文や南嶽の慧思のあとをうけて、第三祖智顗（五三八―九七）によって教学が大成した。かれは天台山にあって禅定体験をつみかさね、それにもとづいて止観とよぶ独自

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

の修行体系を組織した。また『法華経』を教学の中核におき、その宣布につとめた。天台の教学は三諦円融、一念三千を旗印とし、十界互具の性具説を唱えた。

(3) 三階教――北斉末、末法思想の流行とともにその時世に見合う宗教として、信行によって三階教が唱えられた。三階は仏教の発展を時代によって三段階に分かつもので、第三段階は仏性思想にもとづいて万人を普敬すべしという。この派は実践を重んじ、信徒の結社をもったため、しばしば国から弾圧されている。

(4) 浄土教――三階教と同じく末法相応の教えとして浄土往生を説く。この教えは北魏の曇鸞(四七六―五四二?)がヴァスバンドゥの『浄土論』に注を書き(『往生論註』)、称名念仏を説いたのにはじまる。唐に入って道綽(五六二―六四五)が出て『観無量寿経』にもとづく教義を確立し、その弟子善導(六一三―八一)によって大成した。『観経疏』は善導の教説の基本である。

浄土教は学派というよりは広く民衆にまでおよぶ宗教運動で、その念仏の教えはその後もながく中国民衆に浸透している。

(5) 禅宗――北魏の時代、菩提達摩(ボーディダルマ)によって伝えられたのを初伝とするが、今日見られるような禅の教団の基礎は、六祖といわれる慧能(六三八―七一三)によって固められた。そのあと、江西の馬祖や湖南の石頭によって、後に臨済、曹洞、雲門、法眼、潙仰の五家七宗となって発展するところのいわゆる南宗禅(洪州宗)が確立し、禅の主流となる。その以前には牛頭宗、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

北宗禅、荷沢宗などの系統が盛衰をくりかえした。

禅宗は教外別伝、不立文字と唱え、見性成仏をモットーとするが、これは慧能以後に確立した主張である。所依の経をもたないところにかえって独自の思想を展開し、その表現手段として、語録とか公案の類を多く残した。師嗣相承を重んずるのもその特色である。

(6) 法相宗――玄奘（六〇二―六六四）ははじめ摂論宗で唯識説を学んだがあきたらず、正しい唯識説を求めてインドに留学した。一八年の修学の後、帰朝して『瑜伽師地論』『成唯識論』その他多くの唯識論書を伝え、また『大般若』六〇〇巻はじめ多数の経論を訳出して、訳経三蔵の代表とされている。かれはそれ以前の唯識説関係の訳経は不正確として、自己の「新訳」の正しさを主張した。そのため、かれ以前の訳経を一般に「旧訳」とよぶ。

玄奘は翻訳家として一生を終えたが、その弟子基（六三二―八二。慈恩大師）は師の教えにもとづき、法相宗を組織した。この宗旨は『成唯識論』を基本として学説を組織し、あわせて『倶舎論』などのアビダルマの教学を尊重した。一時はたいへんな盛況で他宗を凌駕したが、三乗を究竟とし、五性各別、一分不成仏の説を主張したため、一乗説に立つ天台宗などの主流から批判され、後に法蔵によって華厳宗が大成するにおよび、急速に力を失った。

(7) 華厳宗――『華厳経』の伝訳後、それにもとづく解釈学者や実践者がしだいに現われたが、そのひとり杜順（五五四―六四〇）を開祖とし、智儼（六〇二―六八）をへて法蔵（六四三―七一二）によ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

って学説の組織体系化が完成した。その説は地論宗をうけ、『大乗起信論』の如来蔵縁起説を媒介として『華厳経』を解釈するもので、重々無尽の法界縁起とよばれる。また衆生ひとりひとりに如来の性徳が現われるといって、これを「性起」とよぶ。法蔵は則天武后に気に入られ、その保護のもとで華厳宗は大勢力に発展した。その背景には、法界縁起の思想が唐帝国のイデオロギーを支える世界観となった点が考えられる。

華厳宗はそのあと、澄観、宗密によってさらに盛大となるが、最後はその教学を自家薬籠のものとした禅宗のうちに吸収された。華厳の教学は天台とならんで、中国の生んだ最高の仏教理論と言えよう。

(8) 律宗――中国の教団制度は、道安による律の整備にはじまるが、そのあと『四分律』にもとづく受戒以下の諸制度の研究に応じて、戒律研究の諸学派が成立した。そのなかでもっとも力をもったのが道宣（五九六―六六七）のはじめた南山律宗である。道宣は一方では仏教史家としても重要である。律蔵を整備しようとする意欲はさきに法顕（三三九―四二〇）のインド留学（その成果として『五分律』の翻訳と『仏国記』の著作がある）を生み、唐代に入って、義浄（六三五―七一三）の留学を生んだ。義浄は『根本説一切有部律』をもたらし、また『南海寄帰内法伝』によって東南アジア諸国の教団の実状を報告した。

律宗がインド伝来の戒律を忠実に守り、それによって出家教団の制度の基本となったのに対し、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

その中国社会慣習との違和感から、独自の規律をつくろうとする動きが禅宗の間で生まれた。それが「清規」とよばれるもので、日常生活万般にわたる規定をふくむ。その確立者は百丈懐海（七二〇―八一四）である。清規の特色の第一は、作務と称して労働を重んじ、僧院の自給自足の生活を認めた点にある。これはインドではおよそ考えられなかった点である。

(9) 密教――中国の密教は善無畏（シュバカラシンハ。六三七―七三五）の『大日経』の訳出にはじまる。ついで金剛智（ヴァジュラボーディ）、不空（アモーガヴァジュラ）によって『金剛頂経』が訳出され、当時のインド密教がそのまま輸入された。善無畏や不空の教えは、それぞれ一行と恵果によって伝えられ、しだいに中国に根づきはじめたが、まだ宗派の形成にならぬうちに会昌の破仏（八四五）にあい、発展の芽を絶たれた。密教は恵果の弟子空海などによって日本に伝えられてから、独自の展開を遂げている。

その後の状勢

宋代以後の仏教は儒教の巻き返しにあってその発展を止められ、ふたたび中国社会の縁辺の位置においやられる。宋の理学は仏教の哲理を己れのものとして、逆に仏教の攻撃に出た。仏教側は応戦のため儒仏道の三教融会を説いたりしたが、かえって独自性を失った。そのあと、元の時代におけるチベット系仏教の導入をへて、禅と念仏の実践をあわせ行なう念仏禅が中国仏教の主流となり、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

今日にいたっている。仏教の影響はしかし儒学者のうえに残り、とくに実践的な王陽明学派のなかに禅の思想の影響が見られる。それはまた居士仏教の運動として中国仏教の底流をかたちづくっている。

3　朝鮮の仏教

日本ではしばしば「三国伝来」の仏教ということを口にする。その三国とは天竺・震旦・本朝すなわちインドと中国と日本である。この流伝経路は奈良時代中期以後の仏教にとっては事実である。しかし、初伝から奈良前期にかけては、仏教は朝鮮半島の諸国――高句麗（高麗）・百済・新羅の三国――経由で輸入された。歴史的には、この三国の仏教が日本に与えた影響は多大である。

朝鮮半島への仏教の流伝は前秦符堅が使いをつかわして高句麗に仏像をもたらした三七二年にはじまるといわれている。以来、高句麗は北魏をはじめとする北朝系の仏教を受容した。新羅には五世紀になってはじめて高句麗から伝えられた。あるいは阿道なる僧が五二七年に伝えたのが最初ともいう。

一方、百済には東晋から三八四年に摩羅難提なる胡僧がはじめて仏教をつたえ、漢山において僧一〇人を度したという。百済は高句麗との対抗上、早くから南朝と政治的交渉をもっており、その後もひきつづいて南朝系の仏教が輸入されたと思われる。日本には百済から五三八年に伝えられた。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

当時の半島諸国の仏教の特色は知られないが、聖徳太子の時代に招請されて渡来した高麗僧慧観は三論宗を伝え、また、後に百済から渡来した道蔵は成実宗を伝えている。後者は梁の時代に南朝で栄えた学派である。

朝鮮半島はその後、隋・唐の帝国統一の余波をうけて、百済、高句麗の順で滅亡し、唐の勢力を阻止した新羅が半島の統一を完成する。この時期、朝鮮の仏教も最盛期を迎える。その主流となったのは、智儼に華厳を学んで海東華厳宗の祖となった義湘（六二五―七〇二）であり、また独学で独自の境地をひらいた元暁（六一八―八六）である。元暁は華厳の教義にくわしく、その著わした注釈類は「海東疏」とよばれて中国で尊重された。かれはまた非僧非俗の生活で民衆の間に入り、仏教の普及に貢献した。なお日本の華厳宗は新羅から審祥を招いてはじめられた。

新羅出身の学者としては法相宗の円測（六一三―九六）が重要である。かれは唐本土で活躍している。そのほか、インドまで赴いた慧超などもいる。

禅宗は九世紀になって輸入されたが、その後、高麗時代になって知訥（一一五八―一二一〇）が出て、曹渓宗をはじめた。

高麗の王朝も仏教を尊崇した。その功績として高麗版大蔵経の開版が挙げられる。また天台宗を再興した義天（一〇五四―一一〇一）も王族の出身である。

李朝は儒教を国是として排仏政策をとったので、その後の仏教は発展をとめられた。現代まで韓

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

国で勢力を占めているのは曹渓宗で、そのなかに華厳教学が融合されている。曹渓宗は、一時日本の統治下に入った僧侶の肉食妻帯の風習を排除して、戒律の厳守に努めている。

4　日本の仏教

仏教初伝と聖徳太子

日本への仏教初伝は、正史たる『日本書紀』によれば、欽明天皇の十三年（五五二）である。しかし『元興寺縁起』や『上宮聖徳法王帝説』によれば五三八年で、このほうが正しいと考えられる。ただし、事実は半島渡来の諸氏族を通じて、それ以前から入っていたことであろう。

渡来系氏族と密接な交渉のあった蘇我氏がおそらく百済聖明王からの経巻、仏像の公伝をとりもち、物部氏らの排仏論者と争ったすえ、これに勝って、仏教が公認されるにいたった。

聖徳太子は蘇我氏と縁が深く、若くして仏教を信奉したが、摂政となって国家の体制を整えるにあたり、大陸の文物、制度とともに積極的に仏教を採り入れた。その制定にかかる十七条憲法は和の貴さをうたい、三宝を敬うことをすすめている。また、自ら仏教を熱心に学び、諸種の慈善事業をおこし、経典を講釈した。法華、勝鬘、維摩の三経に対する注釈『三経義疏』がその著作と伝えられている。

太子のこのようなはたらきは、日本仏教の基礎を固めるうえできわめて大きなものがあったので、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

後に親鸞は太子を「和国の教主」とよんでいる。この評価はすべての仏教徒に通じるものといってよい。太子への尊崇の念はいわゆる太子信仰を生んで、現代まで及んでいる。

南都六宗

太子の定めた方針を継承する大化の新政以後、仏教は朝鮮半島のみならず大陸からも直接伝来するようになり、留学僧の往来も頻繁となった。新文化の吸収を国是とした政府は大寺院を建てて仏教の吸収につとめた。しかし一方では日本古来の宗教、習俗を守ろうとする勢力も根づよく、仏教側は妥協策として「本地垂迹（ほんじすいじゃく）」の説をうち立てた。日本の神々をもって、インドの諸仏、菩薩の権化と見なすのである。このようないわゆる神仏習合は、その後もながく日本仏教の特色となっている。

奈良時代はこうして政府の保護のもと、仏教が土着するための努力が開始された時代であるが、もう一つ教学の面でも、ひたすら中国の仏教の吸収につとめた時代でもある。その結果として、輸入経路に応じて種々の学派が成立した。世にいう南都六宗である。

(1) 三論宗――高麗の慧観によって太子の時代に伝わった。慧観は元興寺に住して三論を講じた。そのあとも元興寺がこの学の中心となって多くの学者を輩出した。

(2) 成実宗――百済の道蔵が七二一年に来日して『成実論』を講じたのがはじまりであるが、最

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

終的には三論宗の付宗にとどまった。

(3) 法相宗――唐に留学した道昭（六二九―七〇〇）が白雉年間（六五三）に伝えたのをはじめとし、以後、日本の留学僧や新羅の僧によって四次にわたって輸入された。興福寺を中心とし、法隆寺、薬師寺などがその伝統をうけついで現在まで及んでいる。この付宗に、(4) 倶舎宗がある。

法相宗は唯識説と倶舎の学を伝承して、長く仏教教学の中心となり、学問所として宗派を問わずに重んぜられた。

(5) 華厳宗――新羅の審祥が良弁（六八九―七七三）に迎えられて、東大寺で『華厳経』を講じたのが華厳宗の初伝で、良弁はその弟子として日本の華厳宗を確立した。以来、東大寺を中心として、その教学を今日に伝えている。華厳宗は大乗仏教の基本として、その後もながく影響力をもち、鎌倉時代には高弁（明恵）、凝然のような高僧が出て教団の改革と、新しい教義の展開を示した。

(6) 律宗――唐の鑑真（六八七―七六三）が、五度にわたる挫折にもめげず、ついに日本への渡来を果たした話は有名であるが、かれによる四分律宗の伝来と戒壇の設立は、それによってはじめて日本で正式な受戒儀式による僧侶の得度が可能となった点できわめて重要な意義をもつ。かれの開いた唐招提寺は、そのあと律宗の本山となった。

奈良時代には、毎年得度できる僧侶の数（年分度者）も国家によって限定され、すべてが国家の統制下にあった。東大寺を中心とし、諸国に国分寺をおいて鎮護国家を祈らせたのも、統一国家の

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

勢威のシンボルとしての意義が大きい。こうして、国が保護・管理する一方で、僧侶が直接民衆に布教し、公益の事業をおこすことは極度におそれられ、禁ぜられた。行基（六六八―七四九）がはじめに弾圧をうけたのも、徒党をくみ、勝手に土木工事などをおこしたとの理由による。しかし、東大寺を造るにあたっては行基の影響力を無視できず、これを勧請元として利用している。権力とのむすびつきは仏教僧侶の腐敗をもたらした。

天台宗と真言宗

平安時代に入って、最澄（七六六―八二二）および空海（七七三―八三五）によって、唐から新しい仏教が輸入された。

(1) 天台宗――最澄は南都仏教の腐敗をなげき、真の修行僧を育てて国の規範たらしめようとし、京都の東北の比叡山に延暦寺をたてた。南都に対抗して年分度者の申請をしてその許可を得、新たに大乗の戒壇をもうけ、大乗円頓戒による得度の法をきめた。南都の戒壇による具足戒は小乗戒であり、利他の願行をふくまないというのである。ここに日本独自の出家の儀式が成立することになる。これはアジアの他の諸地域に見られない特色である。

最澄は教学としては天台宗をうけつぎ、法華経の一乗、一切皆成の思想を基本にすえた教学をつくりあげたが、同時に、禅・念仏・密教をもとり入れて、大乗の総合をめざした。これがその後も

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

叡山が学問の中心として多くの僧侶を集め、ひいては鎌倉時代の新仏教諸宗を生みだす母胎となったゆえんである。

(2) 真言宗――空海は最澄と同時に留学したが長安にとどまり、不空の弟子恵果から直接に真言密教を伝授されて帰国、高野山にその新しい道場をひらいた。かれは若年のころ私度僧として苦行し、最澄とは対照的境遇にあった。また南都の仏教とくに華厳宗とも親しく、最澄のような旧仏教に対する反駁も少ない。戒律に関しても、具足戒を守り、真言律宗の名でこれを伝えるようになる。さらに、行基の場合に見られるような民衆への教化や利生の事業も伝えられるなど、ことごとく最澄とちがった行き方をしている。その影響は今日まで四国遍路に見られるような大師信仰として全国的にひろまっている。

真言宗の教義は『大日経』に基本をおき、『金剛頂経』を加味し、両者の教義を胎蔵界・金剛界の両部曼荼羅にあらわし、真言（マントラ）念誦の力で、仏の三密（身語意の秘密のはたらき）の加持をうけて、仏の世界に入ることを説く。空海はこれを「即身成仏」「即事而真」と表現している。その深奥は容易にうかがいえないが、祈禱による現世利益の面で貴族から民衆にいたるまでの支持を得た。

なお、天台宗でも最澄の意志により弟子の円仁が唐にわたって密教を改めて伝えた。以来、これを天台宗の密教の意味で「台密」とよび、これに対し真言宗を、京都の東寺（教王護国寺）に根拠地

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

をもったゆえに「東密」とよびならわしている。

天台、真言の両宗は、教団組織が確立し、たがいに他と容れない組織となった点で、わが国の宗派の原型を示すものである。またその教義についても、ともに一切皆成の立場にたち、一方が本覚を主張し、他は即身成仏を言うなど、気も遠くなるような長い修行を要請するインド仏教の主張にくらべれば、きわめて現実肯定に近い教理を主張している。これもまた、その後の日本仏教の特色を示すものといえる。同時に、朝廷・貴族の保護をうけ、国家仏教的色彩をぬぐいさることができなかった点では、南都仏教とも同じ部類に入る。

浄土思想の盛行

平安時代中期になると、比叡山のなかに念仏による浄土往生の思想が盛んとなり、貴族を通じ、しだいに民衆にも浸透するようになる。これは地方における争乱の連続と、仏教にいう末法到来(後冷泉天皇の永承七年〔一〇五二〕が仏滅二千年にあたり、以後末法の世に入るといわれた)をそれと重ね合わせ、厭離穢土、欣求浄土の願いを真剣に抱くようになったとされる。ことに源信(九四二―一〇一七)の『往生要集』は大きな影響を与え、以後、念仏の動きが活発となった。

この形勢のなかで、法然(一一三三―一二一二)が出て、往生のためには他の雑行はいらないと、専修念仏を唱え、天台宗からの独立を宣言したのが浄土宗のはじまりである。その弟子に親鸞(一

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

一七三―一二六二）が出て、さらに行としての念仏にかわって、弥陀の慈悲によってわれわれの往生が決定しているとの信にもとづく報恩の念仏を強調して、浄土宗からも独立した新しい宗旨をつくりあげた。これが浄土真宗である。

法然や親鸞は、中国の曇鸞、道綽、善導の教えをうけつぐものとその宗旨の系譜を主張しているが、教団の運動としては純粋に日本発生のものである。その運動の初期には叡山からの圧迫がはげしく、朝廷から流罪にされたりしたが、かえって民衆の間に根づよい力をもつようになった。

この浄土宗や真宗の開宗をもって仏教は新しい時代を迎える。いわゆる鎌倉新仏教の時代である。

禅宗の伝来

浄土教の盛行と並んで鎌倉時代を彩るのは、大陸からの禅宗各派の伝来である。禅宗（北宗禅）はすでに最澄らによっても伝えられていたが、中国のように独立の教団の形成にいたらなかった。最澄は天台の禅というべき止観の法を基本としていたからである。その後、中国との公的交渉がとだえるに及び、九世紀以後の南宗禅の主流はついに伝えられる機会を失って平安末にいたった。

平安末期、宋との民間貿易が回復するに及び、禅宗の伝来を求める声が生まれ、栄西（一一四一―一二一五）が二度目の渡宋の際その将来に成功した。かれは鎌倉幕府のうしろ立てを得て、建仁寺を建て禅宗の道場としたが、最初は天台の寓宗の地位にとどまった。しかし、つづく道元その他

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

の入宋や、あいつぐ中国僧の渡来によって、多くの系統の禅宗がひろまった。その系統は前後あわせて二四流といわれるが、当時の派としては臨済と曹洞の二系統に帰着する（後に江戸時代になって、隠元によってもたらされた一派は黄檗宗と名のるが、中国でいえば臨済の系統である）。

道元（一二〇〇―五三）は叡山で得度し、建仁寺で学んだ後、入宋し、諸方遍歴の後、曹洞宗の系統に属する如浄の法を伝えた。かれ自身は曹洞宗とも禅宗とも名のることを嫌い、仏心宗と称したが、その後継者たちは曹洞宗の名で独立の教団を組織した。道元の主著は『正法眼蔵』で、そのなかで本証妙修、修証一如の綿密な行持の宗教を高揚している。叢林における「一箇半箇の接得」を立場とするのは、最澄の行き方に似ている。しかし門流の時代に入って、祈禱などもとり入れて、天台、真言の勢力に入りこみ、これを吸収して急速に全国的にひろまった。

臨済の系統はこれに対し、中国的伝統を重んじて、公案による見性悟道の修行を主張した。この派は鎌倉や京都において、将軍など中央の武家貴族の帰依をうけて、かつての天台、真言の地位にとって代わって勢力を拡大した。禅は自己鍛練と簡潔な教理という点で、行動的な武士階級の人気を得たものである。

禅はまた、茶をはじめ宋から日常の食事の風習などもあわせもたらし、日本人の食住の生活に大きな影響を与えた。また、建築、絵画など文化の面でも、鎌倉・室町時代の指導的役割を担った。禅宗僧侶はいわば当時の外国帰りのインテリだったわけで、儒学や詩文もまた禅僧たちの手で守り

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

育てられた。これを京鎌倉の主要禅院の称である五山にちなんで、五山文学とよんでいる。

日蓮宗と時宗

鎌倉時代の新宗教運動の最後を飾るものとして、日蓮（一二二二―八二）による法華宗（日蓮宗）の開教と、一遍にはじまる時衆の動きにふれねばならない。

日蓮も、法然をはじめとする諸宗の祖師同様、はじめに叡山に学び、そこで法華経をただ一つの所依とする宗旨をえらびとって、独立を宣言した。日蓮は他宗の攻撃に急で、ために幕府から流罪にされたが、元寇に際し、その立正安国の主張にもとづく予言が認められて赦免された。かれの場合も『法華経』の題目を唱えることに行の基本を集約するという簡潔性が人びとにうけ入れられたものである。その一方、日本の神々を仏教守護の神として尊崇するなど、民族主義的色彩も強かった。これは、浄土、念仏の諸宗が超越的宗教もしくは個人の内面性を重んじ、国家を下位におこうとしたのと異なる。

法華宗はその後、関東を中心にひろまり、室町時代には京の町衆の間に大きな勢力をもった。

一遍（一二三九―八九）は平安時代の中期に出た空也（九〇三―七二）の系統をひく、諸国遊行の聖の念仏行者であり、簡単な教義とやさしい説法で民衆をひきつけた。「時衆」とはその意味について諸説あるが、その時その時の衆りという意味らしい。一所不住の徒で固定した教団ではなかった

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

からである。一遍もまた神祇を重んじて、神仏融和を説いている。

同じ遊行の念仏を説く宗派としては、このほか、良忍（一〇七二―一一三二）にはじまる融通念仏宗がある。

以上、鎌倉時代にはじまった諸宗は、その教義が、念仏とか禅とか法華経というように、一事にもっぱらであること、国家の宗教としてでなく個人の宗教として出発していること、貴族以外の多数の民衆の間にその教団の基礎をおいた点などで、共通する特色がある。日本仏教は鎌倉時代になって、はじめて日本の風土に土着したといえるであろう。

他方、鎌倉新仏教に刺激されて、南都の旧仏教のなかから、解脱上人貞慶や、栂尾の明恵上人高弁らによる戒律復興、教学復興の動きがあったことは特筆すべきである。

室町時代以後の仏教

室町時代はすでに一部ふれたように、鎌倉仏教の延長線上にある。新仏教の全国への普及というのも、実は南北朝の動乱を契機としたその後の動きであり、そういうなかに、総持寺の瑩山紹瑾（一二六八―一三二五）による曹洞宗の拡張があり、蓮如（一四一五―九九）による真宗教団の拡大がある。真宗教団はそのなかから、宗教王国の独立をめざす一向一揆を生み、一時は事実上、本願寺が封建領主的勢力となった。一方、法華宗も、京都で町衆による法華一揆を生んでいる。しかし、

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

このような動きは、織田信長、豊臣秀吉による天下統一にともない、完全に屈服させられた。

信長らによる新しい体制は、同時に叡山や南都、高野などの旧仏教勢力に対しても攻撃をしかけ、仏教教団は荘園領主としてもっていた権力をいっさい根こそぎにされる。

こうして俗世的権力を剝奪された仏教は、そのあと江戸幕府によって完全な管理体制下におかれるとともに、キリスト教（吉利支丹、切支丹）から日本人を守るための教化政策にくりこまれ、檀家制度のもとで戸籍係の役を果たさせられる。

このような状況のもと、仏教は経済的には安定したが、往年のエネルギーは失われ、新しい宗教運動を生むこともなく、明治時代を迎えるにいたる。しかし、その間に、安定した体制は仏教の教学研究という面では格段の発展をもたらし、近代における仏教研究発展の素地をつくった。

明治維新前後、民族主義の台頭によって仏教は排仏運動に直面したが、それをきっかけに仏教浄化の運動がおこり、多くのすぐれた僧侶が輩出して、各宗それぞれに近代的教団として脱皮し、今日にいたっている。

なお、近代の民衆的仏教運動として、数多くの新興教団が出た。その多くは日蓮宗の系統であるが、すべてが在家仏教運動の形態をとっている。

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from “Maruzen eBook Library” on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content
from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

eBook Library

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

参考文献

〔仏教入門・概説〕

渡辺照宏『仏教』（岩波新書）、第二版、一九七四

ベック『仏教』（渡辺照宏・渡辺重朗訳）上下（岩波文庫）、一九七七

金岡秀友・田村芳朗・柳田聖山『仏教入門』筑摩書房、一九八一（座談会と参考文献）

〔辞　典〕

宇井伯寿監修『コンサイス仏教辞典』大東出版社、一九三八（新版、一九八〇）

多屋頼俊・横超慧日・舟橋一哉編『仏教学辞典』法蔵館、一九五五

中村元監修『新・仏教辞典』誠信書房、一九六二

――『仏教語大辞典』東京書籍、一九七五（合本縮刷版、一九八一）

水野弘元監修『仏典解題事典』春秋社、第二版、一九七八

〔仏教史〕

渡辺照宏『仏教のあゆみ』大法輪閣、一九五七

平川　彰『インド・中国・日本仏教通史』春秋社、一九七七

――『インド仏教史』上下、春秋社、一九七四、七九

奈良康明『仏教史Ⅰ』（世界宗教史叢書7）山川出版社、一九七九（インド、東南アジア）

龍山章真著・桜部建補注『印度仏教史』法蔵館、一九七七

早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学『インド思想史』東京大学出版会、一九八二

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

山崎宏・笠原一男監修『仏教史年表』法蔵館、一九七九
鎌田茂雄『中国仏教史』（岩波全書）、一九七八
家永三郎・赤松俊秀・圭室諦成『日本仏教史』全三巻、法蔵館、一九六七
田村芳朗『日本仏教史入門』角川書店、一九六九

〔仏　伝〕

水野弘元『釈尊の生涯』春秋社、一九六〇
渡辺照宏『新釈尊伝』大法輪閣、一九六六
中村　元『ゴータマ・ブッダ―釈尊の生涯』（『中村元選集』11）春秋社、一九六九
前田恵学『釈尊』山喜房仏書林、一九七二
早島鏡正『ゴータマ・ブッダ』（人類の知的遺産3）講談社、一九七九

〔教理・思想〕

水野弘元『原始仏教』（サーラ叢書4）平楽寺書店、一九五六
J・シチェルバトスコイ『小乗仏教概論』（金岡秀友訳）理想社、一九六三
――『大乗仏教概論』（金岡秀友訳）理想社、一九五八
宮本正尊・花山信勝・結城令聞・中村元編集『講座仏教』全7巻、大蔵出版、改訂新版、一九六七
1『仏教の思想(1)』、2『仏教の思想(2)』、3『インドの仏教』、4『中国の仏教』、5『日本の仏教』、6『日本仏教の宗派(1)』、7『日本仏教の宗派(2)』
宇野精一・中村元・玉城康四郎編集『仏教思想Iインド的展開』（講座東洋思想5）東京大学出版会、一九六三
――編集『仏教思想II中国的展開』（講座東洋思想6）、一九六三
――編集『東洋思想の日本的展開』（講座東洋思想10）、一九六七
塚本善隆・増谷文雄・梶山雄一・上山春平・梅原猛編『仏教の思想』全12巻、角川書店、一九六九―七〇
1増谷・梅原『知恵と慈悲〈ブッダ〉』、2桜部・

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

上山『存在の分析〈アビダルマ〉』、3梶山・上山『空の論理〈中観〉』、4服部・上山『認識と超越〈唯識〉』、5田村・梅原『絶対の真理〈天台〉』、6鎌田・上山『無限の世界観〈華厳〉』、7柳田・梅原『無の探究〈中国禅〉』、8塚本・梅原『不安と欣求〈中国浄土〉』、9宮坂・梅原『生命の海〈空海〉』、10増谷・梅原『絶望と歓喜〈親鸞〉』、11高崎・梅原『古仏のまねび〈道元〉』、12紀野・梅原『永遠のいのち〈日蓮〉』

長尾雅人・中村元監修、三枝充悳編『講座仏教思想』全7巻、理想社、一九七四―七五、八二

1『存在論／時間論』、2『認識論／論理学』、3『倫理学／教育学』、4『人間学／心理学』、5『宗教論／真理・価値観』、6『人生観』、7『文学論／芸術論』

平川彰・梶山雄一・高崎直道編『講座大乗仏教』全10巻、春秋社、一九八二―八五

1『大乗仏教とは何か』、2『般若思想』、3『華厳思想』、4『法華思想』、5『浄土思想』、6『如来蔵思想』、7『中観思想』、8『唯識思想』、9『認識論と論理学』、10『大乗仏教とその周辺』

中村　元『ナーガールジュナ』（人類の知的遺産13）講談社、一九八〇

三枝充悳『ヴァスバンドゥ』（人類の知的遺産14）、一九八三

柳田聖山『ダルマ』（人類の知的遺産16）、一九八一

金岡秀友『密教の哲学』（サーラ叢書18）平楽寺書店、一九六九

松長有慶『密教の歴史』（サーラ叢書19）、一九六九

〔教団・戒律〕

平川　彰『原始仏教の研究』春秋社、一九六四

――『生活の中の仏教』春秋社、一九六六

〔仏　典〕

渡辺照宏『お経の話』（岩波新書）、一九六七

水野弘元『経典―その成立と展開』佼成出版、一九八

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

○

勝又俊教・古田紹欽編『大乗仏典入門』大蔵出版、一九八〇

『現代人の仏教』全12巻、筑摩書房、一九六五―六八

1増谷文雄『智慧と愛のことば〈阿含経〉』、2宮坂宥勝『真理の花たば〈法句経〉』、3石田瑞麿『実践への道〈般若・維摩経〉』、4玉城康四郎『永遠の世界観〈華厳経〉』、5紀野一義『いのちの世界〈法華経〉』、6早島鏡正『人間の願い〈無量寿経〉』、7田村芳朗『人間性の発見〈涅槃経〉』、8渡辺照宏『愛と平和の象徴〈弥勒経〉』、9金岡秀友『さとりの秘密〈理趣経〉』、10石上善応『東の智慧・西の智慧〈弥蘭陀王問経〉』、11阿部肇一『禅の世界〈公案〉』、12増谷文雄『仏教概論』

梶山雄一『般若経』（中公新書）、一九七六

〔現代語訳〕

中村元訳『ブッダのことば―スッタニパータ』（岩波文庫）、一九五八

――訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』（岩波文庫）、一九七八

――訳『ブッダ最後の旅』（岩波文庫）、一九八〇

――訳『仏弟子の告白―テーラガーター』（岩波文庫）、一九八二

――訳『尼僧の告白―テーリーガーター』（岩波文庫）、一九八二

中村元・早島鏡正訳『ミリンダ王の問い―インドとギリシャとの対決』全3巻（東洋文庫）平凡社、一九六二―六四

中村元・紀野一義訳注『般若心経・金剛般若経』（岩波文庫）、一九六〇

坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上中下（岩波文庫）、一九六二―六七

中村元・早島鏡正・紀野一義『浄土三部経』上下（岩波文庫）、一九六三―六四

長尾雅人訳注『維摩経』（中公文庫）、一九七三

三枝充悳『大智度論の物語』(一)(二)（レグルス文庫）第三文明社、一九七三、七七

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

シャーンティデーヴァ『悟りへの道』（金倉圓照訳）、（サーラ叢書9）平楽寺書店、一九五八
モークシャカラグプタ『論理のことば』（梶山雄一訳注）（中公文庫）、一九七五
中村元編『仏典Ⅰ』（世界古典文学全集）筑摩書房、一九六六〔原始仏教聖典〕
――編『仏典Ⅱ』（世界古典文学全集）、一九六六〔大乗仏典〕
長尾雅人編『バラモン教典・原始仏典』（世界の名著1）中央公論社、一九六九
――編『大乗仏典』（世界の名著2）、一九六七
長尾雅人・梶山雄一監修『大乗仏典』全15巻、中央公論社、一九七四―七五
1『般若部経典』金剛般若経、善勇猛般若経（長尾雅人・戸崎宏正訳）、2・3『八千頌般若経』ⅠⅡ（梶山雄一・丹治昭義訳）、4・5『法華経』ⅠⅡ（松濤誠廉訳）、6『浄土三部経』（山口益・森三樹三郎・桜部建訳）、7『維摩経・首楞厳三昧経』（長尾雅人・桜部建訳）、8『十地経』（荒牧典俊訳）、9『宝積部経典』迦葉品、護国尊者所問経、郁伽長者所問経（長尾雅人・桜部建訳）、10・11『三昧王経』（田村智淳・一郷正道訳）、12『如来蔵系経典』如来蔵経、不増不減経、勝鬘経、華厳経性起品、智光明荘厳経（高崎直道訳）、13アシュヴァゴーシャ（馬鳴）『ブッダ・チャリタ』（原実訳）、14『龍樹論集』（瓜生津隆真・梶山雄一訳）、15『世親論集』（長尾雅人・梶山雄一・荒牧典俊訳）
岩本裕編訳『仏教聖典選』全7巻、別巻1、読売新聞社、一九七四―七六
1『初期経典』、2『仏伝文学・仏教説話』、3『大乗仏典㈠』法華経抄、4『大乗仏典㈡』一万頌般若、七百頌般若、金光明経、5『大乗経典㈢』華厳経入法界品抄、6『大乗仏典㈣』大無量寿経、薬師如来本願経、悲華経抄、7『密教経典』、別巻『仏教事典』
佐藤密雄『律蔵』（仏典講座4）大蔵出版、一九七二
石田瑞麿『梵網経』（仏典講座14）、一九七一
桜部　建『倶舎論』（仏典講座18）、一九八一
平川　彰『大乗起信論』（仏典講座22）、一九七三

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

――『八宗綱要』上下（仏典講座39）、一九八〇―八一
坂内龍雄『真言陀羅尼』平河出版社、一九八一
三枝充悳『中論』上中下（レグルス文庫）、一九八四

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content
from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

eBook Library

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

用 語 索 引

太字はとくに詳しい説明のあるページを示す.

ア 行

アヴァダーナ(比喩譚) 22–3
アカニシュタ →色究竟天
アーガマ →阿含
アートマン →我
アビダルマ(阿毘達磨) 11, 14, 97, 231
アムリタ →不死
アーラヤ識 116, 142, **180**, 181, 187
アルハット →阿羅漢
阿含(アーガマ, 阿含経) 10–11, 14, 97
阿闍梨(軌範師) 218
阿修羅 119
阿耨多羅三藐三菩提 46, 147
阿毘達磨 →アビダルマ
阿惟越致 202
阿羅漢(アルハット) 46–7, **198**, 199
阿頼耶 →アーラヤ識
阿黎耶 →アーラヤ識
愛(渇愛) 85, 138–40
愛語 166
愛別離苦 130
悪作(心所) 133
悪作 →突吉羅
安居 36, 222
イッチャンティカ(一闡提) 210
異生 197
異熟 126; ～因 110–1; ～果 110–1
意(マナス) 101, 104, 173–7, 179, 181, 187
意業 125
一乗 206, 208–10; ～思想 194, 208
一来 198
一向一揆 260
一向記 80
一切皆苦 85
一切皆空 93, 114
一切経 16
一切衆生悉有仏性 190, 193
一切法 97–9
一生補処 54, 202; ～の菩薩 54, 204
一闡提 →イッチャンティカ
一体の三宝 9
因縁(四縁) 110, 112
因縁(由来) 221
有 bhava 123, 139–41
有 bhāva 123
有為 90, 108; ～法 90, 102
有学の聖人 199
有垢真如 191
有身見 131
有頂天 123
有部(説一切有部) 104, 109, **231**
有余依涅槃 147
有力の能作因 113
有漏 107; ～業 126; ～智 108
優婆夷 215
優婆塞 215
慧 153, 160–3; ～解脱 164
回向(廻向) 166
依他起性 183–4
円成実性 184
縁覚乗 206
縁起(～説, ～の理, ～の法則) 29, 66, 68, **70–7**, 85, 87–8, **91–3**, 106, 110, 133–43; ～法頌 **37**, 66
縁生 →縁起
和尚 218

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo

悪作　→あくさ
応供(阿羅漢)　46–7, 198
応身　62
黄檗宗　258
怨憎会苦　130

カ　行

カルマン　→業
ガナ　211
果報　126, 175
過去仏(過去七仏)　53–4
我(個我，アートマン)　**82–4**, 105, 117, 126, 146, 180
我所　181；～執　181
我慢　131
迦稀那衣法　222
餓鬼　119, **120**
戒　150, 153, **154–6**
戒禁取見　131
戒本　219
界　102
海東華厳宗　**250**
格義仏教　241
覚支　162
学　154
渇愛　→愛
羯磨　→こんま
観(毘鉢舎那)　157–8
灌頂位　201
願(誓願)　170
軌範師　→阿闍梨
喜　166
帰依処　**4**
偽経　16
疑　131
客塵煩悩　187
経(スートラ)　14, 16
教相判釈　244
境　103
境識俱泯　185
憍　131
行(サンスカーラ)　84, **88–90**, **100–2**, **124**, 128, **134–5**, **177**
行(修行)　163–70
九次第定　158, **159**
口業　125
苦(四苦八苦)　72, 85–6
苦行　29
苦集　79, 133
苦諦　→四諦
苦滅　79, 87
倶有因　110, **113**
倶分解脱　164
具足戒　222
空性　93；～説　**114**
空無辺処　159
熏習　180
化身　62
仮　95, 178, 196
灰身滅智　148
悔過(悔過法)　221
華厳宗　246, 250, 253
解脱　117, 147；～知見　**162**
結界　217
結集　13, 41, **42**
結生の識(結生識)　135, 137
見　131
見取(見取見)　131
見道　153, 198
犍度　222
現前僧伽　217
現法楽住　157
還滅の縁起　142
虚妄分別　183
虚空　106
五位(～七十五法)　103–5
五蘊　97–9, **100**
五蘊皆空　**97**, 114
五蘊無我　83
五果　110
五戒　154–5
五蓋　133, 189
五学処　154
五境　102

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

五下分結 132
五見 131
五根(器官の五根) 101
五根(三十七覚支の一つ) 163
五取蘊 100, 140
五趣 119
五衆 216
五上分結 132
五停心観 158
五智五仏の説 62
五分法身 58, 161
五力 163
後得智 161, 185
語業 125
降魔 28, **30**
業(カルマン) 89, 111, 117, **124–6**, 177; ～論者 124; ～処 158
根 100, 103
根本分裂 228
悟沈 133
羯磨 218–9
言説諦 96

サ 行

サンガ(僧伽) 3, 211
サンサーラ →輪廻
サンスカーラ →行
在纏位の法身 149, 191
三阿僧祇劫 51
三悪道 119
三有 123
三科 99
三界 119, 121–3; ～唯心 124, 178
三階教 245
三学 153–4
三帰依文 6
三帰礼文 6–7
三解脱門 169
三結 132
三事和合 103, 137
三聚浄戒 156
三十七覚支 162
三十二大人相 50, 52
三性 184
三乗 206–10
三世実有法体恒有 **108–9**, 231
三世十方の諸仏 56
三千大千世界 57
三蔵 14
三転十二行相 74
三毒の煩悩 129
三念住 52
三不善根 129
三宝 4–5
三法印 80
三摩地 →定
三摩呬他 →等引
三摩鉢底 →等至
三昧 →定
三明六通 50, 52
三論宗 244, 250, 252
シャーストラ →論
ジャータカ(本生話) 22–3
止(舎摩他) 157
止観 157
四依 222–3
四縁 110
四繋 132
四向四果 198
四衆 215
四正勤(四正断) 152, 162
四聖諦 →四諦
四姓平等 209
四摂法 166
四神足(四如意足) 162
四善根 200
四禅 152, **159**
四双八輩 198
四諦(～説) 31, **70–9**, 85, 99, 107, 116, 124, 144, 149
四顚倒 152
四答 80
四如意足 →四神足
四念処 152, 162

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

四不壊浄 156, 164
四暴流 132
四方僧伽 217
四法印 80
四梵住 →四無量心
四無畏 51
四無色定 158–9
四無量心(四梵住) 166
四門出遊(四門遊観) 25
四軛 132
四漏 132
地獄(奈落) 119, 120
思慧 160
士用果 110, 112
自覚覚他覚行窮満 31, 48
自業自得 173
自恣 222
自性 93, 114
自性清浄心 186–92
持戒 167–8
時衆(時宗) 259
慈 161
式叉摩那 216
色 83, 100
色界 122; ～定 159
色究竟天(アカニシュタ) 122–3
色身 59, 62
色即是空空即是色 178, 186
色法 104
識 vijñāna 84, **100**, 104, **134–7, 173–7, 179, 182**
識 vijñapti 182
識無辺処 159
七覚支 163
七結 132
七衆 216
七心界 103
七仏通誡の偈 171
実際 94
習気 177, 180
集諦 →四諦
沙門 25–6
沙弥 216; ～尼 216
舎摩他 →止
舎利八分 41
娑婆世界 55–6, **57**
捨 130, 159, 163, 166
捨堕 220
捨置記 80
邪見 131
釈提桓因 →帝釈天
取 101, 139–40
須陀洹 →預流
須弥山 **57**, 121–2
種姓人 200
種子 180
受 83, 100, 138
受戒 222
受具 222
受用身 62
修 150
修慧 161
修道 153, 199
授記 54, 56
衆 215
衆学法 221
十地説 202
十善業道 156
十難 78
十波羅蜜 170
十力 51
十四捨置記 78
十四無記 77
十二支縁起(十二縁起, 十二因縁) 74–6, **133–43**, 177
十二処(十二入) 97–99, **102**
十八界 97–100, **102**
十八不共仏法 50–1
処 101
初転法輪 31, 72
初発心 202
所縁 113, 136; ～縁 110, 112
諸行無常 81
諸法無我 82

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

小乗(～仏教) 10–1, 13, 166, 207, 232
正定聚 200
正性決定 203
正性離生 200
生死(～輪廻, ～流転) 116
生死即涅槃 124; ～煩悩即菩提 148
生身 59
声聞乗 206
清浄 77, 108, 128
勝義諦 95
聖 197
摂衆生戒 156, 169
摂善法戒 156
摂律儀戒 156
上座(長老) 218
上座部 228
成実宗 250, 252
成道 28
定 153, **156–60**, 163
浄土 55; ～教 165, 245; ～信仰 194
浄土宗 256
浄土真宗 257
乗 207
掉挙 133
静慮 157
心 104, **173–7**, 179
心一境性 157
心王 104, 175
心解脱 164
心所法(心所有法, 心相応行) 104, 187
心生滅 192
心真如 192
心相続 **176**, 179
心不相応行法 104–5
心法 104
身業 125
信 163–5, 193–5; ～解脱 164
真言 235
真言宗 255
真実 94
真諦 95
真如 48, 94
進具 222
清規 248
瞋(瞋恚) 129
睡眠 133
随信行者 164, 201
随法行者 164, 201
随眠 129
世俗諦 95
世尊 47
世第一法 200
施, 戒, 生天の教え 164
施設 95, 196
誓願 56, 151, 165
刹那滅 176
説一切有部 →有部
染汚の意 181
禅 157
禅師 157, 218
禅宗 245, 257
禅定 **29**, 151, **157–8**, 169
相応因 110, 112
曹渓宗 250
曹洞宗 258
僧(僧伽) →サンガ
僧残 220
想 83, 100
増上縁 110, 113
増上果 110, 112
雑染 77, 108, 128
即身成仏 256
触(六境) 102
触(十二支縁起) 137

タ 行

タターガタ →如来
ダルマ →法
タントラ教 236
ダンマ →法
他受用身 62
陀羅尼 235

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

太子信仰 252
台密 255
帝釈天(天帝釈, 釈提桓因) 120, 122
大師信仰 255
大衆部 228
大乗(～仏教) 10–3, 165, 207, **232**; ～経 15; ～経典 15; ～非仏説 10
大乗戒 156
大蔵経 16
大般涅槃 140, 147
大悲 52
大悲闡提 210
大力の菩薩 203
第一義諦 95
提舎尼 221
単堕 221
智 170; ～資糧 169
癡 130
畜生 119
択法 161, 163
択滅 107, 148
中道 30–1, 76, 150–1
中観派 114, 179, 195, **234**
偸蘭遮 221
長老 →上座
テーラ・ヴァーダ(長老派) 230
天帝釈 →帝釈天
天台宗 244, 254
天竜八部衆 119
転識得智 184
転依 184–5
纏(～の煩悩) 129
度 168
東密 255
等引(三摩呬他) 157
等持 →定
等至(三摩鉢底) 157
等無間縁 110, 112–3, 177
等流果 110–1
等流身 61
同事 166
同類因 110–1
道 150
道諦 →四諦
独覚乗 206
毒矢の喩え 78
突吉羅 221
貪 129

ナ 行

奈落 →地獄
南無三宝 7
南方上座部 230
南方仏教 238
ニルヴァーナ →涅槃
二資糧 169
二乗 207–9
日蓮宗 259
入滅 38
如去 48–9
如来(タターガタ) 9, 45–6, **48–9**, 61, 78; ～の十号 46
如来蔵 149, 190–3
如来蔵思想 190–5, 208
人施設 196
任意捨命 40
忍 169
忍辱 167, 169
涅槃(ニルヴァーナ) 5, 106, **144–7**
涅槃寂静 86
念 159, 162
念仏 157
能作因 110, 112

ハ 行

パリニッバーナ(般涅槃) 38
波逸提 220
波羅夷 220
波羅提木叉 219
波羅提提舎尼 221
波羅蜜 167–8
八正道(八聖道) 31, 72, 149, **152–3**
般涅槃 →パリニッバーナ

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

般舟三昧 159
般若(智慧) 160, 167; ～波羅蜜 167, 169
反問記 80
比丘 25, 33, 38, 215; ～尼 215
比喩譚 →アヴァダーナ
非想非々想処 159
非択滅 107
非天 119
非福業 126
悲 166
毘鉢舎那 →観
百八煩悩 132
表業 125
ブッダジャヤンティ 240
ブラフマン(梵) 117, 146
不還 198
不死(アムリタ) 117, 145
不定 221
不定種姓 209
不退転 202
不退転地(阿惟越致) 202
不動業 126
布薩 222
布施 156, 166–8
普賢行 205
部派仏教 13, 231
福業 126
福資糧 169
仏 3, 47
仏国土 55
仏教 1, **2**
仏性 149, 190
仏伝 21–4
仏道 2
仏法 1–2
分別 138, 160
分別記 80
辺見(辺執見) 131
遍行因 110–1
遍計所執性 183–4
方便 170
法(ダルマ, ダンマ) 1, 13, **63–9**, 102
法印 81
法有 114
法師 157, 218
法灯明・自灯明 39
法界 60, 93, 94
法空 114
法華一揆 260
法華宗 259
法性 60, **92–4**, 106
法身 9, **59–61**, 94, 162
法身偈 37, 66
法相宗 246, 253
報身 61
発菩提心(発心) 150, 165, 186
菩薩(菩提薩多) 21, **50**, 148, **201–10**, 232
菩提 28, 145–7; ～心 186
菩提分(菩提分法) 162
本覚 192, 255
本願 151, 195
本地垂迹 252
本生話 →ジャータカ
凡夫(～異生) 197
梵 →ブラフマン
梵天 120
梵天勧請 31, **32**
煩悩(惑) 124, 126–33

マ 行

マナス →意
マンダラ(曼荼羅) 235
慢 131
弥勒信仰 204
微塵含千の喩 194
密教 195, 235–6, 248
名色 136
無為 106, 108, 148
無為法 102, 104–7
無我 68, **82–5**, 114
無学 199
無記(中立) 111, 125–6; ～心 133

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

無記(無回答) 77–8, 135
無垢真如 191
無師独悟 **33**, 172
無色界 122
無住処涅槃 148, 204
無所有処 159
無生法忍 169
無性 209
無上正等覚 46, 147
無常 68, 82, 110, 177
無表業 125
無表色 104
無分別智 161
無明 86, 130, 134–5, 188
無余依涅槃 140, 147–8
無漏 107; ～業 126; ～智 108
滅 107, 147
滅諦 221
滅尽定 158–9
滅諦 →四諦
聞慧 160

ヤ 行

瑜伽行派 114, 176, 179, 186, 195, **233–4**
瑜伽師 157, 218
唯識 114, 182; ～観 185
唯識説 114, 126, 138, 142, 176, **179–86**, 187–9, 192, 195, 233
唯識論者 185
唯心 177
融通念仏宗 260
ヨーガ 29, 157
預流(須陀洹) 195
欲界 122; ～定 160

ラ 行

ラマ 238
羅漢 47
利行 166
離繋果 110–1, 113
力 170
律 13, 36, **219**
律宗 247, 253
律蔵 216, 219, **214**
輪廻(サンサーラ) 116–7, **118**
臨済宗(臨済の系統) 258
流転の縁起 142
漏 107
漏尽 147, 162, 198; ～智 162; ～通 162
蘆束の喩 136
六因 110
六師外道 26
六識 102, 181, 187
六随眠 132
六度 50
六道(六趣) 119
六入(六処, 六根) 84, 101–2, 137
六欲天 121
六境 102, 136
六波羅蜜 167–9
論(シャーストラ) 14

ワ 行

惑 →煩悩
惑・業・苦 124, 134, 139, 141

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会

著者略歴
1926年　東京に生れる
1950年　東京大学文学部哲学科卒業(印度哲学専修)
　　駒沢大学, 大阪大学を経て
1977年　東京大学文学部教授
1992年　鶴見大学学長(1992. 12～2004. 11)
現　在　東京大学名誉教授, 鶴見大学名誉教授

主要著書
"*A Study on the Ratnagotravibhāga* (*Uttaratantra*)"
(1966, IsMEO)
「如来蔵思想の形成」(1974, 春秋社)
「大乗仏典 12 如来蔵系経典」(1975, 中央公論社)
「仏典講座 17 楞伽経」(1980, 大蔵出版)
「講座大乗仏教」全 10 巻 (共編, 1981～96, 春秋社)
「インド思想史」(共著, 1982, 東京大学出版会)

仏教入門

1983年6月10日　初　版
2010年6月8日　16　刷
[検印廃止]

著　者　高崎直道(たかさきじきどう)

発行所　財団法人　東京大学出版会
代表者　長谷川寿一
113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1
電話 03-3811-8814・振替 00160-6-59964
印刷所　株式会社精興社
製本所　牧製本印刷株式会社

©1983　Jikido Takasaki
ISBN 978-4-13-013011-0　Printed in Japan

R〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは, 著作権法上での例外を除き, 禁じられています. 本書からの複写を希望される場合は, 日本複写権センター (03-3401-2382) にご連絡ください.

May not be copied, displayed, distributed, modified, published, reproduced, stored, transmitted all or any part of the content from this site in any medium to anyone except for personal and non-commercial use permitted under the copyright law of Japan.

複製禁止／Downloaded from "Maruzen eBook Library" on 15/05/2020 14:40:37 under the license of University of Tokyo
仏教入門 [1983] 東京大学出版会